
薔薇のマリア
Ⅱ.壊れそうなきみを胸に抱いて
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


A BRAVE HEART OF
RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own
lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
II.壊れそうなきみを胸に抱いて



サンランド無統治王国
首都エルデン第四区
〝銀の砦（シルバリイホールド）〟
ユリカは珐瑠に目をやった。マシュー・シュナイデルを見た。焔を見た。ヨハン・サンライズを見て、最後にデニス・サンライズを睨みつけた。
「秩序の番人！　あなたたちの義って、いったい何なの？　隊がどうしたとか、必要な人員（ひちゅよう）がどうとか、作戦（しゃくしぇん）がどうだとか！　しょんな戦争（しぇんしょう）ごっこをしゅるのがあなたたちの義なの？　だったら、悪だとか秩序だとか偉しょうなことを言わないで！　戦争（しぇんしょう）したいなら、どこかの国に仕官するなり、傭兵になるなりしゅればいい！　あなたたちにおあちゅらえ向きの戦場（しぇんじょう）が、きっといくらでもあるわ！　しゃあ……！　弱虫の偽善者（ぎじぇんしゃ）は、化けの皮が剥がれる前に、今しゅぐ荷物（にもちゅ）をまとめてこの国からしゃっしゃと出ていきなしゃい！」


そいつは革か何かの、派手な色と柄のパンツとブーツを穿いただけで、上半身は裸だった。
一応、人間に類する形をしている。けれども、極端に腰がくびれ、手足と首が異常に長い体形は、明々白々に普通の人間ではありえない。体形のせいで、巨漢という表現はややそぐわないが、背丈は二メーテルくらいあるだろう。
その肌――奇妙に白くて、傷一つない最上級の陶器のように滑らかな肌は、なぜか皮膚というよりも肉を想像させる。
やつの顔貌は邪悪だ。
大きく左右に裂けているきわめて薄い唇も。人間のそれとは思えない尖った歯も。鬼火のような禍々しい輝きを宿した両眼も。
ひたすら不快だ。
やつの左肩には、数字の《6》が刺青されている。
6。
SIX。

薔薇のマリア

II．壊れそうなきみを胸に抱いて

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ⅱ

*—Beatrice: A Breakable in My Arms—*

*Ao Jyumonji*



*First published 2005 in Japan*

*By*

*Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.*

# A BRAVE HEART OF RED ROSE

II

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE

II

# MAIN CHARACTERS



**Homura**
焔ホムラ
《秩序の番人（モラル・キーパーズ）》の突撃隊隊長。



**Azian**
アジアン
クラン《昼飯時（ランチタイム）》の頭領（マスター）。



**Mariarose**
マリアローズ
主人公。美貌の侵入者（クラッカー）。



**Denis Sunrise**
デニス・サンライズ
《秩序の番人（モラル・キーパーズ）》総長。



**Beatrice**
ベアトリーチェ
《秩序の番人（モラル・キーパーズ）》所属の少女。

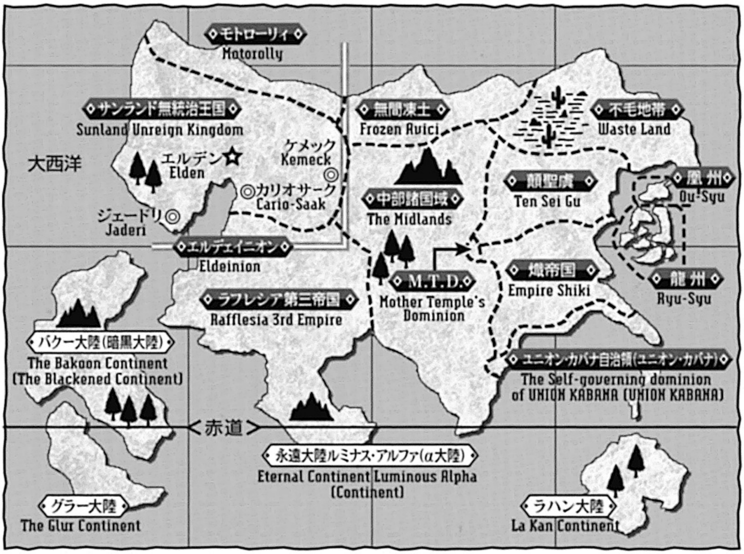


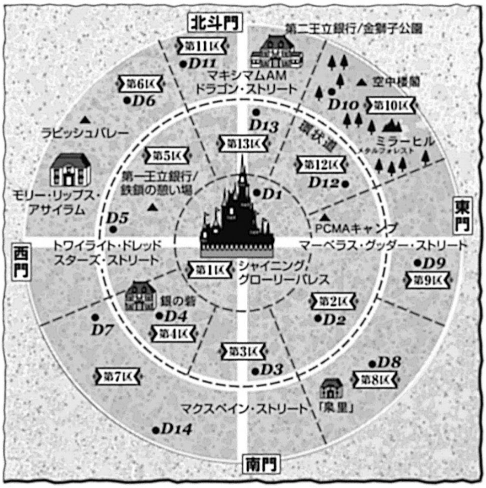
**Tomatokun**
トマトクン
クランZOOの園長（マスター）。

## and the others

Molly Lips モリー・リップス
Korona コロナ
SIX シックス
and“ZOO”

## The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"




Elden:the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
**サンランド無統治王国 首都エルデン**

MAP製作 On Graphics

*illustration*：*BUNBUN*
*design work*：*design CREST*

Omenage 897 6th revolution 21th day

サンランド無統治王国首都エルデン第九区・第十区境

〝おしゃぶり人形(サックドール)〟

chapter.0 a so-called prologue

# 俺の地下室(へや)へようこそ

「──炎模様フアイヤーパターンの鎧よろいに、波打つ刃はの大剣けん？」

　仲間内でその男のことを話したとき、最初に反応したのは、かの閃せん光こうの魔ま女じよマチルダの弟で子しにして、クラン・昼飯時ランチタイムきっての天才魔導士ウイザード〝垂ベテイれ・ザ目・ドウのルーベピンテグアィイズ〟だった。

　二十ン歳のくせに、十代の小こ娘むすめにも見えるベティは、ぷっくりした唇くちびるを舌先でぺろりと舐なめてから話す癖くせがある。童顔だけれども、背は百六十五サンチ近くあって、胸むな元もとが大きく開いたサン・ティエンヌ・ドゥ・シボーの蠱こ惑わく的な魔術士衣もよく似合っているのだが、実は、あの胸の谷間は──いや、彼女の名めい誉よと我が身の安全のために、これ以上はやめておこう。

　いずれにせよ、ベティは間ま違ちがいなく頭のいい女だ。昼飯時ランチタイムの中では一番の情報通でもある。

「それって、トマトクンじゃないの」

「トマトクン……？　まさか、それがその男の名というんじゃないだろうネ」

「そのまさかよ。ＺＯＯズーってクランの頭張ってる男でしょう。今、あたしの妹分がそこにいるの。サフィニアっていってね。色々と面めん倒どうを背負っていて、お姉様も匙さじを投げたくらいだったけど、才能はある子だったわ。ひょっとしたら、潜在能力ポテンシヤルはあたし以上かも」

「キミ以上？──いや、そんなことはいい。トマトクン……ＺＯＯ、か……」

　嫌いやな予感がした。

　第五区の鉄てつ鎖さの憩いこい場で、ほんの数秒やりあっただけだが、そのトマトクンというふざけた名の男からは、何か異質なものを感じた。

　あれは危険だ。こちら側の人間だという気がする。

　他の風にはなびかない一輪の薔薇ばらが、悪あく趣しゆ味みで、

胡う散さん臭くさくて、たぶん端はたから見るよりもずっと獰どう猛もうなあの道化師には、引きよせられるかもしれない──マリアローズ。

　マリア。

　ああ、マリア、マリア、マリア。

「またあの子のことを考えてるの」

　ベティは鋭するどい。だが、彼女とて、何もかもを見通せるわけではない。

　現に、目の前にいる男が──自分たちが属する昼飯時ランチタイムの頭領マスターで、虐殺人形カーネイジ・ドールと渾あだ名なされる男が、本当は何ものなのかさえ、ベティは正確には理解していない。

「わからないわね。どんな子かと思って前に一度、ちらっと遠くから見たけど、ただきれいなだけの子供じゃない。しかも、あんな顔をして──」

「黙だまれヨ、ベティ。どんな理由で誰だれを愛そうと、ボクの勝手だ」

「なるほど。マジで愛しちゃってるのね。どうりで最近、カイがぷりぷりしてるわけだわ」

「どうしてここでカイが出てくる」

「あんただって気づいてるでしょう、アジアン。カイがあんたに惚ほれてるって」

　むろん、アジアンとて朴ぼく念ねん仁じんではない。女だてらに明けのモーニング・明星スターを自在に操あやつり、昼飯時ランチタイムの中でも有数の戦士であるカイが、自分を好いていることくらい知っている。

　ただ、気き性しようが荒あらく、黒い瞳ひとみでいつも容よう赦しやなくまっすぐ人を見つめるカイが、その気持ちを恋れん愛あい感情と結びつけているかどうか。

　付き合いが長いので、カイに浮ういた話の一つもないことはアジアンも承知しているし、彼女が相手では男も大変だろうと思う。

　アジアンも、そういった対象としてカイを意識したことは、一度たりともない。

　それは、そもそも━無理なのだ。

「身内の恋愛は御ご法はつ度とだヨ」

「そんな規則あったかしら」

「今、決めた。ウチではボクがルールだ。何か文句があるかい？」

　ベティは肩かたをすくめてみせただけだった。

　その翌日だった。

　さっそく悪い予感が当たった。

　マリアローズが、ＺＯＯの連中と行動をともにすると言い出したのだ。アジアンは止めたのだが、聞き入れてもらえなかった。正直、こんなことになるのなら、と思った━いっそ、マリアローズを昼飯時ランチタイムに引き入れてしまえばよかった。

　その機会もなくはなかったのだ。

　実は、トマトクンという悪ふざけのすぎた名の男が現れる直前、昼飯時ランチタイムに入れてくれと、マリアローズの方から申し出てきた。マリアローズは一人で侵入者クラッカーを続けることに限界を感じている様子だったので、そのあたりが動機なのだろうが、そんな一幕もあった。

　あのとき、マリアローズを受け入れるべきではなかったのか？

　しかし、ダメだ。

　できない。

　身内の恋愛は御法度、か。あながち戯ざれ言ごとともいえない。特に、クランを、五十人近くの人間の命を背負う我が身にとっては、冗じよう談だんでも何でもない。

最初、クランを作ろうと思い立ったのは、気がつくといつもつるんでいる仲間が何人かいて、彼らとの結びつきを何らかの形にしたかった。それだけだったはずなのに。

滑こつ稽けいでも、愚おろかでも、胸の真ん中に空いた大きな穴を埋うめようと、必死であがいているようなやつばかりだった。

曖あい昧まいな言葉や感情だけでは、信じあえない。信じたいのに、信じられない。

そんなひねくれ者たちがまとまるには、クランがあり、そのために生きて死ぬのだという大義名分が、是ぜ非ひとも必要だった。

だが、覚かく悟ごの上で自ら背負いこんだ荷物が、予想以上に大きくなりすぎたのか。

たまに減りながらも、徐じよ々じよに増えてゆき、今はもう四十八人。

彼らの中には、恋こい人びとを持つ者もいる。この腐くさった街で、吹ふけば飛ぶような家庭を築いている者もいる。

その命が、たとえようもないくらい、重い。重すぎる。

いっそ、放り投げてしまいたい。何もかも捨てて、身軽に、自由になりたい。

もしかしたら、自分は心の片かた隅すみでそんなことを考えていたのか。だから、あの日、あんなことを……？

アジアンはマリアローズを捜していたのだった。

てっきりＺＯＯに入ってしまうのだとばかり考えていたマリアローズは、だが、まさかと思いながら立ちよってみたアンダーグラウンドＤ７の入口付近に、一人でいた。

というか、襲おそわれていた。しかも、相手はよりにもよってＳｍＣの雑魚ざこどもだった。

周りに複数の死体が転がっていた。

あろうことか、ＳｍＣの一人が取り押さえたマリアローズに小便

を浴びせようとしていた。

　その場面を見て頭に血が上った。確かに。

　けれども、殺意を押しとどめるより、解放することを選せん択たくしたのは自分自身だ。

　きっとそれ以外の手段もあった。しかし、アジアンはマリアローズを救うために、あえてＳｍＣを一人殺した。

「その人から離はなれろ。さもないと全員殺す」

　アジアンは連中にそう言ったのだった。

　まずいことになると思った。一方で、どうにでもなってしまえとも思った。

　こうしてボクは、何もかもを壊こわす。失う。その痛みをくれ。どうせなら、存分に味わわせてくれ。

　命を助けた挙句、マリアローズに拒きよ絶ぜつされて、アジアンは甘かん美びな苦痛に一人身み悶もだえた。

　そうだ。あの野生の山やま猫ねこは誇ほこり高い。施ほどこしを嫌きらう。訳知り顔の下げ劣れつな同情を嫌う。上から見下ろすような態度で守ろうとするボクを嫌う。よくわかる。ボクも同じだ。わかっていた。

　自分が何をしでかしたのかも。その結果、この先、何が起こるのかも。

　わかっているつもりだった。

　──そのつもりだっただけで、結局、何一つわかっていなかったのだろう。

　首都エルデン第九区と第十区にまたがる、バラックと露ろ店てん、阿片窟シエルター、賭と場ばがひしめく不健全きわまりない一帯は、市民の間で闇やみ市いちと呼び慣らわされている。

　無統治王国と銘めい打うったこの国で、闇も正規もへったくれもないものだが、様々な事情により大っぴらに取引できない品物も中にはあるのだ。

　たとえば、各種合成麻ま薬やく。これは錬金士Ａ組合Ｇが厳しく生成を禁じていて、合成麻薬を発見し次し第だい、いかなる手段を用いても回収、生成者に厳げん罰ばつを下す旨むねの掟おきてがある。また、麻あさやケシやコカなどを原料とする天然麻薬も、受け渡わたしの都合で闇市の方が売買しやすいらしい。

　また、エルデェＥイニオン機Ｍ術士匠合Ｕに所属していない機術士の製作物も、大部分は闇市の軒のき先さきに並ぶ。ＥＭＵもＡＧと同様、これはダメだとかアレはいけないといった規定が非常に厳しく、この制限を無視して商売すれば、ＥＭＵを敵に回すことになりかねないからだ。

　もっとも、サンランド最大の圧力団体といわれるＡＧにしろ、ＥＭＵにしろ、この闇市には手を出さない。

　それは暗あん黙もくの了りよう解かいなどという、曖昧な理由からではない。

　闇市をとりしきっているあるクランを、彼らは忌いみ嫌う以上に恐おそれているのだ。

　ＳｍＣ。

　正式名めい称しようは、加サデイ虐ステイ的ツク・殺戮マーダーズ・愛好会クラブ。

　七年前、ある出来事によって、彼らはエルデン中に一いち躍やくその名を轟とどろかせた。

　人呼んで、ベラドリア惨さん劇げき。

　第九区〝クァラナド歓かん楽らく街〟の高級クラブ「ベラドリア」で、死シ美ビ憧ドー、カイド男だん爵しやく、ＡＧＹアギイなど、六つのクランの首魁マスター、構成員メンバー、店の従業員ら、総勢五十二名が惨ざん殺さつされた事件がそれだ。

　当時、これら六つのクランは、競合しつつ闇市を運営して、互たがいに利益を分配しあっていた。その首魁マスターたちがベラドリ

アに集つどい、談合がてら親しん睦ぼくを深めていたところを、何者かに襲われたわけだ。

　そして、仲良く皆みな殺ごろしにされた。

　被ひ害がい者しやの死体はすべてむごたらしく損そん壊かいされ、蘇そ生せい式を商売の種とする高層寺院の坊ぼう主ずも、手の施しようがなかったという。

　この事件で首魁マスターと幾いく人にんもの主要構成員メンバーを失った六つのクランは、あるいは跡あと目め争あらそいで分ぶん裂れつし、あるいは瓦が解かいし、あるいは別のクランに吸収された──ＳｍＣに。

　だが、ＳｍＣは「我々が手を下したのだ」とは公言しなかった。

　する必要もなかった。

　それから間もなく、やすやすと闇市を掌しよう握あくしたＳｍＣがやったということは、誰だれの目にも火を見るより明らかだった。

　大おお袈げ裟さにいえば、その頃ころ、たかだか二十数名の小所帯にすぎなかったＳｍＣは、一夜にして闇市を乗っ取り、裏街道に確固たる地位を築き上げたのだ。

　こうして闇市の領主から出発したＳｍＣが、現在、エルデンで猛もう威いを振ふるっている。

　今のエルデンで名の知れたクランといえば、たぶんまず第一にＳｍＣがきて、その次にＳｍＣと敵対関係にある秩序のモラル・番人キーパーズが挙げられるだろう。

　そんな悪名高きＳｍＣの根こん拠きよ地である闇市の奥まった場所に、その建物はひっそりとたたずんでいた。

　位置的にはもう第十区に入っていて、闇市の北ほく端たんに近い。周囲には四、五階建ての建物が建ち並び、廃はい材ざいでできたバラックがそれらの隙すき間まを埋うめている。闇市の中では比ひ較かく的てき整然とした印象を受ける一角だが、ひとけは多くなく、その二階建ての建物にも、とりたてて人目を引く要素はない。

いや、むしろ目立たない。

建物の正面脇わきにある地下への階段の前に、小さな看板を無造作に置いているのが、唯ゆい一いつの目印だろうか。

その看板にしても、黒地に白で《おしサャツぶりク人形ドール》と書かれているだけの、いたって簡素なものだ。

うまく擬ぎ装そうされているというべきか。外に見張りの一人や二人くらい置いてもよさそうなものだが、それすらもない。ただ、建物に近づくに従って、誰かに、どこからか見られているという不ふ愉ゆ快かいな感覚が、どんどん強まってくる。

事実、見られているのだろう。

周りの建物の窓から、バラックの中から、幾人もがこちらをうかがっているに違ちがいない。

「──超最低ＳＵＣＫだネ、まったく……」

目ま深ぶかにかぶった黒衣のフードの奥で、アジアンは低く、吐はき捨てるように呟つぶやいた。あえて声に出すあたり、我ながら幼よう稚ちだと思うが、いくらか自制はした。五メーテルほど先を行く男には、とうてい聞きとれない小声だったはずだ。

それにも拘かかわらず、男は足を止めた。

振り返った男は、ガルベル・ダの小こ粋いきなストライプのスーツを着こなして、灰色の頭とう髪はつをきっちり後ろに撫なでつけている。

しかし、髪かみの毛と同じ色の瞳ひとみからにじみ出ているのは、気き障ざったらしさではなく、言い知れぬ酷こく薄はくさだ。

鉤かぎ鼻ばなで、唇くちびるが薄うすく、削そぎ落としたように頬ほおのこけた男の顔立ちは、どこか老ろう獪かいな鷲わしを思わせる。

「何か言ったか」

「別に」

　男はジェイと呼ばれている。ＳｍＣの首領マスターＳＩＸの腹心で、ベラドリア惨劇の立役者の一人とも噂うわさされていることから、その筋では知らなければモグリとされるくらいの有名人だ。

　アジアンが思うに、ＳｍＣで真に敵すべき相手といえば、ＳＩＸとこのジェイ。あとは全員、個人としてはカス同然で、二人を除いたＳｍＣなど単なる烏う合ごうの衆しゅうにすぎない。

　逆を返せば、二人がいる限り、ＳｍＣを侮あなどるべきではないわけだが。

「ただ、反吐へどが出そうだ、とネ──そう言っただけサ」

「どうせなら、血反吐を吐かせてやろうか」

「できるものならやってみるがいい」

　ジェイはアジアンの挑ちよう発はつには乗らず、薄笑いを浮うかべて足を進めた。まあ、当然だろうが、正直、その余裕ぶった態度はそうとう気に食わない。こんな男についてゆく自分にも腹が立つ。そうするしかない状じよう況きようが苛いら立だたしい。

　とはいえ、今、踵きびすを返してここから立ち去るわけにも、やはりゆかないのだ。

　やむをえず、アジアンはジェイのあとを追って《おしサャツぶりク人形ドール》の看板がある階段を降りた。虐殺人形がおしゃぶり人形を訪れる、か──そんなふうに自じ嘲ちようする気にも今ひとつなれないまま、合成骨材コンクリートの壁かべを埋めつくす溶剤塗料ペンキの落書きを横目で見ながら、だが、静かすぎる、と思った。

　見た目はそれ相応に取り繕つくろおうとしているものの、造りが上等すぎる。この闇やみ市いちに、これほど防音のしっかりした建物が他ほかにあるだろうか？

　もっとも、階段を降りきったジェイが突つき当たりのドアを開けた途と端たん、不自然な静せい寂じやくは呆あつ気けなく破られた。

　弦げん楽がつ器きや打楽器の音にあわせて、がなりたてる声。いや、濁だみ声ごえといった方が正しいだろう。

　歌か。あれが歌のつもりか。人を惹ひきつける要素は微み塵じんもない。美しさの欠片かけらもない。他人を圧あつ倒とうしようとし、気張って、中身を伴ともなわないので失敗し、単にやかましいだけの雑音に堕だしている。

「キミらはこれを聴きいて感じ入ったりするのか」

　アジアンはジェイに続いて、ドアをくぐりながら訊きいた。

　サックドールの中は、光量を抑おさえた間接照明と、奥のステージを照らすライト以外に光源がなく、かなり暗い。目測で百五十平方メーテルはありそうなこの空間は、ステージ上で屑くず以下のパフォーマンスを繰くり広げる軽音楽団バンドの他にも、人間と彼らの話し声とその体たい臭しゅう、酒の匂におい、煙草たばこの煙けむりに満たされている。

　アジアンの声も、それらの騒そう音おんに半ばかき消されたが、ジェイならば聞き分けるだろう。

　案の定だった。

「さあな」

「匂いもひどい」

「嫌いやなら耳を塞ふさいで鼻をつまんでいろ」

　ジェイがそう言って歩き出すと、進行方向を塞いでいた男たちが、椅い子すを引き、身を寄せあって次々と道を空けた。そいつらは全員、顔や腕うでや首、胸などに《ＳｍＣ》の文字を意い匠しよう化した刺青いれずみを入れている。あるいは、最近、エルデンのクソ野郎モウフオどもの間で流行している焼印も、かなり混じっているようだ。

　話によると、ＳｍＣ内部でも、古参の刺青組と新参の焼印組との間には、軋あつ轢れきがあるとかないとか。

　そうはいっても、どちらも人間社会の膿うみや澱おりみたいな連中だ。似た者同士に違いない。そして、この国、特にこのエルデンには、そういった人種が掃はいて捨てるほどいる。

「盛せい況きようだネ」

「安い殺しをやるより、ここの売り上げをかすめた方が儲もうかるくらいだよ」

　噂では、ジェイはラハン大陸出身で、前身は殺人を請うけ負って金をもらう、いわゆる殺し屋だったらしい。おそらく、派手に仕事をしすぎたせいで、いくつもの国で追っ手がかかり、サンランドに逃にげてきた口だろう。

　だが、逃げて、か──だとすると、その意味では、アジアンも大差ない。もともとすべてを放り捨て、それどころか擲なげうち、切り捨てて、逃とう亡ぼうしてきた身だ。そんな自分が安住の地を求め、クランを作り、その頭領マスターに収まるなんて、最初から無理があったのではないか。

　ジェイは左手奥のカウンターがある方へ向かっている。

　群れからはぐれた野犬のように、そのあとをついて回るアジアンは、今や屈くつ辱じよくよりも後こう悔かいを噛かみ締しめていた。

　いずれにしても、苦い味だった。いっそ吐はき捨ててしまいたいが、今さら手て遅おくれだ。カウンターの中から薄うす暗ぐらい厨ちゆう房ぼうに入り、四つ並んだ業務用冷蔵庫のうち、一番奥の冷蔵庫の前までくると、アジアンは何か粘ねばつくものに足首をつかまれたような錯さつ覚かくにとらわれた。

　罠わなか。もしくは、抜ぬけ出せない底なし沼ぬまか。

　けれども、こうなることをまったく予想していなかったわけではない。

「開けろ」

　ジェイに命じられ、やたらと体格のいい、料理人の格好をしているわりには人相の悪すぎるＳｍＣがそのドアを開けた。

　何のことはない。棚たなに並べられた食料品やら飲料やらが、機術によって製作された奪熱機で冷やされている。一見、単なる冷蔵庫だ。

　しかし、料理人の仕事は、その中から食材を選びとって腕を振ふるい、ＳｍＣとひそかに非戦同盟を結んでいるクランの頭領マス

ターをもてなすことではなかった。彼は棚に両手をかけて、低く唸うなりつつ引いた。すると、動いた。棚がゆっくりと引き出されてゆく。どうやら、正面から見ただけではわからない位置に、滑かつ車しやが据すえ付けられているらしい。

　それでもかなり重いようだが、料理人はたっぷり二十秒ほどかけて棚を引き出し終え、ジェイに黙もく礼れいした。

「ご苦労」

　ジェイは料理人に一声かけてから、アジアンに顎あごをしゃくってみせた。

「入れ」

「キミみたいな男に背中を向けられるものか」

「臆おく病びようなんだな」

「キミが信用できないだけサ」

「気はあうようだ。俺も貴様が信用できない。貴様はいつまで経たっても人に馴なれない、腹を空すかせた厄やつ介かいな野良犬だよ」

「人に馴れない？　ふん……」

　アジアンは以前、それと似た台詞せりふをマリアローズに告げたことがある。キミは人に馴れない、気高く美しい野生の山やま猫ねこだ、と。同じようなことを、よりにもよってジェイに言われるとは皮肉だが、当然、意味あいはずいぶん異なっているに違ちがいない。

「いいから先に行けヨ、ジェイ」

　アジアンがありったけの親愛の情をこめて呼び捨てにすると、ジェイは頰ほおを歪ゆがめて微び笑しようした。

「じゃあそうしよう、アジアン」

　本当は、そんなお遊び同然の悪意の応おう酬しゆうに付き合うだけで、気が滅め入いる。

　しかし、受けて立たないわけにはゆかない。舐なめられるわけにはゆかないのだ。自分の矜きよう持じを保つためではない。信じてくれている仲間のためだ。アジアンは彼らを、昼飯時ランチタイムを守らなければならない。アジアンにはその義務があり、責任がある。

　それがわかっていながら、あんなことをしたのだ。

　━矛む盾じゆんしている。

「なあ、アジアン……」

　ジェイは、まだくだらないお遊びを続けるつもりなのか。

　すでに、入口は料理人に塞ぎ直されている。冷蔵庫に擬ぎ装そうされたこの隠かくし通路を照らす明かりは、天てん井じように設置されている近紫外線ブラック照明ライトだけだ。アジアンは夜目が利きくからいいが、そうでなければ、やや下り勾こう配ばいで左にカーブしているこの通路は、ずいぶん歩きにくいだろう。

　要するに、ジェイも見えているということだ。

「正直、俺は嬉うれしいんだよ」

「何がだい」

「犬は首輪をつけて飼うものだろう。庭で放し飼いできるのは、忠実な番犬だけだ。貴様は違う。性しよう根ねも素す直なおじゃないし、躾しつけもなっちゃいない。いつ飼い主の手に嚙みつくか知れない。貴様のような犬には戒いましめの首輪が必要だ」

「ボクに似合う粋ＣＯＯＬな首輪ならいいけどネ」

「たとえ超最低ＳＵＣＫな首輪でも、貴様はもう外せないよ、アジアン」

　そうしてどれくらい歩いただろう。たぶん、さして長い距きよ離りではない。通路の果ての頑がん丈じようそうな鉄てつ柵さくの前で、ジェイが足を止めた。

　柵の向こうでは、天鵞絨ベルベットの幕を背景に、腰こしに剣けんを下げたスーツ姿のＳｍＣが二名、直立不動の姿勢をとってい

る。ジェイが身み振ぶりで合図すると、そのうち一人が内側から柵を押し開け、もう一人は幕をたくし上げた。

　だが、幕はその向こうにも下ろされている。

　アジアンの前を行くジェイの後ろ姿は、何度も幕に隠されて、追うたびに現れては消え、布同士が擦こすれる音は何かが裂さける音のように聞こえた。

　ついにジェイが最後の幕をめくったときには、夢から覚めたような、あるいは夢の中に迷いこんだような、おのれがおのれでなくなったように不確かな心地ここちがしたくらいだった。

「──我が主よマイ・ロード」

　そして、ジェイは跪ひざまずき、恭うやうやしく頭こうべを垂れた。

　甘ったるい欺ぎ瞞まんの香かおりと、多数の生き物から発せられる熱気と、血と、汗あせと、涙なみだと、雌めすどもの嬌きよう声せいと、雄おすどもの呻うめき声、それに圧あつ倒とう的てきな暴力、歓かん喜き、支配の気配に充みち満ち、貴族趣しゆ味みと現代趣味と加か虐ぎやく趣しゆ味みと魔ま術じゆつ的様式とが混在している、一種破は滅めつ的な部屋へと足を踏ふみ入れて。

　やつは裸ら形ぎようだった。

　やつの玉座を形作っているのもまた、全裸の男女の群れだった。

　男女のうち、ある者たちは交合している。押し潰つぶされて息絶えている者もある。やつの肌はだに触ふれ、感極きわまったような表情で恍こう惚こつとしている者もいる。いずれにしても、皆みな、やつにひれ伏ふしている。身も、心も、すべてを奪うばわれて、与あたえられている。やつの玉座であるという、ただそれだけの権利と、生きる目的を。

　Ｓ．Ｉ．Ｘ□□

　あるいは、ＳＩＸ。

　異相であり、異形であるといっていいだろう。

　身の丈たけは二メーテルに迫せまり、極きよく端たんに腰がくびれていて、手足と首が異様に長い体形も。

　奇き妙みように生白く、左ひだり肩かたに数字の《６》が刺青いれずみされている以外は、皺しわも、傷もない、白磁のように滑なめらかな肌の質感も。

　きわめて薄うすい唇くちびるが大きく左右に裂け、両りよう眼めは鬼おに火びのような禍まが々まがしい輝かがやきを宿す、どこか白子アルビノの蛇へびを連想させる顔も。

　女のそれのように美しく艶つやのある、肩までまっすぐ伸のびた黒くろ髪かみすらも。

　あらゆる要素が、ＳＩＸを人外のものであるかのごとく印象づける道具となっている。

　ＳＩＸは人間の玉座の上で足を組んだ。

「ようこそ、アジアン……俺の地下室へやへ」

　腹の底に響ひびくような最低音域バスだが、人の神経を逆さか撫なでしてやまない、どこか女じみた妙みような抑よく揚ようの声音だ。相変わらず気色が悪いけれども、アジアンは不快感をおくびにも出さず、かといって挨あい拶さつもせず、単刀直入に訊きいた。

「わざわざ人を呼びつけて、何の用だい」

「何だと思う」

「さて」

「アジアン……」

　ＳＩＸは含ふくみ笑いをしながら、自分の股こ間かんの位置にある女の頭を撫なでた。

「ＳｍＣうちは今、末まつ端たんまで含めると六百近くいる。まだ増えるよ。これから青あお汁じるくせえ目障りな銀ピカの糞ふん転ころがしどもを叩たたけば、右往左往するだけしか能のねえチンケな小悪党も、傘さん下かに入れてくれと泣いて頼たのんでくるだろう。色々あって、俺も遊んでばかりいられないから、ちょっぴり本

気を出すことにしたんだよ」

「そう──」

　勝手にするがいい、と思いながら、アジアンは無表情を崩くずさなかった。

「で？」

「アジアン、これでも俺はお前を買ってるんだ」

「光栄だネ」

「だから、お前とは是ぜ非ひとも対等の友人でいたかった」

「友人……？」



　お笑いぐさだ。これはさすがに表情に出てしまったかもしれない。膝ひざの上に頬ほお杖づえをついて首を傾かしげたＳＩＸが、右目だけ大きく見開いた。

「おかしいか」

「本音なら傑けつ作さくだし、冗じよう談だんとしても悪くないと思うヨ」

「それなら、傑作の方だ。俺もジョークは嫌きらいじゃないがねえ。今のは本音だよ。お前さんのところと非戦同盟、しかも、密約なんてややこしい形を呑のんでやったのは、俺の好意を形にしたつもりさ。もちろん、愛は与えるもので、与えられるものでも、求めるものでもない。お前が俺の愛に応こたえるかどうかは、お前の自由だ。でもねえ、覚えておけ、アジアン。本当の愛は、愛の本体は、愛の本ほん性しようは、惜しみなく奪うものなんだよ」

　アジアンがようやく自分の立場を自覚したのは、そのときだったのかもしれない。

　ＳＩＸが人間の玉座の上でふんぞり返って、アジアンを見下ろした。

「確か、お前のところは四十八人だったか。その中にお前とタイ張れるやつはいるのかよ」

「どうかな」

　不覚にも、声が震ふるえた。

　アジアンは認めざるをえなかった。ＳＩＸと自分とは、もはや対等ではありえない。アジアンを揶や揄ゆするようなＳＩＸの口調が、態度が、それを物語っている。

「まあいいさ。でもねえ、俺からちょっとした訂てい正せいだよ」

「訂正……だと」

「ああ。実は、四十八人ってのは間ま違ちがいだ」

　そこまではっきり言われて、その意味がわからないはずはない。だが、時間にして三秒間かそこら、アジアンがＳＩＸと睨にらみあったのは、きっとわかりたくなかったからだ。

　不意にＳＩＸが指を鳴らした。

　それが合図だったのだろう。

　悪あく趣しゅ味みな地下室の壁かべに、幾いく重えにも垂らされた天鵞絨ベルベツトの幕が、揺ゆれた。

　むろん、揺れただけではない。幕の向こうには、通路か何かが隠かくされていたようだ。何者かが、棒のようなものを──杖つえを使って幕を押しのけ、ひどくゆっくりとした足どりで、地下室に入ってきた。

　誰だれだ？

　知らない男だが、こんな場所に、ＳＩＸの地下室へやなどにいるからには、当然、ＳｍＣの関係者で、しかも、おそらく幹部級クラスに違いない。

　灰色と黒のぴったりした魔術士衣を身にまとい、黒い杖を持ったその男は、背が高く、かなり痩やせている。顔の造作はのっぺりしていて、土気色に近い肌の質感がまるで死人みたいだ。青い瞳ひとみも硝子ガラス玉めいていて生気がなく、長い白はく髪はつは毛髪というより、色素を抜ぬいた糸のように見える。

　一見して年ねん齢れい不ふ詳しようの容姿だが、たぶん魔ま術じゆつ士しだろうから、その点は別におかしくない。外見だけでなく、中身もそうとうおかしそうだが、それもまた同様だ。世間的な基準でいえば頭がイカれている魔術士なんて、珍めずらしくもない。

　白髪の男がどんな奇き人じんだろうと、変人だろうと、狂きよう人じんだろうと、どうでもよかった。

　そんなことよりも、問題は、男が何のために、何をしに、ここへ現れたのか、だ。

　いや、それすらもすぐに明らかになった。

　白髪の男に続いて、地下室の中へ足を進めてきた者がいる。

　彼は。

　何も身につけていなかった。全ぜん裸らの上に、歩き方がぎくしゃくしていて、変だった。それ以上に変なことがあった。

　彼の顔は逆を向いていた。つまり、首がねじれていて、というよ

り、たぶん外的な力によってねじ曲げられることにより、彼の頭部はちょうど百八十度回転させせられ、顔が後ろを向いていた。

　さらに、彼の頭部は後ろ半分が陥かん没ぼつしていた。そこからわき出した赤黒い液体と、はみ出した黄色っぽい何かが、その正体を詮せん索さくしたくもない何かが、彼の全身を汚よごしていた。

　彼は死んでいた。

　どう見ても、死んでいるはずだ。

　それなのに彼は白髪の男に従ってぎこちなく歩き、やがて立ち止まった。

　アジアンの目の前で。

　最初、陰いん部ぶをさらけ出した体の前面と、無残に傷ついた後頭部をこちらに向け、それから、アジアンに死に顔を見せつけるように、アジアンの過失を責めるように、彼は回れ右をした。

　やはり、彼は死んでいた。

　死に際して味わったであろう苦痛と屈くつ辱じょくが、彼の顔を醜みにくく歪ゆがませていた。

　思わず、短い罵ば声せいがアジアンの口から洩もれた。

　━畜生ファック、と。

「四十七だ、アジアン」

　ＳＩＸが喉のどの奥で何かを転がすように笑った。

　確かに、彼が死んだのだから、四十七人ということになる。

　違う。

　死んだのではない。

　殺されたのだ。

「……クラニィ……」

彼は昼飯時ランチタイムの中でも最古参の一人で、年ねん齢れいも今年で三十四か五になるはずだった。もう俺もいい年のオッサンだ、というのが口くち癖ぐせだった。そう言いながらも、豊富な実戦経験に裏打ちされたけれん味のない彼の剣けん術じゆつは、玄人くろうと筋にも評判が高かった。仲間たちの信しん頼らいも厚かった。

もちろん、アジアンも彼を信用していた。クラン結成前からよく知っている彼のことを、ある部分では頼たよりにしてさえいた。

彼は酒を飲んで口が軽くなると、アジアンに言った。「アジアン、お前さんを見てると危なっかしくてな。目が離はなせない、タチの悪い、餓が鬼きだよ、お前さんは」

余計なお世話だと思った。だが、まったくもってそのとおりだった。彼は完全に正しかった。

彼には女によう房ぼうと、子供が二人いた。

二人目は最近、生まれたばかりだった。

二人とも仲間全員で名前を考えた。

二人目の女の子は、アジアンが名付け親になった。ああでもない、こうでもないと騒さわぐ仲間たちを眺ながめて馬ば鹿からしいと思いながらも、いつしか自分も真しん剣けんになっていて、ついにユーリィという名を考えついたのだった。何やかんやと異論も出たが、最後には全員一いつ致ちで、もちろん、彼と彼の女房の賛成もえて、ユーリィに決まった。

このことを、クラニィの女房にどう言えばいい？

美人ではないが、気だてがよく、料理が上手うまくて、ひどい過去を背負っているわりには笑え顔がおに陰かげがなく、やさしそうで、旦だん那なにもその友人たちにも、もちろん子供にも愛されていて、こんな国にはもったいないあの女に。

言え、というのか。

そして、まだ乳児のユーリィには？　この頃ごろ、少し喋しやべるようになって、小さい、小さすぎる無力な手でアジアンの指を握にぎってくるユーリィの姉ジョゼには？　彼女らにもまた、伝えね

ばならないのか？

　━どうやって……？

「お前が殺やってくれた俺の手下……あいつ、かわいそうに、蘇そ生せいできなかったんでねえ。落とし前ってやつだよ。これでおあいこだ。お前だって、クランの頭、張っているからわかるだろう。こうでもしないと、俺の顔が立たないんだよ」

「……ああ」

　アジアンは自制がきかなくなりつつあるのを感じていた。

　体の中で蠢うごめくものがある。解き放て、暴れさせろとやつらが要求している。アジアンもやつらに許してしまいたい。どす黒い衝しよう動どうに身を任せてしまえば、いっそ楽になれるだろう。たとえ、何もかもがぶち壊こわしになるとしても━いや。

　ダメだ。

「わかるヨ」

「だろう？」

　ＳＩＸは満足そうにうなずき、足を組み替かえた。

「やっぱりお前は面おも白しれえやつだよ。願わくば、末永く仲良く付き合っていきたいものだ。敵に回すと面めん倒どうそうだからねえ。アジアン、お前以外はどうとでもなるんだが」

「話はそれだけかい」

「いいや。まだ大事な用件があるんだよ」

　ＳＩＸにこの先、どのような要求を突つきつけられたとしても、もはや拒きよ否ひはできないだろう。

　結局、アジアンは実際に失うまで、まったくわかっていなかったのだ。これまでも仲間が誰だれかに傷つけられたことはあったし、命を落としたこともなかったわけではないが、しかし、自分の軽率さで、愚おろかさで、仲間を失ったのはこれが初めてだった。

　何とか最初で最後にしたかった。

　そうでなければ──

「残念だが、アジアン、お前と友だちになるのは無理みたいだ。だから、飼わせてもらうよ。心配しなくていい。悪いようにはしないさ。俺は愛情細こまやかな、慈じ悲ひ深い主人だ──ただ、ＳかＭでいったら、完全にＳだがねえ……Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕｋｕ……」

　こんな自己嫌けん悪おにも、五体を引き裂さかれるような痛みにも、これ以上は耐たえられそうもない。

　アジアンは胸の奥でそっと呟つぶやいた。

　マリア、どうやらキミとはもう会えそうもない。

　キミを辱はずかしめようとした下ゲ衆スどもの手先に成り果てたボクが、いったいどの面つらを下げてキミに会えるだろう……？

Omenage 897 9th revolution 7th day

サンランド無統治王国首都エルデン第五区外れ
“大食小路（グラトン・アレイ）”

chapter.1

# 逆恨みと正義の論理構造

永遠エターナル大陸コンチネントルミナス・アルファ──通つう称しようαアルフア大陸の北西部に位置するエルデンの夏は、そう長くない。年によって雨が多いのは玉に瑕きずとはいえ、九巡じゆん月げつ初しよ旬じゆんといえば、すでに暑さは下火になっている。一年の内でも、わりあい快適にすごすことのできる季節だ。

今年は雨量もさほどではない。今日も雲一つない晴天で、こんなうららかな日には、菓か子しの一つでも食べたくなるのが人情というものだろう。

まあ、甘かん味みの売れ行きと天候との間に、どのような因いん果が関係があるのかは不明だが。

だいたい、酒煙草たばこ麻薬ドラツグのたぐいを一切やらないマリアローズは、唯ゆい一いつの嗜し好こう品ひんが甘味なもので、菓子系の糖分には常に餓うえている。仮に、一生パンのみで暮らすか、チョコレートのみで暮らすかの二者択たく一いつを迫せまられたら、反射的に後者を選んでしまいかねない。

そんな甘い物好きならば、誰もが一度は訪れたいと熱望する甘味処どころが、エルデン第五区外れの飲食店街〝大食小路グラトン・アレイ〟にある。

その名も、「ヌー・ベイル・アデフェット・ウィット」。

正式名めい称しようは長くて覚えづらいため、ヌー・ベイルの方が通りがいい。店の外観は、青藍色インデイゴのタイルで外がい壁へきを埋うめつくしたサイコロ型の小さな建物で、暗黒大陸出身のソング・マニシュッテ・ラクレーロという黒い肌はだの男が、店主にしてただ一人の調理人だ。

ラクレーロの経歴は凄すごい。

子供の頃、暗黒大陸からα大陸に渡わたって以来、十代後半から二十代をラフレシア第三帝てい国こくの帝パテ室イシ専エ・属ド・菓子職人エンペレールとしてすごした彼は、三十歳で大陸東部の顚てん聖せい虞ぐ王室に引き抜ぬかれ、三十五歳の頃、熾しき帝国の天帝家に招かれながらこれを断り、三十七歳でとうとうエルデンに自分の店を構えた。

現在、四十四歳。

噂うわさでは、今でもたまに各国の王族、貴族がお忍しのびで彼の店を訪れるという。

ところが、材料等の問題もあり、ラクレーロが一日に作る菓子の量は限られている。そのせいで値段が高いのは当たり前としても、何と彼は自ら客を選ぶ。気に食わない者は容よう赦しやなく追い返してしまうのだ。その基準がまた謎なぞめいていて、とんでもない極ごく悪あく人にんが常連だと思えば、クラン・秩序の番人のさる麗れい人じんも上客だったりするらしい。

とにかく、どうしても食べたいからといって、金を積めば食べられるというものではない。

一方で、何度も断られた者が、それでも諦あきらめず通いつめた末に、ようやく、しかもタダで食べさせてもらったという話もある。

今、間ま違ちがいなくそこにありながらも、伝説と化している甘味処、ヌー・ベイル。

マリアローズはユリカ、サフィニアと一いつ緒しよにその店から出てきたところだった。

信じがたいことに、ラクレーロに追い返されて、すごすご帰ってきたのではない。

ちゃんといただいてきた。おかげで、八割がた放心状態だ。

美び味みだった。実にうまかった。それ以外の言葉を見つけられない自分がもどかしいとも思わないくらい、ひたすら美味おいしかった。

「はあ……」

口を開けば、ため息ばかりが出る。幸福感と満足感が全身にとめどもなく広がり、顔の筋肉が勝手に緩ゆるんで引き締しまらない。見れば、サフィニアとユリカも似たような状態らしい。

さすがは、ソング・マニシュッテ・ラクレーロ。

彼が用意してくれた、黒木き苺いちごのタルトとレモンのシャーベット、それにチョコレートケーキは、どれも決して特別な菓子で

はなかったのに。

　別物だった。今まで食べてきたタルトは、シャーベットは、ケーキは、いったい何だったのかという感じだ。〝砂ロー糖ド・のオブ・君主シユガー〟、〝天上のヘブンリー・菓子スイーツ・王キング〟などなど、その名に冠かんされた数々の称しよう号ごうは伊達だてではないということか。

「それにしても、サフィニアに奢おごってもらうっていう話が、こんな途と方ほうもないことになるなんてね」

「……わたしの……兄弟で子しにあたる方が……女性ですが……」

　サフィニアは弛し緩かんする頬ほおを掌てのひらでこすりながら、いつもより若じやつ干かん明るめの声音で応じた。

「先日、たまたま会う機会がありまして……彼女に相談したところ、このお店がいいと、強く薦すすめられたのです……彼女がラクレーロさんに、話を通しておいてくれて……」

「ということは、しょの人のおかげでご馳ち走しようになれたわけね」

　ユリカの顔もふにゃらけている。

　しかし、いくらこのあたりが飲食店の建ち並ぶ一帯で、エルデンの中では治安がいい方だとはいえ、こんなことでいいのか。赤いライン入りの女性用ナース医術士服・ユニを着た外見十歳のブロンド美少女と、いかにも幸薄うすげな銀ぎん髪ぱつの華きや奢しやな女魔ま術じゆつ士しと、真紅の髪かみも鮮あざやかなマリアローズ、こんな三人が道の真ん中で恍こう惚こつとしているなんて、無防備すぎる。

　わかってはいても、自分ではどうしようもないのだ。

　ラクレーロ、恐おそるべし。

「ま、オレストロであんなことを言い出したのは僕だけどさ。かなり値段も高かったし、かえってサフィニアに悪かったっていうか、逆にこっちが感謝したいくらいだよ」

「いえ……わたしも楽しみましたし……こんなことでもない

と……」

「しょうね。追い返しゃれてしまわないかどうかは別べちゆとしても、何かのきっかけがないと行けないお店みしえだわ」

「うん。そう考えると、色々あったけど、そのおかげでこんな経験ができたわけだし、結果的にはむしろよかったよね」



　実際、つい先日、アンダーグラウンドＤ９の喪そう神しん街がいオレストロでひどい目に遭あったりしなければ、ヌー・ベイルを訪れる機会など生しよう涯がいなかっただろう。

　あのとき、必要以上に責任を感じて落ちこむサフィニアに、マリアローズがたわけたことを言ったのだ。いちいち謝るくらいなら、

そのぶん、あとで甘い物でも奢ってくれればいいとか、何とか。

　むろん、本気ではなかった。少しでもサフィニアの気分が楽になればいいと、単なる思いつきを冗じよう談だんめかして口にしただけのことだ。

　けれども、サフィニアは律りち儀ぎに心の中で謝罪した数をかぞえていた。それに見あうだけの何かを返さないと、自分の気がすまないというのが彼女の主張だった。そこまで言われて拒こばむのも何だということで、お呼ばれしたのがヌー・ベイルの超ちよう絶品だったわけだ。

　ちなみに、マリアローズたちクラン・ＺＯＯの六人が、苦労して喪神街オレストロ深層くんだりまで行った目的は、魔導王時代の秘宝、焼バきーつニくンしグ刺しレイ貫く剣ピア〝劫ごう火か〟の入手だった。

　どうやらそこにいるという、かつての黄昏たそがれの魔導王の一人、〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟りん霊れいが劫火を所持しているらしい。そんな情報をもとに、ついには不完全な不死体と成り果てていたレディ・麟霊と対決し、激げき闘とうの末にこれを葬ほうむり去って、そして──

　それだけだった。

　肝かん心じんの劫火は見つからなかった。ひょっとしたら、劫火が日の目を見ることは二度とないかもしれない。レディ・麟霊の玄げん室しつは、彼女自身の手によって封ふう印いんされてしまった。もし、玄室のどこかに劫火があったとしても、探し出すことはまず不可能だろう。何か新しい別の手がかりでも見つからない限り、とりあえず、劫火のことは諦めるしかなさそうだ。

　実は、劫火を手に入れた暁あかつきには、マリアローズが所有することになっていたのだが。

　返す返すも残念だ。

　何しろ、劫火の価値は三億ダラーに相当するという。

　もちろん、神秘的な魔ま力りよくを我がものとすべく自ら使ってもいいが、金に換かえれば一生食うには困らない。ここだけの話、マリアローズは劫火を獲かく得とくし、売り払はらって億万長者に

なる夢さえ何度か見たくらいだ。

　まあ、思い出しても腹が立つだけだし、せっかく美味おいしいものを食べて気分がいいのに、自分で水を差すこともあるまい。

　もう少し、この幸せにひたっていよう──としたのだけれども、こういうときに限って邪じゃ魔まが入るのはなぜだろう。

　足を止めて横を見ると、ユリカもすでに気づいているようだ。極限クライマックス九手棍ナインポールを小さな両手で握にぎったユリカは、やや腰こしを落として、先ほどまで緩んでいた唇くちびるを引き結んでいる。マリアローズとユリカに両りよう脇わきを固められているサフィニアも、この前、新しく購こう入にゆうした銀色の杖つえを手に、いつでも特殊なチヤネ精神集中リングに入ることができそうな構えだ。

「……つけられてるね」

「出待ちしゃれていたのかも。今までわからなかったなんて、迂う闊かちゆだわ」

「捲まくのは──」

　すばしっこさが身上のマリアローズはともかく、いくら鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術の使い手とはいっても、ユリカの体格は見たとおり十歳並みだ。サフィニアも敏びん捷しようとはいえないので、正直、こちらの機動力は決して高くない。

「ちょっと難しいかな」

「申し訳ないけど、しょう考えた方が無難でしょうね」

「気にしないで。その代わり、頼たよりにしてるから。反応を見て、ダメそうなら先手をとる」

　ダメとは、平和的な解決が望めない場合、という意味だ。仲間内ではこんな言い方でも十分通じるし、各人がどう動くべきか、前もって確かく認にんする必要もない。マリアローズがＺＯＯに加盟してまだ三巡じゆん月げつも経たっていないが、ともにいくつかの修しゆ羅ら場ばをくぐり抜ぬけるうちに、その程度は阿あ吽うんの呼こ吸きゆうで何とかなるようになってきている。

　ただ、人通りも結構ある大食小路グラトン・アレイで、あからさまに殺気を漲みなぎらせて他人ひと様さまを尾び行こうするような相手だ。

　単なる馬ば鹿かか。腕うで自じ慢まんの大だい胆たんな馬鹿か。最初からここで仕し掛かけてくる気でいるのか。

　いずれにしても、油断は禁物だし、何より的確な状じよう況きよう判断が求められる。

　マリアローズは意識的に一つ短く息をつき、心を落ち着けてから振ふり返った。

「僕たちに何か用でもあるの」

　いきなりそう訊きかれると、用がある者はだいたい、肯こう定ていか否定かどちらかの意思表示をするものだ。

　連中は素す直なおに前者を選んで、身構えた。

　七メーテルほど離はなれて、マリアローズたちをつけてきていた男が、見てそれとわかるだけで五人。全員、体毛や肌はだの色、顔立ちが東方系なだけでなく、灰色とオリーブ色に黄褐色オークルをあわせたお揃そろいの軽けい鎧よろいを着ているので、実に判別しやすい。

　彼らの胸にプリントされた《Ｓ＊Ｋ》のエンブレムは、シリアルキラーの略か。たいして品質も性能もよくないが、安価でそこそこ見映えだけはする、そんな名前のブランドがあるのだ。

　というか、シリアルキラーの鎧を着た一団━━何かが引っかかる。いったい、何だ？

　だが、無理に記き憶おくの巣をつつく必要はなさそうだった。

　五人のうち一人、薄うすい髭ひげを口の周りにこびりつかせたつり目の男が、左手に持っていた鞘さやから青せい竜りゆう刀とうを抜きつつ舌なめずりした。

「用、あるよ。お前たち、ツーね」

「ＺＯＯズー、ではあるけどね」

「つ……つ、じゅ、じゅー？」

　何度言い直しても、つり目はうまく「ズー」と発音できないようだ。共通語のつたなさにも特とく徴ちようがある。連中はα大陸の東に浮うかぶ島国、龍りゆう州しゆうの出身だろう。馴な染じみの商人の中に龍州人がいて、マリアローズもほんの片言なら龍州語を理解できるくらいなので、まず間ま違ちがいない。

「で、僕たちがＺＯＯだとして、何の用さ」

「とぼける、よくないね」

「別にとぼけてはないけど──」

　いちいちからかっていても、きりがないだろう。

　それに、マリアローズは腰に下げた偽劫ごう火かの柄つかに手をかけながら、実はとぼけていた。思い出しはじめていたのだ。シリアルキラー。似たような格好。そうか。引っかかっていたものの正体とはこれだったのか。

　ただ、あのときは龍州人かどうかなんてわからなかった。わかるはずがなかった。何せ、素顔を拝む機会がなかった。

　連中は、やはりお揃いの防毒面ガスマスクをかぶっていたからだ。

「そんな物ぶつ騒そうなものは引っこめたらどう？　話しあいで解決しようよ」

「ふつぁけるな！」

「ふざけてなんかない。僕は本気だよ。今、たまたま美味しいものを食べたあとで、上じよう機き嫌げんだから、きみたちの態度次し第だいでは見み逃のがしてやるって言ってるんだ」

「見み逃のかす、必要ないね。お前たち、ここて死ぬ。吾ウー等テンに殺されるよ」

　つり目は薄うす笑わらいを浮かべた。

「仲間の仇かたきね。覚おぼえてない、言うのタメ。オレストロ

て、何人も、何人も、お前たちのせいて、半死者ハーフてつとなったよ。最初、正体不明たったね。ても、お前たちＺＯＯつー、オレストロの奥まて行って今は有名よ。吾ウー等テンシリアル・キラーつ、皆みな、お前たち狙ねらってる。もう逃にけられないよ」

「しりある・きらーつ……？」

　たぶん、シリアル・キラーズと言いたいのだろうが、彼らが着ているシリアルキラーの軽鎧と何か関係があるのだろうか。文脈からすると、どうも彼らの属するクランか何かの名めい称しようのように思える。

　Ｓ＊Ｋ＝シリアル・キラーズ＝龍州人のクラン？

　そのあたりはよくわからないけれども、事情はおおよそ呑のみこめてきた。

　あれは五日前、喪そう神しん街がい深層でレディ・麟霊と対決する前日のことだ。

　マリアローズたちＺＯＯの面々は、その日も喪神街にいたのだが、第四層へ通じる坂道の前で予想していなかった難敵と出くわし、苦戦を強しいられていた。そこに颯さつ爽そうと現れたのが、お揃いの防毒面ガスマスクをつけた者たちの集団だった。

　いや、正確にいえば、やつらは物もの陰かげに隠かくれ、マリアローズたちの動向をうかがっていたのだ。

　ＺＯＯの中には、一見して値の張りそうな武具を持ち歩いている者もいるので、おそらくどこかで目をつけられたのだろう。やつらはどさくさに紛まぎれてマリアローズたちを襲おそい、勝利も、生命も、金目の物も、すべてを略りやく奪だつしてしまおうと目もく論ろんでいたに違いない。

　が、むろん、こちらとしても、黙だまってやられてやる義理はない。防毒面ガスマスク集団の存在を察知したマリアローズらは、やつらが動き出す前にこれを撃げき退たい、事なきをえた──とも言いきれないが、あの集団がＳ＊Ｋだったのだとすれば、つり目の主張も一応、理解できなくはない。

　当然、同意も共感も同情も一いつ切さいできないが。

「逆さか恨うらみ、か……」

　マリアローズは小さくため息をついて、軽く首を振ふった。肩かたはすくめなかった。そんな仕草で無む駄だに腕うでを動かすわけにはゆかなかった。

　なぜなら、マリアローズの右手はすでに偽劫火の柄を握にぎっていたし、左手は鞘に添そえて、居合いの準備を整えていたからだ。

　つり目の男まで、約五メーテル。

　この距きょ離りを一いつ瞬しゅんで縮めなければならないが、身体能力の面でいうと、マリアローズは他人ひとよりすぐれているわけではない。

　では、どうするか。

「とりあえず、きみの言いたいことはわかったよ。でも、そっちは喋しゃべりたいだけ喋って、こっちの話は何も聞かないなんて、それはないんじゃない？　僕たちにだって言い分はある」

「お前たちの話、聞く必要、ないね」

「どうしてさ」

　その問いに、つり目が何か答えようと口を開いた瞬間だった。

　マリアローズは弾はじかれたように駆かけ出し、三歩でつり目を間合いにとらえるや否いなや、腰こしを左に回して鞘を引きながら、一息で偽劫火を抜ぬいた。

　狙ったのはつり目の顔面だったのだが、敵も然さる者だった。つり目はうろたえつつも、とっさに上体をのけ反らせて偽劫火の抜き打ちをかわし、崩くずれた体勢のまま青竜刀で空を一薙なぎした。そう、空を。

　初しょ太刀だちを外されたマリアローズは、すかさず飛び退のいていた。

「話を──」

　もっとも、ただ逃にげたのではない。マリアローズは偽劫火を

持った右手を前に差し向け、左手は右籠こ手てに添えて、もう次なる手を打とうとしていた。

　というより、すぐに打った。

　いや、撃ったといった方が正確だろう。

「聞かないなら……！」

　マリアローズの右手の延長線上には、つり目の額があった。そして、右籠手の手首の内側にあたる部分には、小型の射出装置がある。

　そこから何が射出されるのかといえば、矢だ。

　籠手の両りよう脇わきにあるスイッチを同時に押すと、小さな作動音がした。わずかな反動があって、針状の細い矢がまっすぐ飛んでゆき、狙いどおり、見事つり目の眉み間けんに突つき刺さった。

「──こうだ。ちなみに、後こう悔かいしても遅おそいよ？」

「倪ニー奴ヌウ……な、何を！」

　つり目は額に手をあてて矢を探さぐりあてると、慌あわててこれを引き抜いたが、時すでに遅しだ。つり目自身も、何となく自分の運命を悟さとったのかもしれない。矢に仕込まれた神経毒Ｐ９ドウター＋プラスが効果を現すまでの数秒間に、やつは青せい竜りゆう刀とうを振って仲間に号令をかけた。

「襲シー撃ジ他ター奴ヌウ！　狙ジユ先シヤン赤チー髪フ、魔アモー術シユー士シ……！　グッ……クウゥッ……」

　他のＳ＊Ｋどもはこれに従って、痙けい攣れんしながら自分で首を絞しめるような格好で崩れ落ちたつり目に見向きもせず、こちらへ押しよせてくる。薄はく情じような連中なのか？　そんなはずはない。マリアローズの知る限り、龍州人は仲間意識が強く、身内の結束はきわめて固いはずだ。ということは、単なるチンピラではなく、ちゃんと訓練されているのか。

　だとしたら、いかにも魔術士といった風ふう体ていのサフィニアがまず狙われる。確か、つり目が発した叫さけびの中にも、龍州語

で魔術士を意味する言葉があった。サフィニアを守らなければならないが、たった数メーテルとはいえ、一人だけ突とつ出しゆつした位置でＳ＊Ｋ四人を相手どるなんて、マリアローズにはとうてい無理だ。

　下がるしかない。いや、ここは下がるのが正解だろう。

　マリアローズがＳ＊Ｋどもを正面にとらえたまま後退すると、それと入れ違いに、計ったようなタイミングでユリカが前に出た。

「──倒とおぉっ……！」

　それも、ただ闇やみ雲くもに突進したのではない。ユリカは壁かべを作って迫せまってくるＳ＊Ｋどもの手前で身を沈しずめ、円を描えがくように極限クライマックス九手棍ナインポールを旋せん回かいさせた。

　だが、いくらうまく連中の足首あたりに棍こんが命中したとはいえ、四人のＳ＊Ｋが一いつ斉せいにつんのめって一回転し、仰あお向むけで地面に叩たたきつけられる結果は、できすぎだ。絶ぜつ妙みようの角度とか、力の加え方とか、相手の体勢とか。おそらく、すべてが揃そろってはじめて可能となる芸当なのだろうが、これこそユリカが身につけている鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術の真しん髄ずいなのか。

　間かん髪はつを入れず、ユリカが自分の方へ倒れかかってきた一人を返す一いち撃げきで払はらいのけると、景気の悪い声が上ハイ古ロ高メ位オ語ンを口ずさみはじめた。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　短い呪じゆ文もんだった。爆ばく雷らい索さく。サフィニアがよく用いる要素魔ま術じゆつだけれども、実はそうたやすく使えるような魔術ではない。しかも、サフィニアの凄すごいところは、杖つえから幾いく条もの雷いかずちを放出するだけでもたいしたものなのに、それらを思いどおりに操縦してしまうことだ。

　つまり、敵味方が入り乱れていても、敵のみを狙い撃ちできる。マリアローズも、初歩的な魔術の教育を受けた経験があるのでわかるのだが、これは口で言うほど簡単ではない。だいたい、魔術というやつは、努力や根こん性じようより素質やセンスだ。才能がなけ

れば、いくら頑がん張ばってもダメなのだ。たとえば、●ロナとか、コ●ナとか、コロ●とか。

　まあ、たまたま見知っているへっぽこ魔術士を持ち出すまでもなく、実はマリアローズもあまり魔術に向いていないクチなのだが。

　閃せん光こうの魔女マチルダにその才を見込まれながら、一億人に一人の凶きよう運うんが原因で見放された経歴を持つサフィニアは、違ちがう。

　サフィニアの杖から放たれた青白い稲いな妻ずまは、きっちり四人のＳ＊Ｋをとらえて感電させた。

　マリアローズとユリカが時間を稼かせぎ、その間にサフィニアが魔術を準備して、一挙に敵を片づける。うまいこと、理想的な連れん携けいが成功したわけだが、気を抜いている場合ではなかった。

「……来ライ此シー処チユ！　呼フー在ツアイ近ジン同トン友ヨウ！」

「彼ピン倪ニー奴ヌウ！　殺シヤーハパー裂リエ！」

　場所が大食小路グラトン・アレイということもあって、騒さわぎが起こるまではそれなりに人通りがあったのだが、今は物見高い野次馬連中だけが少し離はなれて人ひと垣がきを作っている。殺気立った龍州語が聞こえてきたのは、その中、あるいは向こうからだった。

　通りの両側を塞ふさぐようにできた人垣をかき分けて、ぞろぞろと姿を現した龍州人が、十人、いや、それ以上か。

　見たところ、シリアルキラーの服を身にまとったＳ＊Ｋだけでなく、ファー付きの黒い皮ひ革かく製のジャケットを着た者も混じっている。ジャケットには金色の蛇へびみたいな生き物、おそらく龍が刺し繍しゆうされていて、龍州人の趣しゆ味みなのか、これまた全部お揃いだ。

「……畜生シツト」

　マリアローズはサフィニアを挟はさんでユリカと背中あわせになり、左手でベルトのホルダーをまさぐった。ハーレム・ゴードン──爆ばく弾だんは、しかし、さすがに街中では使いづらい。法も、秩

ちつ序じよもないといわれているこの国でも、好き勝手し放題というわけにはゆかないのだ。

　まあ、別にそうしたければしてもいいのだが、そのためには相応の力がなければならない。傍ぼう若じやく無ぶ人じんな振ふる舞まいで誰だれかに害を与あたえれば恨うらまれて当然だし、出る杭くいは打たれるという言葉もある。それでつけ狙われ、襲おそわれたとき、返り討うちにしてやれるだけの力がなければ、殺されて終わりだ。

　要するに、他人に迷めい惑わくをかけてはいけません。

　結局、人間社会に共通する最低限のエチケットくらい守っておくのが、何よりも自分のため、ということになるだろう。そうすれば、反感を買うこともあまりないから、生きてゆく上でのリスクが軽減される。それは承知しているし、マリアローズなどは結構、気を遣つかっている方だと思うのだが、そうではない馬ば鹿かも中にはいて。

　よりにもよって、そいつが身内にいたりすると、すべては水の泡あわだ。

　──あの魚野や郎ろう。

　さっき、つり目がこんなことを言っていた。「最初、（お前たちの）正体（は）不明たったね。ても、お前たちＺＯＯつー、オレストロの奥まて行って（そのことを自じ慢まんげに言い触ふらした阿あ呆ほうがいたおかげで）今は有名よ」

　なお、（　）内はマリアローズの補足だが、さらに付け足すと、その阿呆の名はカタリという。やつは魚顔であり、残念なことにＺＯＯの一員であって、嫌いやすぎることに、マリアローズの仲間といわざるをえない。

　ついでに、やつはつい先日、稀少物レア・収集家ハンターたちの会合で、自分が喪そう神しん街がい深層に到とう達たつしたこと、レディ・麟霊を倒したこと、稀少レア物ものの入手はならなかったが、この一連の探たん索さく行自体に資料的な価値があることなどをべらべらと喋しやべりまくって──その結果、乱らん闘とう騒さわぎを起こした。

よせばいいのに、余計なことまで話したせいだ。

それが何かというと、喪神街深層到達の前日、Ｓ＊Ｋの防毒面ガスマスク集団と予想外の難敵に挟きよう撃げきされた挙句、潰かい走そうした出来事だ。

当事者のマリアローズが言うのも何だが、本当にあれはひどかった。

乾かわいた国の餓うえた土の亡者やら、たくさんの半死者ハーフデツドやらに追いかけられて、Ｄ９出入口を目指すまでの間、巻き添ぞえにした侵入者クラツカー多数。彼らに逃とう走そうを強しいたマリアローズらＺＯＯの面々は、地上まで逃にげきると、そのままどさくさに紛まぎれて姿を消した。

そうせざるをえなかったのだ。

素す直なおに謝ったところで、許してもらえるはずがないし、場合によっては刃にん傷じよう沙ざ汰たになりかねなかった。というか、まず間違いなくそうなっただろう。

で、あの事件で危うく死にかけた侵入者クラツカーの一人が、たまたま会合に出席していたらしい。

すると、当然、「お前のせいか！」という話になるのが道理だ。カタリも最初は頭を下げていたものの、そのうち揉もみあいになり、つかみあいになって、何かの弾はずみで第三者同士が殴なぐりあいを始めると、あとはもうめちゃくちゃだったという。

それでも、どうにか死なずにその場を切り抜けてきたカタリは、ユリカに治ち療りようしてもらいながら「ほとぼり冷めるまで会合には顔出されへんなあ。情報収集に支障出まくりやで。ものごっつう鬱うつや」などと呟つぶやいていたが、そこで鬱になってどうする。だから半魚人だというのだ。いや、半魚どころか、知能は完全無欠の魚並みだ。

いずれにせよ、その一件が広まって「（お前たち）今は有名よ」となったことは疑いえない。

つまるところ、例によって例のごとく、すべてカタリのせいなのだ。

　夏が暑いのも冬が寒いのも、何もかも全部、カタリが悪い。

「あとで串くしに刺さして焼き魚にしてやる」

　むろん、そのためには、この危地を脱だつしなければならない。

　だが、マリアローズの正面方向から六、七──八人、まだ増えそうか。

　それと、マリアローズにとっての背後、ユリカの正面方向からも、やはり六、七人。

　あわせて実にこちらの五倍、十五人はくだらない龍州人どもに挟まれたこの苦境を、どうやって？

「……片側は……わたしが、何とか……」

　マリアローズが逡しゅん巡じゅんしていると、サフィニアが囁ささやくようにそう言って、特殊なチヤネ精神集中リングに入った。

　ということは、もう片側はマリアローズかユリカ、どちらか一人が前に出て引き受けることになる。一人はサフィニアの護衛だ。

　野次馬が近すぎて、爆弾が使えない以上、個人としての戦せん闘とう能力を考えれば、マリアローズが護衛役、ユリカが前に出る役を受け持つのが妥だ当とうとはいえ──いくらユリカでも、相手が多い。必ずしも勝算ありとはいえない勝負になるだろう。それがわかっていて、行ってくれとユリカに頼たのめるものではない。

　背に腹は代えられない。ここはもう、後先を考えずに爆弾を使うか？

「──サしやフィニア、マリアの方を。こっちはわたしがやるわ」

「ユリカ……」

　マリアローズはサフィニアがうなずく気配を感じながら、ユリカを止めようとして、思いとどまった。

「お願い」

「任しぇて」

　本当に、ユリカに任せてしまっていいのか。まだ迷いはあるが、マリアローズならば、サフィニアを守りながらでも、籠こ手ての矢で後方からユリカを掩えん護ごできる。その逆は不可能なわけだし、現状、これが最善の役割分担であることは否定できない。

　まあ、最善をつくしたからといって、報むくわれるとは限らないのだが。

　マリアローズが眼前を高速で横切ってゆく何かの影かげを見たとき、Ｓ＊Ｋと黒ジャケットの龍州人たちの先頭は、七、八メーテルほどの距きよ離りまで接近してきていた。

　影の正体はすぐにわかった。矢だ。弩いしゆみか。そういえば、喪神街の防毒面ガスマスク集団も弩を持っていた。どこから撃うってきた？　この角度だと、向かって左側の地面より高い位置か。大食小路グラトン・アレイは環かん状じよう通に近く、結構道みち幅はばが広いわりに、両側に建ち並ぶ建物はどれも低い。平屋か二階建て、たまに三階建てがあるくらいだ。今、いる場所の左手には━

　あれか。

　間ま違ちがいない。

　屋台の寄せ集めみたいな低い建物の屋根の上に、三人のＳ＊Ｋが片かた膝ひざを立てて座っている。

　もちろん、そんな場所でただぼんやりしているわけではない。全員、弩を構えている。うち一人、立ち上がろうとしているＳ＊Ｋは、さっきの矢を放ったやつだろう。

　先走って狙ねらいを外したか、それとも、誤って引き金を引きでもしたのか。

　いずれにせよ、あの間ま抜ぬけな慌あわて者には感謝しなければならない。やつがたかだか約十メーテル先の的を外してくれたおかげで、マリアローズは連中の存在を察知することができたのだ。

　ただ、せっかく気づいても、狙そ撃げきを阻はばむ手立てはない。

　しかも、ある予感に駆かられて、右の方を確かく認にんすると━やはり、いた。左側と似たような建物の屋根に、こちらは二人。片

膝立ちで弩をこちらに向けている。どちらか一方ならまだしも、左右からとは。

　こうなるともう、対応策を吟ぎん味みする時間はない。声を出して注意をうながす余よ裕ゆうすらなかった。最優先の標的は魔ま術じゅつ士しであるサフィニアのはずだし、二方向からの射しゃ撃げきにさらされようとしている彼女を守るためには、体を張って盾たてになるだけでは足りない。

「──くっ……！」

　マリアローズは、だから、サフィニアを押し倒たおすようにして地面に伏ふせた。間かん一いつ髪ぱつだった。わずかでも遅おくれていたら、マリアローズとサフィニアは何本もの矢に貫つらぬかれていただろう。

　もっとも、その判断が正しかったのかどうか。

　他ほかにどうしようもなかったと言えばそうなのだが、結果的に呪じゆ文もんの詠えい唱しようを始めようとしていたサフィニアの集中を乱してしまったのは、痛い。痛いどころか、致ち命めい的てきとさえいえる。

　何しろ、これでマリアローズたちは、前後から押し迫せまってくる多数の敵に、真っ向勝負を挑いどまねばならなくなったのだ。

　いや、前後だけでなく、左右からも弩を捨てた連中が屋根より飛び降りて近づいてこようとしているし、マリアローズとサフィニアはこのざまだし、ユリカもさすがにこちらを振ふり返って凍こおりついているしで、もう本当に終わっている。認めたくないが、どう考えても、真っ向勝負どころか嬲なぶり殺しにされるしかない情勢だ。

　そうなってもおかしくなかった。

　むしろ、確実にそうなっていただろう。

「──銀の軍団ザ・シルバリイ」「番人だ……！」「死神！」

　野次馬たちのどよめきと、歓かん呼こ、または恐きよう怖ふと畏い怖ふに彩いろどられた叫さけび、もしくは悲鳴の中、まばゆい銀の装そう甲こうに身を固めた彼らが現れなければ。

　秩序のモラル・番人キーパーズ。

　純ピュア血・ブラのツド・司祭プリーストデザインの白しろ銀がね色いろに輝かがやく鎧よろい、プロヴィデンス・シリーズを制式装備として採用していることから、〝銀の軍団ザ・シルバリイ〟とも称しようされる。

　その構成員は、好意を、または悪意や皮肉をこめて番人と呼ばれているが、どちらにしても、エルデンで彼らのことを知らない者はまずいない。それほどまでに彼らが有名である原因は、遠目から見てもとにかく目立つだけでも、数が多いだけでもない。

　一言でいうと、とんでもなく出しゃばりなのだ。

　頑かたくななまでに自ら標ひよう榜ぼうする「義」とやらにこだわる彼らは、押しつけがましく、高圧的で、容よう赦しやがない。

　番人たちは、普ふ段だんから数人が組になってエルデン中を巡じゆん回かいし、近くで騒さわぎがあると駆けつけてきて、これを仲裁、もしくは鎮ちん圧あつする。誰だれに頼たのまれたわけでもなく、自発的に、だ。特に、ＳｍＣだの、ギャプ・ド・レエだの、赤子同盟ＢＵだの、ＤＩＥダイだのといった名の知れた悪党クランが相手だと、問答無用で斬きりかかることもあるらしい。

　後背から龍州人たちに襲おそいかかったのは、その番人たちだった。

　というか、ユリカが正対していた側の龍州人たちは、すでに散々突つき崩くずされ、斬り破られている。

　反対側の龍州人たちは無事だけれども、本来の標的であるマリアローズらを攻こう撃げきすべきか、仲間を救うべきか、迷っているようだ。あるいは、ただ呆ぼう然ぜんとしているだけかもしれない。

「……助かった……のかな」

　マリアローズも半ば呆あつ気けにとられていた。この状じよう況きようが信じられない、ということもあるが、番人たちの手て際ぎわがあまりにもよくて、思わず感心してしまっていた。

　だって、実は、番人の数は決して多くない。数えてみればすぐに

わかることだが、六人。たった六人だ。ユリカ側の龍州人は、その倍ほどもいたはずだ。

それなのに、番人はいともたやすく龍州人たちを蹴け散ちらしてしまった。

鍵かぎとなったのは、番人六人のうち、五人が持っている盾だ。

横一列に並んで盾を構えた五人の番人は、龍州人たちに後ろから突とつ撃げきして、体当たりを食らわせた。これでもう勝敗は半ば決したといっていいだろう。つんのめり、あるいはバランスを崩した龍州人たちのほとんどは、ただ一人、盾を持たない番人が振るう一メーテルほどもある大刀の餌え食じきとなった。残りは、盾持ちの五人が剣けんを抜ぬき連ねて、あっという間にしとめた。

それは殺したというより、処理したという表現の方がしっくりくる。

とりわけ、太い眉まゆをぴくりとも動かさず、龍州人たちを大刀で撫なで斬りにした番人は際立っていた。

他の番人たちが鎧と揃そろいの兜かぶとで顔を隠かくしていて、彼だけ素す顔がおを晒さらしているのも、その一因ではある。だが、正確無比で一分の無む駄だもなく、一ひと振ふり一振りが稲いな光びかりのように鮮せん烈れつな印象を残す彼の太刀たち捌さばきと比べれば、そんなことは些さ末まつな要素だ。

黒くろ髪かみ、黒い目、肌はだの色や目鼻立ちからして、東方出身か。彼の左頬ほおと右の眉まゆ尻じりには、古そうな傷きず痕あとがある。動じない眉は太く、眼光はきわめて鋭するどい。

狷けん介かいというよりも、物ぶつ騒そう。物騒というより、険悪。険悪より、むしろ冷れい酷こく。

人は彼を死神と呼んで恐おそれる。

おそらく、秩序の番人の中では、総長デニス・サンライズにもひけをとらない知名度の高さを誇ほこるのではなかろうか。

羅ラ叉サ。

やはり東方系の名を持つ銀の死神は、斬り伏ふせた龍州人たちの

屍かばねを一いつ顧こだにせず、血刀を振りかざした。

「悉ことごとく殺せ」

　低く、押し殺したような声だった。羅ラ叉サ以外の番人五人は、この命令を受けて隊列を整え、再び盾たてを構えて走り出した。反対側の龍州人たちがうろたえて浮うき足立ったのは、ようやくこのときだった。

「──遁タン走ツオ！　遁タン走ツオ急ジー励リー……！」

　一人のＳ＊Ｋが仲間に向けてそう叫びながら、回れ右をした。

　だが、遅おそかった。五人の番人たちは、二手に分かれてマリアローズらの両りよう脇わきを駆かけ抜けてゆき、逃にげようとする龍州人たちに速度と体重をのせた盾を浴びせた。

　そこに、先ほどと同じように羅ラ叉サが飛びこんでいって、斬った。一片の躊ちゆう躇ちよも見せず、背中を向けている龍州人の頸けい部ぶを斬った。硬かたいはずの頭ず蓋がい骨こつをものともせずに、やすやすと頭部を斬り割った。突きは一いつ切さい用いず、ひたすら斬った。気合いの声を発するでもなく、息も乱さず、異様なほど平然と斬りつづけた。

　いつの間にか、マリアローズは半分起き上がった体勢のままで、サフィニアをきつく抱だきしめていた。

　そのことに気づいて、力を緩ゆるめようとした腕うでが、震ふるえている。

　怖こわい、と思った。怖い。あの男が恐ろしい。自分たちを押し包んで殺そうとしていた龍州人より、遥はるかに怖い。

　いや、それだけではない。

　これは──嫌けん悪お、か。

　人を虫けら同然に殺すあの男への反感と敵意が、ある一つの感情となって噴ふき出そうとしている。

　助けられておきながら、とか、あの男が殺しているのは、実際、数かず恃だのみ逆さか恨うらみの芋いも虫むし野や郎ろうどもでは

ないか、とか、虫けらといえば虫けらだ、とか。それはわかっているのだが、何もそこまでやることはないのではないか。

　マリアローズは自分が立ち上がるついでに、サフィニアを立たせてやった。

「……ありがとう、ございます……」

「あ、うん……」

　サフィニアに生返事をしつつ、マリアローズは羅ラ叉サの前に這はいつくばっている二人の龍州人から目が離はなせない。

　龍州人のうち一人はＳ＊Ｋで、もう一人は黒ジャケットだ。他ほかは、何とか逃げおおせた者以外、屋根から降りてきた連中も含ふくめて全員、羅ラ叉サと番人たちの手により、すでに息の根を止められている。

　急に出現した血の海二つ、これをいったい誰が片づけるのか。

　近所で商売している者たちが後始末をしなければならないとしたら、気の毒な話だ。

　最初はやんやと歓かん声せいを上げていた野次馬どもも、あまりにも凄せい惨さんな光景に口をつぐみ、あたりは奇き妙みようなほど静まり返っている。

「──不プー殺シヤ吾ウー等テン……願ヤン是シー、願ヤン是シー哉ラー……」

　その静せい寂じやくを破ったのは、生き残りの黒ジャケットだった。

　おそらく、命いのち乞ごいをしているのだろう。黒ジャケットはさかんに両手をもみあわせ、羅ラ叉サを拝むような仕草をしていたが、不意に引きつった愛あい想そ笑いを浮かべた。

「啞ヤー……兄シヤオ倪ニー同トン鄉シヤン吾ウー？　故クー里リー何ヘイ処シウ？　吾ウー来ライ──」

　それは決死の哀あい願がんだったに違ちがいない。早口だったこともあって、何を言っているのかさっぱりわからなかったが、いず

れにせよ、黒ジャケットが笑え顔がおに託たくした最後の望みは叶かなわなかった。

　羅ラ叉サがいきなり大刀を閃ひらめかせたのだ。

　無言で、だ。

　冥めい途どの土産みやげに一言くらいかけてやってもよさそうなものなのに、何てケチくさい死神だろう。

　黒ジャケットにとって唯ゆい一いつの慰なぐさめは、突とつ然ぜん、訪れた死に際し、たぶん苦痛を感じる暇いとまさえなかったことだろうか。

　黒ジャケットの隣となりにへたりこんでいたＳ＊Ｋは、地面に転げ落ちた物体をじっと見つめ、口をぽかんと開けた。

　髪かみの毛を生やした大きめの椀わん、とでも形容すればいいか。説明するのもおぞましいが、要するにそれは、黒ジャケットの眉まゆのあたりから上の部分だった。ついでに、たぶん、数秒後に訪れるＳ＊Ｋの末路でもあった。

　死神は大おお鎌がまを、否いな、大刀を振ふり上げ、やはり何も告げずにＳ＊Ｋを処分しようとしていた。

「……ちょ、ちょっと待った！」

　正直、マリアローズは、死神を制止してどうしようという考えがあったわけではない。Ｓ＊Ｋを哀あわれに思ったのかと問われれば、そのとおりだとも答えられないだろう。当たり前だ。自分たちを殺そうとしていたやつなんかに、同情する馬ば鹿かはいない。

　けれども──これはマリアローズ自身だけでなく、ユリカやサフィニアにも怪け我がひとつなかったので言えることではあるのだが、必死で命乞いしている相手を情け容よう赦しゃなく殺してしまうのは、何か違う気がした。

　第一、黒ジャケットとＳ＊Ｋは、番人たちに何かしたわけではないのだ。

　降りかかる火の粉を払はらうのはこの国の習いなので、身を守るために誰だれかの命を奪うばうというのなら、話はわかる。マリア

ローズも喪そう神しん街がいでそうしたわけで、そのせいで理り不ふ尽じんな恨うらみを買い、こうなった。ろくでもない結果だが、サンランドで、特にエルデンで生きるということは、そういうことだ。ここはそんな国のそんな街であり、皆みな、すべて承知の上でここを生活の拠きよ点てんとしている。耐たえられない者は、この国から出てゆけばいい。誰も止めはしないだろう。

　ところが、秩序の番人は、自分たちの意に染まぬ連中を、この国どころかこの世から追い出そうとしている。

　いや、実際、追い出している。

　彼らはまるで、自分たちの気に食わない者どもを、この国から一いつ掃そうしてしまおうとしているかのようだ。

　そこまでする必要が――あるとかないとか口出しするのも、まあ、サンランドの流りゆう儀ぎではないわけだが。

　いったい、自分は何をしようとしているのか？

　だから、羅ラ叉サが大刀を下ろしてこちらを振り向いたとき、マリアローズはまず困った。

　さらには、あまりにも冷たい死神の視線に射すくめられ、恥はずかしながら怖おじ気けづいた。

　もし、相手の方から何も言ってこなかったら、そのままずっと凍こおりついていたかもしれない。

「何だ」

「え――と、その……」

　マリアローズの声は尻しりすぼみになった。

「何も、殺しちゃうことはないんじゃないかな、なんて……もう勝負はついてるし、殺す価値もないっていうか……」

「そのとおりだ。悪党に価値などない」

　羅ラ叉サは後ろを見ずに、体をひねって大刀を振り下ろした。五人の番人もいて、冷静に考えれば、逃にげおおせるなんて絶対に不

可能なのだが、それでも今が機会と見たのだろう。逃げ出そうとしていたＳ＊Ｋが脳天に大刀の一いち撃げきを食らい、崩くずれるように倒たおれ伏ふした。

「殺す価値以上に、生きる価値がない」

「な──」

　それゆえに、殺すというのか。

　マリアローズが二の句を継つげずにいると、羅ラ叉サは番人の一人が差し出した布で大刀の血ち脂あぶらをぬぐい、鞘さやに収めながらひとりごちるように言った。

「悪は死んでも治らん。ならば、駆く除じよするが最善」

「あ、悪って……」

　ようやく糸口を見つけたと思った。もはや自分が何をしているのか、しようとしているのかも不明だけれども、黙だまって引き下がるのも癪しやくだ。

　そもそも、この国で悪などという概がい念ねんを持ち出すことが、どれだけ無意味か。そんなことを言い出したら、他ほかの国ではとうてい認められない、許されない様々な行こう為いが、ここでは普ふ通つうにまかりとおっている。

　誰にも、何にも禁じられていない、罰ばつされることもないのなら、それを悪と呼べるのか。

　単なる好き嫌きらいとか、快不快とか、自分にとって不利益だとか、邪じや魔まだとか、迷めい惑わくだとか、そういった問題にすぎないのではないか。

　善悪、なんて。

「何が悪くて何がいいなんて、そんな簡単に──」

「おのれを利するため、他を害するものはすべて悪」

　羅ラ叉サは簡潔明めい瞭りように悪を定義してみせ、番人たちに向かって軽く手を挙げた。

「悪なれば即すなわちこれを斬きる。それが我らの義だ」

　羅ラ叉サの合図に応じた番人たちが、一いつ斉せいに兜かぶとを脱ぬいで腰こしに吊つるした。見ると、驚おどろくほど彼らは皆、若い。二十代後半くらいの男が一人いる他は、せいぜい二十歳になるかならずといった感じの男が三人。もっとも小こ柄がらな一人などは、明らかに十代だ。

　しかも、その一人は、顎あごの下あたりでくすんだ金きん髪ぱつを切り揃そろえ、まだあどけなさを残した顔立ちの──女だ。

　女の子、といった方がいいか。ユリカみたいな絶世の美少女ではないが、それでも十人並みよりはずっと上だろう。正直、なぜこんな娘むすめがプロヴィデンス・シリーズの厳いかめしい鎧よろいを着て、番人なんかやっているのかと首を傾かしげたくなる。

　そうはいっても、彼女の鎧は女性用にデザインされたものらしく、体にちゃんとフィットしていて、鎧に着せられている感じはしない。いかにもお堅かたそうで、生き真ま面じ目めそうな表情も相まって、重装備がさまになってもいた。

　何より、つい先ほどの戦せん闘とうでは、彼女も他の番人たちと同様に、龍州人を盾たてで豪ごう快かいに吹ふっ飛ばしていたのだ。一人や二人は剣けんでしとめもしただろう。

　おそらく、十六、七歳。

　子供扱あつかいされる年ねん齢れいではないとはいえ、無条件で一人前の大人と見なされる年でもない。

　だが、彼女はすでに立派な番人だ。立派な番人だからどうしたということもないのだが、マリアローズの視線に気づいたのだろうか。彼女はマリアローズを睨にらみつけた。

　一いつ瞬しゅん、動どう悸きがした。

　深い青の大きな瞳ひとみだった。

　何か思いつめているような目つきだ。

　彼女はその眼まな差ざしでマリアローズを射い貫ぬき、羅ラ叉サのあとを受けるように言い放った。

「我々は義によって悪を斬る。義に背そむく者も斬る。我々を阻はばむ者も斬る。我々は逃げも隠かくれもしない。このとおり顔も晒さらしている。文句があるならいつでもかかってくるがいい」

　凛りんとした響ひびきの、しかし、まだ幼いと言ってもいい声だった。

　無理に背せ伸のびをして、気張っている。外見以上にそんな印象を強く与あたえる声音だが、感じたままのことを口に出しでもしたら、烈れつ火かのごとく怒いかって襲おそいかかってきそうだ。見も知らぬ女の子に、しかも、番人相手に、そこまで想像力を逞たくましくするのもどうかと思うが、なぜか気になる。

　あるいは、何かにとらわれているような、まっすぐだが、底暗い光をたたえたあの目のせいか。

「行くぞ」

　羅ラ叉サが短くそう言って踵きびすを返すと、番人たちは粛しゅく々しゅくとそれに続いた。

　去りゆく秩序の番人の一団が残していったのは、十以上に及およぶ龍州人たちの遺体だけだ。

　いや、まだある。

　形こそないが、やつらはマリアローズの胸の奥に、ある種の敗北感のようなものを植えつけていった。

　──義、だって？

　悪？

　斬る？

　羅ラ叉サの言ったことは、単純明快で誤解しようがないから、むろん理解できている。意味はわかる。

　しかし、反発を感じざるをえない。あの義とやらをこの国で貫つらぬこうとしたら、かなりの数の人間が連中に殺されなければならないことになるだろう。胸に手をあてて考えてみれば、マリアローズだって、自分のために他人に害を与えたことの一度や二度、ない

とは言えない。

　けれども、秩序の番人が義とやらを振ふりかざすことさえも、ここサンランド無統治王国では自由だ。

　しかも、彼らには、独自の理論を他人に強制するだけの武力がある。

　義だの悪だの、馴な染じみのない言葉を使うから奇き異いに映るが、実のところ、彼らもこの国の流りゆう儀ぎにはちゃんと従っているのだ。

「……何なんだよ、いったい」

　彼らに助けられたのは、ごまかしようのない事実なのに、素す直なおに感謝する気持ちになれない。

　もっと言ってしまえば、胸むな糞くそが悪い。

　むせ返るような血の匂においのせいではないだろう。別に、虫けらにも五分の魂たましいなどと言うつもりもない。ただ、理由も何もなく、純じゆん粋すいに個人的な感情として、番人たちのことが気に食わない。そういうことなのかもしれない。

　だが、血の海や野次馬たちの目から逃のがれて大食小路グラトン・アレイを抜け、環かん状じよう通に入ったときだった。

「でも」

　番人たちに共感を示したのは、意外な人物だった。

「あの羅ラ叉しやという人の言っていたことは、間ま違ちがっていないと思うわ」

「え？」

　マリアローズは足を止めてユリカを見た。

「間違ってないって──何が？」

「悪は死んでも治らない。だから根絶やしにしゅるべきだとまでは思わないけど、目にちゅいたものは摘ちゆみとってしまった方がい

いんじゃないかしら」

　ユリカの口調は淡たん々たんとしている。表情も普ふ段だんどおりだ。

　ただ、灰色がかった青い瞳はどこか遠くの風景を映しているかのようで、極限クライマックス九手棍ナインポールを握にぎり締しめる右手にも、わずかにいつも以上の力が入っていた。

「しょうしゅれば、彼らのしぇいで苦しんだり悲しんだりしゅる人が、少しゆこしでも減るはじゅでしょう」

「……それは、そうだけど」

　このエルデンでは、さして珍めずらしくもない話だろうが、マリアローズも母親が悪党どもに嬲なぶられて殺されている。これまたよくあることで、侵入者クラツカーになってからも、何度かやつらに殺されかけた。

　そんなとき、アジアンという名のとんでもない鬼き畜ちく変態男に助けられたりして、余計な面めん倒どうを背負いこむことにもなった。

　思えば、ＺＯＯに入る少し前くらいにも、悪名高いＳｍＣどもに絡からまれたところを、やはりアジアンに救われたのだった。

　あの出来事は、ちょっと──思い出したくないのだが、そういったわけで、当然、悪党なんかいなくなってしまえと、本気で考えたこともある。

　それも、一度や二度ではない。いちいち数えていないが、たぶん結構な回数に上るだろう。

　けれども、まさかユリカがそんな意見を口にするなんて。

　ひょっとして、悪党に何か恨うらみでもあるのだろうか。

　詳くわしく尋たずねたい衝しよう動どうに駆かられたが、マリアローズは思いとどまった。自分自身のことを考えても、もし、過去に何かあったのだとしたら、それはきっとつらい記き憶おくに違いない。少なくとも、こんな道の真ん中で喋しやべるようなことではないだろう。

「まあ、どっちにしても—」

　マリアローズは真紅の頭とう髪はつを掻かき回しながら、話題を変えた。

「一回、みんなで話しあわないとね。あの龍州人たち、Ｓ＊Ｋっていうのかな。どうやら僕らを狙ねらってるみたいだし」

「しょうね」

　そう答えながらも、ユリカは半ば心ここにあらずといったふうだ。マリアローズは軽くため息をついて、サフィニアに向き直った。

「そういえば、今日、事務所にトマトクンが来てなかったけど、何か用事でもあるの？」

「……ええ、何でも……」

　事務所とは、第二王立銀行内にあるＺＯＯのたまり場のことで、正式名めい称しようは動物園ズーズ事務所オフイスという。何もなければ、ＺＯＯの面々はたいていそこでだべっているのだが、お昼すぎにマリアローズたち三人がそこを出るまで、トマトクンは顔を出さなかった。朝からずっとヌー・ベイルの話で盛り上がっていたため、気にしなかったけれども、考えてみればこれは珍しいことだ。

　それでも、トマトクンのスケジュールをちゃんと押さえているあたり、さすがはサフィニアだった。

「夕方から……昔のお友だちに会うとかで……今日は……」

「ふうん。友だち、ね。じゃ、夜までかな。案外、女の人だったりして」

「——え…………」

「あ、いや、その、冗じよう談だんだよ？　そんな、この世の終わりみたいな顔しなくても」

「……べ、別に、わたし……で、でも……そういう可能性も、ないわけじゃ……女の人と……そんなの……困る……だけど、わたしな

んかが困っても……」

「や、だから、冗談だってば。てゆうか、ないって。絶対。ありえない。だってさ、トマトクンだよ？　愛だの恋こいだのなんて全然似合わないし──」

「マリアさん……知らないんですね……ああ見えて結構、女性に言いよられたり……してるんですよ……ふふ……ふふふふ……」

「う、嘘うそ──マジ？　いや、それよりサフィニア、そこって笑うとこじゃないよ？」

「ふふふ……ふふ……」

「やば、サフィニアが壊こわれかけてる、ユリカ──って、ユリカ？」

「……あのとき…………絶じえつ対たい……」

「聞いてないし！」

　マリアローズは頭を抱かかえて天を仰あおいだ。

　つきつめると、すべての元げん凶きようともいえそうな半はん端ぱ生物の鳴き声が聞こえてきたのはそのときだった。

「──待ってえなー！　なあ！　ちっとだけでええねんやんか、なあ……！」

　最初、気のせいか幻げん聴ちようか耳鳴りか何かだと思った。

　精神衛生上、そう思いたかったのだが、あの腐くされ魚野や郎ろうのキングダム・イズルハ訛なまりを聞き違えるはずはなく、声のする方へ目を向けると、やつの姿まで見えた。

　気のせいでも、幻げん覚かくでも、白昼夢でもない。

　あの大おお馬ば鹿かは、逃にげ惑まどうきれいめのオネエチャンを追いかけている最中だった。

「おおーいッ！　大だい丈じよう夫ぶやって！　何も変なことはせえへん、ホンマに茶あしばくだけでええねん！　そしたら、必ずわ

しのこと忘られへんようになるさかい！　なあ！　実は今日、声かけたんはあんたで記念すべき四十九人目なんや！　四シ九ク四シ九ク！　なんてな！　ちゅうわけで、これ以上、わしに惨みじめな思いさせんといて！　頼たのむわ！　なあ……！」

　強ごう引いんだったり、見え見えの嘘だったり、根こん拠きよのない自信だったり、泣き落としだったり、意味不明の駄だ洒落じやれだったり。とにかく、できうる限りの手段をすべて用いている点は評価できる。

　否いな。

　できない。できるはずがない。できるものか。

　そもそも、やつが愚おろかにも余計なことを言い触ふらしたりしなければ、今日という日はヌー・ベイルの超ちよう絶品菓が子しを食べた記念日ということで、美しい思い出としてマリアローズとユリカとサフィニアに記憶されるだけで終わったはずなのだ。

　さすがに、ユリカとサフィニアも半魚人に冷たい視線を送っている。

　マリアローズはこめかみに青筋を浮うかべて偽にせ劫ごう火かの柄つかに手をかけながら、二人に訊きいた。

「とりあえず、あれ、殺やっちゃっていいかな？」

　二人とも反対はしなかった。

Omenage 897 9th revolution 7th day

サンランド無統治王国首都エルデン第八区・東部風料亭
〝泉里(センリ)〟

chapter.2

# 懐旧に思惑は沈む

「まあ、何だ」

　それが男の第一声だった。

「落ち着いた雰ふん囲い気きの、いい店だな」

　表情からはうかがいしれないが、後ろ頭を掻かいているところを見ると、言葉とは裏腹に落ち着かないのか。それとも、戸と惑まどっているのか。

　身長約百九十サンチ、しなやかな長身を炎模様フアイヤーパターンで飾かざられた濃のう紺こん色の奇き怪かいな全身鎧よろいで固めたその男は、立ち居振ふる舞まいや静かに凪ないだ黄玉色の瞳ひとみにも、恐おそろしく隙すきがない。

　それでいて、どこか飄ひよう々ひようとした印象がある。

　一見して業わざ物もの、いや、それ以上の品とわかる大剣を、求められるまま仲居に預けて平然としているあたりは、無防備にすら思えるほどだ。

　読めない。

　男の来歴は知りうる限り、頭に叩たたきこんでいるし、実のところ、まったく接点のない相手ではない。それどころか、幼少時のこととはいえ、はっきりと覚えている。こうしていても、こみ上げてくる懐なつかしさのようなものを抑おさえきれないほどだ。

　それなのに、警けい戒かい心しんをかき立てられる。違い和わ感かんというよりも、異物感がぬぐえない。

　当然かもしれないが。

　首都エルデン第八区は、エルデェＥイニオン機Ｍ術士匠合Ｕや錬金士Ａ組合ＧのエルデンＧ支部があり、また、ＥＭＵ所属のデザイナーズ工こう房ぼうや各種生産工場などが建ち並ぶ工業区だ。その端はしの一角を占しめる東部風料亭「泉里センリ」は、サンランドに初めてα大陸東部の食文化を紹しよう介かいした老舗しにせの名店であり、エルデンで一、二を争う高級飲食店でもある。

　だが、そもそもこの料亭を利用する者たちは、値段など気にもとめないだろう。自分の懐ふところ具合を見て飯を食うような貧びん

乏ぼう人にんは、高い石いし塀べいと荘そう厳ごんな門構えに圧あつ倒とうされ、店の敷しき地ちに足を踏ふみ入れることさえできないに違ちがいない。

　さらに、門をくぐってからも、蓮はすの花咲さく池や風情ふぜいのある石や木々の庭を眺ながめつつ、玉砂じや利りの上に敷しかれた石いし畳だたみの道を数分歩いて、ようやくたどり着くのが表おもて屋やと呼ばれる玄げん関かん部分だ。

　そこで仲居に出で迎むかえられ、下足場を経て母おも屋やと呼ばれるホールに抜ぬけ、長々とした回かい廊ろうを通ってそれぞれの客間に案内される。

　食事にしても、箸はし付けから始まって、前菜、椀わんの物、お造り、煮に物もの、焼き物、酢すの物もの、御ご飯はん、水みず菓が子し、甘かん味みと、一品ずつ出されるのだから、腹が一いつ杯ぱいになればいいという輩やからにとっては、とうてい耐たえがたい仕組みだろう。

　要するに、単に食欲を満たすだけの場ではないのだ。

　適度に広い客間も、壁かべの一面が庭に面していて、四季や天候に応じた風景を楽しめるようになっている。望むのなら、東部風のあでやかな装しよう束ぞくに身を包み、白しろ塗ぬりの化け粧しようを施ほどこした美しい舞まい妓こを呼んで、酒席を盛り上げるのもいい。専属の楽士や歌唱士も控ひかえている。

　そして、これはある意味、このエルデンでは何よりも大事なことだが、ここは安全だ。

　様々な業種の富ふ裕ゆう層を上客に多く抱かかえていて、いわば利害の中立地帯と化しているせいもあるが、それだけではない。泉里はたぶん、現在のエルデンでもっとも強力な武装集団の一つと護衛契けい約やくを結んでいる。

　この荒こう涼りようたる無法の野に、義によって道を示そうと志す、クラン・秩序のモラル・番人キーパーズ。

　純ピュア血・ブラのツド・司祭プリーストデザインの、銀色に輝かがやくプロヴィデンス・シリーズの鎧を制式装備として採用していることから、〝銀の軍団ザ・シルバリイ〟とも呼ばれる。

今、炎模様フアイヤーパターンの全身鎧を身にまとった男を客間に迎むかえ入れたのが、その総長であるデニス・サンライズ、〝太たい陽よう鬼き〟の異名をとる髭ひげの五十二歳だ。

もっとも、愛用のプロヴィデンスＷＸ□Ｐの代わりに、七しち代だい兵ひよう衛え辰たつ巳みの渋しぶい銀地に黒で紋もん様ようが入った小こ袖そでと内うち袴ばかまを無理なく着こなし、愛刀すら帯びていない姿は、猛たけ々だけしい武人というより、むしろ風流人の趣おもむきがある。

そうはいっても、鍛きたえ抜かれた百八十四サンチ、九十キルグラハムの体たい軀くはいまだ衰おとろえを知らず、いながらにして名状しがたい独特の気を周囲に放っているのだが。

その太陽鬼の赤せつ褐かつ色しよくの目が、このように細められるところを見た者は、いったいどれだけいるだろう。

「久しぶりだな、メロンクン……いや、今はトマトクンと名乗っておるのだったか」

「別にどう呼んでくれても構わんぞ」

トマトクンはそう答えて、大おお仰ぎように唇くちびるの片かた端はしをつり上げてみせた。

確かに、メロンクン。あの頃ころ、彼はそんな人を虚こ仮けにしたような名で呼ばれていた。

それが現在はトマトクン、か──たいして変わりはないし、自ら考えた偽ぎ名めいなのだとすれば、どちらもそうとうひどいセンスだ。

ただ、二十年以上前、デニス・サンライズが秩序の番人を設立した際、大いに力を貸した人物の名はメロンクンといった。

しかし、すぐそこにいる男の年ねん齢れいは、どう見てもせいぜい二十代後半だろう。

逆算すると、当時の彼は幼児でなければならない。

普ふ通つうに考えれば、同一人物のはずがない。

　それにも拘かかわらず、デニスは立ち上がってトマトクンにゆっくりと歩みより、右手を差し出した。まるで昂たかぶる気持ちを抑えつけているかのように、静かな所作だ。その証しよう拠こに、太陽鬼の両りよう眼めはうっすらと潤うるんでさえいた。

「よもや再び見まみえることができるとは思わなんだ」

「そうか」

　トマトクンは返事ともつかない返事をすると、不意に肩かたの力を抜いたような笑えみを浮うかべ、デニスの右手を力強く握にぎった。

「老ふけたな、デニス」

「貴公は変わらぬ」

「こう見えて、色々と変わったはずだがな」

「そうは見えぬ──いや、やはり……そうだな。貴公の言うとおりかもしれぬ」

　デニスは一つうなずき、どこか名残なごり惜おしそうに手を離はなしてから、上座を示した。

「ささ、立ち話も何であろう。座ってくれ」

「うむ」

　トマトクンは秩序の番人の太陽鬼に恐きよう縮しゆくする様子もなく、勧すすめられるまま上座に着こうとしたが、その前に足を止めた。

「お前は……」

　実は、この客間にはデニスとトマトクン以外にもう一人、部屋の隅すみで背中を丸めるように跪ひざまずいている者がいたのだ。

　その者を一言で形容するならば、目立たない男、としかいえまい。栗くり色いろの頭とう髪はつや目はごくありふれているし、顔立ちにもこれといった特とく徴ちようがなく、たぶん十人並みという表現がぴったりのはずだ。身につけている七代兵衛辰巳の紺こん

色いろに染め抜かれた小袖と黒い内袴は、よく見るといい品ではあるのだが、室内の調度に同化してしまっていることだろう。

「おお、そうだ。先に紹介しておくべきであったな」

　デニスが面おも白しろがるような含ふくみ笑いをした。

「我が愚ぐ息そくだ」

「お前の子だと？」

　トマトクンが首をひねって考えこんだのは、ほんの数秒だった。その間、デニス・サンライズの子はあえて自分から名乗ろうとはしなかった。試したい、という欲求に駆られたからだ。

　果たして、時の流れと無む縁えんに生きているかのようなこの男は、自分のことを覚えているのか。

　覚えていたとして、それがどうしたというのか。

　トマトクンは軽く目を瞠みはり、その名を正しく口にした。

「ヨハンか」

「……はい」

　ヨハンは少しだけ顔を上げ、上うわ目め遣づかいでトマトクンの顔を仰あおいだ。いかにも凡ぼん庸ようなヨハンの双そう眼がんに尋じん常じようならざる鋭するどい光が射すのは、その瞬しゆん間かんだけのはずだ。

「カレル・シュペクナーの子、ヨハンにございます。父が死してのち、デニス・サンライズの養子となりました」

「そうか。カレルは死んだのか」

「望みどおり、戦いくさ場ばで死にました。本ほん望もうだったでしょう」

「火みたいなやつだったな。始終、怒おこってばかりいて、俺にもよく突つっかかってきた……」

　トマトクンはそこで一度、短く息をついたものの、その顔には何

の感情も浮かんでいないように見えた。

「デニスはすっかり年を食ったが、お前はでかくなって、見み違ちがえたぞ」

「私のことを、覚えておられるのですか」

「ああ。よく遊んでやったろう。お前は覚えてないか」

「申し訳ありません」

　なぜ、ヨハンはとっさに嘘うそをついたのか。そのときは自分でもわからなかった。あとになってから気づいた。

　あの頃は、ただただ悪党どもとの戦いに明け暮れる毎日で、実父のカレルにしても、今の養父であるデニスにしても、ヨハンの相手をしている暇ひまなどなかった。そんな心の余よ裕ゆうもなかったのだろう。

　しかし、この男だけは違った。

　時間があれば、ヨハンを抱だき上げ、肩かた車ぐるまをしてくれた。子供のたわいもない質問に答えてくれた。頭を撫なでてくれた。いつも殺気立っている大人たちの中で、この男だけが悠ゆう然ぜんと構え、それでいて剣けんを抜ぬけば誰だれよりも働いた。

　ヨハンは、この男のことが好きだった。情熱がもたらす強さを教えてくれた実父や、信念を貫つらぬき通すことの大切さを叩たたきこんでくれた養父にも劣おとらないくらい、この男を尊敬していた。実際に接した時間はわずかだったが、この男の面おも影かげを忘れたことはなかった。

　が、なぜだ。

　この男はどうして、当時とまったく変わらない姿で、ここにいるのか。

　秩序の番人の創設に深く関かかわりながら、その設立直後に莫ばく大だいな資金のみを置いて行方ゆくえをくらまして以来、表舞ぶ台たいには上がってこなかった、この男が。

「ヨハン、いつまで客人を立たせておくつもりだ。仲居を呼び、料

理を運ばせよ」

「はい」

　デニスに命じられたヨハンは、トマトクンを上座へと導いたのち、いったん客間を出て仲居を呼びつけた。各種の密談にも用いられる泉里では、特に求めなければ、仲居が客間に張りつくことはない。その代わり、手を打てばすぐに、床ゆかを滑すべるような早足で仲居が駆けつけてくる。

「膳ぜんを。それと、鈴すずを頼たのむ」

　ヨハンにそう言い含められた生き真ま面じ目めそうなまだ若い仲居は、「かしこまりました」と頭を下げて踵きびすを返した。

　まあ、わざわざ念を押す必要もないのだが、泉里では客にあわせて、仲居の帯に硝子ガラスの鈴を下げさせる。すると当然、歩くだけで涼すずやかな鈴の音が鳴るから、仲居が近づいてくれば音でわかる。食事中は仲居たちが客室に出入りして上あげ膳、下げ膳を行うので、口の固かたい彼女らにも聞かせたくない話をするときには、便利といえば便利な仕組みだ。

　ところが、いざ食事が始まっても、デニスとトマトクンは互たがいの近きん況きようには一いつ切さい触ふれず、思い出話に花を咲さかせるのみだった。

　その間、ヨハンはほとんど料理に箸はしをつけなかった。声をかけられたとき以外は、二人の会話に口を挟はさむこともしなかった。努めて平静を装よそおおうとしたが、内心、歯は痒がゆくてならなかった。デニス・サンライズは、秩序の番人の総長として、いったい何のためにヨハンがこの会談の場を設けたと思っているのか。

　かつて、メロンクンと呼ばれた男の消息をつかんだのは、それほど前のことではない。

　それもやむをえないだろう。

　二十年以上前に二十代半ばから後半だった男が、今現在も同じ年格好で生存しているなどとは、誰も思うまい。その者が魔ま術じゅつ士しであれば話はまた別だが、知られている限り、メロンクンは剣けん士しであり、戦せん闘とう指揮者であって、一度たりとも魔

術を使っていないのだ。

　もっとも、トマトクンと名乗る男が、ＺＯＯという小さなクランを率いているとの情報は、数年前から秩序の番人の情報網もうにかかっていた。トマトクンがメロンクンと似た風ふう体ていであるということも、追い追いわかった。その話をたまたま小耳に挟んだデニス・サンライズが、独自に人を動かして、遠回しに本人確かく認にんを行った。

　ざっとこれだけの経けい緯いがあって、ようやくトマトクンがメロンクンだと判明し、今回、彼とデニスとの再会が実現したのだった。

　だが、ヨハンが強く勧すすめなければ、デニスは自分から彼に会おうとはしなかっただろう。デニスにその気があれば、この両者はもっと早く、二人水入らずで酒を酌くみ交かわしていたに違いない。

　ヨハンがそんなデニスを説得して、彼と再び会うことを決心させたのは、二人に旧交を温めてもらうためではなかった。

「総長」

　ヨハンは話が途と切ぎれた隙すきを狙ねらい、あえて養父をそう呼んだ。

「そろそろ、例の件を」

「ヨハン……」

　デニスは箸はし置おきに箸を戻もどし、懐かい紙しで髭ひげの周りをぬぐってから、表情をあらためた。一方、トマトクンはといえば、片方の眉まゆをつり上げて、ヨハンとデニスをじっと見つめている。

「そのことだが──」

「久方ぶりに御ご旧友とお会いになられたのです。昔話に興じられるのも結構。ですが、本会談の要件をお忘れになられては困ります」

「ヨハン」

「はい」

「そのことはよい」

「よい、とは？」

「不要だと申しておる」

「不要ですと？」



「そうだ。幾いく星せい霜そうの時が流れたのだ、ヨハン。彼には彼の同志がおる。友がおる。自ずと異なる義があり、歩むべき道がある。それは我らとは交わることのない道だ」

「義は異なれど、義理はありましょう──トマト殿どの、と、お呼びしてもよろしいか」

　ヨハンは顎あごを引いてトマトクンに向き直った。

「総長に代わり、不ふ肖しよう、この秩序の番人副長、ヨハン・サンライズめが、本日、この場にお越こしいただいた主しゆ旨しをご説明申し上げる」

「ヨハン、よせと申しておるのが……！」

　膝ひざを浮うかせ、声を荒あらげかけたデニスを、トマトクンが静かに制した。

「いい、デニス。飯を奢おごらせてろくに話を聞かんのでは、それこそ義理を欠くだろう」

「しかし」

「俺がいいと言ってるんだ。話せ、ヨハン」

「はい」

　ヨハンは養父に目をやり、しばらくして、ようやく彼が渋しぶ々しぶといった体で首しゆ肯こうするのを見てから、再びトマトクンに顔を向けた。

「当節、その版図を急速に押し広げつつある、不届き千万な下げ賤せんの輩やからのことについては、おそらくトマト殿もご存知でしょう。また、我ら秩序の番人がかの者どもと対立関係にあり、日常的に死傷者を生む半交戦状態に陥おちいっていることも、お聞き及およびのことかと存じます」

「ＳｍＣ、か」

「左様。その中ちゆう核かくは、約三百名の刺青いれずみ組と呼ばれる加盟一年以上の構成員で、これに近ちか頃ごろ、五百名以上の焼印組、いわば外と様ざま連中が加わり、さらにＳｍＣ傘さん下かのクランが六つ、人員にして二百名以上──あわせれば、四桁けたに上る戦力を彼らは有していることになります」

「でかいな。インモラルもそこまで多くはなかった」

　トマトクンが口にしたインモラルとは、今から三十年ほど前、〝エルデンのエンデニア・暴君タイラント〟とも呼ばれた悪党クラ

ンだ。このインモラルに対たい抗こうするため、若き日のデニスが中心となって結成したクラン・モラリティが、のちに秩序の番人の母体となった。

「私も無知無学の身ゆえ、確たることは申せませんが、クランとしては未み曾ぞ有うの規模ではないかと。ですが、実のところ、数はさしたる問題ではありません。我ら秩序の番人も総勢四百余名、しかも、装備、士気、練度、いずれの点においても、かの者どもに劣おとってはおらぬと自負しております」

「頭数を揃そろえても、雑魚ざこは雑魚というわけか」

「十倍、二十倍であれば──あるいは、桁の異なる倍、三倍であれば、また別ですが」

「わかる話だ。お前の言うとおりだろう。で、何が問題なんだ」

「ＳＩＸ」

　ヨハンがその名を出した瞬しゅん間かん、トマトクンは嫌いやそうに口をへの字に曲げた。

「──だけではありません。ＳｍＣには、他ほかにジェイという男もおります。彼が率いる殺さつ戮りく戦隊ジェノシドマックスも侮あなどれぬ相手でしょう。加えて、先頃、得体の知れぬ邪じゃ術じゅつを操あやつるあやしげな魔ま術じゅつ士しが、ＳｍＣに加盟したらしいとの情報もあります」

「だが、お前たちのところだって、それなりに粒つぶが揃ってるんだろう」

　トマトクンは唇くちびるを歪ゆがめたまま、同意を求めるようにデニスを見た。

「銀の軍団ザ・シルバリイが来たと叫さけべば、悪党も逃にげていく。〝死神〟羅ラ叉サや〝女め夜や叉しゃ〟釈拿シヤクナは俺だって知ってるくらいだ。何より、お前がいる。それとも、太陽鬼と渾あだ名なされたお前も、寄る年波には勝てないか」

「何をぬかす。若い者にはまだ負けぬわ」

　デニスは剛ごう毅きにそう言い放ったが、不意に目を伏ふせて

深々とため息をついた。その表情は、いきなり十ばかりも齢よわいを重ねたかのように見える。

「……その女夜叉がな。討うたれたのだ。腕うでの立つ、気き丈じような女によ性しようであったが、命を奪うばわれただけでなく、嬲なぶられ、晒さらされ……我らの手の者がいち早く見つけ、さほど世人の目に触ふれずにすんだのがせめてもの慰なぐさめではあるが──」

「彼女は昨年、我らが同どう輩はいと婚こん姻いんしたばかりで、身み籠ごもっておりました」

　ヨハンはむしろ文書でも朗読するような抑よく揚ようのない口調で、デニスのあとを受けた。こうでもして必死に抑おさえつけなければ、声が揺ゆれてしまいそうだった。

「むろん、子も死にました。どうやらＳＩＸ自ら手を下したようです。目もく撃げき者しやが──と申しても、彼女の隊の生き残りなのですが、その場面を一部始終、見せられたあと、解放された者がいるのです。しかし、重要なのはそんなことではない。ＳＩＸはたった一人で彼女と彼女の隊の者、計十一名を軽々と手玉にとったのです。我ら秩序の番人の中でも、有数の剣けん士しであった彼女と、彼女が率いる精せい鋭えいたちを、です」

　トマトクンは押し黙だまっている。

　ヨハンは卓たくの下に握にぎり拳こぶしを隠かくして、ゆっくりと息を吐はいた。

「──国と国との大おお戦いくさであれば、個人の戦せん闘とう能力が戦局を左右することなど、まずありえない。ですが、我らの戦ではそのようなことが起こりうる。それどころか、傑けつ出しゆつした一人が、戦略も戦術も粉こな微み塵じんに打ち砕くだいて、強ごう引いんに勝利をもぎとってしまいかねない。我らはＳＩＸに匹ひつ敵てきする個を是ぜ非ひとも揃えねばならない。さらに、最近では、龍州系のクランがＳｍＣに接近しているとの噂うわさもあるし、あの虐殺人形カーネイジ・ドールがとうとうＳＩＸに膝を屈くつしたともいう。彼の昼飯時ランチタイムは、その太平楽な名とは裏腹に手練れ揃いです」

「虐殺人形カーネイジ・ドール──あのときの男か……」

「面識がおありですか」

「面識というほどでもないが、ちょっとな」

「では、彼のその二つ名がそう大おお仰ぎようなものではないことは、ご存知でしょう」

「わからんでもない。敵に回したら、厄やつ介かいな相手だろう」

「あなたは──」

　ヨハンはそこで言葉を区切り、奥歯を強く嚙かみあわせた。だが、もはやそんなことでごまかしてしまえる激情ではなかった。

「先ほど総長が申されたように、すでに我らとは異なる道を歩いておられるのでしょう。ですが、私の知っている──存じ上げているあなたは、我らの苦境に見て見ぬふりをするような人ではないはずだ。この際だから、はっきり言います。誰だれも彼もが甘い。養父上ちちうえさえもだ。今は我が方の劣れつ勢せいには見えないが、一寸先はわからない。誰かが斃たおれれば、一気に戦力の均きん衡こうが崩くずれる、悠ゆう長ちように酒を飲んでいられるこの状じよう況きようは、実のところ、危機と隣となりあわせだ」

「それで」

　トマトクンは落ち着き払はらっている。まるで、最初からヨハンの申し入れを予期していたかのような態度だ。

「俺にお前たちの助すけ太刀だちをしろ？」

「平たく言えば、そうです」

「それには俺の仲間も含ふくむわけか」

「そうしていただければ心強いが、私の口からそこまでは頼たのめない。私個人としては、あなたが力を貸してくれさえすれば、あとは現有戦力で敵を抑えきれると踏ふんでいます」

「買いかぶられたものだ」

「いいえ。モラリティがインモラルを完かん膚ぷ無きまでに叩たたきのめすことができたのは、誰のおかげか。あなたがいなければ、

秩序の番人は生まれなかった。養父上ちちうえにくどいほど聞かされました。私の目にも剣けんを振ふるうあなたの姿が焼きついている。あなたなら、一人でＳＩＸと渡わたりあえるはずです。これは大きい」

「もし俺がやられても、お前たちの戦力が落ちるわけじゃないしな」

「そんなことは……！」

　ヨハンは思わず平手で卓を叩き、半ば立ち上がりかけて、座り直した。

「──違ちがう。そんなことは……考えていません」

「意地の悪い言い方だったか。まあ、立場上、それくらい考えて当たり前だと思っただけだ」

　トマトクンは涼すずしい顔をしている。事実、そうした側面もないわけではないが、簡単に割り切ってしまえるものではない。冷れい徹てつ非情の副長、血が通っていないから影かげが薄うすいのだと陰かげ口ぐちを叩かれるヨハン・サンライズが、だ。

　らしくない。

　相手がこの男だからか。

　この男だから、どうしたというのだ。

　ヨハンが言葉を失ってうつむいていると、その養父が舐なめるように飲んでいた酒の杯さかずきを卓に置いた。

「もうよい、ヨハン。そのあたりにしておくがいい」

「……養父上ちちうえ」

　面おもてを上げたヨハンの目に映ったのは、慈いつくしみに満ちた父の顔だった。

「いえ、総長──しかし」

「養父ちちとしてでなく、秩序の番人総長として命じねばならぬの

か。それはさせてくれるな」

　デニスは硝子ガラスの銚ちよう子しを持って自分の杯を満たすと、身を乗り出して、トマトクン、さらにはヨハンの杯にも酒を注いだ。

「ヨハン、そなたをたばかったわけではないが、我は端はなからただひたすら旧友と昔せき日じつを語らい、杯を重ねるつもりであったのだ。考えてもみよ。あの頃ころを知る者は、もはや我とそなた、そして彼のみなのだぞ。他ほかは皆みな、そなたの父も含めて、我が不明ゆえに逝いった」

「不明、などと……」

　ヨハンは養父の真意を測りかねて訊きいた。

「なぜそのようなことを仰おつしやいます」

「我は道を敷しき、人を導く者であるからだ。しかも、この道は我のみで築いたのではない。多くの助力があって敷かれた道だ。我はそのことを忘れ、背せ負おいきれぬ命を背負しよいこみ、こぼれ落ちたぶんは失われた。すべて我が罪、我が咎とがだ」

　デニスはおのれの掌てのひらに収まった杯をじっと見つめている。

「恐おそろしいものではないか。その罪と咎の痛みにさえ、我は慣れた。だが、本来、慣れてはゆかぬのだ。我は今一度、何もかもをこの肩かたに背負い、罪と咎の業ごう火かに身を焼かれながら、義を貫つらぬき通すべく剣を振るいたい」

「養父上ちちうえ……」

「我を愚おろかと思うか」

　デニスは低く笑って一息に杯を干すと、ヨハンの返事を待たず、トマトクンに顔を向けた。

「そのようなわけだ。今の話は聞かなんだことにしてくれ」

「いいのか」

　トマトクンも杯を干し、ヨハンをーいち瞥べつした。

「ヨハンの状況判断は間違ってないと思うがな」

「貴公には一度、助けられた。その大恩は忘れられるものではない。が、五十をすぎて再び大樹に寄りかかるわけにはゆかぬ。くだらぬ意地よと笑ってくれてもよいが、貴公とて守るべきものがあろう。それを守るためには、意地を張らねばならぬときもあるのではないか」

「そういうものか」

「おそらくはな。少なくとも、我はこのようにしか生きられぬ」

「相変わらず不器用なやつだ」

　今度は、トマトクンが微び苦く笑しようを浮うかべながら銚子に手を伸のばし、自分とデニスの杯に酒をついだ。

「──だったら、せめて俺はお前の道の行く末を見届けよう」

「頼まれてくれるか」

「頼まれるも何も、俺が言い出したことだ」

「感謝する」

「飲めよ」

「むろん」

　デニスとトマトクンは同時に杯を干した。この二人にかかれば、泉里の上品な極東酒など水と変わらない。モラリティ時代は、夜ごと車座になって安酒をあおり、変事ありとの報しらせを受ければ、即そく座ざに剣けんを引っつかんで駆かけ出した男たちの生き残りだった。

「こうしておると」

　どこか遠くを見ているようなデニスの頭にも、往時の光景が去来しているのかもしれない。

「物もの寂さびしくもあり、我が修しゆ羅らの道にて果てた者ども

には詫わびる言葉とてないが……貴公に再び見まみえることができてよかった。これは偽いつわらざる本心だ」

「そうか」

　トマトクンは、自分も、とは言わなかった。そういう男なのだと、今になってやっとヨハンも思うことができる。決して口数が少ないわけではないが、肝かん心じんなことを口にせず、あの日も去ってしまった。

　この男がデニスにだけ別れを告げ、莫ばく大だいな金を残して姿を消したあと、幼いヨハンは一人、泣いたのだった。

Omenage 897 9th revolution 8th day

サンランド無統治王国首都エルデン第五区・第一王立銀行前広場

〝鉄鎖の憩い場（アイアンチェインスクウェア）〟

chapter.3

# 捨て身な少女

翌日、マリアローズは龍りゆう州しゆう人対策について協議すべく動物園事務所へ行く前に、第五区の第一王立銀行前、鉄てつ鎖さの憩いこい場に足を向けた。

まあ、昨日あんなことがあった直後だし、単独行動は危険かとも思ったのだが、わざわざ仲間に同行を頼たのむのも情けない話だ。目的は日用品や消しよう耗もう品、及およびその材料の買い出しだけなので、そう時間もかからない。もともと、誰だれかと一いつ緒しよに買い物するのは好きではなく、一人で見て回りたい方でもある。それに、鉄鎖の憩い場は大食小路グラトン・アレイよりさらに安全だ。少なくとも、一いつ般ぱん的にはそう信じられている。

その根こん拠きよは、ちゃんと目に見えるものとして、この第一王立銀行を囲む約三百メーテル四方の広場に存在している。

魔ま導どう兵へい。

鈍にび色いろの甲かつ冑ちゆうで全身を隈くまなく覆おおっている彼らは、人間ではない。キング・グッダーによって作られた擬ぎ似じ生命体だ。

ただ、作り物だからといって、馬ば鹿かにはできない。彼らは敵意に敏びん感かんで、これを感知して敵を認にん識しきすると、命を惜おしまず──そもそも彼らに命なんてないのだが、とにかく、自分が傷つくことをまったく恐おそれずに剣を振ふるう。また、近くの魔導兵を呼びよせ、同どう僚りようたちと連れん携けいして敵を滅ほろぼそうとする知ち恵えもある。

実は、各種王立施し設せつや、サンランド無統治王国の国境を守っているのも、この魔導兵たちだ。

遡さかのぼれば、約九百年前、〝原子のアトミツク・極大マキシマム・魔術士ドレツドスター〟開祖キング・グッダーI世のエルディェイニオン制圧戦においても、魔導兵団ドレツドループスは主戦力だったという。

そんな連中が要所要所に配置され、またはうろつき回っていることから、いつしかこの広場は鉄アイア鎖ンチのエイン憩い場スクウエアなどと呼ばれるようになったわけだ。

さらに、名もない一人の男が、ここをエルデンで一番治安のいい

場所にした。

　と言われている。本当かどうかは知らない。

　だが、伝え聞くところによると、その昔、こんな出来事があったらしい。

　ある日、鉄鎖の憩い場で、一人の男が別の男に追い回されていた。彼は善良な市民で、追い剝はぎに遭あいかけて逃にげていたのだという。いや、そうではなく、彼はスリで、仕事に失敗し、相手に気づかれて逆に追われていたのだともいう。どちらにしても、彼は逃とう走そうの途と中ちゆう、足をもつれさせるか何かして、あろうことか魔導兵に抱だきついてしまった。

　もう逃げられない。追いつかれる。一巻の終わりだ。彼に対する追っ手の害意に、魔導兵が反応したのはそのときだった。

　結果、彼は助かり、追っ手は魔導兵に始末された。

　この事件の顚てん末まつが広まるに従い、鉄鎖の憩い場に商売人たちが集つどいはじめ、ついには市内最大規模の市場が形成されるに至ったというが—なにぶん、古い話だ。市場はその前から存在していたとの説もあり、実際のところはどうなのかわからない。

　ともかく、以上の理由で、鉄鎖の憩い場は安全だと見なされている。というより、ここでの刃にん傷じよう沙ざ汰たは自分の首を絞しめる可能性もあるので、よしておいた方がいいという意識が市民の間には根づいている。

　中には、お構いなしのやつもいるが、それは本当にごく少数の異常人であって。

　そのはずだった。

　マリアローズの知る限りでは、あのＳｍＣさえ、鉄鎖の憩い場では派手な振る舞まいを慎つつしんでいるはずだ。鉄鎖の憩い場は一種の中立地帯になっていて、エルデンに血の時代をもたらした残ク忍ラ公ンと・そクのリーユ族ー郎エ党ルですら、ここではそこまで無む体たいな真似まねはしなかったという。

　それなのに。

「……いい度胸してるよ」

　マリアローズは、馴な染じみの商人からハーレム・ゴードンとＰ９ドウター＋の材料を買い入れたあと、安くて保存がきいて質のいい食材を求め、露ろ店てん巡めぐりをしている最中だった。

　市場の露店は入れ代わりが激しい。面めん倒どうでも、こまめに見て回るのが、お買い得品を見み逃のがさないためのコツだ。特に、新しい店では、いい品物が特価で店先に並べられることが多い。マリアローズは、それらの品を発見したときのしてやったり感が何ともいえず好きなので、できるだけこうして新店開かい拓たくにいそしむようにしている。

　そんな折に、一いつ軒けんの露店を取り囲む男たちを見かけたのだった。

　むろん、「いい度胸」と言うからには、ただ囲んでいるだけではない。

　木の骨組みに布をかぶせただけの露店は、すでにぺしゃんこに潰つぶされ、店主らしき若い男がその前にしゃがみこんでいる。また、被ひ害がいを蒙こうむっているのは、その露店だけではなかった。とばっちりを食って、隣となりの露店もいくつか傾かしいでいる。

　鉄鎖の憩い場で、ここまでやる者は多くない。周囲には人だかりができかけているが、騒そう然ぜんとした中にも、異様な空気が流れている。

　ただ、この異様さは、彼らの行動だけが原因ではないだろう。

　マリアローズは首をひねった。

　全部で五人いる彼らの身なり──服装こそばらばらだが、一様に髑どく髏ろを象かたどった首くび飾かざりや指輪、腕うで輪わなどをつけ、露出した肌はだには黒い刺青いれずみが施ほどこしてある。あれは、龍？　加えて、どうやら五人とも東部人らしい。もっと限定してしまうと、龍州人ではないだろうか。

　その推測は、彼ら自身によってすぐに裏付けられた。

「吾ウー等テン不プ許シユ無ウー礼リー、倪ニー奴ヌウ知チー悉

シー其チー事シ、氾ハン？」

　彼らのうちの一人が、店主に向けてそう喋しやべったのだ。何を言ったのかまではちょっとわからないが、まず間ま違ちがいない。龍州語だ。ということは、やはり彼らは龍州人か。

　しかし、喪そう神しん街がいでの一件といい、昨日といい、今日といい、ずいぶん龍州人と縁えんがある。偶ぐう然ぜんにしてはできすぎているので、これは龍州人が勢力を伸のばしていることの証あかしだと考えるべきだろう。

　少し前までは、龍州人というと、変わったものを熱心に売る商人か、第六区〝屑くず街がい〟の貧ひん民みん窟くつで身を寄せあって生きている連中、というイメージしかなかったのだが。

　いつの間にやら、状じよう況きようが変わったのか。

　あるいは、共通語を話せない者が多いようなので、龍州からエルデンに来て日の浅い新参者が向こう見ずに暴れている、という感じもする。

　そう考えると、この光景も説明がつく。

「て……てめえら、ふざけやがって！　よくも俺の店を……！」

　若い店主がやおら立ち上がり、さっき何か言った龍州人につめよろうとした。何があったにせよ、店主としては、自分の店を潰されて黙だまってはいられまい。もしかしたら、ここが鉄鎖の憩い場だから、ということも頭の隅すみにあったかもしれない。実際、まっとうな相手であれば、さすがにいきなりそこまではしなかっただろう。

　その龍州人は、右の小鼻に髑髏型のピアスをしていた。

　だから、鼻ピアスと呼ぶことにするが、そいつが腰こしから抜ぬいた得物は、一見、普ふ通つうの剣けんだった。柄つかがある。左右に張り出した頑がん丈じようそうな鍔つばがある。かなり短めだけれども、剣身がある。否いな。違う。それは剣身とは呼びえない。金属製の単なる棒にすぎなかった。

　鼻ピアスは、その棒で店主の側頭部を思いきり殴おう打だした。

「──猪チヨウ小シヤオ子ス、倪ニー奴ヌウ欲ユー死シー、氾ハン？　吾ウー殺シヤー了ラ倪ニー奴ヌウ、謝シエ吾ウー於ユー来ライ世シー」

　殴なぐられた勢いで自分の店の残ざん骸がいに突つっこんだ店主は、倒たおれたままぴくりとも動かない。

　誰だれかが「マジかよ」と呟つぶやいた。それはおそらく、その場に居あわせた者、ほぼ全員の気持ちを代弁していた。まったく、マジかよ、という展開だった。

　あの店主は見も知らぬ赤の他人だが、マリアローズもいくら何でもこれはないだろうと思う。いくらここが無法の国だとはいえ、あんな殺され方をしたのではたまらない。同じ殺すのでも、たとえば、店じまいをした店主のあとをつけて闇やみ討うちするとか、超最低ＳＵＣＫな悪党なりの粋ＣＯＯＬなやりようというものがあるのではないか。

　だが、たぶんそうしたサンランド国民の、エルデン市民の感覚は通用しない相手なのだろう。

「臆イー病ピン子スー哉ラー」

　鼻ピアスは周りの非難めいた視線を舌打ち一つで受け止め、弾はじき返した。

「在ツアイ欲ユー言イエン事シー来ライ此チー処シー前カン吾ウー！　殺シヤー同トン等テン他ター倪ニー奴ヌウ！」

　おそらく、文句があるならかかってこい、といったところか。鼻ピアス以外の龍州人たちも、これに呼応して、威い嚇かくするようにあの棒みたいな得物を抜き放ってみせた。

　まあ、標準的なエルデン市民の第三者であれば、そういった態度に出られると、一気に冷めるというか、保身を第一に考えるしかない。殺やられたのが家族や仲間なら話は別だが、さもなければ、一時の反感や不快感など忘れてしまうのが吉きちだ。こんなことで怪け我がをするのもつまらない。

　人だかりの隙すき間まから様子を見ていたマリアローズも、一つ頭を振ふって、その場をあとにしようとした。

　ふと、立ち止まってちらりと振り返り、龍州人か、と思った。

　同じ龍州人だからか。昨日のＳ＊Ｋや黒ジャケットと、あの髑髏の連中には共通の匂においがある。黒ジャケットと同じように、髑髏もＳ＊Ｋとつるんでいたりして？　だとしたら、ひょっとすると、やつらに顔を見られるのはまずいかもしれない。やはり、ここはさっさと立ち去るべきだろう。

　それにしても、鉄鎖の憩い場が安全だなんて、嘘うそっぱちだ。肝かん心じんなときに魔ま導どう兵へいが近くにいなければ、実質、夜道を一人で歩いているのと大差ない。あんなわけのわからないむちゃくちゃな連中もいることだし、これからは少し気をつけなければ──と、再び踵きびすを返しかけたマリアローズだったが、またしても足を止める羽目になった。

　解散しかけていた人だかりも、動きを止めている。

　髑髏の龍州人たちもだ。

　彼らの前に、進み出てきた者がいたからだ。

「あれ……って」

　最初、あまりに格好が違うので、確信が持てなかった。

　何しろ、今日の彼女は、白いブラウスの上に紺こん色いろのジャンパースカートとジャケットを着て、胸むな元もとに臙えん脂じ色いろのリボンまでつけている。腰に剣は吊つっているし、生地に薄うすい装そう甲こうくらい仕込んでいるのかもしれないが、軽装であることは否いなめない。プロヴィデンス・シリーズの鎧よろいを着こみ、盾たてまで持っていた昨日と比べると、ずいぶん印象が違う。

　しかし、見れば、ジャケットの胸に純ピユア血・ブラのツド・司祭プリーストの紋もん章しようが刺し繍しゆうされている。

　もちろん、彼女の金きん髪ぱつや、まだあどけなさを若じやつ干かん残した顔立ちも変わっていない。

　装備のせいか、何だか昨日より今日の方がずっとかわいらしく見えるが、紛まぎれもなく同一人物だろう。

　彼女は──秩序の番人の、名前も知らない少女は、まったく臆する様子もなく、髑どく髏ろの龍州人たちに鋭するどい眼光を浴びせた。

「共通語を解しなくても、わたしの言いたいことくらいわかるだろう。貴様らの卑ひ劣れつにして暴ぼう虐ぎやくな行い、とうてい見すごすことはできない。義によって成敗する」

「氾ハン……？」

　残念ながら、共通語を解しない鼻ピアスに、彼女の言いたいことは伝わらなかったようだ。もしくは、伝わるには伝わったが、本気にしなかったのかもしれない。せいぜい十六、七歳にしか見えない彼女を侮あなどったのかもしれない。

　鼻ピアスは後こう悔かいすべきだ。

　悔くいてどうなるものでもないが。



　彼女の剣けんは、たぶんモトローリィの鍛か冶じ士しが鍛きたえたものだろう。剣身の身み幅はばは広くなく、反りのある片かた刃ばで、円形の鍔つばに特とく徴ちようがあり、モトロール刀、北刀などと呼ばれる。工房アトリエでデザインされ、機術士たちにより工場ファクトリで製造される一いつ般ぱん的な現代の刀剣類とは、ある意味、別物といってもいい。

機術士が製造分野に進出する前は、モトローリィに限らず、刀剣の作り手は鍛冶士だったようだが。

今となっては、α大陸広しといえど、刀剣を一ひと振ふり一振り打ち鍛える鍛冶士は、モトローリィくらいにしかいない。

そういえば、番人の多くは、モトロール刀を主武装にしているという。値段は馬ば鹿か高いし、手入れも大変なようだが、とにかく滅めつ法ぽう斬きれるからだろう。

彼女はその真価をまざまざと見せつけた。

━居合い。

知らぬ者とていない剣聖ヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〞の弟で子しを自じ称しようするバーニング・バラッドの著作『剣の技法』では、居合いを次のように規定している。

すなわち、一いつ瞬しゆんを置かずただちに抜ばつ剣けんして、先せんの先せん、または後ごの先せんの一刀によって、敵と立ち会わずにこれを打ち倒す技わざである、と。

実は、マリアローズも独学でひそかに練習していて、実戦でも使ったりしていたのだが、正直、恥はずかしくなった。

マリアローズの居合いは、居合いではない。居合いもどきですらない。彼女が披ひ露ろうした技こそ、真の居合いだ。

実際の速度だけでなく、呼吸とか、間合いとか、すべてを総動員して「一瞬を置かずただちに抜剣」し、敵を打ち倒たおす。

抜ぬく手を見せない、という言葉があるけれども、まさにそれだった。

気がつくともう、鼻ピアスは頸けい部ぶから血を噴ふん出しゆつさせながら、きょとんとしていた。

「外道でも血は赤いようだな」

「……猪チヨウ小シヤオ……！」

鼻ピアスがようやく血相を変え、自分の首に手をあてて何とか止

血しようとした。

　が、むろん、そんなことで止められるような出血ではない。そう悟さとるのは、人にとってかなり絶望的なことだ。鼻ピアスも意味不明の唸うなり声を洩もらしつつ、救いを求めるように仲間の方を見た。

　その哀あわれな仕草が、他ほかの龍州人たちの怒いかりに火を点つけたようだ。

「殺シヤーハパー裂リエ！」

　そう叫さけんだ一人は、鼻ピアスを抱だきかかえるようにして下がらせ、残りの三人が少女に殺さつ到とうした。

　これで、三対一。少女は先手をとって、相手の戦力を四割も削けずったことになる。その点については見事だし、鼻ピアスが迂う闊かつだったというしかないが、歓かん声せいを上げて少女をはやし立てる野次馬は、早とちりの無責任な糞くそたわけどもだ。

　だいたい、状じよう況きようが少女にとって楽観できるものではないことなんて、少し考えればすぐにわかるではないか。

　第一に、少女は依い然ぜんとして、三人を同時に相手どらなければならない。

　マリアローズも何度か経験があるのでわかるのだが、多対一ではよほど技量に差があるか、条件がこちらに有利でないとまず負ける。

　三対一。技量の面で少女に分があったとしても、圧あつ倒とう的てきに不利だといわざるをえない。

　厳しい見方をすれば、少女は敵を分断しきれなかったのだ。

　前口上など述べたのが失敗だった。勝つためには、そんなことをせず、いきなり敵に斬きりこんで数人、血祭りにあげてしまえばよかったのだ。そうすれば、もっと有利な条件に持ちこめたかもしれず、そのぶん勝利の可能性も高まったに違ちがいない。

　そして、第二。

　果たして、少女は気づいているだろうか。

　鼻ピアスを確保した龍州人が、後ろに下がるだけでなく、人ひと垣がきを割ってどこかへ行こうとしている。単に、鼻ピアスを医術士のところにでも連れてゆこうとしているのなら、まだいい。

　だが、違ったら？

　昨日のＳ＊Ｋ同様、近くに連中の仲間がいて、そいつらを呼びにいったのだとしたら、三対一が四対一に、それ以上になるかもしれない。

　そうでなくても、少女は苦戦していた。

「どうした、お嬢じょうちゃん！　頑がん張ばれ！」

「やれ！　そこだ！　やっちまえって！」

「さっきの威い勢せいはどこいったんだ！　押されてるぞ、番人様よォ！　根こん性じょう見せろ！」

　野次馬どもからかかる揶や揄ゆ混じりの声の中に、微び妙みような焦あせりや苛いら立だちの色が見え隠かくれしている。秩序の番人は必ずしも皆みなに好かれているわけではないが、状況が状況だし、若い女の子ということもあって、少女に肩かた入いれする向きが強いのだろう。つまり、端はたから見ても、それだけ少女が劣れつ勢せいに立たされているということだ。

　実際、少女は防戦一方だった。

　そこそこ使えそうな男三人相手に、何とかしのいでいるだけでも、たいしたものなのかもしれないが。

　なかなかどうして、髑どく髏ろの龍州人たちは狡こう猾かつな敵だった。

　特に、彼らの得物がくせもので、刃はがないから斬れないものの、耐たい刃じん性能は高い。彼らは少女のモトロール刀をそれで楽々と受け止め、左右に張り出した鍔に引っかけてねじり、剣を封ふうじようとする。むろん、そうされてはたまらないから、少女は剣を引くわけだが、そこに別の龍州人が押しこんできて、逃にげたところにまた別の──といった具合に、少女は次し第だいに追いこま

れてゆき、攻こう撃げきどころではなくなって、手数は激減していた。

　いや、激減どころか、消しよう滅めつ間近だ。

　何とか逃げ回っていられるのは、正統派剣けん闘とう術のものと思おぼしき、円えん形ぎようや旋せん形ぎようの足あし捌さばきがきっちりできているおかげだろう。

　そうか──要するに、そういうことなのか。

　確かに、少女の居合いは美しかった。昨日のＳ＊Ｋらとの戦いでも、たぶん彼女は番人の一員としての役割をちゃんと果たしていた。剣術の基き礎そとされる足捌きも、これ以上ないくらいできている。基本に忠実で、乱れがなく、彼女の積み上げてきた修練が、努力が、忍にん耐たいが、汗あせが、そのまま形となって現れているかのようだ。

　だが、言ってしまえば、それ以上ではなかった。

　彼女の剣は誠実で、迷いがない。鋭するどく研とぎ澄すまされてもいる。触ふれれば、斬れるだろう。けれども、相手にしてみれば、黙だまって斬られてやるわけにはゆかないし、彼女の剣術勝負に付き合ってやる義理もない。

　生き死にの中で、人はどこまでも意地汚きたなく、狡猾で、卑ひ劣れつだ。

　マリアローズだって、生きるためなら、あえて泥どろ水みずを飲むかもしれない。糞ふん尿にようにまみれてでも生き延びて、あとでお返しに騙だまし討うちするのも、一つの生き方だと思う。

　しかし、彼女にはそうした汚さがない。

　まっすぐで、曇くもりがなくて、潔くて、まぶしくて──嫌いやになる。

「……それじゃ、死ぬだけだよ」

　義、か。

　その義とやらに殉じゆんじて無む駄だ死じにするのだとしても、

彼女が自分で選んだのだ。仕方ない。

　というより、そもそも無関係だ。

　あの少女が生きようと、死のうと。

　たとえ、ここで彼女が髑髏の龍州人たちに殴なぐり倒たおされ、公衆の面前で乱暴され、殺されたとしても、マリアローズには関係ない。まあ、かなり無茶な連中のようだし、仲間がやられてもいるので、きっとそれくらいのことはするだろう。

　で、そうなったらそうなったで、悲鳴を上げたり目を覆おおったりしながらも、その場面をじっくり見物するのが、正しき野次馬根性というものだ。

　反吐へどが出る。

「だいたい、さ……」

　今さら言ったところでどうしようもないが、あの人数を相手に、一人でどうこうしようなどと考えるのが間違いであって。

　マリアローズの視線の先で、少女は早くも進退きわまりつつある。別に、体力的な問題ではない。いくら彼女の足捌きが巧たくみでも、露ろ店てんがびっしりと並ぶ狭せま苦くるしいこの一帯では、自おのずと空間的な限界があるということだ。

　簡単に言えば、背後に露店がある方向へ前と左右から追いこめば、少女としては飛んで逃げるくらいしか道がない。

　もちろん、飛ぶわけにもゆかないだろうから、退路がない、ということになる。

　退路がなければ、どうするか。

　背中に露店の柱を背負う格好となった少女は、例の棒を構えて三方向から突とつ進しんしてくる龍州人たちの位置を一いつ瞬しゅんで確かく認にんし、体をやや左に開いた。

　そのまま、向かって左から来る龍州人に体当たりした。

　本当は、そのさらに左側をすり抜ぬけようとしたのかもしれない

が、龍州人の方が妨ぼう害がいしようとしたのだ。当然、龍州人は体をよせるだけではなく、棒を振ふり下ろした。一瞬、マリアローズは奇き妙みように思った。なぜ、少女はまだ剣を繰くり出さないのか？

　おかげで、少女は左ひだり肩かたに棒の直ちよく撃げきを食らった。

　ただ、思いきり突つっこんでいったぶん、やや浅かったらしい。少女は顔をしかめただけで、よろめいたりはしなかった。それとほぼ同時だった。

　少女が剣を突き出した。

　右手一本で、龍州人のがら空きになった土手っ腹をぐさりとやって、すかさず剣に体をかぶせるように力をかけて、押した。

　剣をねじりながら、押した。

　少女の口から獣けもののような声が洩もれ、龍州人は苦痛に呻うめき、叫さけんで、二人は今や密着しているため、他ほかの龍州人たちもしばし手出しができなかった。

「──死ねえええええええぇぇ……！」

　そして、少女がそう絶ぜつ叫きようしながら引き抜いた剣を、龍州人の首に叩たたきつけたとき、マリアローズは理解した。

　あの少女は死ぬ気だ。

　最初から、捨て身だったのだ。

　その証しよう拠こに、龍州人の首を力任せに斬きるというより叩き折った少女は、うつむいた姿勢で何かを諦あきらめたかのように──あるいは、覚かく悟ごしたかのように、剣の柄つかから手を放そうとしている。

　それから、ちらりとこちらを見た。

　あの深い青の、暗い瞳ひとみで。

　一いつ瞬しゆん、目があったように思えたのは、マリアローズの

気のせいだろうか。

　逆上した残りの龍州人二人が襲おそいかかってこようとしている、このときに、だ。

　もはやここまで、とでも言うつもりか。

　何が彼女を捨て身にさせたのか。

　彼女はそれで満足なのか。

　知ったことではないが。

　そのはずなのだが。

　マリアローズは「……しょうがないよ」と呟つぶやいた。まったく、しょうがない。

　だって、少女のあの声が、憎ぞう悪おのかたまりとでも表現するしかない声が、マリアローズの胸を深く抉えぐっている。もっとはっきり言ってしまえば、痛い。あの声が見えない杭くいとなって、心臓に突き刺さっているかのようだ。このままだと、しばらく痛みは消えないだろう。

　だが、間に合うか？

　わからないけれども、とにかくマリアローズは人ひと垣がきを押しのけて走った。走りながら照準をあわせるのは困難だったものの、そうも言っていられない。祈いのるような気持ちで、右籠こ手てから矢を撃うった。龍州人二人はマリアローズにほぼ背中を向けていて、右側のやつの後頭部を狙ねらったのだが――当たった様子はない。外れたか？

　だとしたら、マリアローズとしては、別の願い事をしなければならないだろう。どうか流れ矢が見物人ギヤラリーに命中しませんように。

　まあ、当たるものなら、もうとっくに当たっている。手て遅おくれだ。それに、そんなことを願っている場合でもない。

　あと三、四歩というところだった。

まず、右側の龍州人の棒が、少女の左ひだり膝ひざあたりに叩きこまれた。それで体が傾かしいだ少女の右みぎ腕うでを、今度は左側の龍州人がしたたかに打った。少女はすぐそばの露店を巻きこんで、横向きに倒れた。

龍州人たちの意図は明白だ。一いち撃げきで急所を狙わなかったのは、殺す前に少女を痛めつけ、辱はずかしめるつもりだろう。そこがつけこむ隙すきだということに、やつらはまだ気づいていなかったに違ちがいない。

少なくとも、マリアローズの飛び蹴げりが、右側の龍州人の後頭部に炸さく裂れつするまでは。

「──らぁぁっ！」

完全に無む警けい戒かいだったせいか、龍州人は笑えるほどきれいに吹ふっ飛んだ。

その結果、龍州人が顔から突っこんだ先の露ろ店てんは豪ごう快かいに被ひ害がいを受けたわけだが、人間はこの程度では壊こわれない。ただ、物事には順序というものがある。マリアローズはわりと神経質で、順番を守らないと気がすまない。

だから、飛び蹴り後、華か麗れいに着地を決めたマリアローズは、すぐさま左側の龍州人に右籠手を突きつけ、左手でスイッチを押して矢を放った。

わずか一メーテルほど離はなれた場所にいるその龍州人は、瞬発力がない方なのか、まだ状じよう況きようを把は握あくしきれていなかったようだ。マリアローズを見て、驚おどろいたような顔をしていた。矢は、その右目に刺さった。本当は眉み間けんに当てるつもりだったので、少しずれたことになるが、まあいい。次の課題は、Ｐ９ドウター＋がやつを痙けい攣れんさせるまでの数秒間をどうすごすか。それと、先にすっ転ばせた右側の龍州人の処置だ。

その両方を一挙に解決する手段がある。

「倪ニー奴ヌウ何ヘイ哉ラー……！」

まだ今いちよくわかっていないらしいが、片方の手で右目を押さえたまま、新たな敵に一撃見み舞まおうとした左側のやつから逃のがれるように、マリアローズは低く跳ちよう躍やくした。

　雑然と在庫の金物が積まれた露店の奥で、うつぶせの状態から起き上がろうとしていた右側のやつの背中めがけて。

「ヒッ！」

　店の隅すみで固まったり、震ふるえたり、飛び上がったりで忙いそがしい店主には気の毒だが、こうして右側のやつは金物に二度、顔面を突つっこむ羽目になった。中にはフォークやナイフなどの鋭えい利りな品もあったので、かなりダメージは大きいはずだ。

　ただ、繰くり返すが、人間はこれくらいでは壊れない。

　たぶん、壊れないはずだと思うので、マリアローズはやつのうなじに右籠手の射出口をあてて矢を撃ちこんだ。ついでに、その後ろ頭を蹴ったくった反動で振ふり返り、左側のやつを迎むかえ撃とうとしたが、その必要はなかった。

　左側のやつが胸のあたりを掻かきむしりながら全身を痙攣させ、口の端はしから泡あわを噴き出してばったりと倒たおれた。

　右側のやつは、痙攣以前に起きてくる気配がない。

　何とか終わったか━いや。

「きみ……！」

　マリアローズは少女に駆かけよった。少女はへし折れた露店の柱にあずけた背中をやや丸め、体を横にして寝ねている。だが、意識はあるようで、マリアローズが近づくと、ゆっくりと顔を上げた。

「……お……前は……」

「立てる？　てゆうか、立って。急がないと！」

「いそ……ぐ？」

「そうだよ。早く！」

　怪け我がのせいか、それとも虚きょ脱だつ状態なのか。口で言っても埒らちが明かないようだ。

　そこで、マリアローズは少女を無理やり助け起こそうとしたのだ

が、これがなかなか骨だった。何しろ、負傷箇か所しよのうち、一番ひどいのは明らかに左膝だ。外から見ただけで、皿を破は壊かいされているのがわかる。これでは歩けないだろうし、自力で立つことすら難しいだろう。

「ああ、くそ──もう、何で僕がこんな……」

　主に自分に対して悪態をつきながら、マリアローズは背負い袋ぶくろを背中から腹に移動させ、少女の前にしゃがみこんだ。

「乗って！」

「……え……」

「おぶされって言ってるんだ！　いいから乗れ、今すぐ乗れ、ただちに乗れ瞬しゆん時じに乗れ！」

「あ、うん……」

　少女もマリアローズの剣けん幕まくに気け圧おされたのかもしれない。痛そうにしながらも、素す直なおにマリアローズの背におぶさってきた。

「ちゃんとつかまってよね──って、重……」

「……お、重くて悪かったな……」

「悪いよ。マジで。この場合。シャレになんない。そんなに重そうに見えないのにさ。何でこんなに重いんだよ」

　そう愚ぐ痴ちりながらも、マリアローズは何とか立ち上がった──はいいが、これではおそらく、普ふ通つうに歩くよりちょっと速いくらいが関の山だ。もともと、マリアローズは筋骨隆りゆう々りゅうだの逞たくましいだのといった言葉とは無む縁えんで、実は体格的には少女とさして変わらないと思われる。正直、他人をおんぶするよりは、おんぶされる方が似合うかもしれない。

　まあ、いつぞやアジアンにされたみたいに、誰だれかにおんぶされるなんて、冗じよう談だんではないが。

「……やはり……女の人に、わたしは重いのでは……」

「む」

　だが、少女の一言がマリアローズの中の何かに火を点つけた。

「誰が女だって？」

「……え？」

　そうだ。気合いだ。根こん性じようだ。マリアローズは唇くちびるを舐なめて湿しめらせた。

　どのみち、やってしまったことの是ぜ非ひはともかく、ここまで来たら、あとは知らないと少女を放り出すわけにもゆかない。鼻ピアスを連れた龍州人が、本当に仲間を呼びに行ったかどうかは定かではないけれども、そうではないという保証はないのだ。最悪のケースを想定して行動するべきだろう。

　だとしたら、この場から一刻も早く離れる。その一手しかない。

「揺ゆれるから痛いだろうけど、我が慢まんしてね」

「ど、どこへ……？」

「アサイラム」

　別に、前もって考えていたわけではないが、すんなりとその名が口をついて出た。

　なるほど、アサイラムか──自分で言っておいて自分で納なつ得とくするのも変な話だが、確かにあそこは秩序の番人が警備についているし、モリーに少女を治ち療りようしてもらうこともできる。第十一区の動物園事務所に連れて行ってユリカに医術式を施ほどこしてもらう手もあるが、距きよ離り的にも、第六区にあるアサイラムの方が近い。

　まあ、そうはいっても、結構、遠いのだが。

「よし」

　とにかく、無事に行き着けることを願って、進もうとしたときだった。

少女が身じろぎして、申し訳なさそうに言った。

「あの……すまないが」

「何だよ」

「わたしの剣けんを、拾ってもらえないだろうか」

「剣？」

よくわからないけれども、拒こばむのも面めん倒どうなので、マリアローズは剣を拾い上げた。少女に手て渡わたそうとも思ったが、血刀を鞘さやに収めてはあとの手入れが大変だろう。おぶさっている体勢で手に握にぎらせておくのも危ないし、少なくともしばらくは、そのままマリアローズが持ってゆくことにした。

「じゃ、行くよ」

「あ──」

りがとう。たぶん、そう続けようとしたのだろう。

マリアローズは先読みして遮さえぎった。

「お礼とかはあとでいいから」

「い、いや、そうじゃなくて」

「え？」

マリアローズは訊きき返しながら、もう歩き出していた。さすがに早歩きくらいの速度が限界で、こんなことで大だい丈じよう夫ぶかとも思うが、さっきまでの野次馬たちが黙だまって道を空けてくれるのがせめてもの救いだ。

果たして、それを善意ととっていいものかどうか。

迷うところだが、こんな国でも、ひどい人間ばかりではない。やむにやまれぬ事情で、この国に逃にげこんできた者も多いし、気のいいやつも、心優やさしい善良な人々もいる。親切や人情を期待すると痛い目を見るけれども、たまにはいい目にあうことだってないわけではない。

少なくとも、今は周囲を敵に回してはいないようだ。

そのことに若じやつ干かん、安あん堵どし、いやいや、安心するのは早いと自らを戒いましめたマリアローズの耳みみ許もとで、少女が囁ささやくように尋たずねてきた。

「……お前、本当に女じゃないのか？」

今からでも遅おそくない。やっぱり、こいつを放り出して逃げてしまおうか。

一いつ瞬しゅん、本気でそう思った。

Omenage 897 9th revolution 8th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区
〝モリー・リップス・アサイラム〟

chapter.4

# 乙女の事情

追っ手の可能性もそうだが、マリアローズ一人の力でアサイラムまで少女を運ぶのは、やはりそうとう大変だった。

ただ、屑くず街がいとも呼ばれる第六区は、マリアローズにとって知らない街ではない。小さい頃ころ、第六区の貧ひん民みん窟くつに両親と三人で暮らしていたこともあるし、今もアサイラムによく出入りしている関係で、多少の土地鑑かんはある。ここではどういうやつがやばくて、どういうやつはそうでないかも、だいたい知っているつもりだ。

そこで、マリアローズは第六区に入るなり、少々柄がらは悪いが根は素す直なおそうな貧民窟育ちの子供たちに声をかけた。

彼らに小銭をつかませ、荷車を調達してきてもらおうと考えたのだが、成果は若干難ありだった。彼らがどこからか見つけてきた荷車は、普ふ段だん、塵ごみ回収に使われているものらしく、それ相応に汚よごれていて、ちょっと臭くさかったのだ。

ただ、そのあたりは我が慢まんしてもらうしかないし、少女も文句は言わず、おとなしく乗ってくれた。こうなると、あとはもう、面おも白しろがってついてきた数名の子供と一いっ緒しょに荷車を引いて、アサイラムを目指すだけだった。

まあ、途と中ちゅう、子供たちの仲間が龍りゅう州しゅう人らしき一団の不ふ穏おんな動きを知らせてくれて、コースを変えたり、進んでは戻もどったり、また進んだりと、色々あったことはあったのだが。

何とか無事にたどり着いたアサイラムの門の前で、警備にあたっている番人たちの姿を見たときは、本当にほっとした。

もっとも、それとは逆に番人たちは驚おどろき、慌あわてていた。血相を変えて走りよってきた彼らを見て、子供たちが逃げ散っていったくらいで、マリアローズも「どうした」「何があった」と詰きつ問もん調で質問攻ぜめに遭い、正直、カチンときた。これではまるでマリアローズが加害者みたいだ。助けてやったというのに、この扱あつかいはない。

「番人ってのは、どうしてそう横おう柄へいで偉えらそうなんだよ。義だか何だか知らないけどさ。そんな態度だから、きみたちを嫌きらう人も多いんじゃないの」

「何だと？」

　集まってきた五人の番人のうち、一番尊大そうなやつが、気色ばんで腰こしの物に手を伸のばしかけた。

　これだ。これこそ、エルデン市民一いつ般ぱんが思い浮うかべる番人のイメージなのだ。全員がそうではないのかもしれないが、このとおり、感じの悪い番人がいることは事実で、やつらが番人全体の評判を落としているのは間ま違ちがいない。

　とはいえ、こんな阿あ呆ほうでも、昨日の羅ラ叉サ──あの死神よりはまだ人間味がある。頭にはくるものの、相手は器うつわの小さい哀あわれなクソ野郎モウフオなんだと思えば、我慢できなくもない。

「だいたい、そんなこと訊きく前に、やることがあるだろ。この子の怪け我が、結構ひどいんだ。かなり痛みがひどいみたいで、意識も朦もう朧ろうとしかけてる。早く治ち療りようしてあげないと」

「……そのとおりだ。申し訳ない」

　そうあっさり謝られると、かえって気持ち悪いし、困ってしまう。

　だが、実際、急ぐべきだった。

　ただし、少女は膝ひざを大怪我しているので、担かついだり抱かかえたりして運ぶのはまずい。そう判断したマリアローズと付き添そいの番人二名は、少女を荷車に乗せたままアサイラムの入口まで行って、そこで担たん架かに乗せ替かえた。

　それから、番人の一人が受付の事務員に手早く状じよう況きようを説明すると、危急の事態には慣れっこのアサイラムだ。何番の診しん療りよう室しつに少女を運べとか、手空きの医術士は誰だれだとか、いないとか、誰を回そうだとか。色々な指示やら返事が飛び交かう中、ばたばたしているうちに、気がつくと治療が終わっていたという印象だった。

　で、徹てつ夜や明けに仮か眠みんをとろうとしていたところで叩たたき起こされ、少女の治療にあたった医術士が、今はマリアローズの膝を枕まくらに鼾いびきをかいている。

　お昼前の中庭には、穏おだやかな空気が流れていた。

　むろん、ここはアサイラムの敷しき地ち内だ。高く頑がん丈じような塀へいに囲まれ、銀の軍団ザ・シルバリイの番人たちに守られたアサイラムでなければ、お外でのんきにお昼ひる寝ねなんてできるものではない。今日は昨日よりもさらに暖かいので、中庭の芝しば生ふはいい天然のベッドというわけか。

　それならそれで、黙だまって寝ねていて欲ほしいのだが。

「モリー、鼾かきながら人のお尻しりを撫なで回すのやめてくれる？」

「ぐー……ぴゅうぅぅ……ずずずず、ごご、ご、ご……ぷひゅうぅぅ……」

「そういう凝こってるわりに見えすいた芝しば居いはもういいから」

「くー……すー……ぐー……」

「凝ってなくても同じだよ。起きてるんでしょ」

「ＺＺｚｚｚ……Ｚｚｚ……ＺＺｚｚ……」

「あ、ちょっと、そんなとこ……どこ触さわってるんだよ！　やめ──」

「……スして……ぇたら……」

「え？　何？」

「キスしてくれたら……やめてあげる……もちろん、ディープなキス……」

「叩くよ？」

「ちっ」

　モリー・リップス・アサイラムの代表者、総支配人、女王様──何でもいいが、とにかくここの創設者であり、全権を握にぎっているモリーは、目をつぶったまま舌打ちをすると、マリアローズの膝の

上ですぐに静かな寝息を立てはじめた。

　唐とう突とつだが、疲つかれているみたいだし、本当に眠ねむっているように見える。

　モリーのことだから、しつこく演技をしているのかもしれないけれども、さっきより寝顔が無防備だ。

「……また髪かみの毛、何日も洗ってなさそうだし」

　マリアローズはちょっと脂あぶらっぽくなって乱れたモリーの髪を、指で梳すいてやった。それでもぴくりともしないので、どうやら熟じゆく睡すいしているらしい。

　さて、どれくらいの間、膝を貸していればいいのやら。

　モリーの頭を撫でながらぼうっとしていると、膝を抱えて隣となりに座っている少女が、芝生の短い草をむしる音がした。

「母かあ様さまの──モリーのそんな姿……初めて見た」

　少女は九歳から十四歳までアサイラムにいたのだという。

　アサイラムは、様々なことが原因で心を病やんだ人々や、親を失った孤こ児じたちを多数保護している。彼女も孤児で、モリーを母として育った。それから、十四歳で秩序の番人預かりの身になって、十六歳で正式に入団が認められ、番人になったという話は、さっきモリーから聞いた。

　ベアトリーチェ。

　それが少女の名で、モリーは彼女をリーチェと呼んでいた。

　ベアトリーチェは返り血で濡ぬれたジャケットとジャンパースカートを脱ぬぎ、別のスカートと大きめのカーディガンに着き替がえている。お世辞にも洗練された服装とはいえないが、アサイラムにあった衣類を借りただけだから、やむをえないだろう。

「母様──いや、モリーは、わたしたちの前では、とても強い人だから」

「何でモリーを名前で呼ぼうとするの」

「どうしてだろう。けじめ、かな……」

　横目で見たベアトリーチェは、少々顔色がすぐれないくらいで、もう大だい丈じよう夫ぶそうだ。モリーが医術式を施ほどこしたのだから、当たり前だろう。

　モリー・リップスが、エルデン一有名な医術士と評されているのは、何もアサイラムの主あるじであることだけが理由なのではない。彼女は一人の医術士としても、稀け有うなほど有能なのだ。

　中年親父おやじ並みのセクハラ癖へきも、稀まれなくらい凄すごいが。

「いつまでも、母様の子供でいるわけにはいかないんじゃないかって」

　ベアトリーチェはむしった草をゆっくりとばらまいた。

　風はない。

　草はほぼまっすぐ落ちた。

「わたしは母様を守りたかったんだ。何かを守れるくらい強くありたい。わたしが強ければ、失わずにすんだものがたくさんあった」

　どうしてこんな話になっているのだろう。マリアローズにはよくわからない。

　だが、たぶん、ベアトリーチェは喋しやべりたがっている。

　それならば、他ほかにすることがあるでもなし、モリーに膝を貸している間は、暇ひま潰つぶしがてら付き合ってやってもいい。

「それで番人に？」

「うん。秩序の番人団には、恩義もあるんだ。もともと、わたしを母様のところに連れてきてくれたのは、焔ホムラだから」

「ホムラって？」

「今は七番突とつ撃げき隊の隊長をやってる。すごく面おも白しろい人だよ。ちょっと気まぐれだし、だらしないところもあるけど、

やさしくて──何ていうのかな、あったかいんだ。口は悪いけど、焔ホムラの場合、あれは照てれ隠かくしなんじゃないかと思う。だから、焔ホムラを嫌きらう人はいない。みんな、すぐに焔ホムラのことを好きになる。それに、焔ホムラはやさしいだけじゃないんだ。仲間を守るときはとても強い。でも、この間、焔ホムラの奥さんが……」

　ベアトリーチェは不意にうつむいて下した唇くちびるを噛かんだ。

「──わたしは、何をべらべらと。変だな。お前のことなんて、全然知らない。昨日、初めて会って、今日は助けてもらって……奇き妙みような縁えんだ」

「そうだね」

　まったくそのとおりだ。

　けれども、縁なんて意外とそんなものであって。

　振ふり返ってみれば、たとえば、マリアローズがＺＯＯに入ったのも、必然というよりは偶ぐう然ぜんがいくつか重なってそうなっただけのことだと思う。人との出会いや別れに限らず、いいことも、悪いことも、紙一ひと重えだ。

　あのとき、何かがちょっとだけ違ちがっていたら、今の自分はないかもしれない。

　モリーとだって、侵入者クラツカー稼か業ぎようを始めて最初に大きな怪け我がをした際、たまたまアサイラムの評判を耳にしなかったら、知りあうことはなかっただろう。

　当然、こうして膝ひざ枕まくらをしてあげることもなかった。

　それは、とても寂さびしいことのような気がする。

　そういえば、いつだったか、トマトクンが言っていたっけ。「俺は縁ってやつを大事にすることにしている」と。

　なぜだか、折に触ふれて思い出す言葉だ。

　ベアトリーチェとこうして会ったのも、そういった縁の一種なの

だろうか。

　マリアローズは一つ息をついてから言った。

「昨日は助かったよ」

「わたしも……今日は助かった。これでおあいこだな」

　ベアトリーチェはちらりとマリアローズを見て、そっと笑った。

「正直、昨日は、人に助けてもらっておいて、不満そうな顔をして、不満げなことを言って、何だこいつ、と思った」

「あれは、ね」

　マリアローズは羅ラ叉サが口にした義とやらを理解できない。いや、意味は理解できるけれども、共感できないと表現した方が正しいかもしれない。

　確かに、「おのれを利するために他を害するものはすべて悪」と言われれば、納なつ得とくできないこともないのだが。

　あくまで、自分のことを棚たなに上げれば、だ。

　マリアローズは、そこまで自分が清せい廉れん潔けつ白ぱくだと断言できる自信はないし、その必要もないと思う。自分自身と、クランの仲間と、モリーなどごく一部の人間以外のことは考えられない。極論すれば、他はどうなっても知ったことではないし、大事なものを利するためならば、他を犠ぎ牲せいにしたり、傷つけたりするのもやむをえない。それがちっぽけな自分の限界だろう。

　それでいて、ベアトリーチェを救ってしまったりして、一いつ貫かん性せいがない。

　つまり、その程度なのだ。

　いい加減で、適当で、徹てつ底ていしていない。

「──僕は番人じゃないから」

「わたしたちだって、特別な人間じゃない」

「それは、そうだろうけど」

「そうだ。だから、自らに掟おきてを課す。悪を目まの当たりにしたら、決して退かない。勝敗は問題じゃないんだ。剣けんを抜ぬいて、戦う。一度、背中を向けて逃にげたら、次も逃げるようになる。常に戦うことと逃げることを考えるようになる。それでは、戦えない。弱いからだ、わたしたちは。弱さを自覚して乗り越こえなければ、強くなれない」

「けど、死んじゃったら意味がないよ」

「死なんて怖こわくない」

　ベアトリーチェは一いつ瞬しゆんの逡しゆん巡じゆんも見せずに言いきった。

「弱いまま、大切な人を守れないことの方が、わたしは怖い」

「それで、あんな戦い方をしたの」

　捨て身で、死を覚かく悟ごして、ベアトリーチェは戦いに臨んだのか。

　こう言ってしまっては何だが、たとえあの髑どく髏ろの龍州人たちを始末したところで、何がどうなるというわけではないのに。

　その掟とやらのために、強くあるために、そんなことのために、命を捨てなければならないのか。

「死んだら、大切な人も守れないじゃないか」

「……だけど」

　ベアトリーチェは自分の膝ひざに顔をうずめた。

「逃げたくないんだ、わたしは」

　その声が、震ふるえている。

「──何年も前、ここが賊ぞくに襲おそわれたんだ。何人もの子供が……死んだ。殺された。わたしはもう剣を習いはじめていたけど、何も……何もだ。何もできなかった。わたしの妹が殺されたのに。弟が、兄が殺されたのに。姉が殺されたのに。母様も怪我をしたのに」

　それからベアトリーチェは、呟つぶやくように「強くなりたい」と言った。

「わたしは……強くなりたい。もっと強くなりたい。もっと、ずっと強くなりたい。強くならなきゃいけない。だから、強くなるためにどうすればいいかって、焔ホムラに尋たずねたんだ。焔ホムラがこう教えてくれた。一番いいのは戦わないですむことだけど、戦うときは、命を惜おしまずに戦え、斬きるときは、斬られることを考えず斬れって」

「僕なら──」

　マリアローズも、ベアトリーチェの気持ちは理解できないわけではない。

　強くなりたい、か。

　いや、わかる。自分が強ければ、あのとき、大切な人を守ることができたかもしれない。マリアローズだってそう考えないでもないが、それでもベアトリーチェは間違っていると思う。

「僕なら、そんなことは言わないな。とにかく頭を使えって教えるよ。頭を使って、斬れるときをじっとうかがって斬れって。勝つためには何でもしろってさ。もちろん、死ぬのは最悪だ。死んだら負けだろ」

「勝ち負けは問題じゃないと言った」

「問題だよ。それより、生き死にが問題だけどね。そもそも、斬るだの斬らないだのよりさ、誰だれも死ななければ、何もかも丸く収まるんじゃないの。一番いいのは戦わないですむこと、か。その焔ホムラって人が言いたかったのは、たぶんそっちの方だよ。だって、きみが誰かを失ったみたいに、きみが死んだら、誰かがきみを失うんだよ」

　自分がやや感情的になっていることに、マリアローズは気づいていた。

　けれども、一つだけ。これだけはどうしてもベアトリーチェを許せない。

　マリアローズの膝の上に頭をのせている、モリー──ついさっきま

で、徹てつ夜や明けの重い体を引きずって自分の娘むすめに医術式を施ほどこしていた彼女の前で、たとえ本当に眠ねむっているにせよ、よくもそんなことが言えるものだ。

「きみが死ねば、モリーは悲しむ。アサイラムの子供たちが賊にやられたとき、モリーはどんな顔をしてた？　無む駄だだってわかっているのに、モリーは最後まで必死で手当てをしてなかった？　その中の何人かが、蘇そ生せい式でも生き返らないってわかったとき、モリーはどんな様子だった？　きみは見てたんだろ。覚えてるんだろ。モリーが……きみたちの前では、いつも強い人だって？」

　マリアローズは一呼吸置いて、軽く唇くちびるを嚙かんでから、意識的に声を低めた。

「強ければ……痛くないって、そう思うの？　違ちがうんじゃないかな。きっと、痛くても、我が慢まんしてるんだ。強いから、我慢はできる。でも、痛いのは同じだと思うよ。僕はきみよりモリーとの付き合いは短いけど、すごく大事な──そう、大切な、友だちなんだ。だから、あえて言わせてもらう。そんなことで、軽はずみにモリーを傷つけるな」

　言いすぎただろうか。

　ベアトリーチェは黙だまっている。このままだと、何だかいつまでもこの沈ちん黙もくが続きそうだ。

　マリアローズは短く息をついた。

「──ごめん。生意気っていうのも、ちょっと違うかもしれないけど、僕が言うようなことじゃないよね」

「いや……」

　ベアトリーチェはまた草をむしった。

「謝らなくていい。わたしは……誰かを守りたいと思いながら、自分のことだけ考えていたのかもしれない。自分のことで手て一いっ杯ぱいだった。母様の気持ちなんて考えてなかった。だけど、やっぱり……わたしみたいな者が強くなるためには、何かが必要なんだ。それに、悪党は憎にくい。やつらは、奪うばって、殺して、失わせるから」

「憎い、か」

　確かに、マリアローズも悪党は大だい嫌きらいだ。

　昔、第十三区で悪党どもに母を暴行され、殺されて、父の遺体を無残に傷つけられたときの痛みは、今も消えていない。時とその後の忌いまわしい思い出の数々がだいぶ薄うすれさせたとはいえ、いまだに夢に見ることもあるし、あのときの連中を捜さがし出して、復ふく讐しゆうしてやろうと考えたこともある。まだやつらの顔は覚えているから、もし街ですれ違いでもしたら、自分が何をするかわからない。

　それ以外にも、侵入者クラッカーをやっていて、悪党どもの被ひ害がいには何度も遭あっている。

　戦利品を脅おどしとられそうになった。

　殺されかけたこともあった。

　つい最近も、Ｓ＊Ｋに喪そう神しん街がいオレストロで邪じや魔まされた。

　逆さか恨うらみされて、襲おそわれた──

「まあ……その気持ちはわからなくもないけどね」

　実際、ろくでもない連中だ。

「うん。あんなやつら、根絶やしにしちゃっていいよ。いるだけで迷めい惑わくだし。脂羽蟲ゴキとか高層寺院の坊ぼう主ずよりもタチが悪い」

「だろう？」

「あ──や、でも、だからこそ余計、やつらを駆く除じよするために死ぬなんて、ばかばかしいと思うよ？　つまり、自分の命を、あんなやつらの命と引き替かえにするってことでしょ。それってすごくもったいないし、それくらいなら、もっと他ほかに使い途みちがあるんじゃないの」

「わたしの命に他の使い途みちが？」

「あると思うよ、きっと。無理に使うこともないわけだし」

「どうせなら……使いたいな」

　ベアトリーチェは草を握にぎったまま、自分の膝ひざを両りよう腕うでででぎゅっと抱かかえこんだ。

「わたしなんかの命が、何かの役に立つなら」

　この少女は、自分のことを何の価値もない、路ろ傍ぼうの石ころ程度の存在だとでも思っているかのようだ。かといって、投げ遣やりになっているのとも違う。彼女はとても一生懸けん命めいで、真ま面じ目めで、ひたむきで、石ころに等しい自分の命を最大限に生かそうと必死になっている。

　何だか、これがあの番人なのか、という感じだった。

　もちろん、番人の全員がベアトリーチェみたいな人間ではないだろう。そんなことはわかっているけれども、さっき門のところで素す直なおに謝った番人も、マリアローズのイメージとは少し違う。一方で、あの〝死神〟羅ラ叉サとはどうやっても仲良くなれそうにない。当たり前のことではあるが、一口に番人といっても、様々だということか。

「ところで」

　マリアローズはモリーのほっぺたを軽くつねった。

「そんなに僕のお尻しりは触さわり心地ごこちがいいわけ？」

「……ＺＺｚｚｚ……Ｚｚｚｚ……」

「だから、寝ねたふりはもういいってば」

「君だって、しばらくは騙だまされていたでしょう？」

　モリーは怠だるそうに体を起こして、大きな欠伸あくびをした。そんなに眠たいのなら、狸たぬき寝入りなんかせずに、おとなしく昼寝していればよいものを。

　まあ、枕があんなに喋しやべっていては、うるさくて寝ていられたものではなかったかもしれないが。

「リーチェ」

　で、今の話もだいたい聞いていたのだろう。

　少しの間、自分の髪かみの毛を引っかき回していたモリーは、やおら立ち上がったかと思うと、いきなり覆おおいかぶさるようにベアトリーチェを抱だきしめた。

「たまには顔を出しなさい。こんな形じゃなくてね。あなたに守ってもらうというのも悪くないけれど、あまり心配させないで」

「──かあ……さま……」

　ベアトリーチェは、一いつ瞬しゅん、体を硬かたくしたが、すぐにモリーの背中に手を回して目を閉じた。

「ごめんなさい」

Omenage 897 9th revolution 8th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区
〝屑街〟

chapter.5

# 男と女

　アサイラムを出る頃ころには、夕方近くになっていた。

　それというのも、あのあと、今度こそ本当にモリーがマリアローズの膝を枕にして眠ねむりはじめたからだ。

　起こしてベッドのある部屋へ連れてゆくという手もあったが、何だか、そういう気にはなれなかった。

　モリーが体を冷やすといけないので、ベアトリーチェに頼たのんで薄うす手での毛布を持ってきてもらった。それをモリーにかけてやり、足が痺しびれそうになったら、ちょっと体勢を変えながら、とりとめもない話──アサイラムにいた頃のことや、焔ホムラをはじめとする番人のことをベアトリーチェが喋り、マリアローズが聞いているという形が主だったけれども、そうして時間を潰つぶしていたら、突とつ然ぜん、モリーの頭が股またの間に突とつ撃げきしてきた。

　どうやら、モリーは普ふ通つうの目覚め方というものを知らないらしい。

　むろん、悪戯いたずらがすぎるモリーには、きっちりお灸きゅうを据すえておいた。効き目はないだろうが。

　ともあれ、中ちゅう途と半はん端ぱになった買い物は明日にでも回すとして、日が落ちる前には動物園事務所へ行きたい。今日あったことも含ふくめて、ＺＯＯの連中、特にトマトクンとは話をしておかなければならないだろう。何か用事がない限り、だいたい皆みな、晩飯前までは事務所にいるので、まだ間に合うはずだ。

　そう思い、仕事に戻もどるというモリーに入浴をすすめてから別れの挨あい拶さつをして、ベアトリーチェと一いつ緒しよにアサイラムを出た。

「きみのお仲間、一人だと危ないから、送ってやるって言ってたけど──よかったの？　断って」

「いいんだ。非番のわたしが、勤務中の彼らをわずらわせるわけにはいかない」

　秩序の番人では、毎月、番人に給料が支給されるのだという。その代わり、当番制でアサイラムだの、料りよう亭ていだのの警備にあたったり、市中巡じゅん回かいを行ったりする。

今日、ベアトリーチェはそれらの当番から外れていて、仕事がないので、一人、鉄てつ鎖さの憩いこい場をぶらついていたらしい。

「どうせ屯とん所しよに帰るだけだしな。剣けんもある。彼らの心こころ遣づかいは嬉うれしいけど、自分の身くらいは自分で守れる」

「屯所って、銀の砦シルバリイホールドのことだよね」

「うん。ここからだと、環かん状じよう通に入って第四区まで行けばすぐだ」

「じゃあ、環状通までは一緒だね。確か、きみたち番人って、みんなその屯所で寝ね起おきしてるんだっけ？」

「ああ、総長から、三人いる副長、各隊隊長以下、団員はすべて屯所で生活をともにしている。だから、我々の結束は固いんだ。家族みたいなものだからな」

「何か、四六時中顔をつきあわせてたら、うざったくなりそうだけど」

「そんなことはない。ただ──そうだな、たまに一人きりになりたいときはある」

　ベアトリーチェとマリアローズは、アサイラムを離はなれて環状通を目指し、入り組んだ貧ひん民みん窟くつの中を歩いている。

　ただ、貧民窟などというと、いかにも貧しくて、不衛生で、みすぼらしくて、といった様子を想像してしまうが、このあたりはそうでもない。バラックよりも石造りの建物が多く、わりと小ぎれいな街並みだ。ここからもっと北、塵じん芥かい処理施し設せつのあるラビッシュバレーに近い一帯はかなりひどいはずだけれども、では、どこからどこまでが貧民窟なのか。線引きするのは難しい。

　それで、どこもかしこも貧民窟と呼ばれている。

　おそらく、そういうことなのだろう。

「わたしは女だからな。知っているかもしれないが、秩う序ちのの番人団は女が少ないんだ。特に、わたしはまだ未熟だし。だから、皆、とても気を遣つかってくれる。それが……たまに、ちょっと、

何て言ったらいいのか……うまく説明できないけど、つらくなるんだ」

「特別扱あつかいされるのが嫌いやだってことかな」

「そうかもしれない」

「で、今日は非番だったから、一人で買い物でもしてたわけ？」

「かっ、買い物なんて──」

　ベアトリーチェはなぜか顔を真っ赤にした。

「違ちがう！　買い物なんかしてない。ただ、どんなものが売られているか、見て回っていただけだ。だいたい、必要最低限の物資は団から支給されるし、買い物なんてする必要はない。だから、給料は全額アサイラムに寄付することにしている」

　実は、マリアローズもたまにいくらかアサイラムに寄付している。アサイラムには募ぼ金きん箱ばこが設置してあって、そこに投入される金が、わずかとはいえ運営資金の足しになっていることは間違いない。

　それにしても、給料全額とは。

「だけど、きみくらいの年の女の子なら、欲ほしいものの一つや二つあるんじゃないの」

「な、ない！　そんな、欲しいものなんて！　そもそもだな、女ならとか、女だからとか、そういうのがわたしはたまらなくて──いや……」

　ベアトリーチェは短くため息をついて、肩かたを落とした。

「嘘うそだな……そうだ。お前の言うとおりかもしれない。そうじゃなければ、市場をぶらついたりはしない。本当に、わたしは弱いんだって思い知らされる。総長に直じか談だん判ぱんして、羅ラ叉サ副長直属の隊に配置替がえしてもらったのは、そんな弱い自分を鍛きたえ直すためだ。前は焔ホムラの下にいたんだけど、どうしても甘えが出てしまっていけなかった。それに比べると、あの人は、すごく厳しいから」

「死神、か」

「あの人は琺瑠フオール副長とか、焔ホムラと同じ、凰おう州しゆう流る民みんなんだ」

「凰おう州しゆうって、龍りゆう州しゆうの北にある島国だよね」

「うん。わたしもよくは知らないけど、凰州には厳格な階級制度があって、下層階級に生まれついた者は、食べていくのも大変らしい。それで、生きるために大陸に渡わたる人々がたくさんいて、そういった人たちが凰州流民と呼ばれる。羅ラ叉サ副長は、幼い頃ころから、他ほかの流民の子供たちを守るために剣をとり、ずっと人を斬きりつづけてきた」

「へえ……」

　そういう過去があって、あのように剣を振ふるい、義のために悪を斬る。

　知ってしまうと、理解できなくもない。死神も生まれながらの死神ではなく、死神になった理由があるということだろう。

　ベアトリーチェは眉まゆをひそめ、思いつめたような目をやや伏ふせた。

「流民の暮らしは過か酷こくなんだ。もちろん、わたしは聞いただけだけど、もともと貧しさに耐たえかねて国を出てきた人たちだし、生活の糧かてをえるだけでも大変で、大陸では言葉も通じない。女子供は金になるから、たいがいさらわれて売られる。琺瑠フオール副長や焔ホムラが、昔、羅ラ叉サ副長に何度も助けられたって話していた。羅ラ叉サ副長は、年とし端はもいかない子供の頃、初めて人を斬ったときから剣けんを抱だいて眠ねむるようになって、今もそうなんだ」

　実際、売られた経験のあるマリアローズにしてみれば、身につまされる話だった。

　死神と呼ばれる以前の羅ラ叉サは、同郷の仲間たちをあんな目に遭あわせないため、おのれの身を剣に縛しばりつけるようにして、血を流したのか。

　流した血の量が、彼の太刀たち筋すじを無む駄だなく鋭するどく

研とぎ澄すまし、表情を奪うばって、彼を死神に仕立て上げたのか。

「……なるほどね」

「そうして色々な場所を巡めぐって、最後にはこの国に流れ着いて──総長に保護された。羅ラ叉サ副長が、一度だけ話してくれたことがある。酒しゆ宴えんがあった夜だったから、もしかしたら酔よっていたのかな。自分を守ってくれたのは、総長が初めてだったって。言い方は少し違っていたかもしれないけど、あの羅ラ叉サ副長がそんなことを言ったんだ」

　秩序の番人総長、デニス・サンライズ。

　もう五十をすぎているというが、太たい陽よう鬼きの異名をとる彼は、エルデンの名士の一人と言ってもいいだろう。

　死神も有名だけれども、デニスはその武勇だけでなく、人格者としても名高い。大所帯をまとめ上げている手しゆ腕わんや人望も評価されていて、複数の国家から仕官の誘さそいもあるらしいが、すべて断り、現在も一線で自ら剣を振るうことさえあるという。

　そういえば、番人を悪く言う者は多いが、デニス・サンライズに対する悪口雑言はあまり聞かない。

　格の違いというやつだろうか。

　そこらのチンピラが太陽鬼の陰かげ口ぐちを叩たたいても、みじめなだけだ。太陽鬼の名には、それくらいの重みが備わっている。

「デニス・サンライズ──有名人だけど、さすがに見たことはないや。どんな人なんだろ」

「大きな人だ」

　ベアトリーチェが伏せていた目を上げた。

「わたしには生みの母と育ての母がいるけど、父は知らない。でも、父とはああいった人なんじゃないかと思う」

「お父さん、か……」

　マリアローズの父は、とにかくやさしい人だった。母もそうだが、度がすぎるほどのお人ひと好よしで、子供のマリアローズから見ても、こんなにたやすく他人を信じていいのかと心配だった。

　結局、それが仇あだとなり、一家三人で国を捨て、サンランドに逃にげこまざるをえなくなった。

　故郷だけでなく、何もかもを失いもした。

　だが、マリアローズは一度たりとも父を恨うらんだことはない。父は悪くなかったと思うし、何より、父と母が自分を生んでくれて、ずっとではないけれども、そばにいてくれたからこそ、今、こうして生きていられるのだと思う。

　まあ、そうはいっても、大きな人という印象はさすがにない。少なくとも、肉体的には強くもなかった。振り返れば、国を出るまでは剣を握にぎったこともなかった父が、よくも侵入者クラッカー稼か業ぎようで家族を食わせていたものだ。そういう意味では、強かったといえるのかもしれないが。

　いずれにせよ、ベアトリーチェの瞳ひとみの輝かがやきや口くち振ぶりから、彼女がデニス・サンライズをいたく尊敬していることは見てとれた。ベアトリーチェの話を信じるなら、あの死神もデニス・サンライズを父親のように慕したっているらしい。

　たぶん、それなりの人物なのだろう。

　そんなことをぼんやりと考えていたら、ベアトリーチェが「──ところで」とマリアローズの顔をのぞきこんできた。

「実は、とんでもない事実に気づいてしまった」

「え、何？」

「ちょっとびっくりだ。何だと思う？」

「……さあ？」

　本当にわからない。マリアローズが首をひねると、ベアトリーチェは年ねん齢れい相応に悪戯いたずらっぽく笑った。

「お前の名前、まだ知らないんだ」

「へ？　嘘うそ」

「嘘じゃない。母様は君と呼んでいただけだし、わたしもずっとお前と呼んでいた」

「あ──言われてみれば、そうかもね」

「うん。だから、名前を教えて欲ほしい」

　別に、拒こばむ理由はない。妙みように美々しい響ひびきを持つ名のため、最初に名乗るとき、少しだけ気き恥はずかしかったりするのだが、今はたいした障害とは思えなかった。自分の名前を口にしようとしたマリアローズは、その前に視界の隅すみを何かが落下してゆくのを見た。

　小さい物体だ。

　音がした。

　何だ？　小石？

　石いし畳だたみが敷しかれた道を見回すと、落ちてきたものと思おぼしき小石があった。どこから落ちてきたのだろう。当然、上からのはずで、見上げると、道に面した古い建物の三階の窓から、荷車を調達してくれた少年のうち一人が身を乗り出していた。

　マリアローズと目があうと、少年は左──マリアローズたちの進行方向を指差して、すぐに窓の奥へ姿を隠かくした。

　ここまでしてもらって、その意味を汲くみとることができなかったら、単なる間ま抜ぬけだ。

「どうした？」

　少年の姿を見ていないベアトリーチェも、マリアローズの様子から異変を察知したようだ。声に警けい戒かい感かんがにじみ出ているが、残念ながら、この場合、ベアトリーチェはのんきすぎるといわざるをえない。この状じよう況きようは、警けい戒かいでは不足だ。すぐにでも行動すべきで、できればそのための態勢を一いつ瞬しゆんで整えてもらいたかった。

　このあたりは、単独で侵入者クラツカーをやっていたマリアロー

ズとは、感覚が違ちがうのか。

　正直、甘いと思うけれども、愚ぐ痴ちを言っても始まらない。

「来て！」

　マリアローズはベアトリーチェの手をとり、百八十度方向転てん換かんして走り出した。

　しかし、悪いことに、このあたりは隙すき間まなく建物が建ち並んでいて、細い脇わき道みちなどは見あたらない。話に夢中で、自分が虎こ口こうに飛びこんでいたことに気づかなかったのか。これではベアトリーチェを責められたものではないが、そんな義理はないのに、わざわざ知らせてくれたあの少年の厚意を無む駄だにはしたくない。

　したくはなかったのだが。

　石造りの建物に挟はさまれた曲がりくねった道を十秒ばかり走ったところで、十メーテルほど先の角から髑どく髏ろの龍州人が出てくるのを見た。

　その数、五人、いや、七、八人か。

「くっ……！」

　ただちに回れ右をすると、そちらからもやはり髑髏の龍州人が距きよ離りをつめてくる。あの餓が鬼きめ。しっかり挟み撃うちされてるじゃないか──などということは、思っても口には出さない。本気でそう思ったわけでもない。ただ、どちらにしても、逃げ場を失ったことは確かだ。

　しかも、やつらの中に、一見して他ほかと違う二人が混じっている。

　何となくだけれども、やばい。

　一人は男で、もう一人は女なのだが、見た目でいうと、特に男の方がやばそうだ。

　それはもう、その堂々たる体たい軀くからして、普ふ通つうではない。

背せ丈たけは馬ば鹿かみたいに高いわけではないものの、全身これ筋肉というか。龍州人がよく着る丈の長い衣服を身につけているのだが、彼のそれは藍あい色いろ地に禍まが々まがしい白い人骨の紋もん様ようが描えがかれていて、袖そでがない。そのせいで露ろ出しゅつしている刺青いれずみだらけの肩かたが、腕うでが、また、顔までもが、まるで岩がん塊かいのようにごつごつしていて、やたらと硬かたそうなのだ。それでいて、身のこなしに一分の隙すきもないのは、見かけ倒だおしの筋肉ではないということだろう。

そして、もう一人。

岩男にぴったりと寄り添そって歩いてくる女の方だが、こちらも負けず劣おとらず、外見にインパクトがある。

まず、着ている衣類が派手だ。東部料理店などで、たまに女性従業員が着用している龍州風のドレス、旗チー袍パオとほぼ同じ形なのだけれども、スリットがずいぶん深い。腰こし骨ぼね近くまで深く切れこみが入っているせいで、歩くごとにすらりと長い美び脚きやくがあらわになる。黒地に紅色の髑どく髏ろ柄がらというのも、その毒々しさがかえって艶なまめかしさを演出しているかのようだ。

ところが、女の髪かみ型がたは暗黒大陸の女性がよくやるドレッドロックスで、眉まゆを剃そり落とし、口紅は何と黒だ。さらに、目の周りに不気味な紋様を刺青している。

おそらく、もとはスレンダーなのに出るところは出ている東部美女なのだろうが、一種、呪じゆ術じゆつ的な装よそおいによって、何とも表現しがたい別物と化している。

そう──呪術的な。

「まさか……魔ま術じゆつ士し」

聞くところによると、龍州やラハン大陸、暗黒大陸などにも、魔術に類するものは存在するらしい。ただし、α大陸とは歩んできた歴史が違い、文化も違う。当然、魔術の形態も自おのずと異なっていて、呼び方も様々だという。

しかし、あることはある。

どういう形か、マリアローズは知らないが。

　知りたくもないが、知らないままやりすごすことができるかどうか。

「……あまり期待はできそうもない、かな」

「すまない」

　ベアトリーチェはマリアローズに身をよせ、繋つないだ手をきつく握にぎってきた。

「わたしのせいで、お前までこんなことに」

「どう返事をすればいいか、迷うね」

　というより、すでに前後から髑髏の龍州人たちが五、六メーテルほどまでにじりよってきている。どう返事をしたところで、この状況は改善できそうもない。何か。何か手段はないのか。考えようとしても、頭の中に靄もやでもかかっているかのように、思考の道みち標しるべが見つからない。

　暑くなんかないのに、汗あせが出る。

　これは、冷ひや汗か。

　とりあえず、ベアトリーチェの手を振ふり払はらって、両手を自由にしておくべきだ。そうは思うのだが、ベアトリーチェはほとんどマリアローズにしがみついている。手を放して、彼女を突つき放してしまうことが、できない──とはいわないまでも、気が進まない。

　身の上話やら何やら、色々と知りすぎたせいで、情でも移ったのか。

　まあ、モリーの子供だということもあるし。

「ベアトリーチェ」

　しかし、だったらなおのこと、何とかこの場を切り抜ぬけなければならない。

　マリアローズは一度、ぎゅっと指に力をこめてから、ベアトリーチェの手を振りほどいた。

「何があっても僕についてきて」

「……わかった」

　答えたベアトリーチェの声は、ひそやかだが、決然としていた。これなら心配はいらないだろう。と思いたい。両側の建物は住居だし、道みち幅はばは狭せまいしで、こんな場所で使うのは本意ではないけれども、やむをえまい。マリアローズはベルトのホルダーに手を伸のばした。そのときだった。

　あの女が岩男を伴ともなって前に進み出てきた。

「仲間が世話になったようね」

　流りゅう暢ちような共通語だった。どこか淫いん靡びな響ひびきのある声音だ。それなのに、冷然としている。いや、その他ほかをはねのけるような冷たさが、逆に人を惹ひきつけるのか。

　マリアローズは女を見て、口を動かそうとした。

　何か言おうとしたのだ。

　どこを見ながら？

　目だ。

　女の両目の周りに施ほどこされた刺青に吸いよせられるように、マリアローズはその瞳ひとみを見て、そして──

「……な……こ……れ……」

　しぼんでゆく。

　自分の中の何かが、あるいはすべてが縮こまってゆき、女の黒々と光る瞳に吸いこまれる。

　何かが地面に倒たおれる音がした。ベアトリーチェか？

　だが、確かめることはできなかった。女の双そう眸ぼうから目を離はなすことができない。

　小さくなってゆく。自分が。

回りながら、削けずられてゆく。体が。感覚が。

消えてしまう、落ちる、底に、暗がりに、これは──

Omenage 897 9th revolution 8th day?

サンランド無統治王国首都エルデン?

“unknown”

chapter.6

# 閉じこめられて

──体の左半面がひどく冷たい。

　肩かたが軋きしむように痛み、何だか呼吸がしづらくて、とんでもなく無茶な体勢を強しいられているのかと疑った。

　意識がはっきりしてくるに従い、疑いは確信に変わって、自分が後ろ手に縛しばられ、足あし枷かせを嵌はめられて、猿さる轡ぐつわを噛かまされていると理解した。

　そんな格好で、石の床ゆかの上に横向きで寝ねているわけだ。

　ここはどこだろう？

　暗い。

　しかし、闇やみではない。明かりがある。落ちかかってくる、縞しま模も様ようの光──格こう子し窓か。

　何となく、最初からそんな気がしていた。

　要するに、格子窓がついた扉とびらのある部屋に閉じこめられているのだろう。かすかに異い臭しゅうがするのは、監かん禁きん用の部屋だからかもしれない。

　体の向きを変えると、ベアトリーチェが同じように横たわっていて、ほんのちょっとだけ安心した。ただ、薄うす明あかりの中で見た限りでは、呼吸はしているようだが、目を閉じているし、意識はまだないらしい。それもひっくるめて、安心している場合ではない。

　当たり前だ。

　いったい、何があったんだっけ？　なぜ、こんな場所に？

　まず、そこから考えなければならないはずだが、扉の向こうから複数の足音が聞こえてきて、それどころではなくなった。

　近づいてくる。

　止まった。

　鍵かぎを差しこみ、回す音がして、扉が開かれ、ぞろぞろと何人

か部屋の中へ入ってきた。

　マリアローズはとっさに瞼まぶたを緩ゆるく閉じて、眠ねむっているふりをした。顔は扉の方へ向けているから、薄目を開けて様子をうかがうことはできる。こうするのが最善だという自信はないが、生かしたまま閉じこめておくくらいだ。寝ていると思わせることができれば、いきなり殺されはしないだろう。

「殺さねーの？　これ」

　━━と、しょっぱなからマリアローズの希望的観測を打ち砕くだこうとしたのは、かなり背の低い、子供みたいな男だった。

　男は防寒着のような分厚いコートのフードを深々とかぶり、パンツ、ブーツ、グローブと、ずいぶん厚着だ。開け放たれた扉から射しこむ逆光ではよく見えないが、黄褐色オークル、濃紺色ネイビー、灰色の組み合わせとデザインに特とく徴ちようがある。

　シリアルキラー。

　間ま違ちがいない。あれはシリアルキラーの衣類だ。

「殺やっちまおーぜ。これカタッポ、ＺＯＯとかってヤツの一味だろ。オレァ、こいつらに手下、何人も食われてンだよ」

　だが、このおかしな抑よく揚ようの共通語は、まるで闇やみ市いちあたりの薬物ドラツグで頭がぶっ飛んだ若い連中みたいな喋しやべり方だ。龍りゆう州しゆう人ではないのか？　龍州人の集団と思おぼしきＳ＊Ｋとは関係ない？　もはや意識がないふりをするのも必死なマリアローズの疑問は、やがて氷解することになる。

「飛フエイ、何ヘイ故クー使シ共クオン通タン語ユー？　吾ウー難ナン解シエ倪ニー共クオン通タン語ユー」

　背の低い男にそう言ったのは、あのドレッドロックスの女だった。

　たぶん、フェイというのは背の低い男の名だろう。それにしても、フェイは本当に子供なのかもしれない。反論する前に、女に向かって顎あごを突つき出すようにして「イー」とやってみせた仕草などは、まったく餓が鬼きとしか思えない。

「うっせェンだよ。テメーらこそもーそンなショッペー言葉使うのヤメロ。それとも何、未練あンの？　バッカじゃねーの。もー戻もどれねーんだぜ。ここに根ェ下ろして一ひと旗はた揚あげるンじゃなかったのかよ。だったらここの言葉喋れ。喋れねーわけじゃねーだろ。そこまでクルッパーかよ、あン？　どーなンだよ媚妻メイルーサンよ？」

「馬ば鹿かにしないでちょうだい。共通語くらい喋れるわ。あんたよりずっとまともにね」

　メイルーと呼ばれた女は、あのときと同じ流りゆう暢ちような共通語で答えると、マリアローズをちらりと見た。

　あの魔ま性しようの目で、だ。

　マリアローズは一いつ瞬しゆん、緊きん張ちようしたが、今回は何も起こらなかった。

　目があっていないからだろうか──と、そこまで考えて、そういうことかと思った。秘密はメイルーの目か。ほとんど直感的な推理にすぎないけれども、おそらく当たりだろう。かつて東の原野の魔導王天てん正せい具ぐ象しようが、目で見たものを石に変える魔術を使ったという話は有名だ。メイルーも、それに類する魔術を身につけているに違いない。

　ちなみに、メイルーの隣となりには、やはりあの岩男がぴったりとくっついて立っている。

　これで三人。

　部屋に入ってきたのは四人で、もう一人いる。

　メイルーがその一人を横目で見た。

「とにかく、あたしは生かして利用すべきだと考える。だからこうしてとらえてきた。あんたの意見はどうなの、荊ジン」

　ジンと呼ばれた最後の男は、そうとう背が高く、横よこ幅はばはそれほどでもないため、ひょろ長い印象だった。

　顔も長く、黒い頭とう髪はつを逆立てて、色眼鏡サングラスをかけている。金色の龍が刺し繡しゆうされたファー付きの黒い皮ひ革

かく製のジャケットに、パンツとブーツといういでたちは、大食小路グラトン・アレイでＳ＊Ｋの助すけっ人とに出てきた黒ジャケットどもとほぼ同じだ。

　ということは、ジンは連中の関係者であり、もっといえば、少なくともその幹部か、ひょっとしたらリーダー格かもしれない。

　貧ひん民みん窟くつでの様子を考えあわせると、それはメイルーや岩男も同様だろう。彼ら二人は髑どく髏ろの龍州人たちの頭目といったところか。

　すると、ちょっと信じがたいが、子供みたいなフェイがＳ＊Ｋの親分？

　たとえば、龍州人のグループが三つあり、それらが連合していて、ここに各グループの首領が集つどっているとか？

　ジンが腹の底から空気を吐はき出すような低い声で言った。

「ＺＯＯだかはどうか知らん。だが、あの秩序の番人に人質など通じるのか」

「ンだろ？　ジンもそー思うよな？　殺っちゃおーぜ」

　フェイが手を叩たたかんばかりに喜んで呼応したが、ジンはそちらに顔を向けもしない。黒い色眼鏡サングラスに遮さえぎられ、視線の先はわからないけれども、どうもマリアローズをじっと見つめているようだ。

「殺すなら、ただ死なせるのもつまらんな」

　──それってどういう意味？

　マリアローズは思わず問い質ただしたくなったが、もちろん我が慢まんした。えてして、こういう何を考えているのかさっぱり読めない男ほど、人一倍、鬼き畜ちくで変態で残ざん虐ぎやくだったりするので、注意しなければならない。まあ、まな板の上の半魚人同然のこの状態では、注意してどうなるものでもないが。

　そう。

　あらためて、せつなくなってくる。

　今は冷静に状じよう況きようをうかがうしかないとはいえ、本当は暴れ出したい気分だ。

　予定では、今いま頃ごろ、この龍州人たちにどう対処するべきか、ＺＯＯの皆みなと話しあっているはずだったのに。それが、どうしてこんなことに？

　むろん、ベアトリーチェを助けず、買い物をさっさとすませて、動物園事務所に行っていれば、こうならなかった。それはまったくそのとおりだ。マリアローズも頭では理解している。

　だが、だったらあのとき、ベアトリーチェを見捨てればよかったのか。

　そうかもしれない。けれども、できなかった。

　なぜだ？

　──そんなこと、知るものか。

「殺すのはいつでもできるわ」

　メイルーが喉のどを鳴らしてひそやかに笑った。

「それに、これが男だったら、あたしもこんなことは言わない。女だからこそ、利用価値があるのよ」

「どーゆー意味だよ」

　不満げながらもフェイが食いついてくると、メイルーは心持ち顎あごを上げて目をすぼめた。

「わからない？　男ならまだしも、女を見捨てるのは聞こえが悪いでしょう。しかも、こんな子供みたいな娘むすめよ」

「関係あるかァ？　ンなこと」

「少し前、女め夜や叉しやとか呼ばれていた女の死体が晒さらしものにされたことがあってね。番人どもはずいぶん慌あわててその女の死体を回収したらしいわ。そもそも、女の番人が少ないのは、極力弱味を増やしたくないからじゃないかしら。男の考えることなんてそんなものよ」

「単に女アマァ邪じや魔まッけで面めん倒どうくせェからじゃねーの」

「何でもあんたとーいつ緒しよにしないことね」

「ンだとォ？」

　フェイがこれまた子供みたいに拳こぶしを握にぎって構えると、岩男がぬっと割って入ってきて、メイルーを庇かばうそぶりをみせた。岩男の背せ丈たけはジンと比べれば高くないが、横幅や厚みは凄すごい。フェイもそんな岩男とやりあう気にはなれないのか、面おも白しろくなさそうに舌打ちをして引き下がり、コートのポケットに両手を突つっこんでそっぽを向いてしまった。

「どっちにしても」

　ジンが短く息をつき、色眼鏡サングラスのブリッジを右手の中指で押し上げた。

「ＳｍＣと話をしてみる価値はあるということか」

　ＳｍＣ？

　マリアローズは突とつ然ぜんのことにやや戸と惑まどいを覚えた。どうしてここでその名前が出てくるのか。

　もしかして、彼ら龍州人たちが、あのＳｍＣと繋つながっている？

　考えられるいくつかの可能性について頭を巡めぐらせていると、メイルーがジンにうなずいてみせた。

「ええ。始末するのは、利用価値がないと決まってからでいい。前から言っているように、今、ＳｍＣと事を構えるのは得策じゃないとあたしは思う」

「だが、やつらに隷れい従じゆうするのも癪しやくだ」

「もちろんよ。手を組むとしても、彼らの傘さん下かに入るのではなく、対等の同盟という形でなければね。そのためには少し急ぐ必要があるわ。彼らがこちらを高く買っているうちに、話をまとめないと──」

「ンで」

　フェイが強く床ゆかを蹴けりつけ、メイルーの言葉を中断させた。その音が尋じん常じようではなかった。床に体をつけているマリアローズなどは、心臓が止まるかと思ったくらいだ。

　さすがに石の床が砕くだけたりはしていないようだが、もし、あんな力で容よう赦しやなく蹴られたら。

　想像もしたくない。

「その話とかってのォ勝手にまとめるためかよ。テメーがコソコソＳｍＣのクソ野郎モウフオと会ってやがンのはよ」

「……何のことかしら」

　メイルーが返事をするまで、一いつ瞬しゆんの間があった。その間が何を物語っているのか。だんだんと、マリアローズにも事情が呑のみこめてきた。

　つまり、いつの頃ころからかこのエルデンで一定の勢力を振ふるうようになった彼ら龍州人のグループは、現在、岐き路ろに立たされているのだろう。

　エルデン最大の悪党クラン・ＳｍＣと、手を結ぶか、否いなか。

　この件に関して、内部で意見の対立もある様子だ。おそらく、手を結ぼうと考えているのがメイルーで、反対しているのがフェイらしく、ジンはよくわからない。

　そして、彼らの間で何らかの合意がなされる前に、メイルーが隠かくれてＳｍＣと接せつ触しよくした。

　フェイが指し摘てきしたのは、たぶんそのことだと思われる。

「勘かん違ちがいしないで欲ほしいのだけど。確かに、あたしがＳｍＣのジェイと会ったのは事実よ。でも、ただ、ＳＩＸがもう一度会いたがっていると伝えられただけ。是ぜ非ひ、あたしたちと友人になりたいと言っているとね。もちろん、そのことは、あとであんたたちにも話そうと思っていたわ」

「方針が決まるまで、やつらと話はしねェってのが決定事じ項こう

だったはずだぜ」

「会って話をしただけよ。それとも、断ればよかったと言うの。彼らの機き嫌げんを損ねて、同盟の可能性を消してしまえばよかったとでも？」

「いっそ、そーしちまやァよかったんだよ。オレァ、あンな超最低ＳＵＣＫな屑くずどもとつるむなンざァ、端はなから気に食わねェンだ」

「その超最低ＳＵＣＫな屑が、あたしたちを簡単にひねり潰つぶせるだけの戦力を持っているのよ。気分でものを言わないでくれる？　あんた一人の気分で、あたしたちが背負っている同どう胞ほうの命を危険にさらすわけにはいかないわ」

「弱よわ腰ごしだなァ、妖ヤオ術シユー師シ！　テメーが発情雌犬フアキンシクワンみてェにケツ振ってやがるから、ヤツらに足あし許もと見られンだよ！」

「誰だれが発情雌犬フアキンシクワンだ、侏シウ儒ルー！　自分で母ムー語ユーを使うなと言ったくせに！」

「不プ呼フー吾ウー侏シウ儒ルー……！」

　そう叫さけんでメイルーに飛びかかろうとしたフェイを、岩男が遮さえぎった。いや、遮ったというより、阻はばんだといった方が正しいだろう。フェイが突き出してきた右拳を左手で払はらった岩男は、半身になって腰こしを落とし、右足を前に出した構えをとった。

「許フー殺シヤー彼ピ侏シウ儒ルー、呉戒ウージエ！」

　すかさずメイルーに命じられて、岩男──おそらく、ウージエという名なのだろう。ウージエが筋肉に鎧よろわれた体を滑すべらせるように前に進めた。フェイも黙だまっておらず、いったん飛び退しさってから、再度、攻せめに転じようとしたが、激げき突とつ寸前の両者を同時につかまえ、制止した者がいた。

「已イー其チ時シー戯フー哉ラー」

　ジンだ。

　右手でウージエの喉のど仏ぼとけを押さえ、左手でフェイの襟えり首くびをつかんだジンは、二人のちょうど真ん中に立っている。

　それにしても、今のはかなり素す早ばやかった。その前のウージエとフェイの短い立ち回りも迫はく力りよくがあったし、メイルーの魔ま術じゆつも恐おそろしい。龍州人たちのグループが総勢どれくらいいるのかは不明だが、彼らだけでも十分脅きよう威いになりうる。メイルーの話が真実だとすれば、ＳｍＣの方から彼らに同盟を持ちかけているようだけれども、それだけ評価が高いということだろう。

　しかし、ＳｍＣか。

　連中が近ちか頃ごろ、急速に勢力を拡大していることは、たぶんエルデン市民なら誰でも知っている。阿あ呆ほうどもが見せびらかして歩いている《ＳｍＣ》の焼印は、その象しよう徴ちようだ。

　龍州人たちを取りこもうという動きも、その一いつ環かんなのか。そこまでして戦力を拡かく充じゆうし、ＳｍＣは何を狙ねらっているのか。宿敵といってもいい秩序の番人を潰そうとでもいうのか。

　どうでもいいことだが。

　というか、そんな似非えせ大局的見地から物事を見ようとするのも、逃とう避ひの一種に違いない。

「身内で争うのは無益だ」

　ジンがウージエとフェイを解放し、また色眼鏡サングラスの位置を右手の中指で直した。

「飛フエイ燕ヤンが言ったとおり、俺たちはこの街に根を下ろす決意を固めた。齊キ・家チアが倒たおれでもしない限り、もう国には戻もどれないしな。母ムー語ユーを捨てるべきだという意見にも俺は賛成だ」

「話がわかるじゃねーか、荊ジン王ワン」

　得意げにそう言ったフェイを、ジンはやはり一いつ顧こだにしない。

「ただ、媚妻メイルーの考えも理解できる。俺たちの規模からすると、ＳｍＣはでかい。でかすぎる。やつらと同盟を結べるのなら、結んでおくべきだ。それに、断れば、やつらは俺たちに圧力をかけてくるだろう。そして、弱らせたところで、吸収しようとする。それがやつらの常じよう套とう手段だ。そうだろう、媚妻メイルー」

「ええ。だから、やつらから握あく手しゆを求めてきている間に、さっさと握にぎってしまった方がいいということよ。ついでに気の利きいた贈おくり物でもすれば、相手だって悪い気はしないでしょう」

　腕うで組ぐみをしたメイルーの横では、ウージエがゆっくりと喉のどをさすっている。

　ジンが色眼鏡サングラスをマリアローズに向けた。

「問題は、先方がこんなもので喜ぶかどうか、だが」

「何だったら、これからすぐに話を通して感かん触しよくを探さぐってみてもいいわ」

「使えるものは使うべきだな。機嫌をとっておけば、そのうち油断して背中を見せるようになるかもしれん」

「そう──そのときはそのときね」

「飛フエイ燕ヤンもそれで異存はないか」

「好きにしやがれ」

「決まりだ」

　ジンが短くそう言ったのを最後に、彼らは揃そろって部屋を出てゆき、再び扉とびらが閉められた。

　もちろん、そのあとすぐに鍵かぎもかけられ、四人の足音が遠ざかるにつれて、うんざりするような静せい寂じやくがそこらじゅうを満たしていった。そんな中、扉越ごしに感じるかすかな気配は、部屋には入ってこないで、鍵を開け閉めしたやつか。見張りが一人、近くにいるのだろう。

　だが、それがどうした？　だから何だというのか？

見張りがいようといまいと、同じだ。

これほど希望の持てない窮きゆう地ちに陥おちいったのは、いつ以来だろう。思いつかないということは、あるいは初めてか。

もう失望するのも落らく胆たんするのもたくさんだが、一応、確かめてみたところ、剣けんや背負い袋ぶくろはもちろん、ベルトや外がい套とう、籠こ手て、ブーツも奪うばわれている。この上、ボディスーツまで脱ぬがされていたら、自害の方法を探すしかなかったところだ。

とはいえ、頑がん丈じようそうな縄なわで、とうていほどけそうもないほど固く後ろ手に縛しばられ、両足首に木製の足あし枷かせを嵌はめられて固定され、猿さる轡ぐつわを嚙かまされている。自害に限らず、これでいったい何をどうしろと？

ベアトリーチェをちらりと見て、よく寝ていられるものだと思いながら、しかし、マリアローズはまだ諦あきらめきれていなかった。

もともと、往おう生じよう際ぎわの悪い方だ。ひょっとしたら、何か手立てがあるのではないか。見落としていることはないか。ここから脱だつ出しゆつするのは困難だとしても、今、できることは？

何にせよ、とにかく体の自由が利かなければ、どうしようもない。

まずは、手だ。

たとえば、肩かたの関節を外して手を後ろから前に──回そうにも、関節を外すなどという荒あら技わざは一度も試したことがない。第一、痛そうだという以上に、関節なんて簡単に外せるのか。どうやって？

では、他ほかの方法はどうだろう。マリアローズが使える、手品に毛も生えていない程度の初歩的な魔術で、何かできないか？

縄を燃やすとか。

手も火傷やけどするだろうが。

　それはまあ、我が慢まんするとして、我慢できるかどうか知らないが、どうにか耐たえるとしても、そもそも触しよく媒ばいがない。ベルトの小物入れには色々入っているのだけれども、当然、ここにはないわけで。

　あとは──そう、備えあれば憂うれいなし。

　こんなときのために、ブーツの底に仕込んでおいた小型の七つ道具が──あったのだが、そのブーツが脱がされていて、ここにはない。

　なかなか用心深い連中だ。しかし、さすがにこれには気づかなかったらしい。マリアローズは体をねじりつつ、縛られたままの手を伸のばして、ボディスーツの上じよう衣いをたくしあげ、下か衣いの上じよう端たんを探った。そこには触さわってようやくわかるくらいの切れこみがあり、指を突つっこむと、薄うすい輪状の物体が引っかかる。

　それに指を通し、そっと引き出した。

　結構、長い。

　平打ちの麵めんのような形状だが、むろん食べ物ではなく、紐ひもみたいに伸ばした超ちよう硬こう度どの極薄金属板の両端に輪をつけたものだ。

　ただ、後ろ手に縛られた状態では、これがあったところで、いかんともしがたい。一人では。

　幸いなことに、マリアローズは一人ではなかった。

「べんアんトんリんーーチェん」

　猿轡を嚙まされたままなので、何とも間ま抜ぬけな声になる。

　けれども、芋いも虫むしみたいに蠕ぜん動どうして近づいてゆき、何度も名を呼ぶうちに、ベアトリーチェが身じろぎして瞼まぶたがぴくりと動いた。

　もう一息だ。そう思い、肩のあたりに頭をこすりつけると、ようやくベアトリーチェがゆっくりと目を開けた。

「……お前んんん……うん━こんんこはん」

　何だか、かなりびっくりしているようだが、マリアローズにもちゃんと事情を説明してやるすべはない。落ち着けば、ベアトリーチェも自分たちが拉ら致ち監かん禁きんされていることくらいわかるだろう。

　それほど時間はかからなかった。



　少しの間、きょろきょろしたり、体をよじったりしていたベアトリーチェは、やがてマリアローズをじっと見つめ、すまなそうに眉まゆをひそめた。

　その両りよう眼めが潤うるんでいる。

泣いているのか。

いや、必死に涙なみだをこらえているのだろう。

確かに、泣いてどうなるものでもない。マリアローズは「あっちを向け」とベアトリーチェに言うつもりで、顎あごを動かしてみせた。ただちにとはゆかなかったが、意図は通じたようだ。ベアトリーチェがやや不ふ審しんげに体を反転させたのを見て、マリアローズもそっくり同じことをすると、二人は背中あわせで横になる格好になった。

問題はここからだ。

右手の人差し指を片かた端はしの輪に通した金属の紐を、後ろ手のまま、うまくベアトリーチェの両手首を縛っている縄に絡からませなければならない。その際、縛られた両手首と背中の間に通す必要があるわけだが、紐でベアトリーチェを傷つけてはいけないから、体勢を変えたり、自由にならない両手を限界一いつ杯ぱいまで動かしたりで、かなり苦労した。

もっとも、途と中ちゆうで、マリアローズが何をしようとしているのか、ベアトリーチェも察してくれたようだ。それでじっとしてくれていたのは助かった。

だが、そこまで何とか成功したあとも、今度は両端から紐を引っ張りつつ、小刻みに上下左右に動かし、縄を切断する作業がまだ残っている。というよりも、こちらの方が本命で、ずっと難度が高く、もっと根気と時間を要しそうで、果たして本当に切れるのか？

そんな疑いが首をもたげてきた頃ころ、マリアローズはふと、ベアトリーチェの様子がおかしいことに気づいた。

手を止め、首だけ振ふり返らせて見ると、ベアトリーチェは赤子のように体を丸めている。

それはいい。身を固くしているのもわかる。震ふるえているのも理解できなくはない。

ただ、時折、もぞもぞと主に下半身をくねらせるのは明らかに変だ。

変だけれども、マリアローズはすぐにぴんときた。そうか。

　季節柄がら、凍こごえるほど気温が低いわけではないが、石の床ゆかはえらく冷たい。高価なアンリミテッドＩＣＥのボディスーツのおかげか、マリアローズはさほどでもないけれども、これだと体温がどんどん奪うばわれてゆくだろう。体感的にはかなり寒いに違ちがいない。すると、必然的にそういったものがこみ上げてきてもおかしくない。

　──人間なら誰だれもさけられない生理現象、か。

　とはいうものの、それがわかったところで、どうする？

　この部屋には、あいにくトイレらしき設備はない。あったところで、こんな状態では使用できるかどうか。物理的な問題は措おいても、マリアローズが一つ部屋の中にいるわけだし。

　だったら、我慢してもらう？　できるのならそれもいいが、生理現象を相手にそれも酷こくな話だ。だいたい、いつまで我慢していればいいのか。頑がん張ばって耐え、こらえた挙句、殺されてしまうかもしれないのだ。

　マリアローズは体を反転させ、ベアトリーチェの肩かたを顎でつついた。

　びくりと全身を波打たせてから、慌あわてたようにこちらを向いたベアトリーチェは、よほど切せつ羽ぱ詰つまっているのだろう。顔に脂あぶら汗あせが浮うかんでいる。

「僕んん、後んんろん向んいんてんるんかんらん」

　もはや一刻を争うのではないかと思い、マリアローズは様々な躊ちゆう躇ちよを振り切ってそう言ったのだが、まさか一発で通じてしまうとは。

　しかも、せっかくの気き遣づかいが、膝ひざ蹴げりで報むくいられるなんて予想もしていなかった。

「ふんんざけんんるなん！」

「──痛んんっ、何んんすんるんんんだんよん、いんんきなんんり！」

　危うく鳩尾みぞおちに一いち撃げき食らうところだった。

　マリアローズは即そく座ざに抗こう議ぎしたが、ベアトリーチェは全然聞く耳を持ってくれない。矢や継つぎ早ばやに繰くり出される、凶きよう暴ぼうな膝蹴りに次ぐ爪つま先さき蹴り、さらにまた膝蹴り。縛しばられたり、嵌はめられたりしているマリアローズは、よけることも満足にできない。

　まあ、動きが制限されているのは、お互たがい様さまのはずなのだが。

「痛んんっ！　痛んん！　痛んんたっん！」

「こんんの、こんんの！　破ん廉んん恥ん漢んんめん！」

「やんんめ──やんんめっ！　やんんめてんつってんんば！」

「そんんんなんんことんんできんんるかん！　でんきんるんとん思んんうんかん！　でんんきるんんはずんんないんんだろん……！」

　マリアローズが床の上を転がって逃にげ、足が届かなくなると、ベアトリーチェはやっと暴れるのをやめた。それはいいが、さっきよりも状じよう況きようが悪化したようで、床に額を押しつけてうんうん唸うなり出す始末だ。まったく、何をやっているのだか。

　だいたい、急に、しかも、あんなに猛もう烈れつに動くから悪い。そんなことをして膀ぼう胱こうを刺し激げきすれば、余計したくなるに決まっている。それ以前に、恥はずかしがっている場合か。せっかく人が一いち縷るの望みに賭かけるべく、とりあえず両手を自由にしようと全力をつくしているときに、だ。

　恥ずかしい？

　皆みな、生き抜ぬくためには溝どぶ川がわを泳いで渡わたり、干し草にくるまって眠ねむり、脂羽蟲ゴキでさえ焼いて食らっている──いや、若じやつ干かん誇こ張ちようがあるかもしれないし、特に脂羽蟲ゴキだけは絶対に食べたくないが、とにかく、そのような世せ知ち辛がらい、壮そう絶ぜつな、寒風吹ふきすさぶ世の中で、だ。

　小便を垂れ流すくらい、どうだというのだ。むしろ、堂々と垂れ流してみせるのが、番人の心意気ではないのか。

　もちろん、マリアローズがベアトリーチェの立場だったら、はっ

きりいって、百パーセント、間違いなく、誰にはばかることもない。

　我が慢まんする。

　ああ、徹てつ底てい的に我慢するとも。

　少なくとも、死ぬまでは我慢する。

　他人ひと様さまの前でそんなことができるものか。できるはずがない。不可能だ。

　だから、正直、ベアトリーチェの気持ちはよくわかる。わかるだけに、持って行き場のない腹立ちとやるせなさがいっそうつのり、それらをぶつけるべき相手を探すうちに━見つけた。

　単純な理り屈くつではないか。どうしてこんなことがわからなかったのか。

　そもそも、悪いのはベアトリーチェか？

　責めるべき相手は、他ほかにいるのではないか？

　盗人ぬすつとに家宝を盗ぬすまれた者は、確かに不用心だったかもしれず、間ま抜ぬけかもしれない。だが、盗まれた方が悪いというのは所しよ詮せん、盗人側の論理だ。盗まれた方にしてみれば、盗人が悪いに決まっている。

　つまり、さらわれたマリアローズたちにしてみれば、さらった龍州人どもが圧あつ倒とう的に悪い。全部の責任はやつらが負わなければならない。必ず、絶対に、負わせるべきなのだ。

「開んんけろん！」

　マリアローズは扉とびらの前まで移動し、足あし枷かせによって固定された両足で、蹴けった。

　やや錆さびついた金属製の扉に、怒いかりをぶつけた。苛いら々いらをぶつけた。恨うらみをぶつけた。ありったけの非難をこめて、何回も蹴りを炸さく裂れつさせた。開けろ、と叫さけんだ。開けろ。開けろ。開けろ開けろ開けろ。今すぐ開けないと、即そつ刻こく、皆みな殺ごろす！

「黙モー哉ラー！　已起騒音イーチーサオイン！」

　そのうち、扉の向こうからそんな怒ど鳴なり声が聞こえてきたけれども、構うものか。無視して叫び、蹴りつづけると、相手も根負けしたのだろう。格こう子し窓から一人の龍州人が部屋の中をのぞきこんできて、鍵かぎを回す音がし、扉が開いた。

「うるさいよ。静しつかにするね。死にたいか」

　いかにも龍州人らしい共通語でそう言った男は、小こ柄がらだが俊しゆん敏びんそうで、例の黒ジャケットを着ている。東方系、とりわけ、龍州や凰おう州しゆうを含ふくむ熾しき帝てい国こくや顚てん聖せい虞ぐ以東の東部人は、年ねん齢れいがよくわからないが、たぶん三十歳にはなっていないだろう。右目の下に施ほどこされた菱ひし形がたの刺青いれずみが特とく徴ちよう的な、まだ若い男だ。

　マリアローズは、当然、菱形男の言葉に従うつもりなんてなかったが、さりとてどうするべきか。そもそも、何が目的でこんなことをしたのだったか。

　単なるヒステリーではない──そう、ベアトリーチェだ。ベアトリーチェをトイレへ連れて行けと、菱形男に頼たのむべきだ。頼む、だって？

「……………………」

　ともかく、目め力ぢからのみで頼んで、いや、脅きよう迫はくしてみたが、菱形男は首を傾かしげている。鈍にぶいやつだ。全然、わからないらしい。当たり前か。

　ちなみに、こう見えて、マリアローズは冷静だ。ちょっとばかり拘こう禁きん反応が出ただけで、もうすっかり平静を取り戻もどしている。自分ではそのつもりでいる。なので、視線をベアトリーチェに向け、菱形男が自力で事情を察するように仕向ける方法を思いついた。

　これが功を奏した。

　もたらされた結果は、最善とは言いがたかったが。

「そういうことね」

　菱形男は頬ほおを歪ゆがめて笑ってみせると、いったん部屋から出て、椅い子すを引きずりながらすぐに中へ戻ってきた。

　何をしようというのか。椅子を駆く使しして特とく殊しゆな拷ごう問もんでも始めようというのか。

　違ちがった。

　菱形男は、ただ椅子に腰こしかけただけだった。

　それだけでなく、大きく伸のびをしてみせ、ゆったりと足を開いてくつろいだ姿勢になり、にやにやしている。

「いい見世物ね。ゆっくり待つよ。恥はつかしかる女、見るの愉ゆ快かい。とても興奮する」

「──ッ……！」

　どうやら、まだ拘禁反応のヒステリーが消えていなかったらしい。マリアローズは発作的に頭に血が上って、菱形男が座っている椅子の脚あしに回し両足蹴りをかました。菱形男も油断していたのか、椅子ごと派手にすっ転び、その際、金属と金属の触ふれあう硬かたい音が響ひびいた。

　菱形男が腰に吊つっていた鍵束の音だ。

　鍵。

　それを目にし、その音を耳にした瞬しゆん間かん、マリアローズは他に何も考えられなくなった。考える必要もないと思った。

　無様に転てん倒とうした菱形男を、何とかする。そうすれば、道が開ける。逃げられるかどうかは知らない。ただ、何かが変わる。変わる可能性が出てくる。どうせ八方塞ふさがりの現状だ。失敗したところで、八方塞がりが十六方塞がりくらいになるだけだろう。

　マリアローズは自分のものとは思えない驚きよう異い的なバネを発揮して跳はね起き、菱形男に飛びかかった。今の状態でできることは限られているが、ベアトリーチェがいいことを教えてくれた。膝ひざだ。膝を食らうと、そうとう痛い。マリアローズは菱形男の顔面めがけて、両膝ダブルニー落としプレスを叩たたきこもうとした。

けれども、菱形男だって木偶でくの坊ぼうではない。マリアローズの膝は見事に━石の床ゆかを直ちよく撃げきし、間かん一いつ髪ぱつでこれをよけた菱形男は、龍州語の奇き声せいを発して反撃に転じた。それでなくとも、膝の周辺一帯が痺しびれた感じになっているマリアローズは、ほとんど無防備だ。そこに、体をかぶせるようにして放った左の回し蹴りを、首の右側面へと見み舞まうなんて。

思いやりがないというか、人類愛に欠けるというか。

マリアローズは一瞬、意識が飛んだ。

まだ永えい眠みんには早すぎるので、急いで戻ってきたが、そのときにはもう、自分の目線は床に近い位置まで落ちていて、腹部に超最低ＳＵＣＫな強打ブロウを何発か頂ちよう戴だいしたあとだった。

「━やんんめてんんくれん！　お願いだんんんんん、やんんめてん……！」

「退チユイ哉ラー！」

ベアトリーチェが菱形男の足にすりよろうとして、蹴り払はらわれたようだ。

菱形男はその間にも、狂くるったようにマリアローズの肩かたを、腹を、腿ももを踵かかとで踏ふみつけ、それでも気がすまないのか、今度は左手一本で真紅の髪かみの毛をつかみ、乱暴に引っ張り上げた。

「お前、目の玉抉えくり出たしてやるよ。これ、とてもとても痛い。暴あばれた罰ばつよ」

菱形男の表情や口調から判断しても、どうやら冗じよう談だんではなさそうだ。

やつの右手が、何かをつまむような指の形で近づいてくる。

まあ、こんなことになってもおかしくはなかったわけだが、さすがに勘かん弁べんして欲ほしい。

マリアローズは内心で菱形男を呪じゆ詛そしながら、やむをえず

目を閉じた。いくら何でも、ぱっちり目を開けたまま、そのときを待つ勇気はない。できれば、気絶しておきたかったくらいだ。陰いん湿しつそうな男だし、たとえ失神していても、きっちり覚かく醒せいさせてから眼球抉りを決行しかねないが、それにしても。

　──馬ば鹿かみたいだ。

　というか、正しよう真しん正しよう銘めい、馬鹿だ。

　番人の小こ娘むすめなんかに関かかわって。龍州人などに絡からまれて。つかまって。閉じこめられて。逃にげようとして。こんな目に遭あって。

　ＺＯＯに入ったときさえ、最終的にその決断を下した自分が信じられなかったくらいなのに。

　マリアローズは、ずっと一人だったからだ。

　もちろん、自分一人だけの力で、何もかもこなせるはずはない。図らずも、たまには誰だれかに助けてもらうこともあったし──たとえば、悪党に襲おそわれて死にかけていたところを、アジアンに救われたりとか。

　見も知らぬ他ほかの侵入者クラツカーの失策に巻きこまれ、異界生物フリークスどもに追い回されていたとき、アジアンがそいつらを始末してくれたりとか。

　コロナの馬鹿がメリクルの大群を呼びこみ、アドゴニーだのグレゴリーだのといった上位種まで出てきて、「もうダメ」という危機に、やはりアジアンが現れたりとか。

　何だか、こうして振ふり返ってみると、アジアンばっかりだが。

　いや、あの鬼き畜ちく変態自己陶酔ナルシ野郎ストだけでなく、初心者ニユービー侵入者クラツカーだった頃ころ、親切にしてくれた中年の侵入者クラツカーだっていたし──マリアローズの体目当てだったけれども、まあ、何とか撃げき退たいしてやった。

　他には、特注品オーダーメイドの籠こ手てを作ってくれたはぐれ機術士〝ショコラット〟も、マリアローズにいつも格安で品物を提供してくれる──のは、たまたまやつの弱味を握にぎっているからだ。

　要するに、ＺＯＯに加盟して仲間ができるまで、マリアローズはろくな人付き合いをしてこなかった。

　アジアンはあくまで一方的にマリアローズにつきまとっていただけだし、そう考えると、一部、利害を超ちよう越えつした関係を持ったのは、モリーくらいだろう。

　そんな自分が、だ。

　いったい何をやっているのか？

　まったくもって、自分らしくない。それとも、ベアトリーチェがモリーの子供だから？　しかし、順序が違う。その事実を知ったのは、ベアトリーチェをアサイラムに連れて行ったあとだ。

　──わかんないな、もお……。

　マリアローズは激痛に備えて猿さる轡ぐつわを思いきり嚙かんだが、菱ひし形がた男の指は瞼まぶたに軽く触ふれたところで止まった。

「何をしている」

　菱形男のものではない声だった。目を開けると、いつの間にか、菱形男の後ろに色眼鏡サングラスをかけた長身の男が立っていた。

　しかし、この男、まるで消えたり現れたりするかのように、存在感が著いちじるしく増減する。上背があるだけに、黙だまっていても目立つはずなのだが、よほど気配を消すのがうまいのか。

　ジンは感情をうかがわせない低い声で訊きいた。

「なぜ勝手に開けた」

「乎フ……耶イー……此シー猪チヤオ子スー発フア騒サオ音イン」

　菱形男がマリアローズを示し、言い訳めいたことを口にしている。きっと、何があっても扉とびらを開けるなと命じられていたのだろう。かなりうろたえているようだが、無言のジンを前にして、弁解は無む駄だだと悟さとったのか。菱形男はマリアローズの髪の毛から手を放して一歩下がり、左手で包んだ右拳こぶしを胸の前で上下に何度か振ってみせた。龍州人が謝罪するときの仕草だ。

「赦吾過誤シエウークオウー……赦シエ吾ウー、荊ジン王ワン」

「母ムー語ユーはよせ。お前もさっき外で飛フエイ燕ヤンが言ったことを聞いていただろう」

「是シー……あ、はい」

「そうか。俺たちの話に聞き耳を立てていたのか」

「い、いえ！」

「お前は賢かしこくないようだな」

　その一言がどのような意味を持つのか。菱形男はうなだれて、すっかり意気消しよう沈ちんしてしまった様子だが、ジンは気にするそぶりも見せない。

「何があった」

「は……は、はい」

　菱形男はベアトリーチェを一いち瞥べつしてから、マリアローズに視線を移した。

「あの女、トイレ行かせろと、つっと扉とぴら叩たたいて、うるさいかったものですから」

　さっきよりも共通語がたどたどしいのは、たぶん内心の動どう揺ようが影えい響きようしているのだろう。それでも即そく座ざに事情を理解したらしいジンは、考えこむこともなく、予想外の指示を下した。

「連れて行ってやれ。その間は手足を自由にしてやっても構わん。お前一人で不安なら、何人か使うがいい」

「──はい」

　菱形男も、一いつ瞬しゆんだけ虚きよをつかれたような顔をしたが、問い直したりはしなかった。おそらく、それは菱形男にとって正しい判断だった。菱形男に担かつがれるように持ち上げられたベアトリーチェも、差し迫せまっているためか、反はん抗こうする気力はないようだ。おとなしい荷物と化して運ばれてゆき、あとには

マリアローズとジンの二人だけが残された。

「さて」

　ジンはマリアローズの前にしゃがみこんだ。

「やつらが戻もどってくるまで、俺がお前を見張っているか。こんな役回りは久しぶりだな」

　相変わらず、その口くち振ぶりからも、表情からも、何を考えているのかさっぱりつかめない。龍州人だから、ではないだろう。岩男、呉戒ウージエは、見ていた限り一言も喋しゃべらなかったので別としても、子供みたいなフェイこと飛フエイ燕ヤンも、魔ま性しょうの目を持つ媚妻メイルーも、それ以外の龍州人たちも、どこか得体の知れないところはあるにせよ、所しょ詮せんは同じ人間だ。少なくとも、マリアローズにはそう思えた。

　けれども、このジン──荊ジン王ワンという男は違う。一いつ般ぱん的な人間とは、異なる仕組みで動いているかのようだ。行動に一いつ貫かん性が見み出いだせない。読めないのだ。どのような男なのか？

　だから、荊ジン王ワンが手を伸のばしてきて、あっという間にマリアローズの猿轡をほどいたのも、かなり唐とう突とつに感じた。

　しかも、それだけにとどまらず、荊ジン王ワンの右手の人差し指と親指が、いきなり口の中に侵入してきた。

「勘かん違ちがいするなよ」

　まるで口こう腔こうの形をなぞり、歯の数をかぞえているかのような指の動きだ。

「あの女は大事な人質だからな。お前は違う。どうしようと俺たちの自由だ」

　不覚にも、驚おどろきと恐きょう怖ふのあまり、マリアローズは身動き一つできなかった。

　そう、怖こわかった。

　この男を突つき動かしている論理が、欲求が、欲望が、理解でき

ない。そのことが何よりも恐おそろしく、おぞましい。

「いい歯並びだ。歯もきれいだな。この歯を一本一本抜ぬいてやろうか。歯をすべて抜いてどうすると思う」

　──知るものか。

　だが、声が出ない。喋ろうにも、無理だ。荊ジン王ワンの指がマリアローズの舌を挟はさんでいる。

「俺の国では女をそうやって道具にする。もちろん、どこでもやるわけじゃない。そういう店があって、俺は餓が鬼きの頃ころ、そこに女を卸おろす仕事をしていた。その店には世界中から客が集まってくる。当然、女どもは共通語もぺらぺらだ。俺もあいつらに教わった。上手うまいものだろう。ただ、あいつらは一見、とても美しいが、実は入れ歯でな。歯がないままだと、見映えが悪いからだ。それを外すと全員ばあさんみたいになる。他の遊あそび女めと違って、そんな女を身み請うけする物好きは滅めつ多たにいない。年を食って用済みになったら、お払はらい箱だ。捨てられる」

　荊ジン王ワンの指がゆっくりと移動していって、マリアローズの奥歯をつまんだ。

　一瞬だった。

　どうやったのかもわからない。

　何かが千切れる音がして、口の中にあたたかい液体が溢あふれ、石の床ゆかに小さな硬かたいものが落ちた。

　奥歯だった。

　荊ジン王ワンが引き抜いたのだ。

「──い……つぅ……」

「本当は鍼はりで痛覚を麻ま痺ひさせて、専用の道具を使う。だが、面めん倒どうなときや反抗的な女は、こうして一本一本抜いてやる。というのは名目だ。覚えると、こいつは癖くせになる。抜くときの感かん触しょくがいい女は、いとおしく思えるようになる。経験上、歯並びがよくて、しっかりした歯のやつがいい。お前は上玉だ」

「……僕、は……」

　マリアローズは荊ジン王ワンを睨にらみつけた。ようやく目が覚めた気分だ。何のことはない。こいつは単なる変態だ。そうだとわかってしまえば、怖くも何ともない。いや、ある意味、そうとう怖いが。

「女じゃない……！」

「そうか。だが、たいした問題じゃない」

　これっぽっちも動じないとは、筋金入りか。荊ジン王ワンは左手でマリアローズの顎あごを押さえ、右手をまた口の中に突っこんでこようとした。

　しかし、マリアローズとしても、これ以上、奥歯をくれてやるわけにはゆかないので、タイミングを見計らい、荊ジン王ワンの指を嚙かんだ。嚙み切るつもりで嚙んでやった。

「そうやって抵てい抗こうするやつもいた。そんなときはこうして──」

　ところが、荊ジン王ワンは落ち着き払っていた。慣れているのか。左手でマリアローズの首を絞しめるというよりも、太い血管があるあたりをピンポイントで押さえ、思わず力が緩ゆるんだ隙すきに、右手をさらに押しこんできた。

「こうする」

　今まで、自分の骨が折れる音は聞いたことがある。皮ひ膚ふが裂さけ、肉が切れる音も聞いた。どれも嫌いやな音だった。けれども、歯を抜かれる音はそれらに匹ひつ敵てきする。もしかしたら、それら以上かもしれない。

「──ぐう……あっ……」

　唇くちびるからこぼれた血液が床を濡ぬらした。結構な量だが、それよりも、歯は茎ぐきに錐きりでも打ちこまれているかのような痛みが強きよう烈れつだ。これなら反抗的な女もすぐに悔くい改め、従順な子羊になるだろう。泣いて許しを乞こうかもしれない。あるいは、絶望して舌を嚙もうとでもするか。

そのための歯を抜いてしまうわけだから、このやり口は本当にむごい。

「戻ってきたか」

もっとも、マリアローズには、自害するのに必要なぶんの歯は残された。

まあ、この程度で自死を選ぶほど軟なん弱じゃくではないつもりだが、二本目の奥歯を無造作に放り投げた荊ジン王ワンが立ち上がったときは、正直、かなり安あん堵どした。

「猿さる轡ぐつわを嚙ませておけ」

そう言い残して踵きびすを返した荊ジン王ワンと入れ代わりに、菱ひし形がた男がベアトリーチェを連れて部屋に入ってきた。連れて、と言っても、出ていったときと同じ、半ば抱かかえられるような格好だったが、ベアトリーチェはマリアローズを見るなり、菱形男を振ふり切って床に倒たおれこんできた。

「──お前んんん……！　何んんをんさんれんたん！　大丈夫かんんんんんん……！」

よくわからないが、たぶん、心配してくれているのだろう。菱形男は床を見回して肩かたをすくめ、荊ジン王ワンが外したマリアローズの猿轡を拾い上げようとしている。あれを再び嚙ませられるまでの間に、何かベアトリーチェに伝えておくべき言葉はないだろうか。

痛みやら出血やらで、少々ぼんやりした頭をひねった結果、一つだけあった。

「マリアローズ、だよ」

「……えん？」

「僕の、名前」

考えてみると、まだ教えていなかった。今さら名前など教えてどうなる。そう思わなくもないが、とっさにそれしか浮うかばなかったのだから、仕方ない。

「マんんリアん……ロんーーズん……」

「ああ……女の子みたいだ、とか──」

「何喋しやべってる」

　菱形男が薄うすく笑いながら、マリアローズにきつく猿轡を嚙ませた。

「ても、お前、運いいよ。たった二本てすんたね。けと、たぷん、あとてきっと全じえん部ぷやられるよ。覚かく悟こしておくいいね」

　余よ裕ゆうがあれば、「それは楽しみ」とでも返してやるところだが、残念ながら、奥歯のあった箇か所しよが猛もう烈れつに疼うずいてたまらない。そもそも、猿轡のせいで喋れないし、菱形男に殴なぐる蹴けるの暴行を加えられたところが、じわじわと痛みはじめてもいた。

　まったく、踏ふんだり蹴ったりだが、こんなものだろう。拉ら致ち監かん禁きんされて、ただですむはずがない。それこそ、ある程度、覚悟はできている。あとで全部やられる、だって？　上等だ。こっちの方から言ってやりたいくらいだ。

　──勘かん弁べんしてよ、もお……。

Omenage 897 9th revolution 9th day?

サンランド無統治王国首都エルデン?

“unknown”

chapter.7

# 別々の道

マリアローズは目をつぶって数をかぞえていた。

それは何かをじっと耐たえるときの癖くせのようなものだ。

正確ではないにしろ、だいたい一秒ごとに一ずつ、頭の中に描えがいた数字を増やしてゆく。百までいったら、一に戻もどる。もう全部で百三回、百までかぞえた。

おおよそだが、百七十一分あまり。三時間足らず。

頭から首にかけて、やわらかいものがあたっている。体を曲げたベアトリーチェが、ぴったりと身をよせているのだ。

ちょうど、ベアトリーチェの胸がマリアローズの枕まくらになっているような体勢で、何でこんなふうになったのだったか──そう、菱形男が扉とびらを閉めたあとすぐに、ベアトリーチェが涙なみだを流しながら、床ゆかに頭を打ちつけはじめた。「すまない」とか、「ごめん」とか、謝罪の言葉も口にしていたと思う。

けれども、気持ちは理解できるが、そんなことしてどうなるわけでもない。

マリアローズが首を振ってやめさせると、ベアトリーチェは今みたいな体勢になって、繰くり返し、繰り返し、まじないのように何か唱え出したのだった。

「んんんん、んんんん、んんんんん」

当然、最初はただ唸うなっているようにしか聞こえなかった。

何度目だろう。ふと気づいた。

「いたいの、いたいの、とんでいけ」

ベアトリーチェは、節をつけてそう言っていたのだ。

思い返せば、マリアローズの母も、小さな怪け我がをしたとき、そうやって慰なぐさめてくれたものだった。

他人を疑うことを知らず、裏切られても、傷つけられても、決して望みを捨てず、笑え顔がおを忘れなかったのに、結局、愛した夫を失い、茫ぼう然ぜん自じ失しつのまま悪漢どもに嬲なぶられて、

ついには殺された母──お母さん。

　何だか、余計なことまで思い出してしまいそうだった。

　だから、マリアローズは固く目を閉じた。

　数をかぞえた。

　いつの間にか、ベアトリーチェの声は途と切ぎれがちになり、やがて止やんで、彼女のぬくもりだけが伝わってきた。

　あたたかかった。

　そして、百まで百四回、それから六十三までかぞえたときだ。

　遠くから話し声が聞こえてきた。足音もだ。複数。どこかで聞いた覚えのある声が混じっているような気もした。あれは、誰だれだったか？

　考えている間に、見張りの菱ひし形がた男が何か言い、扉に鍵かぎを差しこんで回した。

　扉が開いた。

「あら、仲がいいのね」

　まず最初に部屋へ入ってきたのは、媚妻メイルーと呉戒ウージエの二人組だった。

　魔ま性しようの目の周りに奇き怪かいな刺青いれずみを施ほどこした媚妻メイルーは、右手に持った小型の携けい帯たい用灯火器で、部屋の中というより、マリアローズとベアトリーチェを照らしている。足の先から頭の先、脳まで筋肉でできているのではないかと思える呉戒ウージエは、媚妻メイルーにぴったりと寄り添そう彫ちよう像ぞうのようだ。

　そこまでは、まあ、いい。

　二人に続いて入ってきた三人目についても、見知らぬ男だし、只ただ者ものではなさそうだという印象以外は、別にどうでもよかった。

問題は四人目だ。

マリアローズは棘闇ソーンダークの黒衣に身を包んだその男を知っていた。

だが、顔をあわせるのは、結構、久しぶりだ。もう二巡じゆん月げつ以上、会っていない。その前は、事あるごとにどこからともなく現れて、煩わずらわしくて仕方なかったくらいなのに、突とつ然ぜん、姿を見せなくなった。

最後に言葉を交かわしたのは──Ｄ７の出入口付近で、不覚にもＳｍＣの集団に襲おそわれて殺されかけたときだ。やつに危ういところを助けられたのは、あれで何回目だろう。

そう、助けてもらったのだ。

それなのに、ちょっと色々あった時期で、かなりひどいことを言ってしまった。

あまりちゃんと覚えてはいないのだが、おそらく──気持ち悪いとか。もうたくさんだとか。顔も見たくないとか。放っておいてくれとか。

もともと、男のくせに、マリアローズに抱だきついてきたり、口説いてきたり、求愛してきたり、そうとう迷めい惑わくなやつではあった。

とはいえ、さすがにあれは少し言いすぎだったかもしれない。しかし、そのせいでマリアローズの前に姿を現さなくなったなんて、どうもやつらしくない。実際、あの直後、鉄てつ鎖さの憩いこい場でやつを見かけた。他ほかにもいくつか気になることがあって、やつの事情なんか知ったことではないが、どうしたんだろう、と考えることくらいはたまにあった。

──アジアン。

どうしてアジアンがここへ？

まさか、以前のように、絶体絶命の危機に陥おちいったマリアローズを、恩着せがましく助けにきたとか？

いや、それにしては様子が変だ。アジアンは口くち許もとにこそ

笑みを浮うかべているが、実に冷たい、氷のような薄うす青あおい瞳ひとみでマリアローズとベアトリーチェを一いち瞥べつしたきりだった。人というより、物を見るような、まったく関心も興味もない、そんな目つきだ。

　マリアローズ自身、意外だったのだが、なぜかこれが結構、こたえた。

　それはないだろ、と思ってしまった自分がいて、すぐさま打ち消し、だが──どういうわけだろう？

　つまり、一番大きいのは、驚きよう愕がくではない。心に受けた衝しよう撃げきでもない。

　不ふ審しんだった。

「あっちの女か」

　目を瞠みはっているマリアローズをよそに、三番目の男が媚妻メイルーに尋たずねた。

　体にフィットしたストライプ柄がらのスーツを着こなし、灰色の髪かみの毛を後ろに撫なでつけて整せい髪はつ料で固めた彼は、一見、うまく伊達だて男を装よそおっているように見える。

　だが、頭髪と同じ色の瞳に宿る光が鋭するどすぎる。鉤かぎ鼻ばなは禍まが々まがしく、あくまで薄うすい唇くちびるはいかにも冷血そうだ。餓うえきった肉食獣じゆうのように頬ほおがこけていて、全体的な顔立ちは狩かりに長たけた老ろう獪かいな鷲わしを思わせる。

　いや、それ以上にもっと直接的で、しっくりくる言葉がとっさに思い浮かんだ。

　人でなし。

　初対面の人間にそんな印象を抱いだかせるのには、きっとそれ相応の原因があるに違ちがいない。

「普ふ通つうの小こ娘むすめにしか見えないが」

　そう言って顎あごに手をあててわずかに首を傾かしげた人でなし

に、媚妻メイルーがモトロール刀の鍔つばと思おぼしきものを見せた。

「この娘が持っていた剣けんの鍔よ。今、着ているブラウスにも、純ピュア血・ブラのツド・司祭プリーストの紋もん章しようが刺し繍しゆうしてあるわ。確かく認にんする？」

「その必要はなさそうだな」

　人でなしは媚妻メイルーに軽くうなずいてみせると、品定めでもするようにマリアローズを見た。

「こっちは」

「そちらは別口。お望みなら差し上げてもいいけど」

「せっかくだが、俺は熟うれた女が好みでね。貴様はどうだ」

　人でなしに話を振ふられたアジアンは、マリアローズを見もせずに肩かたをすくめた。

「ボクもいらない。恵めぐんでもらうほど不自由はしていないヨ」

「貴様は無む駄だに女にもてそうだものな、アジアン」

「そうでもないサ、ジェイ。間違いなくキミよりは女好きのする顔だろうが、比ひ較かく対象のレベルが低すぎて、あまり自じ慢まんになりそうもない」

　ジェイ──って、あのジェイ……？

　しかし、何だろう、この二人の会話は。

　互たがいに名前を呼びあって、軽口を叩たたいているようにも聞こえるが、どこか毒がある。

　だいたい、マリアローズの記き憶おく違いでなければ、ジェイといったら、かなり名の通った人物ではないのか。まあ、媚妻メイルーや飛フエイ燕ヤン、荊ジン王ワンの会話から、ジェイがここにいるのは驚おどろくに値あたいしないというか、まだ納なつ得とくできるとしても、なぜアジアンが一いつ緒しよに？

ＳｍＣ□□加サデイ虐ステイ的ツク・殺戮マーダーズ・愛好会クラブの実質的なナンバー２だというジェイと、アジアンなんかがどうして？

「とりあえず、番人の女はもらっていく」

ジェイがそう告げると、アジアンが進み出てきて、ベアトリーチェに近づいてきた。

ということは、必然的にマリアローズにも接近することになる。

というか、ベアトリーチェはマリアローズにくっついているのだから、ほぼ接せつ触しよくに近い。

アジアンは、だが、やはりマリアローズなど眼中にないようだった。何か叫さけびながら暴れるベアトリーチェを軽々と持ち上げ、さっさと部屋から出てゆくまで、顔色一つ変えず、マリアローズの方へ視線を向けることもしなかった。

その態度は、売られてゆく子牛みたいに、最後までずっとマリアローズを見つめていたベアトリーチェとは正反対だ。

そして、連れられていったベアトリーチェより、そんなアジアンが気になっている自分もどうかと思う。

いずれにせよ、アジアンに続いてジェイや媚妻メイルーと呉戒ウージエも部屋から出てゆき、またまた鍵かぎを閉められると、何というか、これはもう、とどめを刺さされた気分だった。

だって、ベアトリーチェはあっさりとＳｍＣに引き渡わたされてしまい、マリアローズは一人になり、よくわからないけれども、アジアンがＳｍＣの片棒を担かついでいる。

ＳｍＣといえば、敵か味方かで色分けするとしたら、完全に敵だ。

マリアローズはやつらに殺されそうになったこともあるし──そのとき、アジアンに救われたわけだが。

そうだ。

あのとき、Ｄ７地中砦とりでアヴァシーの出入口付近で、確かア

ジアンは、マリアローズを痛めつけ、辱はずかしめようとしていたＳｍＣを、殺した。

　それなのに、どうしてＳｍＣのナンバー２と行動をともにし、荷物持ちみたいな真似まねを？

　むろん、考えたところで、わかるはずもない。きっと裏面に何か複雑な状じよう況きようがあって、理由があり、こうなったのだろう。そう推測するのが関の山で、具体的なことは何一つ思いつかない。

　何せ、マリアローズは知らないのだ。

　実際のところ、アジアンとはどのような人間なのか。たとえば、昼飯時ランチタイムというクランの頭領マスターで、一年以上前に偶ぐう然ぜん、助けたマリアローズをなぜか気に入ったらしく、つきまとい、追い回して、とてつもなくしつこくて、それで？

　それだけだ。

　マリアローズは、アジアンの出身も知らない。素す性じようを知らない。経歴を知らない。なぜ、彼が虐殺人形カーネイジ・ドールと呼ばれているのかも、昼飯時ランチタイムについても、風聞以上のことは知らない。年ねん齢れいすら知らない。

　もしかしたら、あの一年は夢か幻まぼろしだったのではないか。

　実は、アジアンと知りあってなんかいなくて、見知らぬ他人同士なのではないか。

　アジアンは、本当にマリアローズのことなど知らないのかもしれない。

　そんなふうにさえ思える。

　少なくとも、そう考えても、辻つじ褄つまがあわないことはない。

　いや、いくら何でもそんなことはないか。マリアローズがアジアンを覚えているという事実は消せないし、ＺＯＯに入ることになったのも、トマトクンがやつの変態行こう為いを止めたのがそもそものきっかけだったのだ。

まあ、そうはいっても、別にアジアンをあてにしていたわけではない。アジアンに限らず、この状況で誰だれかに何かを期待するほど、マリアローズはお気楽な楽天家ではなかった。

せめて、マリアローズがとらわれたことに、ＺＯＯの面々が気づいてくれたら──しかし、それも無理な話だ。よしんば、マリアローズが動物園事務所に顔を出さないことを誰かがあやしんだにせよ、まさか龍りゅう州しゆう人たちに拉ら致ちされたとは思わないだろう。

要するに、マリアローズの未来はほぼ確定しているのだ。

そのうち荊ジン王ワンがやってきて、歯を抜ぬかれ、それから道具として使われる。どう使うのかまでは想像したくない。とにかく屈くつ辱じよく的な扱あつかいを受けて、その状態がどれくらい続くのかは不明だが、いずれは始末されるものと考えておいた方がいいだろう。

ひょっとしたら、どこかのタイミングで逃にげる機会があるかもしれない。

だが、今はそんなあやふやな可能性で、自分を励はげます気にはなれない。

──ベアトリーチェ。

いなくなってから、思い知らされるなんて。

一人ではなかったことが、どれだけ心強かったか。

猿さる轡ぐつわを噛かまされていたせいで、満足に話もできなかったけれども、いるだけで違ちがった。

ベアトリーチェのぬくもりが不安をやわらげてくれていた。絶望を忘れさせた。こうしてベアトリーチェがいなくなってみると、黙だまって数をかぞえることすらできない。

それでも時間は流れてゆく。

気が狂くるいそうだ。

いったい、いつまでこうしていればいいのか？

　あれから何秒経たった？　何分？　何時間？　ベアトリーチェがいなくなってから、一人きりでどれくらい？

　寒い。

　ボディスーツが床ゆかの冷たさを遮さえぎってくれているはずなのに、凄すさまじく、寒い。

　石。石の床。壁かべ。鍵をかけられた金属の扉とびら。壊こわしてしまいたい。壊すことなんかできない。わかっている。わかっているが、ダメだ。耐たえられない。痛い。出して欲ほしい。苦しい。ここから出たい。出たい。出して。お願いだから。頼たのむから。

　ああ──もう、泣きたくなってきた。

　泣いてしまおうか。

　何かがこみ上げてきて、溢あふれ出す寸前だった。

　耳慣れない小さな音がした。

　それは、吸いこまれるような、吐はき出されるような、湿しめり気のある、唇くちびるをすぼめたときのような、しかし、それらとは決定的に違う音だった。たぶん、その現象においてしか発せられない音に違いなかった。

　マリアローズは扉に近い方の部屋の隅すみへ顔を向けた。

　そこに、徐じょ々じょに、浮うき出るように、あるものが出現しつつあった。

　人だ。

　女性だった。

　彼女は胸むな元もとが大きく開いた蠱こ惑わく的なデザインの服を着て、腰こしに一目で値打ち物とわかる剣けんを吊つっている。ぷっくりした唇は魅惑的セクシーだが、垂れ気味の目はそれほど大きくない。やたらと胸が強調されているけれども、体つきはわりと細身だ。背も低くなくて、踵かかとの高い靴くつのぶんを差し引いても、マリアローズより上背があるだろう。

　年齢は、いくつくらいだろう。全体のアンバランスさが個性的な魅み力りよくになっていて、かなり人目を引きそうな女性だが、十代にも見え、もっと年上にも見える。

　ただ、一つだけ確実なことがある。



それは、彼女が魔ま術じゆつ士しだということだ。

マリアローズは専門家ではないので、明言はできないが、おそらく彼女はある場所とある場所を繋つなげて移動してきたのだろう。そんな芸当は、かなり強力な魔術の使い手でなければできないはずだ。

何しろ、かつて恐怖のドレッド操り手スターと呼ばれた魔術士たちの頂点に君臨していた古いにしえの魔ま導どう王おうですら、玉座から寝しん室しつまで歩いて移動したという。

その有名なエピソードは、魔術によるいわゆる瞬間移動テレポートが、いかに困難かを物語っている。

「しぃ」

そんな大おお技わざをいきなり披ひ露ろうして現れた女魔術士は、完全に現れるなり、右手の人差し指を唇にあててみせた。静かに、という意味か。

マリアローズが半分呆あつ気けにとられたままうなずくと、彼女は両手に抱かかえていた荷物を床に置いた。そういえば、出現の仕方に気をとられていて注意が向かなかったが、ずいぶん色々なものを彼女は持ってきた。それは、一つではない。いくつかある。しかも、全部、見覚えのあるものばかりだった。

というよりも—外がい套とうにくるんだ、籠こ手て、偽にせ劫ごう火か、それにベルト、ブーツ、背負い袋ぶくろまで。

すべて、失神している間に奪うばわれたはずのマリアローズの装備だった。

「……どんんう、いんんう……」

「しぃ」

女魔術士は再び唇に指をあててマリアローズを黙らせ、衣きぬ擦ずれの音も立てずに近づいてきて屈かがみこみ、床に手をついた。

甘い、いい香かおりがする。

サフィニアのような、触しよく媒ばいやら秘薬やらの匂においと

は違う。香こう水すいでもつけているのか。

「いい、あたしの言うことをよく聞いて」

　女魔術士の唇は、マリアローズの耳にほとんど触ふれかけていた。

　彼女が囁ささやきはじめる前にぞくりとしたのは、唇を舐なめて湿らせた舌が、耳たぶをかすめたからか。

「そのうちあなたの仲間が助けに来るわ。今、手足を自由にしてあげるから、あなたは身み支じ度たくを調えてそのときを待ちなさい。あと、あたしが誰だれかとか、何のためにこんなことをしてるのかとか、詮せん索さくは一いつ切さいしないで。わかった？」

　仲間とは、ＺＯＯの皆みなのことだろうか。ある意味、彼女の登場以上に唐とう突とつな話だが、マリアローズにしてみれば、願ってもない申し出だ。逆に、あまりにもうますぎて、罠わなではないかと勘かん繰ぐりたくなる。

「疑いたくなる気持ちはわかるけど──」

　マリアローズが首を縦に振ふるのを躊躇ためらっていると、女魔術士は腰に下げた物入れから何かを取り出した。

「滌Ｆｙ坤Ｌｙ觀」

　音の感じからして、たぶん上ハイ古ロ高メ位オ語ンの呪じゆ文もんだろう。要素魔術らしいけれども、妙みようだ。女魔術士が特殊なチヤネ精神集中リングをした気配はまったくない。それにも拘かかわらず、弾はじけるような音とともに、マリアローズの両手と両足が、突とつ然ぜん、自由になった。

　瞬間、仄ほのかな光が生まれ、マリアローズと女魔術士の髪かみや着衣がふわりと揺ゆれたので、たぶん魔術が発動したのだとは思うのだが。

　たとえ、さして難度の高くない魔術だったとしても、特殊なチヤネ精神集中リングなしで使うなんて、現代魔術士の水準レベルではない。その昔、一部の魔導王は、精神集中や呪文や呪式を用いずに魔術を完成させたというが、そうした大いなる技法はすでに失われて久しいと聞く。

　では、彼女が今、やってみせたのは？

「あたしは、ただ頼たのまれたことを、頼まれたとおりにやっているだけだから」

　女魔術士はマリアローズの耳みみ許もとで短くため息をついた。その息がかかって、少しくすぐったかったが、そんなことで身をよじっている場合ではないだろう。

「……ま、あいつの我わが儘ままは今に始まったことじゃないし、あんな男でも、一応、あたしたちのボスだしね。とにかく、あたしが頼まれたのはここまでよ。あとは、あなたの好きにするといい」

「あんんの」

　マリアローズは思わずまた声を出してしまい、慌あわててその先の言葉を呑のみこんだ。

　けれども、女魔術士に尋たずねたかったのだ。

　あいつ。あの男。ボス。頼まれた。

　彼女に頼んだのは誰なのか？

　結局、訊きけずじまいだった。

「じゃあね、薔薇マリアのマローリアズ」

　女魔ま術じゆつ士しは最後にそれだけ言うと、マリアローズから体を離はなして立ち上がった。そして、腰こしに吊つった剣けんの柄つかに左手をかけ、空中に何かばら撒まきながら右手を舞まうように踊おどらせつつ、早口で何事か唱えると──薄うすれてゆく。

　彼女の姿が。

　存在が。

　見る見るうちに消えてしまった。

　かすかに残されたのは、あの香りだけだった。

　甘くて、それでいて甘ったるくはなく、後口はさっぱりしていて、けれども、一度嗅かいだら忘れないような香りだけが。

それにしても、彼女は何者なのか。誰が彼女を動かしたのか。本当に、ＺＯＯの皆はここに来るのか。来るのだとしたら、誰かが情報をもたらしたのか。あいつ。あの男。誰だ？　やはり、やつか。考えられる範はん囲いでは、やつとしか思えないが、それよりも今は優先すべき作業がある。

──でも、あの女の人。

マリアローズは口の奥を苛さいなむ疼とう痛つうに顔をしかめつつ、手始めに猿さる轡ぐつわをほどいて、ブーツを履はきながら思った。

あの胸。

大きく見せようとして、かなり強ごう引いんによせて上げていた。

「……やっぱり、大きい方がいいとか思うのかな。モリーは肩かたが凝こって仕方ないとか、ぐちぐち言ってたけど。実際、前に肩かた揉もみさせられたとき、そうとう凝ってたし、モリー……」

かなりどうでもいいことだが。

ひそやかな独り言とはいえ、無む駄だ口ぐちを叩たたけるのは、多少、希望と余よ裕ゆうが出てきた証しよう拠こだろう。

ただ、連れ去られてしまったベアトリーチェのことが脳のう裏りをよぎると、胸が締しめつけられたように苦しくなって、吐はき気すら覚える。こんなことを言えた義理ではないが、マリアローズを助けてくれるつもりがあるなら、どうしてベアトリーチェも一いつ緒しよに救ってくれなかったのか。正体が確定したわけでもない相手に、胸の裡うらでつい不満をぶつけてしまいたくなる。

ベアトリーチェはどうしているだろう。

どうなるのだろう。

マリアローズはそんなことばかり考えながら、格こう子し窓から見えない位置で籠こ手てを装着し、ベルトと外がい套とうを身につけた。市場で買いこんだハーレム・ゴードンやＰ９ドウター＋の材料は軽いし、それらをつめた背負い袋ぶくろ自体、もともと軽量なので、背負っても動作が妨さまたげられることはない。愛用の剣、

偽にせ劫ごう火かは、腰に吊つるしてがちゃつくといけないから、さしあたり左手で持っておくことにした。

　それから、忘れてはいけないのが、奥歯だ。

　荊ジン王ワンに抜ぬかれた奥歯は、二本ともきっちり回収し、布に包んでベルトの小物入れに収めておいた。完全に失われてしまった骨や肉、歯などを再生するのは、モリー級クラスの医術士でも大変なのだが、現物さえあれば、わりと簡単にくっつけてもらえる。

　むろん、無事に脱だつ出しゆつできたらの話だが。

「──よし」

　準備を終えると、ベアトリーチェのことはともかく、気合いも充じゆう実じつしてきた。

　何だか、単独で脱出できてしまいそうな気さえする。もちろん、気のせいに違ちがいないが、爆弾もあるし、籠手の矢も使える。仮に、ＺＯＯの皆みなが救助に来てくれなくても、荊ジン王ワンに歯を抜かれる前に一いつ矢し報むくいることくらいはできるだろう。

　が、焦あせって動く必要はない。女魔術士は「そのうち」という表現を使った。一向に何も起こる様子がなければ別の方策を探すとしても、しばらくこのまま待った方がよさそうだ。

　マリアローズは扉とびらがある側の壁かべに身をよせて、じっと耳を澄すまし、ひたすら待った。

　ベアトリーチェのことは、悪いが、今は忘れなければならない。

　数をかぞえる。

　一。二。三。四。五。六……二十三。二十四。二十五……五十七、五十八……九十九。百。

　一。二。三──

　そうして、百まで四十二回、かぞえ終えたときだった。

　鳥とり肌はだが立った。

音が聞こえる。

声だ。龍州語。龍州訛なまりの共通語。共通語。悲鳴。怒ど号ごう。それと、何かがぶつかりあう音。金属音。剣けん戟げきの音か。色々な音がする。にわかに壁の向こうが騒さわがしくなった。ついに異変が起こったのだ。

「敵テイ襲シー！　敵テイ襲シー！」

「何ヘイ汝ルー敵テイ！　報パオ荊ジン王ワン！」

「已イー遁トン走ツオ、闘トウ哉ラー！　殺シヤーハパー裂リエ！」

聞こえてくる龍州語の叫さけびの意味も、何となくだが、見当がつく。敵だ、荊ジン王ワンを呼べ、敵を倒たおせ、とか、だいたいそんな感じだろう。

果たして、その敵とは何者なのか。

マリアローズとしては、当然、女魔術士の言葉を信用して、ＺＯＯの皆だと思いたい。

しかし、断定するのはまだ早い。主観はできるだけ排はい除じよして、明確な事実だけをもとに判断を下すべきだ。

すなわち、マリアローズは外から鍵かぎをかけられた部屋の中に一人でいる。前に扉が開いたとき、廊ろう下かが見えた。まあ、当たり前だが、何らかの建物の中なのだろう。建物の所在は不明だ。複数人、それも三人や四人ではきかない数の声が聞こえるから、この建物の中には結構な人数の龍州人がいると思われる。

そこを、誰だれかが、少なくとも現時点では龍州人の敵である何者かが、襲しゆう撃げきしている。

音は──龍州人と襲撃者の戦いは、だんだん近づいてきている。

見張りの菱ひし形がた男が龍州語で何か叫んだ。足音がする。遠ざかってゆく。見張りがいなくなった？　マリアローズがとるべき行動は？

まず、外の様子をこの目で確かめたい。菱形男はどこかへ行って

しまったようなので、格子窓から顔を出しても、さして危険はないだろう。

　マリアローズは中ちゆう腰ごしの姿勢で壁を伝うように移動し、扉の手前まで来た。そこで立ち上がり、直立したマリアローズのちょうど額あたりの高さにある小さな格子窓から外を見ようと、少しだけ背せ伸のびをした。

　何かが格子窓から射しこむ光を遮さえぎった。

　爪つま先さき立ちになったマリアローズの目に映ったのは、色眼鏡サングラスだった。

「……なぜ動き回っている」

「そっちこそ──何でここに？」

　荊ジン王ワン。

　マリアローズはすぐさま飛び退のいて、床ゆかに尻しり餅もちをついた。荊ジン王ワンが格子窓越ごしに指を伸のばしてきたからだ。何のつもりか知らないけれども、かなり危険な感じがした。もしかして、目を突つこうとでもしたのか。

「勝手に持ち場から離はなれるとはな。あの男は本当に愚おろかなようだ」

　背の高い荊ジン王ワンは、少し屈かがんで格子窓から部屋の中をのぞいていたのだろう。すでに、マリアローズが見上げた格子窓に荊ジン王ワンの色眼鏡サングラスはなく、やつの細長い指が格子に食いこまんばかりに絡からみついている。

「ここを開けようにも、鍵はやつが持っている。親キン鍵ジアンは媚妻メイルーか。飛フエイ燕ヤンだったか。どっちにしても、俺じゃない。だいたい、襲撃してきたのは誰だ。おい、お前。まさか、お前の仲間か」

　口調こそ平静なのだが、荊ジン王ワンは立てつづけに扉を蹴け飛とばしたり、無意味に格子を握にぎったりなど、かなり動どう揺ようしているらしい。

　やつに奥歯を抜かれたマリアローズにしてみれば、正直、いい気

味だ。いい気味ついでに、一つ悪戯いたずらを思いついた。なかなかタチの悪い悪戯だが、相手もそうとうタチが悪いから、これっぽっちも心は痛まない。痛むどころか、成功したときのことを考えると、心が浮うき立ってくるくらいだ。

　マリアローズはベルトのホルダーから爆弾を一本、抜きとった。二、三本、一気に使ってもいいが、もったいないし、複数本だと手て許もとが狂くるうかもしれない。下手をすると、自分が被ひ害がいを受けかねないので、ここは慎しん重ちようを期すべきだろう。

「ねえ、いいことを教えてあげようか」

　マリアローズがそう言うと、荊ジン王ワンの指がぴくりと動いた。

「何だ」

　荊ジン王ワンは再び格子窓のところへ顔を持ってきた。

「手品の種でもばらすつもりか」

「悪いけど、それは無理」

　手品を使ったのは、マリアローズではないし。

　その代わりといっては何だが、マリアローズは爆ばく弾だんを持った右手の籠こ手てを格子窓に向けた。

　たいして狙ねらいもつけずに、撃うった。

　とっさに格子窓から顔を離してこれをよけた荊ジン王ワンは、まったくいい勘かんをしている。たいしたものだと褒ほめてやってもいい。

　もっとも、それも計算のうちだった。正確にいえば、第一弾だんが失敗しても、第二弾を用意してあるということだ。

　その第二弾を実行に移すため、マリアローズは扉とびらに飛びついた。格子窓の隙すき間まから爆弾をあちら側に投げつけ、すかさず右に跳ちよう躍やくすると、扉越しの爆発音が銅ど鑼らを鳴らしたようにけたたましく響ひびいた。

「……死んだかな？」

　ひどい音だった。耳が少々馬ば鹿かになっているようで、自分の声もやや聞こえづらい。顔を上げて振ふり返ると、扉はびくともしておらず、格子窓から煙けむりが流れこんできている。爆弾一本では、見た目や音の派手さほどの威い力りよくはないとはいえ、あの至近距きよ離りで食らえばさすがにただではすまないはずだが、さて──この目で直接、確かめてみるべきか。

　どちらにせよ、態勢を立て直してからだ。

　マリアローズは素早く立ち上がり、壁かべに背中をつけて扉に歩みよった。荊ジン王ワンがどうなったのかは不明だが、どうも龍州人と襲撃者との戦せん闘とうの気配はずいぶん近づいてきているようだ。やはり、格子窓から見てみようか？

　迷っている間に、耳慣れた訛なまりの魚声が耳に飛びこんできた。

「おンどれらァ……！　ドタマかち割られたいんか！　さっさと道を空けんかい！」

「ん？」

　けれども、陸に魚がいるはずはないし、幻げん聴ちようか。

「オラァッ！　オラッ！　オラオラオラオラァァーハァッ！　ええんか！　ええんかい？　ええんやな！　ウホッ！　どっシャァァァ───ッ！」

　だが、幻聴にしては、はっきりしすぎている。

「今こ宵よいのイノイチは血ィに飢うえとるでえ！　もちろんロノニーもや！　ダハハァッ！」

「カタリ、突とつ出しゆつしすぎるな！」

　トマトクンの声を聞いて、マリアローズはようやくほっとしつつも、ご苦労様、という気分だった。

　まったく、あの半魚人ときたら、お調子者で、考えなしで、間ま抜ぬけで、愚ぐ図ずでのろまな亀かめで、頓とん珍ちん漢かんの表

ひよう六ろく玉だまだ。女好きだし、助平だし、もてないし、うるさいし、やかましいし、邪じや魔まくさいし、傍はた迷めい惑わくだし──

「マリア！　マリアロォォォーズッ！　どこや！　どこにおるんや！　助けに来たで！　マリアローズ……！」

　あんなに大声を張り上げて、馬鹿みたいに何度も何度も人の名前を呼んだりして。

「……そんなに呼ばなくても、聞こえてるっての……」

　ちょっとだけ、眼球の上じよう外がい側そくにある分ぶん泌ぴつ腺せんから塩っ辛からい水みたいな液体がにじみそうになったのは、おそらく目が乾かわいているせいだろう。眠ねむいからかもしれない。まあ、真ま面じ目めな話をすると、極度の緊きん張ちよう状態から脱だつした結果、全身が弛し緩かんするのと一いつ緒しよに涙るい腺せんも緩ゆるんでしまった。そういうことに違ちがいない。

　マリアローズは念のため、目の周りを手の甲こうでぬぐってから、扉を叩たたいた。ただ、外ではまだ悲鳴や絶ぜつ叫きようが飛び交かっているようなので、混戦になっている可能性もある。安全を考えて、格こう子し窓から顔は出さないでおいた。

「カタリ！　ここ、ここだよ！　カタリ、半魚人、トマトクン！　みんな！」

「おお！　そこにおったか！」

　カタリは思ったより近くにいたようだ。すぐに格子窓から魚顔をのぞかせ、マリアローズの姿を確かく認にんすると、半魚人にしてはそこそこ人好きのする笑えみを浮かべてみせた。

「どうやら大だい丈じよう夫ぶそうやな」

「……まあ、ね」

　マリアローズが苦く笑しようを返すと、カタリはいきなり眉まゆをつり上げて、離はなれ気味の目を見開いた。相変わらず落ち着きのないやつだ。

「って、血ィがついてるやん！　口の周り！」

「え？　あ、これは、ちょっと……」

「何や、ゴーモンでもされたんかい！　ゴーモン？　ま、まままままさか、こ、コーモンにゴーモン──」

「妄もう想そう力逞たくましく下品なこと言うな、腐くされ半魚人！　違うよ、ただ……奥歯を抜ぬかれちゃって」

「歯ァやて？」

「うん」

　カタリが不思議がるのも無理はない。あんな変態趣しゅ味みの持ち主がそうそういるはずはないし、マリアローズがたまたまあんな男に巡めぐり会ってしまったのは、不運以外の何ものでもない。

　そういえば、その変態野や郎ろうはどうしたのだろう。

「──そうだ、そのあたりに、背が高くて色眼鏡サングラスをかけた男がいなかった？　髪かみはこう、逆立ててあって。もしかしたら、死体かもしれないけど」

「いや、わしは見かけてへんな」

「そっか」

　ということは、逃にげたのか。たぶん、無傷ではすまなかったはずだと思うが、変態という生き物は概がいしてしぶとい。どれくらいしぶといかといえば、マリアローズが住居にしているエルデンで三番目に高い高層寺院ＧＭエンパシィの屋上から落ちても、死なないほどしぶとい。

　たとえば、アジアンがそうだ。

　──アジアン、か。

「どないしたん。やっぱり痛いんか」

　カタリに心配されるなんて、今、自分はどんな表情をしていたのだろう。

　マリアローズは首を横に振ふった。

「や、そうじゃなくて。ま、痛いことは痛いけど」

「ようわからんけど、歯ァ抜かれたら、そら痛いやろな。とにかく、待っとれ。さっきしばき倒たおしたヤツから奪うばった鍵かぎがあるんや。きっとこの鍵の束の……」

　菱ひし形がた男は、哀あわれ半魚人の斧おのの錆さびとなったのか。カタリが何やらがちゃがちゃとやりはじめた。

「この鍵の束の……」

　まだがちゃがちゃやっている。

「この鍵の──ダァァックッ！　どれやっちゅうねん！　ええい、まだるっこしいわ、こうなったらもうあと一個や！　この一個でダメやったら、蹴け破やぶったる！　勝ォォォォ負ッ！」

　で、そういう勝負に負けつづけた挙句、見事、死にマニアの称しよう号ごうをえたカタリだが、今回は珍めずらしく勝ってしまったようだ。

「ッシャァァァ──ッ！　どや！　やるときにはきっちりやるのが男っちゅうもんや！」

　まあ、たぶん、カタリはこれで数年分の幸運を使い果たしたに違いない。それでも、マリアローズを解放するために消費したのだと思えば、カタリにとっても光栄だろう。マリアローズもやっとこのいまいましい部屋から出ることができて、万々歳というわけだ。

「でも……結構、派手にやったね」

　部屋を出た先の廊ろう下かは二メーテル少々ほどの幅はばで、マリアローズが閉じこめられていた部屋のものを含ふくめ、全部で三つのドアが同じ側に並んでいる。長さは十二、三メーテルくらいだろうか。その先は両りよう端たんとも曲がり角になっているのだが、見み渡わたした限り、今、この廊下は襲しゆう撃げき者しやたちの手によって完全に制圧されていた。そこかしこに黒ジャケットの死し骸がいがいくつも転がっていて、動いているのは皆みな、襲撃者だ。

「マリア！」

　その中で、いち早くマリアローズに駆かけよってきた者がいる。

　女性用ナース医術士服・ユニを身にまとった、十歳か十一歳の絶世の美少女に見えるものの、本当は二十三歳のユリカだ。

「大丈夫？　怪け我がは？　出しゆつ血けちゆしているわね。口の中？　見しぇなしゃい──座しゆわって。届かないから」

「あ、う、うん」

　こういうときのユリカは結構、強ごう引いんだ。マリアローズは逆らいがたい迫はく力りよくに押されて、おとなしく床ゆかに正座した。口を開けた瞬しゆん間かん、ユリカが眉をひそめたのは、奥歯がないのを見てとったからだろうが、こんなこともあろうかと回収しておいたブツがある。

「ほえ（これ）」

　マリアローズが小物入れから布きれに包んだ奥歯を出すと、ユリカはそれを受けとってさっそく医術式による治ち療りようを開始した。当然だが、施せ術じゆつ中のユリカは真しん剣けんそのものだ。その顔つきがまた健けな気げというか、ただごとではなくかわいいのだけれども、大口を開けているマリアローズはさぞかし間ま抜ぬけだろう。

「何だ、殴なぐられて折られでもしたのか」

　大剣を外がい套とうでぬぐいながら、炎模様フアイヤーパターンの全身鎧よろいに身を包んだトマトクンがその様子を見物しにきた。

「ふむ。殴られたという感じでもないな。いったいどういうやられ方をしたんだ」

「はほは……ひはひへふへふ？（あのさ……見ないでくれる？）」

「じっとしてて！」

「……はひ（はい）」

「ユリカの言うとおりだぞ。黙だまって治療を受けていろ」

　──もとはと言えば、きみが見てるせいじゃないか。

　トマトクンにそう言い返したい気持ちをぐっとこらえていると、ユリカの医術式は一分ほどで完かん了りようした。

　試しに噛かみあわせてみたところ、奥歯はちゃんとあるべき場所に収まっているし、さっきまで口の奥から頬ほおのあたりまでを蝕むしばんでいた疼とう痛つうも、すっかり失うせている。負傷した箇か所しよは他ほかにもあるのだが、動けないほどのひどい怪我ではない。ピンパーネルとサフィニアがそれぞれ通路の両端を監かん視ししてくれているとはいえ、あまりのんびりできる環かん境きようでもないし、後回しでいいだろう。

「ありがと、ユリカ」

「いいえ。しょれより、急いしよぎましょう。だいぶやっちゅけたけど、あいちゅらは殺しても殺しても出てくる脂羽蟲ゴキみたいなものよ。まごまごしていたら、またどこからか這はい出てくるに決まっているわ」

　ユリカにしては過激な台詞せりふだった。見れば、彼女の女性用ナース医術士服・ユニや極限クライマツクス九手棍ナインポールも、かなりの量の返り血で赤黒く染まっている。確かに、だいぶやっちゅけたらしい。

　昨日、龍州人たちに襲おそわれたところを番人に助けられたときも思ったが、どうやらユリカは悪党によほど根深い恨うらみを持っているようだ。

　身体的特とく徴ちようは約十歳相当なのに、二十三歳で、優ゆう秀しゆうな医術士で、しかも鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術をも習得している、とてつもなく可か憐れんなユリカ・白雪スノーホワイト。

　彼女にも、心に抱かかえている闇やみがあったりするのか。

　どうも悪党どもに対する憎ぞう悪おがその闇に関係していそうな気もするが、とにかく、彼女の言葉は正しい。急いだ方がいいだろう。

　マリアローズは立ち上がってトマトクンに向き直った。

「僕はもう平気だから。行こう」

「うむ。ピンプ、そっちはもういい。引き返すぞ」

　トマトクンの指示を受け、曲がり角の向こうを監視していたピンパーネルが合流してきた。ということは、サフィニアが見張っている方の曲がり角が、出口方面に続いているのだろう。

　しかし、こうしてみると、あらためて不思議に思うというか、狐きつねにつままれたような気分だ。

　だって、ここがどこかも含めて、マリアローズにはわからないことが多すぎる。

　特に、ＺＯＯの皆は、どうやってマリアローズの居場所を知ったのか？　裏で糸を引いてあの女魔ま術じゆつ士しを動かしたのは、本当にマリアローズの想像どおりの人物なのか？

　以上の二点については、とりわけ気になって仕方ないし、今すぐ解き明かしたい謎なぞだ。

　とはいえ、今はそんなことを悠ゆう長ちようように話していられる状じよう況きようではない。ただ、それでも、皆に伝えておくべき気持ちはあるはずだ。こういうことは、できるだけ早くすませておいた方がいいとも思う。

　そうは思うのだが、もどかしいことに、なぜかその一言がなかなか出てこない。

　ユリカに医術式を施ほどこしてもらったときは、素す直なおに自然に言えたのに。

　みんな、助けに来てくれて、ありがとう。

　たったそれだけの言葉が、どうして言えないのか。

「……苦手なんだよね、そういうの……」

　マリアローズは言い訳がましくそんなことを呟つぶやきながら、トマトクンらと一いつ緒しよにサフィニアが待機していた曲がり角

まで走った。

　そこでトマトクンを先頭に、カタリとマリアローズ、サフィニアとユリカ、最さい後こう尾びにピンパーネルがつく隊列を組んで角を曲がると、その先はかなりの激戦区だったらしい。

　死体の数もだが、切断された人体の一部がそこらじゅうに散らばっているわ、サフィニアの魔術によるものか壁かべは削けずれているわ、血と骨と肉の泥でい濘ねいに足をとられそうになるわで、かなり凄せい絶ぜつな光景だ。

「生半可な相手やなかったで。奇き襲しゆうが成功してへんかったら、もっと苦労したかもしらん。まあ、ゆうても、わしらにはピンプがおるからな。屋内戦闘インドアフアイトはピンプの独どく擅せん場じようやさかい」

　足を動かしつつカタリが言うとおり、死体の半分以上は、ピンパーネルによって解体されたものと思われる。人に利きき腕うでや利き足があり、固有の癖くせがあるように、殺し方にも特徴があるので、すぐにわかるのだ。

　たとえば、ＺＯＯ最速最大効率を誇ほこる砂色の元アッサシンは、雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けん、雄おすのグレアデと雌めすのリレッザを駆く使しして、斬きりつけ、突つき刺さし、斬り剝はがし、斬り刻んで、戦闘能力を奪うばい、息の根を止める。どこまでも鮮あざやかに、どこまでも手早く、どこまでも正確に人間を殺傷するのがピンパーネルだ。

　対して、トマトクンは琥こ珀はく色いろの剣けん身しん波打つ大剣で豪ごう快かいにぶった斬り、カタリは二本の変形斧おのイノイチとロノニーを急所にぶちこむ。ユリカは棍こんで殴おう打だするのが主だし、サフィニアは魔術士だから、これまた他とは明らかに違ちがう。

　何にせよ、彼らは自分たちの倍以上の敵を押しのけ、というよりも粉ふん砕さいして、マリアローズを救い出してくれたわけだ。

　━感謝……してるよ。これでも、ちゃんと。

　だが、面と向かって言うのは気き恥はずかしいというか、何というか。

我ながら厄やつ介かいな性格だと思うけれども、今すぐどうこうできるものでもない。

だから、せめて、全員を代表してトマトクンの背中にそっと小声で「ありがとう」と言っておいた。

もちろん、駆かけている最中だし、聞こえないだろう。

それでいい。

というわけでは決してないが、最低限の気持ちの区切りにはなる。そのつもりだった。

それなのに、トマトクンは走りながら急にこちらを見て、ニヤリと笑ってみせた。

「──な……何だよ」

「さあな」

すっかり忘れていた。

この男、聞いているふりをして聞いていなかったり、当然、聞こえているはずのことが聞こえていなかったりするくせに、たまにこうなのだ。

地じ獄ごく耳みみとは違うが、これはこれで始末が悪い。

「わ、わ、笑うな！　きみなんかただでさえでかいんだから、笑ったらもっとでかいだろ！　きみみたいなやつは省スペースって言葉を座右の銘めいにするべきなんだ、この独活うどの大木！」

「何やようわからんけど、言うとることがめちゃくちゃやん？」

「うるさい黙だまれ、腐くされ魚！　横から顔を出すな！」

マリアローズは腹立ち紛まぎれに、併へい走そうしているカタリの喉のどに手刀を見み舞まってやった。これがまともに入って、カタリは目玉を半ば飛び出させつつ「んご」と「もぎゅ」の中間あたりの声を洩もらしたが、少し遅おくれただけで喉を押さえたまま何とかついてくる。

「──痛いがなっ！」

「へえ、魚には痛覚がないって話は嘘うそなんだね、新発見！」

「ダァホ！　そないなモン確かめたいんやったら、直接、魚に訊きけばええやろ！」

「だからきみの体に訊いたんじゃないか」

「なーるほど──って、わ・し・は・さ・か・な・や・な・いっちゅうねん！」

「じゃあ何なんだよ」

「人間や！」

「その顔で？」

　生きて再びそんなたわけたやりとりができることに、感謝すべきなのか、安あん堵どすべきなのか、あるいは呪のろうべきか。

　マリアローズたちはいくつか角を曲がり、錆さびた鉄てつ扉ぴを開けて階段室に入った。階段室の中には切れかけの半永久灯しか設置されておらず、かなり暗い。階段の手すりに触ふれると、油染じみているのだか、埃ほこりにまみれているのだか、その両方か、いずれにしてもひどい手て触ざわりだった。

　監かん禁きん部屋や廊ろう下かも、そうとう古びて薄うす汚よごれていたが、雑に建てられ、乱暴に使われた挙句、打ち捨てられた建物を、適当に再利用しているという感じか。

　階段室に入ってから足を緩ゆるめたトマトクンが、振ふり返らずにマリアローズの名を呼んだ。

「マリア」

「何？」

「この建物はＳ＊Ｋシリアル・キラーズ、王おう龍りゅう、骨こつ龍りゅうとかいう三つの龍州人のクランがアジトにしてる場所だと聞いたんだが」

「えっと──誰だれに？」

　いい機会なので訊いてみると、答えたのは意外なことにサフィニアだった。

「……わたしの……兄弟で子しにあたる方です。大勢いた弟子の中でも……お姉様に天才と呼ばれたのは彼女くらいで、若くして魔導士ウイザードを称しようするくらい……」

「彼女？　もしかしてその人、剣けんを持ってて、胸をよせて上げてる──」

「そ……それを彼女の前で言うと……ただではすまないので……気をつけた方が……」

「そ、そっか」

　サフィニアは、ただではすまなかった実例をいくつか目もく撃げきしたかのような顔つきだ。もし次に会う機会があったとしても、そのことについては触れない方がいいだろう。

「でも、どうしてその人が？」

「ベティは……彼女の仮カ名ナですが……詳くわしい理由を言いませんでした……ただ、わたしを訪ねてきて、マリアさんがここにとらえられているということだけ……ですが、口くち振ぶりから察するに、彼女が属しているクランの……頭領マスターの指示ではないかと……」

「その、クランって──」

「はい……昼飯時ランチタイムといって……」

「あ、やっぱり？」

「……ご存知でしたか……？」

「知ってる何も」

　アジアン。

　見知らぬ他人のふりをしてみたり、裏から手を回して助けるよう

な真似まねをしてみたり、あの男はいったい、どういうつもりなのか。どうにも腑ふに落ちないことだらけだが、そのあたりは本人に問い質ただすしかないのかもしれない。

　まあ、マリアローズはアジアンの所在なんて知らないし、問いつめる手段があるのかどうかはまた別問題だが。

「──とりあえず、そのことはいいや。で、何だっけ。Ｓ＊Ｋと王龍と骨龍……王龍は黒ジャケットで、骨龍は髑どく髏ろのアクセサリーをつけてる連中かな。それがどうかしたの？」

「ああ」

　トマトクンが右手を背中の大剣に伸のばしながらうなずいた。

「ここにはその王龍と思おぼしき連中はいた。龍州人は衣い装しようを統一するのが好きらしいな。すぐにわかった。だが、おそらく、骨龍やらＳ＊Ｋやらは見かけてない。マリア、お前はここで王龍以外のやつらを見たか」

「やつらっていうか──Ｓ＊Ｋの頭ボスらしいちっこい男はいたけどね。確か、飛フエイ燕ヤンっていったかな。王龍の頭ボスがたぶん荊ジン王ワンで、こいつは僕が爆ばく弾だん食らわしといた。それから、媚妻メイルーと呉戒ウージエってのが骨龍の首領格だと思う。ドレッド女魔ま術じゆつ士しと筋肉ダルマの二人組。そいつらがいないとしたら、ＳｍＣのジェイって男と一いつ緒しよに、ベアトリーチェを連れてどこかに行ったのかも」

「うむ」

「……僕の話、理解してないでしょ？」

「まあ、お前が理解してるほどには理解できてないと思うが」

「ごめん。きみにややこしい話をした僕がばかだった。要するに、Ｓ＊Ｋと骨龍の頭ボスっぽい三人は、しばらく前はここにいたけど、今、いるかどうかは知らないってこと」

「そうか。だったら、この向こうにいるのかもしれんな」

　ちょうど階段を二階分上りきったトマトクンの前に、やはり錆びた鉄扉がある。

　トマトクンは大剣を抜ぬいて、ざっと一同を見回した。

「どうもうざったい嫌いやな臭においがする。あまり相手にしないで逃にげた方がよさそうだ。ユリカ、カタリ、マリアはサフィニアのカバーだけでいい。ピンプは先行、俺が頃ころ合あいを見計らってしんがりについたら、あとは全員、振り返らないで走れ。いいな」

　皆みなが表情を引き締しめてうなずいたのを確かく認にんすると、トマトクンは左手で一気にドアを開け放った。

　その脇わきをすり抜けてピンパーネルが突つっこんでいった先は、百倍美化して言うならエントランスホール、ありのままに表現すれば、落書きだらけで薄汚れた広すぎる合成骨材コンクリートの箱、正面に外へ通じる扉とびら付きといったところか。

　連中は、薄うす緑みどり色の燐りん光こうが立ちのぼるラビッシュバレーを背景にして、正面の扉の向こうに展開していた。

　地面に立っている者がいる。しゃがんでこちらを睨にらみつけている者もいる。乱雑に散らばった廃はい材ざいや、何かのがらくたの上に陣じん取どっている者もいる。

　ざっと見たところでは二十人以上、三十近くいるか。

　いずれもシリアルキラーの防具を身にまとい、手には青せい竜りゅう刀とうや棍こんなどを持っている。弩いしゆみを構えている者までいる。きっと襲しゅう撃げき者しやたちが出てくるのを今か今かと待ち構えていたのだろうが、砂色の風と化したピンパーネルの突とつ進しんには、ちゃんと反応できていなかった。何人かが何か叫さけぼうとしたり、動き出そうとした頃ころには、すでにピンパーネルは最初の敵を殺傷圏けん内ないにとらえていた。

　その敵は、ちょうど扉を出てすぐの場所で偉えらそうにふんぞり返っていた。

　子供だった。

　いや、単にマリアローズより背が低いというだけで、やつは子供などではない。子供には不可能だ。ピンパーネルが繰くり出した目にも止まらぬ連撃を間かん一いつ髪ぱつで飛び退しさってかわし、手にした妙みような形状の得物ですかさず反撃に転じるなんて、お

子様の隠かくし芸げいにしては上等すぎる。

　それにしても、飛フエイ燕ヤンの得物は変わっていた。鉄の輪に鉄球付きの鎖くさりが四本繋つながれていて、その輪をつかんで鎖を振ふり回すという使い方をするようだが、扱あつかいはかなり難しそうだ。

　もっとも、飛フエイ燕ヤンはその得物によほど習熟しているらしい。飛フエイ燕ヤンの手にかかると、四本の鎖がまるで別々の生き物のように動いた。鎖自体、かなり長いこともあり、これはなかなかに厄やつ介かいだろう。さしもの元アッサシンも、四方から同時に攻せめ立てられて、防戦に回らざるをえなくなったかのように見えた。

　それもほんの一いつ瞬しゆんにすぎなかったが。

　ピンパーネルが選せん択たくした対処法は、常識人にはちょっと考えつかない。だが、もし正解があるとしたら、ピンパーネルの出した答えはそれに近いかもしれない。

　ピンパーネルはまず一本の鎖を右足で踏ふんだ。

　さらに、もう一本の鎖にあえて左手をとらせると、即そく座ざにこれを右手の雄おすのグレアデで切断し、三本目の鎖は左足で踏んだ。

　それから、しゃがみこんで両足で動きを止めた鎖を雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんで斬きり、最後の鎖にはまた左手をとらせて、ぐいと引っ張った。

　これで体勢を崩くずさずに鉄の輪から手を放した飛フエイ燕ヤンも、そうとういい反射神経をしていると言わざるをえまい。

「──鬼おにスゲェ……！　アンタ超ちよう強ェな！」

　だが、声に喜色をにじませて敵のピンパーネルを称しよう賛さんするあたりは、何というか、やけに子供っぽい精神性メンタリテイだ。

　実は、本当に子供だったりして。

　まさか、いくら何でもそんなことはないと思うが、フードで顔の

上半分が隠れていることもあって、どうもわからない男だ。

「オレァ、カンドーしたぜ──って、このクソ野郎モウフオども
がァッ！　オレの命令もねェのに何やろーってンだ殺すぞボケ？」

　しかも、ようやく何か大切なことを思い出したように動き出そうとした味方を、一いつ喝かつして制止するなんて、どういうつもりなのだろう。

　その間に、マリアローズたちは扉付近までそろそろと移動したが、さてどうしたものか。ピンパーネルも雄のグレアデと雌めすのリレッザを両手にぶら下げたまま突っ立っていて、ちょっと奇き妙みような雰ふん囲い気きだし、肝かん心じんのトマトクンも様子見を決めこんでいる模様だ。とりあえずマリアローズとしては、いつでも飛び出せる態勢を整えておくくらいしかない。

「ったくよォ、子分の文左衛門ブンザエモンがよォ、黙ダアってオレのゆーとーり動いてりァいンだよ。だからテメーらボンクラだっつーの。ンでさァ、アンタ名ァ何つーの教えてくれや」

「……………………」

　飛フエイ燕ヤンが名を尋たずねた相手は、明らかにピンパーネルだった。

　ただ、ラハン大陸出身の元アッサシンにとっては、少々聞きとりづらい共通語だったかもしれない。そのせいなのかどうか。

　ピンパーネルはたっぷり三秒ほど黙りこんでから、振り返ってトマトクンを見た。ラフレシア貴族に飼われている血統書付きの猟りよう犬けんのように、トマトクンに絶対の忠誠を誓ちかっているピンパーネルは、基本的に主人の命令以外のことはしない。もちろん、場合によっては臨機応変に対応するが、今回については自分では判断しきれないケースだったのだろう。主人にご意見伺うかがいをして、うなずいてもらってから、ピンパーネルはやっと短く答えた。

　というか、うなずくトマトクンもどうかと思う。

「ピンパーネル」

「ほォ、ミスター・ピンパーかよォ！」

　飛フエイ燕ヤンは悦えつに入いったように手を叩たたきながらひとしきり笑うと、不意に近くの廃材に飛び乗り、そこに腰こしを下ろして足をぶらぶらさせた。

「よォし、いいぜ。気に入ったよ。テメーら確かＺＯＯだったな。面おも白しろそーだから今日は見み逃のがしてやンよ」

　これにはさすがにＳ＊Ｋたちがざわめいた。

　それでも、小声で何か呟つぶやいたり囁ささやきあったりするくらいで、飛フエイ燕ヤンに直接、文句を言う者は皆かい無むだ。部下をしっかり掌しよう握あくしているのか。ピンパーネルの初撃を回かい避ひするほどの地力の持ち主だから、恐きよう怖ふで抑よく圧あつしているのか。どうも「また始まった」みたいな空気が流れているような気がするので、呆あきれ半分、諦あきらめ半分といった感じにも見受けられるが。

「あ、でもアレだかンな」

　飛フエイ燕ヤンは少しだけフードをめくり、小動物系の黒々とした目を片方だけつぶってみせた。

　その顔は、やはり子供だった。子供というのは言いすぎだとしても、せいぜいマリアローズと同年配程度にしか見えない。それも、少々敵意を抱いだきづらい愛あい嬌きようのある顔立ちだ。

「オレの手下ァ食ッたのォチャラにするつもりはねー。テメーらずいぶんムチャクチャやってくれたみてーだけど、王龍もイチョ同どう胞ほうだからなァ。あとで借りはキチキチキッチリ返させてもらうけどよォ、今日はもー夜も遅おせェつーか間もなく夜明けだ。勝負はまた今度っつーことにしよーぜ。いー話だろォ？」

「ふむ」

　トマトクンが大剣を背中に戻もどして、悠ゆう然ぜんと前に進み出た。

「悪くない。俺たちも仲間は返してもらったし、無む駄だな血を流すのは本意じゃないしな」

「テメー誰だれだよ。偉えらそうだなァ、ミスター・ピンパーより強ェの？」

「さあな。何なら試してみるか」

「ハッ、一発冷めちまったら気ィが入らねェよ。テメー名ァ何つーの」

「トマトクンだ」

「ハァ……？」

　飛フエイ燕ヤンは大きく首を傾かたむけて、トマトクンを指差した。

「──ミスター・トメィトォ？」

「まあ、そんな感じだ」

「ギャハッ！　そいつァ粋ＣＯＯＬだねェ！」

　何がそんなにおかしいのやら。

　いや、結構おかしいか。マリアローズだって、最初にその名を聞いたときは、冗じよう談だんか聞き違ちがえではないかと思ったものだ。腹を抱かかえて笑う飛フエイ燕ヤンの気持ちもわからないではない。

　飛フエイ燕ヤンはそうして気のすむまで馬ば鹿か笑いをしたあと、後ろの方へ顎あごをしゃくってみせた。

「行けよ。また会おーぜェ。次は殺す」

「ああ、またな」

　トマトクンはマリアローズたちを振ふり返って「行くぞ」と低く言ってから、ゆっくりと歩き出した。すぐにピンパーネルがトマトクンの横に並び、その後ろにマリアローズ、ユリカ、カタリがサフィニアを囲んで進む格好となったが、正直、単純に戦せん闘とうをするよりも妙な緊きん張ちよう感かんがある。

　一つには、意図的なのか何なのか知らないが、Ｓ＊Ｋたちが積極的に道を譲ゆずろうとはしないせいだ。

　まあ、実際、飛フエイ燕ヤンはトマトクンに「行け」と言っただ

けで、手下どもには「動くな」以外の指示を出していない。考えようによっては、彼らはそれを忠実に守っているとも言える。それで、時にＳ＊Ｋと肩かたが触ふれあいそうな距きょ離りですれ違うこともあり、そうでなくても粘ねばっこい視線でねめつけてくるやつが多くて、落ち着かないといったらない。

　本当に、通す気があるのか。

　たとえ飛フエイ燕ヤンはそのつもりでも、何かきっかけがあれば、他ほかのＳ＊Ｋどもは一いっ斉せいに襲おそいかかってくるのではないか。

　マリアローズの中で疑いが高まるごとに、一方で、Ｓ＊Ｋの包囲の輪を脱だっするときが迫せまってきている。

　あと五メーテル。

　四メーテル。

　もう少しだ。

　それゆえに、気が急く。もっと早く。もっと大おお股またで歩きたい。しかし、トマトクンの歩調は一向に変わらない。まだるっこしくてたまらない。

　そうはいっても、気がつけば、すぐ目の前に三人並んでいるＳ＊Ｋたちが最後だ。

　トマトクンが顔を半分だけ後ろに向けて、囁くように言ったのは、そのＳ＊Ｋたちとすれ違った直後だった。

「合図をしたら走れ」

　マリアローズは思わず生なま唾つばを呑みこんだ。なぜ、とは訊きかない。トマトクンが出す指示の中には、皆みなを無条件で従わせる種類のものがある。理り屈くつ抜ぬきでわかるのだ。そうすべきだ、そうする以外にないと。

　今回がまさしくそれだった。

　その正しさと、トマトクンがそう指示を出した理由はすぐに明らかになった。

「──なーんてね」

　もう七、八メーテルほど後ろにいる飛フエイ燕ヤンが、いきなり廃はい材ざいの上に立ち上がった。

「野や郎ろうどもォそいつらァ全部狩かれェッ！　逃にげろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げてみせろよォ！　次があンのかどうかはテメーで決めやがれェッ！　キャハハハハッ……！」

「走れ！」

　トマトクンは飛フエイ燕ヤンとほぼ同時にそう叫さけぶなり、一っ飛びで隊列の最さい後こう尾びに移動して大剣を一いつ閃せんさせた。

　マリアローズはすでに駆かけ出していたので、その結果は見なかった。見るまでもなかった。トマトクンは大剣のたった一ひと振ふりで、一人以上のＳ＊Ｋを斬ざん殺さつしてのけたことだろう。そして、今はもう最後尾について走っているはずだ。トマトクンが後ろを守ってくれているのなら、マリアローズたちはただひたすら駆ければいいのだ。

　そう、ラビッシュバレーめがけてまっすぐ──あれ？

「ちょっ……ピンパーネル！　道、こっちでいいの？」

　今、隊列の先頭はピンパーネルだ。

　従って、皆、ピンパーネルのあとについていっているわけだが、このまま行けば間違いなく塵じん芥かい処理施し設せつのあるラビッシュバレーに至る。ラビッシュバレーといったら、第六区の外がい縁えん部近くにあり、その先はラストクロームメタル製、高さ十七メーテル、基底部幅はば二十一メーテル、上部幅十七メーテルの首都城じよう壁へきにぶちあたるだけだ。

　それとも、これから脇わき道みちや小道でも通ってＳ＊Ｋの追っ手を撒まくつもりなのか。

　そうだ。きっとそうに違いない。

　ところが、急にピンパーネルがずるずる後退してきた。ピンパーネルは誰だれよりも足が速いはずなのに、どうして？

何となくわかっていた。

ピンパーネルはもう最後尾のトマトクンに近い位置まで下がっている。そんなに先頭は嫌いやか。嫌なのか。だが、マリアローズだってこんな場所は初めてだ。それなら、こういうとき、頼たよりになるはずの男が隣となりにいるではないか。

「カタリ！　きみって道とか覚えるの得意—で？」

だが、懸けん命めいに足を動かしながら横を見て、愕がく然ぜんとした。

カタリがいない。

むろん、消えたわけではなかった。カタリはいつの間にかユリカの横にいた。振り返っても、マリアローズと目をあわせようとしない。魚顔を横に向けたまま走っている。半魚人、お前もか。

だったら、儚はかない望みではあるが、ユリカは。サフィニアは。

「あの！　マリア！　ごめんなしゃい、わたしもまったく、道とかわからないから！」

「……み、右に同じです……！」

「来たときはこっちからじゃなかったんや！　全然ちゃう方でな！　エライ急いでたし！　そいで—」

「後ろは任せろ！　マリア、道案内は頼たのんだぞ！」

「頼みまス」

「—って、頼まれても！　もお、何でこんな……！」

Omenage 897 9th revolution 9th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区・第二王立銀行内

〝動物園事務所(ズーズオフィス)〟

chapter.8

# 憎い空

　結局、第十一区にある第二王立銀行内の動物園事務所までたどり着く頃ころには、すっかり夜が明けまくっていた。

　あとから整理してみたところ、媚妻メイルーと呉戒ウージエに拉ら致ちされたのが九巡じゅん月げつ八番日の夕方、だいたい十六時で、トマトクンたちが助けに来てくれたのは九番目の明け方四時半くらいだった。つまり、監かん禁きんされていたのはたかだか半日にすぎなかったわけだ。

　その後、事務所に到とう着ちやくしたのが七時半だから、ラビッシュバレーの近くから第二王立銀行まで、直線距きょ離りにして約五キルメーテルを走破するのに、実に三時間もかかったことになる。

　ただ、この三時間には、建物を出るまでと、Ｓ＊Ｋの囲みから脱だつするまでの時間も含ふくまれている。Ｓ＊Ｋもなかなかしつこかったし、途と中ちゆうで王おう龍りゆうの残党が追つい跡せきに加わってきたりもした。敵の総数が把は握あくできず、いつまでも逃げつづけるべきか、どこかで足を止めて戦うべきか。判断に迷ったり、揺ゆれたりしながら、最終的には相当数の追っ手を斬きったと思う。

　それでも、地の利は向こうにあった。

　また、特にサフィニアを抱かかえるこちら側にとっては、Ｓ＊Ｋが使ってきた弩いしゆみなどの飛び道具も大きな脅きよう威いだった。

　だから、やはり逃にげざるをえなく、マリアローズも忙せわしく頭を巡らせて、あっちだ、いやこっちだと頑がん張ばったのだが、ラビッシュバレー近辺は本当に鬼き門もんだった。

　何しろ、建ち並ぶバラックとバラックの間が、道なのか、ただの隙すき間まなのかもわからない。かといって、龍州人のアジトがあった場所のような開けた土地は、飛び道具で狙そ撃げきされやすいので、避さけなければならない。ラビッシュバレーが目印になり、方角はわかるのだが、行きたい方向に道がない。

　そんな調子で、あっちもダメ、こっちもダメ、そっちもダメ。あれもダメ、これもダメ、それもダメ。ダメ、ダメ、ダメ……。

　ある意味、全員が無事ですんだのは、奇き跡せきに近いかもしれない。

　そして、そのあと、今後について話しあっているうちに、マリアローズは不覚にも寝ね入いってしまったらしい。

　気がつくと、動物園事務所名物大円えん卓たくの下で、毛布にくるまって猫ねこみたいに丸くなっている自分がいた。

「……って、あれ？　僕……椅い子すに座って何か喋しやべってて……いつの間にこんな……」

　毛布はユリカあたりがかけてくれたのか。大円卓の下に潜もぐりこんだ記き憶おくは一いつ切さいないが、わざわざ誰かがこんな場所にマリアローズを運んだとも思えないので、自分で移動したのだろう。

「ま、でも、ここだと床ゆかも汚きたなくないし……」

　事務所の面積は十数メーテル四方ほどもあり、その中央に鎮ちん座ざする大円卓も直径七メーテルくらいの大きさはある。その下の真ん中あたりともなれば、掃そう除じをするとき以外、誰だれも足を踏ふみ入れない領域だ。無意識のうちにここを寝ね床どこに選んだマリアローズの衛生観念と見識は、ずば抜ぬけて高いと言わねばならないだろう。

　とはいうものの、いつまでもいるような場所でもない。ベルトの小物入れから時計を取り出して確かめると、十三時半を回っている。五時間ほど眠ねむったことになるのか。マリアローズはまだ開ききらない目をこすりつつ、毛布を抱えて大円卓の下から這はい出した。

「あら、マリア、起きたのね。おはよう」

　話し声もしないし、やけに静かだと思ったら、事務所にはユリカしかいなかった。

「……おはよう」

　ＺＯＯの仲間についていえば、確かに、窓まど際ぎわに置いた棚たなのところで何かやっているユリカの姿以外は見あたらない。

　あくまで、ＺＯＯに限っていえば、だが。

　マリアローズは突とつ如じよ、襲おそってきた偏へん頭ず痛つうをこらえながら、大円卓を囲む椅子の一つにちょこんと座って茶をすするちんまりした生物に近づき、眼ガンをつけた。

「──それで、きみはいったい、どうして、ここで、何をやってるわけ」



「ほ？」

　黒っぽい三角帽ぼうにだぶだぶのローブという、ほぼ禁じ手に近い古典的な魔ま術じゆつ士しの装しよう束ぞくに身を包んだコロナは、無む駄だにでかいすみれ色の目をぱちくりさせた。

「はっ！　こ、これはマリアさん！　何やら突とつ然ぜんのお出ましですが、このたびはお日ひ柄がらもよく、ご健勝におすごしの由よし、何よりで……あ！　コロ、あう、わ、わたしとしたことが、ご挨あい拶さつをするのに座ったままなんて、しょ、少々お待ちください、い、今、きゃっ」

「ば──あぶなっ！」

　マリアローズがとっさに手を出して支えなければ、コロナが慌あわてて大円卓に置いたカップは倒たおれて中身をぶちまけていただろう。まったく、起きたばかりだというのに、心臓に悪い。

「ふう……もういいよ。きみはそのまま、そこに、じっと座って、黙だまってて」

「ご、ごめんなさいです」

「喋るな」

　マリアローズが冷ややかに命じると、コロナは両手で自分の口を塞ふさぎ、ぶんぶんと首を縦に振ふってみせた。さすがコロナ、意志の力では自分を制せい御ぎょできないから、腕うでずくで何とかしようというわけか。ろくに魔術を使えないへっぽこ魔術士らしい発想だ。

「で、ユリカ、何でこいつがここに？」

「マリアのお友だちなの？」

　逆にユリカから質問されて、どう答えるべきか迷ったが、嘘うそをつくのはよくないだろう。

「全然違ちがうよ。ただ、ちょっと色々あって、こいつがどんなに傍はた迷めい惑わくなやつか知ってるだけ」

「じゃあ、お友だちなのね」

「違うってば！」

　ユリカは若じゃっ干かんむきになって否定するマリアローズを面おも白しろがっているようだ。だが、コロナがここにいる理由を説明する段になると、自分でも納なっ得とくできていないのか、困こ

ん惑わく顔になった。

「どうやらしょの子、迷子になったらしいの」

「迷子ぉ？」

「しょう。道に迷っているうちに、いちゅの間にか第二銀行に入りこんでしまったみたい。しょれで、事務所の前をうろうろしていたから、ちゅい……」

　とうてい信じられる話ではないが、コロナならば絶対にないとは言いきれない。それ以前に、どうでもいい。コロナ絡がらみだと、事の真しん偽ぎを判定する手間さえ面めん倒どうだ。

　いずれにせよ、心優やさしいユリカはついうっかり拾ってしまったのだろうが、この悪あく縁えんは手て遅おくれにならないうちにさっさと断ち切っておくべきだろう。

「ま、いいや。とにかく、友人じゃなくて知りあいのよしみで、こいつは僕が捨てて──や、保護者のとこに送り届けとくからさ。それより、みんなは？」

「いったん家に帰ったわ。あとでまた集あちゆまってくると思うけど」

「確か、落ち着くまで単独行動は控ひかえようって決めたんだったよね。大だい丈じよう夫ぶなの？」

「トマトクンとピンパーネルは心配ないし、サしやフィニアの部屋は第十区のメタルフォレストにあって、魔ま術じゆちゆ士し以外は入れないもの。カタリは貸し宿住じゆまいだけど、ああ見えて、しょのあたりは抜かりがないから」

「ユリカは第二区の汎大陸ＰＣ医術士会ＭＡキャンプだっけ」

「ええ。でも、わたしは荷に物もちゆもたいしてないし。ここでも生しえい活かちゆできちゃうくらい」

　そういえば、ＺＯＯの面々の中で、事務所にいる時間が一番長いのはユリカだろう。事務所の棚にはユリカが趣しゆ味みで集めているお茶もたくさん収められているし、彼女の着き替がえ類を収納した大きめのトランクも隅すみの方に隠かくしてある。この事務所は

銀行内の一室を勝手に使用しているだけだが、別室には水回りの設備も完備されているので、寝床さえどうにかすれば、十分暮らせる環かん境きようだ。

「だったら、ユリカはここにいるんだね」

「こういうときだし、誰かいた方がいいでしょう」

「うん──あ、じゃあ、僕もちょっと出てくるから」

「おうちに帰るの？　一人で平気？」

「大丈夫。家に戻もどるわけじゃないんだけど、用事があって。どうしても……外せない、大事な用で」

　ユリカが心配げに首を傾かしげている。そんな表情で見つめられると、何だか心が挫くじけてしまいそうになるが、これぱかりは気が重いからといって取りやめるわけにはゆかない。

「そんなに遅おそくはならないと思うよ。みんなが先に戻ってきたら、よろしく言っといて」

「気を……ちゅけてね？」

　それでも、表情や態度に出てしまったのか。

　ユリカが近寄ってきて右手を伸のばし、マリアローズの左手の指をそっと握にぎってくれた。

　そんな心こころ遣づかいに甘えて、触ふれあった指先から元気をもらったが、少しだけでいい。

　もっと甘えたくなって進めなくなる前に、マリアローズは手を離はなし、できるだけ力強く微笑ほほえんでみせた。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

　マリアローズはユリカの笑え顔がおに見送られ、襟えり首くびをつかんで立たせたコロナとともに事務所をあとにした。

　それからエスカレーターに乗って一階へ下り、銀行から出るまで

の間にあらためて思ったのだが、やはり道に迷って事務所前にたどり着くなんてありえない。だいたい、どこからどこへ行こうとしていたのか。そのあたりを軽く尋たずねると、コロナの口はまだ自分の左手に塞がれたままで、答えが返ってこなかった。

「……もういいよ、喋しやべっても」

　ここまでゆくと律りち儀ぎというより、ただのお馬ば鹿かさんだ。まあ、聞いたところによると、第四区の貸し宿から約二キルメーテル離れた第五区の第一王立銀行に行こうとして、その三倍は遠い第十一区の第二王立銀行まで来てしまったらしいので、本当に超ちようお馬鹿さんなのだろう。

「銀行によく似た建物があったので、ここだ、と思ってしまいまして」

「ここも銀行だからね」

「ほ？　それでは、コロナもあながち間違ってはいなかったのですね？」

「いや、きみは決定的に間違ってるけど」

「で、で、でもですよ、ここが銀行……で、あそこも銀行……なので、つまり、ええと？」

　もはやエルデンには王立銀行が二つあるという、常識的な知識を授けてやる気にもなれなかった。ついでに、わざわざコロナを目的地まで送ってやる気もない。外に放り出して、あとはまた放ほう浪ろうの旅に出てもらうつもりだったのが、結果的には放り出す手間もいらなくなった。

　銀行を出てすぐのところに、やたらと不ふ機き嫌げんそうな面ツラをしたコロナの保護者がいたからだ。

「あ！　てめえ……！」

　東方系の顔立ちで、黒くろ髪かみに銀色の目という珍めずらしい組み合わせのレニィは、コロナに駆かけよってきてその頭を軽く小こ突づいた。

「この馬鹿が！　いつまで経たっても現れやしねえから、銀行違い

でこっちに来てるんじゃねえかと思って捜しにきてみたら、やっぱりかよ。俺は第一の方だってちゃんと言っただろうが」

「あう、も、申し訳ありません、どうやら、そこは覚えていなかったらしく……」

「ありえねえ。三回だぞ。三回も念を押したんだ。てめえだって、わかりました任せてくださいとかぬかしてやがったじゃねえか。てーか、急げ。他ほかの連中はもう先にアンダーグラウンドに向かっちまったけど、今ならまだ中で合流できるかもしれねえ」

「はっ、あ、ちょっ、待ってレニィさん、マリアさんに挨あい拶さつとお礼を……！」

　レニィは抗あらがうコロナの手をとり、大おお股またで歩きはじめた。そのままマリアローズを完全に無視して立ち去るのかと思いきや、五メーテルほど進んだときだった。

　不意に立ち止まったレニィは、振ふり返ってなぜかマリアローズを睨にらみつけた。

　まあ、睨まれたように感じたのは、単にレニィの目つきがきわめて悪いせいかもしれないが。

「この馬鹿が世話になった。じゃあな。てめえも頭下げとけ」

「は、はい、あの、いつもすみません！　もうお一ひと方かたにも是ぜ非ひ、コロナが末永い無病息災をお祈いのり申し上げていると、お伝え願えれば！　それでは、何かの折りにまた！」

「……ばいばい」

　マリアローズが半ば呆あきれながら手を振ってやると、レニィとコロナはどんどん遠ざかっていって、そのうち見えなくなった。

　それにしても、あの二人を見ていると、何だか、同じエルデンで暮らしていながら、まったく別の世界に生きているかのように思われる。むろん、人それぞれだし、どちらがいいとか悪いという問題ではない。ただ、ああして楽しげにじゃれあっている者もいれば、そうでない者、そんなことをやっている場合ではない者もいるということだ。

――ベアトリーチェ。

彼女は今、どうしているだろう。

マリアローズは胸のあたりを掻かきむしるように押さえた。

見上げた空は、よりにもよって雲一つなく、無責任なまでに晴れている。

いっそ、憎にくく々にくしいほどに。

Omenage 897 9th revolution 9th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区
〝モリー・リップス・アサイラム〟

chapter.9

# 僕は卑劣

　第六区はどうやら龍りゆう州しゆう人たちの根こん拠きよ地らしいということもあって、アサイラムまで行くのはもっと大変だと思っていた。

　そのため、暗視鏡をかけたり、頭ず巾きんをかぶったり、マスクをしたりなど変装した上、人目を忍しのんで歩いたのだが、なぜかＳ＊Ｋも、黒ジャケットの王龍も、髑どく髏ろの骨龍も影かげをひそめていた。

　連中の代わりに目についたのが、銀の軍団ザ・シルバリイの番人たちだ。

　とりわけ、第六区では番人の姿を多く見かけた。彼らは普ふ段だんよりさらに威い嚇かく的な雰ふん囲い気きで、通りすがりをいちいちねめつけるものだから、昼下がりの貧ひん民みん窟くつは妙みようにひとけが少なく、静かだった。

　もちろん、彼らが何の理由もなく、そんなことをしているはずがない。

　アサイラムの門を警備していたのは昨日と違う番人だったので、呼び止められることこそなかったものの、仕事の合間に会ってくれたモリーは、当然、その事実をすでに知らされている様子だった。

「何て顔をしているのよ」

　それなのに、診しん療りよう室しつに入ってきたマリアローズを見るなり、モリーは開口一番、そんなことを言った。

「まるで蜻蛉トンボが肥こえ溜だめの中で蝗虫バツタの腐くされ葡萄酒ワイン煮込にこみを食べたあとみたいな表情ね」

「……蜻蛉トンボって蝗虫バツタなんか食べるのかな」

「どうかしら」

　窓まど際ぎわの机の前に置いた椅い子すに腰こしかけたまま、モリーは疲つかれたような笑えみを浮うかべて肩かたをすくめてみせた。

「へっぴり腰ごしの毒どく蛇じやが化石になった栗くりヨウカンを食べたあとみたいな表情でもいいけれど──まあ、何でもいいわ。と

にかく、そんなところに突つっ立っていないで、座りなさいな」

「うん」

　マリアローズはモリーと向かいあう位置に回転椅子を持ってきて、そこに腰を下ろした。

　だが、どう切り出せばいいか迷うというより、頭の中が真っ白になって、言葉が出てこない。

　机の上や脇わきに置かれた夥おびただしい量の書類を見るまでもなく、モリーには片づけなければならない仕事が山積している。その中で、わざわざ時間を作ってくれたのだ。

　早く言わなければならない。どうせモリーは知っている。そう顔に書いてある。けれども、知っているのだとしたら、今さらマリアローズが言うべきことなんてあるのか。

　番人たちが街を大勢うろついていて、それにはきっと彼女の件が関係しているはずで、モリーはアサイラムの警備を任せていることもあり、番人とは繋つながりが深いし、昨日、あんなことがあったばかりだから──その話はモリーに伝えられているはずで。

　それでも、関係者との折せつ衝しようやら、財務上の決裁やら、難しい症しよう例れいに対する治ち療りよう方針の検討やら、救急の臨りん床しよう対応やら、被ひ保護者たちとのふれあいやら、モリーにしかできない仕事はいくらでもある。刻々と過ぎ去りゆく時は、待ってくれない。

　だから、モリーは止まらない。おそらく、たとえベアトリーチェがこのまま殺されたとしても、モリーは休まないだろう。

　そんなモリーを「冷たいコールド人間ハーテツドだ」と評する阿あ呆ほうもいる。「あれは人間ではない」とまで言い放つクソッタレがいる。

　何も知らないで。

「あの子──」

　モリーは煙草たばこをくわえて火を点つけ、ゆっくりと紫し煙えんを吐はき出した。

「番人の焔ホムラという男に連れられてここに来たとき、あの子は九歳だったわ。暗い、何かにじっと耐えているような、思いつめているような目をしていて、口もきかなかった。母親を殺されて、自分も売られそうになっていたところを、番人に救い出された直後だったわけだから、当然だけれど」

「殺された……？」

「よくある話よ」

　モリーは一つため息をついて、かすかに頭を振ふった。

「どこの馬の骨かもわからない父親は、自分の娘むすめが生まれる前に行方ゆくえをくらまして、母親は一人であの子を産んだ。当時はカリオサークにいたらしいわ。それから、母子二人でエルデンに出てきた。母親はクァラナドで娼しよう婦ふをしていたのよ。でも、つまらないことで客に殺されて、あの子は孤こ児じになった。母親を殺した男は、糞くそショボイ悪党クランのチンピラで、この街には腐るほどいる害虫の一匹ぴきで、それはありふれた悲劇にすぎなくて──保護者を失ったあの子は、他の同じような境きよう遇ぐうの子供たちがたどる道の途と中ちゆう、たまたま番人に助けられた」

　そういえば、ベアトリーチェが言っていた。

　悪党は憎にくい。やつらは、奪うばって、殺して、失わせるから、と。

　つまり、ベアトリーチェ自身、やつらに奪われた者だったのだ。

　それはマリアローズも同じだった。

　そして、モリーの言葉どおり、そんな悲劇なんてこの街ではありふれている。路ろ傍ぼうの小石みたいに、ちっぽけで、無価値で、顧かえりみられることがなく、そこらじゅうに転がっている。

　マリアローズは、だから、しょうがないんだよ、と思っていた。

　ここはそういう街だ。しかし、知らぬ間にここにとらわれ、しがみついて生きている自分がいる。だから、苦痛でも、腹立たしくても、受け入れるしかない。受け入れた上で、前を向いて生きてゆくしかない。

　一方、ベアトリーチェは受け入れず、諦あきらめずに、自分の力で少しでもこの街を変えてゆくことによって、前を向こうとした。

　そういうことなのか。

「あの子がここに来てから、しばらくして──あれは、そうね、三巡じゆん月げつと三日経たった日のことだったわ。あの子がやっと喋しやべったの」

　モリーは上に向けた左の掌てのひらをマリアローズに差し出してみせた。

「剣けんをくれませんか。わたしでも使える剣を」

「……剣、を」

「ええ。自分を助けた番人の姿が、彼らが腐れ外道どもを剣で斬きり殺す場面が、目に焼きついていたのかしらね。あの子はそう言ったのよ。わたしはないと答えたわ。けれど、あの子はどこからか見つけてきた剣を振り回すようになった。しかも、いつか秩序の番人に入団したいなんて言い出して。女の子なのに、生傷が絶えなかった。何度も治してあげた。そのうち、だんだん口数が多くなって、明るくなっていった。笑うようになった。わたしを母様と呼んでくれるようになった。でも、わたしが何度やめろと注意しても、剣けん術じゆつの練習はやめなかったわ。結局、いくらか才能があったみたいで、入団試験をパスしてしまって──ずいぶん厳しい試験だったらしいけれど、あの子は番人になったのよ」

「僕……」

　マリアローズの視線の先で、モリーの煙草の先からこぼれ落ちた灰が床ゆかに散らばった。

　顔を上げられない。

　モリーの目を見ることができない。

「ベアトリーチェと一いつ緒しよに……つかまって」

「知っているわ。貧ひん民みん窟くつの子供が知らせてくれたから。その洟はな垂たれ小こ僧ぞうども、昨日、君があの子をここへ運んできたときに、手伝いをしてちゃっかりいくらか小こ遣づかい

をせしめたみたいね。そのあと、君とあの子が龍州人に囲まれて連れ去られるところを目もく撃げきしたらしくて、迷った挙句、今朝、そのことを教えにきてくれたのよ」

「……モリー、僕は」

「君は無事だったのね」

　一いつ瞬しゆん、責められているのかと思い、上うわ目め遣づかいでモリーの顔を確かく認にんしてしまった。

　しかし、モリーに限ってそんなことをするはずがない。モリーは心底から安あん堵どしたように目め許もとを緩ゆるめて、やはり疲つかれたような微び笑しようを浮うかべていた。

「安心したわ。仲間に助けてもらったの？　それとも、解放された？」

「仲間が」

　正確に言えばそれだけではないのだが、いまだ明めい瞭りようではない事情を告げるのは躊躇ためらわれた。

「──先にベアトリーチェがＳｍＣに引き渡わたされて、僕だけ残ってたんだ。そこに、仲間が助けにきて……」

「ＳｍＣに？」

「うん。龍州人の──Ｓ＊Ｋと王龍、骨龍っていうらしいんだけど、その連中はＳｍＣと手を組もうとしてるみたいで。ＳｍＣは番人と対立してるから、ベアトリーチェは女の子だし、何か利用価値があるんじゃないかって、龍州人が話してた」

「そう」

　モリーはずいぶん短くなった煙草たばこの先を見つめながら少し考えこんだあと、机の隅すみに置いてあったティーカップを手許に引きよせた。アサイラム内は原則、禁きん煙えんなので、モリーの診しん療りよう室しつにも灰皿はない。それで、時に空のティーカップが灰皿になる。

「今の話、番人に詳くわしく聞かせてあげてくれる？　たぶん、彼

らもそこまでは把は握あくしていないと思うから。現状は龍州人たちをマークしているみたいだけれど、君の話の裏をとることができれば、違ちがった動き方ができるはずだわ」

「それは、もちろん」

「可能性は……」

　モリーは二本目の煙草をくわえようとして手を止め、言い直した。

「望みはまだ消えたわけじゃないし。相手が動く前に、打てる手は打っておきたいわね。もし、向こうがあの子を使って取引しようとしてきたら、番人はとりあわないでしょうから」

「──それって……見捨てるってこと？」

「デニス・サンライズは、悪い男じゃないのよ」

　モリーの返事は答えになっていないように思えた。

　その手の中で二つに折られた二本目の煙草は、もう吸えそうもない。

「ただ、情に流されて、二十年以上も守りつづけてきた組織を危うくするほど愚おろかでもないわ。相手がＳｍＣなら、そんなことくらい理解しているでしょう。出方を探さぐるために取引を持ちかけるふりをすることはあっても、番人が応じるとは考えていないはずよ」

「じゃあ、ベアトリーチェは……」

　モリーの話から考えても、秩序の番人はベアトリーチェの居場所を知らない。場所がわからなければ、番人たちがベアトリーチェを救出することなどできるはずもない。仮に、ＳｍＣがベアトリーチェの身み柄がらと引き換かえに何かを要求しても、番人は応じない。

　要するに、絶望的だということだ。

　このまま状じよう況きようが変わらなければ、ベアトリーチェは確実に──

　だが、マリアローズにはその先を考える勇気がなかった。考えてしまうと、そのとおりになってしまいそうで、怖こわい。いや、そうなるのではないかと思うことが、恐おそろしいのだ。いつか近いうちにもたらされるかもしれない現実的な結果を、受け止めることができない。

　たった半日くらい前には、すぐそばにいたのに。

　ベアトリーチェが猿さる轡ぐつわを噛かまされたまま唱えてくれたおまじないが、まだ耳にこびりついているのに。

「君のせいじゃないわ」

　モリーが感情を抑おさえつけたような低い声でそう言って、折れた煙草を机の上に置いた。

「うちから秩序の番人に入団した子は何人もいて、そのうちの何人かはもう二度と帰ってこない。名前を呼んであげることも、抱だきしめてあげることもできない。ただでさえ死が溢あふれているこの街で、番人になれば、いつこんなことになってもおかしくはない。あの子も覚かく悟ごしていたわ。だから、番人になってからはここには来なかった。自分はもう死んだものと思ってくれと、口じゃなく行動でわたしに示していたの。そういう子なのよ」

「でも」

　でも、何だというのか。

　反論なんか一つも思い浮かばない。

　違う。そうではないのだ。

　モリーに会ってしたかったのは、こんなことではなかった。

　マリアローズは自分の膝ひざに額がつくほど深々と頭を下げた。

「……ごめん、モリー……」

　そうだ。

　最初は、自分の口からちゃんとモリーに話しておくのが筋だと思っていた。

　それがけじめだと。

　けれども、違う。たぶん、それだけではなかったのだろう。

　マリアローズは謝りたかったのだ。

　筋違いかもしれない。モリーに謝罪したところで、ベアトリーチェが戻もどってくるわけではない。モリーだって困るだけだ。そんなことはわかっている。

　だが、マリアローズはとにかく誰だれかに謝りたかった。

　謝るとしたら、その相手はモリー以外にいなかった。モリーなら。

　モリーなら、この気持ちを理解してくれて、慰なぐさめてくれるはずだから。

　君は悪くない、君に責任はないと言ってくれるだろうから。

　このつらさをやわらげてくれるに違いないから。

　──何て卑ひ劣れつな。

「……ごめん……僕……」

　そして、モリーはやはり、マリアローズを包みこむように抱きしめて、耳許で囁ささやいてくれた。

　君は悪くないわ、謝らなくていい、と。

　本当は、モリーこそ誰かに抱きしめられてしかるべきなのに、マリアローズがそんなことを言わせたのだった。

　最低だ。

Omenage 897 9th revolution 9th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区

〝彷徨える魂区(RSW)〟

chapter.10

# 裏切りの優先順位

　モリーの診しん療りよう室しつを出たあと、十七番警けい邏ら隊隊長フレドリック・イヌテロを名乗る黒い肌はだの番人に、ベアトリーチェと一いつ緒しよに監かん禁きんされていたときの状況を説明した。

　ただ、自分が脱だつ出しゆつした経けい緯いについては詳くわしく話さなかった。イヌテロもマリアローズのことなんかより、ＳｍＣの名に強い関心を持ったらしい。一応、銀の砦シルバリイホールドに同行を求められたが、断るとイヌテロはあっさり引き下がった。モリーの友人という肩かた書がきも物を言ったのかもしれないが、とにかく入手した新情報を早く持ち帰りたくて、気が急せいている様子だった。

　そんなわけで、わりと短時間で解放されたマリアローズは、しかし、まっすぐ動物園事務所には向かわなかった。

　一人きりで考える時間が欲ほしかったのだ。

　また皆みなと顔をあわせる前に、決めてしまいたかった。

　割りきれない、やるせない思いを抱かかえたまま、この件はこれで終わりにするか。

　それとも、気がすむまで、何らかの結果が出るまで、自分なりにあがいてみるか。

　が、いくら考えても、答えが見つかりそうな気配はない。そんなものが道のどこかに転がっているはずもなく、振ふり仰あおいだ空は嫌いや味みなくらい晴れていて、子供みたいに雲の形に意味を求めることもできなかった。

　そうしてあてどなく歩くうちに、高層寺院が建ち並ぶ第十三区にさまよいこんだのは、帰き巣そう本能というやつだろうか。

　まあ、あまりいい思い出のない場所だが、今は高層寺院ＧＭエンパシィの屋上を住居にしていることもあって、やはり勝手知ったる庭のようなものだ。ここならどこがやばくてどこがそうでないか、体が覚えているし、少々ぼんやりしていても危険は少ない。たまに凶きよう相そう悪相の坊ぼう主ずどもにちょっかいをかけられても、連中をうまくあしらう方法は、千通りくらい身につけている。

　当然、第十三区と第十一区の境目あたりに、崩くずれかけた高層

建築が密集している一角があることも承知していた。

　とはいえ、マリアローズは何か特別の意図があって、その一角に足を踏ふみ入れたわけではない。そろそろ潮時かと思い、第十一区へ足を向けた結果、たまたまそこを通り抜ぬける羽目になっただけだ。

　もっとも、ここはいつ倒とう壊かいしてもおかしくない建物だらけで、日ひ頃ごろから人がよりつかない。実際、何かの拍ひよう子しで本当に建物が倒たおれてくるらしいので、頭上には要注意だが、とにかく静かだ。考えをまとめるのには、意外と悪くない場所かもしれない。

　歩いていると、合成建材の欠片かけらがぱらぱらと落ちてきたり、どこかで何かが軋きしむ音が聞こえてきたりして、ちょっと洒落しやれにならない怖こわさを味わったりもするのだが。

　第十三区の高層建築群は魔ま導どう王おう時代の技術で建造されているため、その破片もほとんど劣れつ化かしたり、風化したりしない。そんなものがあちこちに散らばっているせいで、あまり足場もよろしくない。

「……こんなので、考え事なんかできるかって」

　時刻は十六時を回っている。まだ日が落ちる時間ではないけれども、この一角は奇き妙みように暗い。第十三区は高い建物ばかりなので、もとよりどこも日当たりは悪いのだが、それだけではない気がする。

　ここにはあるべきものが欠けているのだ。

　生の気配がない。

　アンダーグラウンドでさえ、異界生物フリークスたちの気配が身近にある。それがメリクルであっても、蜥蜴とかげ人であっても、亜あ人じんボーグであっても、たとえ半死者ハーフデッドであっても、そこにいて、動いているものがあれば、こんな薄うすら寒さは感じずにすむだろう。

　ここは廃はい墟きよだ。

　かつてα大陸中の商人たちが商売の拠きよ点てんとし、巨きよ万

まんの富を築いた第十三区〝摩スカイ天スク楼レイパ街ーズ〟。

　その栄えい華がを羨うらやみ、妬ねたみ、恨うらみ、また欲に目がくらんだ者どもの手によって略りやく奪だつされ、殺さつ戮りくされ、破は壊かいされて、第十三区は〝無人地帯ノーマンズエリア〟と化した。

　当時の面おも影かげが、ここには色いろ濃こく残っている。

　その後、第十三区の大半は、蘇そ生せい式を編み出した神に仕えし僧そう侶りよ、神官どもに目をつけられ、再び活気を取り戻もどして、いつしか〝彷徨ＲえるＳ魂区Ｗ〟と呼ばれるようになった。信じがたい耐たい用よう年数を誇ほこる古いにしえの高層建築群は、巨大な祭さい壇だんの設置場所として最適だったのだ。

　しかし、もっとも激げき烈れつな破壊にさらされたこの一角は、手つかずのままだった。

　失われた技術の結けつ晶しようとも言うべき高層建築は、多くの建築秘技を伝えるモトローリィの石工ですら、修復不可能だったからだ。

　さりとて、わざわざ取り壊こわすために骨を折る物好きもいなかった。

　ここは人に見放された廃墟だ。

　誰だれもいない。

　マリアローズ以外は、誰も。

　──いや。

　いる。

　誰かに見られている。

　視線を感じる。どこから？

　上か？

　見上げると、極限近くまで傾かたむいた高層建築に空が塞ふさが

れていた。その高層建築は、まだ地面と直角に屹きつ立りつしている別の高層建築にもたれかかり、支えられることで、何とか重力に抗あらがっているのだった。

　いるはずがない。ここには人間なんていない。あんな状態の建物の中に入る馬ば鹿かはいない。

　気のせいだ。

　頭を振って再び歩き出そうとした。

　だが、ふと一つの名前と顔が脳のう裏りをよぎり、まさか、と思った。

　まさか──でも、ありうる。

　実は、姿を見せなくなってからも、やつの気配を、視線を感じることが時折あった。

　そのたびに違ちがうと打ち消してきたが、今もそれとまったく同じだった。

「……ジアン……いるんだろ」

　小さな、かすれた声で呼んでみた。

　二回目は、大きな、自分でも正体のわからない、何らかの感情をこめた声で叫さけんだ。

「アジアン……！　こそこそ隠かくれてないで、出てきたらどうなんだよ！」

　マリアローズが張り上げた声は、周りの高層建築に跳はね返されて、むなしく反はん響きようするばかりだった。

　勘かん違ちがいだったのか。そんなはずはない。だって、現に──

　足音がした。

　小さな合成建材の欠片を踏み潰つぶす音だ。

　マリアローズは振り返った。

　そこに、やつがいた。

　棘闇ソーンダークの黒衣を身にまとい、黒くろ髪かみが落ちかかる冷たく薄うす青あおい瞳ひとみにマリアローズの姿を映して、口くち許もとに胡う散さん臭くさい笑みを貼はりつかせた虐殺人形カーネイジ・ドール、クラン・昼飯時ランチタイムの頭領マスター、アジアンが。

「やあ」

　アジアンはマリアローズから五、六メーテル離はなれた位置で足を止めた。

「久しぶりだネ。本当は、こうしてキミの前に姿を現すつもりはなかったんだけど……キミがあんなに情熱的にボクの名を呼んでくれたのは、初めてだったから。こらえきれなくなって、つい出てきてしまったヨ」

「──久しぶり……だって？」

　唇くちびるが、腹の奥の方が、震ふるえた。

　この男がいけしゃあしゃあと戯たわ言ごとを吐はいてみせるのは、今に始まったことではない。

　だが、今回は特に超最悪ＳＵＣＫだ。

「何が久しぶりだよ。今日、会ったばかりじゃないか。それも、ＳｍＣのやつなんかと一いつ緒しよに。どういうことだよ……何でだよ？　きみのクランって、あのクソッタレな連中とつるんでたわけ？　それはいいよ。僕の知ったことじゃない。だけど……それならどうして、僕を助けるような真似まねをしたんだよ……？」

「なぜって」



　アジアンは前まえ髪がみをかきあげて、短くため息をついた。

「キミを愛しているからに決まっているだろう」

「愛……？　ふざけるな！」

「ふざけてなんかいないサ。ボクはいたって真ま面じ目めだヨ。あれがキミでなければ、助けたりしなかった。キミだからだ。キミだから……！」

　アジアンは一いつ瞬しゅん、声を荒あらげかけて言葉を呑のみこみ、目を伏ふせた。

「──キミを見捨てることなんてできなかった。別に、だからどうしたと言うつもりはないヨ。キミは気にしなくていい。ボクがやりたくてやったことだ。キミに責任はない」

「責任、って……何だよそれ……？」

　アジアンは何か隠している。そんな気がした。「キミに責任はない」とは、つまり、マリアローズに責任があるということではないのか。けれども、いったいどんな責任が？

　思いあたることは一つしかない。

　六巡じゅん月げつ二十番日だったか。アンダーグラウンドＤ７地中砦とりでアヴァシーの出入口付近で、ＳｍＣの集団に襲おそわれていた侵入者クラッカーたちを見かけた。自分の過失もあったのだが、それに巻きこまれる形で殺されかけていたマリアローズを、間かん一いつ髪ぱつでアジアンが救った。妙みような武器か何かを使ってＳｍＣを殺し、残りを追い払はらったのだ。

　そう、ＳｍＣを。

　食い違いがある。

　アジアンは、ＳｍＣのナンバー２とも言われるジェイと行動をともにしていたのだ。昼飯時ランチタイムとＳｍＣが敵対しているとは考えづらい。少なくとも、現時点では。

　だが、二巡月以上前のあの時点ではどうだったのか？

　あの日、ＳｍＣを殺したアジアンが、今、どうしてＳｍＣのジェイと一緒に？

　この期間に、両者の関係を変化させる出来事があったのか？

　あの日を境に、急にマリアローズの前に出てこなくなったこと

と、何か関係が？

「いつだったか、クランに入れてくれないかとキミに頼たのまれたことがあったネ」

　アジアンは動かない。近づいてこない。

　この距きよ離りが限度なのだとでも言うように。

「ボクは拒こばんだ。あの判断が正しかったのかどうか、今でも自信はない。でも、キミには見せたくなかった。知られたくなかった。知れば、キミはボクをもっと嫌きらいになるだろう。情けない、見下げ果てたヤツだと思うだろう。だけど、ボクにも守らなければならないものがある。ボクを信じている馬鹿な連中がいるんだ。放り捨てて逃にげ出すわけにはいかない。もう……これ以上はネ」

「僕に、何を……何を見せたくなかったっていうんだ」

「格好悪いところをサ」

　アジアンはそう言うと、マリアローズに背を向けた。

「──色々あって、今はＳＩＸに飼われている身だ。場合によっては、キミのいるＺＯＯとも敵対するかもしれないネ。お互たがい別々のクランにいれば、こういうことだってある。そうなって欲ほしくはないが、そうならざるをえないのなら、仕方ない」

「仕方ない、って……」

　そうなってしまったら、アジアンは敵として自分を殺すのだろうか。

　想像しにくい状じよう況きようだけれども、アジアンがＳｍＣに与くみしているのだとすれば、敵味方になる可能性がないとはいえない。そして、マリアローズがその決断を下してしまえば、その可能性は現実のものとなりうる。もし、ＳｍＣにとらわれているはずのベアトリーチェを救い出すために、何かしようと思えば、結果的にそうなってもおかしくない。

　だが、そもそも、そんなことが可能なのか。

　無力な地虫に等しいマリアローズが、いくら地べたを這はいずり回ったところで、ベアトリーチェを救い出すことなんてできるものか。

　何の手がかりもないというのに。

　──いや。

　手がかりはある。

　というより、手がかりを持っていそうな人物が、すぐそばにいる。

　ただ、仮にアジアンがベアトリーチェの居所を知っていたとしても、それを洩もらすことが何を意味するのか。マリアローズにも理解できないわけではなかった。

　要するに、裏切りだ。手を結んでいると思われるＳｍＣへの背信行こう為いに他ほかならない。

　加えて、その情報をもとに何か行動を起こせば、マリアローズはＳｍＣと明確に敵対することになる。

　そうなれば、当然、アジアンの敵に回ることにもなって、つまり──

「あの娘むすめは」

　不意にアジアンが顔を半分だけ振ふり向かせて、やけに冷ややかな声を出した。

「きみの友だちなのかい。番人の」

「……友だちっていうか。知りあったばかりで」

「そう。でも、キミは彼女のことが気になっているんだろう」

「どうして」

　むろん、図星ではあった。

「──何で、そんなこと……きみにわかるのさ」

　しかし、なぜ見み透すかされているのか。

　アジアンは寂さびしそうに、少しだけ笑った。

「わかるヨ。キミのことなら、全部」

　それは、これまでも何度かアジアンの口から聞かされたことのある台詞せりふだった。得意の戯ざれ言ごとにすぎないと思っていた。

　本当にそうなのか。

　わからなくなってくる。

　わからない。

　だって、マリアローズはアジアンのことをまったくと言っていいほど知らないのだ。

　それなのに、アジアンはマリアローズのことが全部わかると言う。

　実際、マリアローズの胸の裡うらを見通しているかのようだった。

「あの子はサックドールにいる。場所は、番人なら知っているんじゃないかな。闇やみ市いちにある飲み屋だヨ。厨ちゆう房ぼうの、一番奥の冷蔵庫が隠かくし扉とびらになっていて、その先にＳＩＸの隠れ家ががある。下水道からも、隠れ家に直通する道があるみたいだネ。そっちは詳くわしくは知らない。ボクが教えてあげられるのはここまでだ」

　アジアンは行ってしまう。結局、マリアローズにわかったことは、それだけだった。

　そのとおりになった。

　アジアンはマリアローズと視線をあわせることもなく、足音も立てずに、早足で歩き去っていった。

　その姿が見えなくなってから気づいた。

アジアンはついに、マリアローズの名を一度も呼ばなかった。

Omenage 897 9th revolution 9th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区・第二王立銀行内
〝動物園事務所(ズーズオフィス)〟

chapter.II

# 当たり前のように

「──というわけで」

　マリアローズは大円えん卓たくに両手をつき、それぞれ着席しているＺＯＯの面々を見回した。

「誠に勝手ですが、僕マリアローズは、これから単独行動をとらせてもらいます」

「ふむ」

　トマトクンが腕うで組ぐみをして首をひねった。

「つまり、何だ。その……ベアトリッチャ、だったか」

「ベアトリーチェ」

「おお、そうだったな。で、そのベアトリーチェが、ＳｍＣと一いつ緒しよにお前が拉ら致ちられたあと、龍りゆう州しゆう人を身み柄がらに引き渡わたされて……む？」

「ぐちゃぐちゃになってるし。正しくは、龍州人がベアトリーチェと僕を拉致して、そのあと、ベアトリーチェだけＳｍＣに引き渡した。それで、今、ＳｍＣにつかまってるベアトリーチェを助けたいってこと」

「なるほどな。だが、なぜお前がそのベアリトーチャンを助けなきゃならんのだ」

「何でとーちゃんなんだよ！　だから、ベアリトーチェだってば！」

「それを言うならベアトリーチェやろ」

　世界中で誰だれにツッコまれるのが一番腹立たしいかといえば、それはもちろん半魚人だ。しかし、構えば構うほどつけ上がるだけなので、華か麗れいに無視スルーすることにした。

「ま、まあ、ベアトリーチェを助けたいっていうのは、何ていうか……」

　そのあとに続けようとした話の内容が内容なので、あまり華麗にはならなかったが。

「僕がよく、モリー・リップスっていう人の世話になってることは知ってるでしょ。モリーの話は、きみたちにもしたことがあるし。第六区にあるアサイラムの」

「孤こ児じとか、心の病気にかかった人たちを保護したり、格かく安やしゆで医い術じゆちゆ式しきの治ち療りようをしているところよね」

　直接、面識はないようだが、同じ医術士ということもあってか、ユリカはモリーのことをよく知っているらしい。

「色々と言われることもあるけど、医い術じゆちゆ士しとしてだけじゃなく、一人の人間としても尊しよん敬けいできる凄しゆごい人だと思うわ。もしかして、ベアトリーチェという子はアサしやイラム出身なの？」

「うん。それで、僕はモリーにたくさん借りがあるし。いや、借りっていうか……恩っていうか。早い話、と──友だちなんだよね。や、友だちっていうのも何か、あれだけど」

「……マリアさんが……」

　サフィニアが控ひかえめに微笑ほほえみながら言った。

「自分から誰かのことを……お友だちと呼ぶのを聞いたのは……これが初めてのような気がします……」

「そ、そお？　そうかな？　ま、確かに、僕は限りなく友だち少ないけど……」

「そ……そういう意味では……」

「でも、あの子はマリアのお友だちでしょう？　昼間の──コロナしゃん、だった？　ちょっと変わった子だけど、お人形しゃんみたいでかわいかったわ」

「あれは違ちがうから！　友だちなんかじゃないって、マジで！　てゆうか、ユリカの方がずっとかわいいし。コロナなんて、髪かみとかボサボサでキューティクルゼロだよゼロ！」

「どうでもええねんけど、何や話が錯さく綜そうしとって、さっぱりわけがわからんのやけど」

「うっさい沈ちん黙もくしてろ腐くされ魚！　顔が錯綜してるきみに言われたかないね！」

「何やと！　誰がおっぺけぺーの錯綜顔じゃ！　そのマナコしっかと見開いて見てみぃ、ほれ、ちゃあんと目が二ぁーつ鼻が一ぉーつ口が一ぉーつで耳も二つ揃そろっとるやろが！　どや！」

「はあ……その程度の最低条件を満たしてることが、そんなに自じ慢まんなわけ？」

「ンなわけないやろ！　そら悲しいわ！　境界線上はめっちゃつらいがな！　涙なみだで枕まくらが濡ぬれへん日はないっちゅうねん！──て、ダァホ！　どの境界線上じゃ、何と何の境界やねん、人間と非人間かい！　これでもわしはれっきとした人間や！」

「そんな、自分でも信じてないようなこと、無理して言い張らなくていいよ？」

「信じとるがな！」

「自分にそう言い聞かせないと、とてもじゃないけど生きていけないんだね」

「せや、生きるためやからな！　しゃあないな！　もーええ！　それでええわ！　そういうことにしといたってくれ！」

　カタリがやけくそ気味に屈くつ服ぷくしたところで、思いがけない人が、思いがけないことをマリアローズに訊きいてきた。

「惚ほれマシタか」

「へ？」

　最初、何のことかわからなかった。

　ピンパーネルは真顔というか、いつもながらの無表情だったし、「惚れる」という言葉が彼の口から飛び出したのもやや意外だった。

　だが、もちろん、ピンパーネルの質問の意味はすぐに理解した。

　で、考えてしまった。

　惚れる？　誰が？　誰に？

　もしかして、自分が、ベアトリーチェに？

「ちっ──」

　そんなことは思いもしなかった。とんでもないことだ。

　しかし、ベアトリーチェについて話していたときのアジアンの声がやけに冷たかったことを思い出して、そうか、そういうとらえ方もあるのかと納なっ得とくはした。

　たとえば、付き合いはきわめて短いとはいえ、一目惚れとか。極限状態を二人ですごしたせいで目覚めた恋こいとか。よく聞く話だ。そう誤解されても、やむをえないのかもしれない。だが、そんなことはありえない。あっていいはずがない。

　それは、そもそも──無理なのだ。

「ち、違うよ！　そういうのじゃないから！　僕はただ、何もしないと絶対に後こう悔かいすると思うし、とにかく、ほっとけないだけで！」

「……放っておけないのは……好きになってしまったからでは……」

「サーフィーニーアー？　きみ、そんなこと言っていいわけ？　後悔しない？　いいの？　ここで言っちゃうよ？　目の前で言っちゃっていい？」

「え……？　え？　え？　な……何をですか……？」

　サフィニアは真っ赤になった耳を隠かくすように両手で頭を抱かかえ、うろたえている。その仕草が何だかやけに愛らしくて、こんな仲間たちに囲まれ、こんなふうに馬ば鹿か話をしていられる自分の状じよう況きようをあらためて認にん識しきさせられて、急に息が苦しくなった。

　ベアトリーチェはどんな目に遭あっているのだろう。

　それ以前に、幼い頃ころから剣けんを振ふり回し、厳しい鍛たん錬れんの果てに番人になった彼女は、どんな思いを抱えて生きてき

たのだろう。

　むろん、トマトクンについてはさすがによくわからないが、サフィニアだって、ユリカだって、あのカタリさえ、たぶんピンパーネルも、たくさんつらいことがあり、それを乗り越こえて今ここにいる。それはマリアローズも同じだ。

　けれども、過去に何があったにせよ、こうして笑うことができる。

　戦いの場ではお互たがいの背中を任せて庇かばいあい、そうでないときは、誰だれかを好きになったり、冗じよう談だんを言いあったりして、一いつ緒しよに笑いあう仲間がいる。

　では、ベアトリーチェは？

　母を小悪党に殺され、番人に助けられて、番人になり、義とやらのために剣を振るって、挙句、その秩序の番人に見捨てられる。

　そんな終わり方をする人生とは何だ？

　モリーは彼女も覚かく悟ごしていたと言ったが、覚悟していれば何でもいいのか？

　覚悟さえしていれば、見捨てられて死ぬのも平気だというのか？

　たとえ、そうだ、と答える者がいたとしても、マリアローズは信じない。

　嘘うそだ。

　誰も彼も全員とは言わないが、たいがいの人間は一人で死にたくなんかないはずだ。

　一人はつらい。

　マリアローズはそのことを実感としてよく知っている。マリアローズもずっとそうだったからだ。少なくとも、そういう時期があったからだ。

「──で、マリア」

　トマトクンに名を呼ばれて、マリアローズは顔を上げた。ベアトリーチェのことを考えるうちに、うつむいてしまっていたのか。

　見れば、ユリカやサフィニアやカタリ、ピンパーネルまで、四者四様の気き遣づかわしげな視線をマリアローズに注いでいる。

　今のベアトリーチェは、きっとこうした眼まな差ざしに励はげまされることさえないだろう。

「具体的に、お前はこれからどうするつもりなんだ」

「ええと……それは」

　当然、何の策もなく単独行動をとるなどと宣言したわけではない。一応、ある。正直、ないこともないという程度で、かなり他力本願ではあるが。

「とりあえず、秩序の番人に、ベアトリーチェの居場所を話してみようかなと思ってるんだけど。いくら何でも、僕一人で救い出すなんて無む謀ぼうすぎるし。僕はベアトリーチェと一緒につかまってたわけだから、話くらいは聞いてくれると思う。モリーのところで、一度、番人にＳｍＣ絡がらみのことを説明したりもしてるしね。ただ、アジアンの情報が本当かどうか、確証はないから──」

「ふむ。アジアンか」

　トマトクンはアジアンのことを知っている。一度、やりあったことがあるからだ。

　しかも、場所は鉄てつ鎖さの憩いこい場で、きっかけはマリアローズだった。という言い方は誤解を招くかもしれない。要するに、マリアローズに変態行こう為いを働こうとしていたアジアンを、たまたま近くにいたトマトクンが止め、あわや刃にん傷じよう沙ざ汰たに発展しかけたということだ。

　そういえば、あのときは、鉄鎖の憩い場で剣を抜ぬくなんて、何て大だい胆たんな連中だと思った。

　それが最近ではもう、龍州人は暴れるわ、ベアトリーチェは居合いでそれを斬きり殺すわで、不文律も御ご法はつ度とも糞くそもない。

　めちゃくちゃな人間が増えているのか。それとも、たまたまそういう種類の人間と縁えんがあるのか。

　ともあれ、そんなわけで、トマトクンとアジアンとの間にはちょっとした経緯いきさつがある。やつが昼飯時ランチタイムの頭領マスターだということも、あとでトマトクンには教えた。

　トマトクンがそれをちゃんと記き憶おくしていたのは小さな奇き跡せきだが、もともと昼飯時ランチタイムはその筋では結構、有名らしい。また、サフィニアの兄弟で子しにあたるベティという魔導士ウイザードが所属していることもある。マリアローズにとってはもちろん、ＺＯＯにとっても、昼飯時ランチタイムは色々な意味で因いん縁ねん浅からぬクランなのかもしれない。

「やつの動きも妙みようだな。どうやら昼飯時ランチタイムがＳｍＣの傘さん下かに入ったのは事実のようだが、そうだとしたら、やつのやっていることは危うすぎる」

「……うん」

「仮にも数十人からの命を背負う身だ。色いろ恋こいに狂くるっただけとは思えんがな」

「い、色恋って何だよ」

「やつはお前のことを好いてるんだろう」

「知らないよ！　そんなこと！」

「まあ、いくら何かを思っても通じん相手もいるからな」

　よりにもよって、トマトクンがそんなことを言うものだから、マリアローズは思わずちらりとサフィニアの表情をうかがってしまった。

　予想どおり、サフィニアは一生分の不幸をいっぺんに背負わされたような暗い顔をしている。もとより陰かげのある、というか、陰のありすぎるサフィニアだが、その変化にまったく頓とん着ちやくせず話を続けるトマトクンこそ、何を思っても通じない相手ではないか。

「しかし、お前を助けたのはまだしも、バリアトーチャンの件はい

かにもまずい」

「ベアトリーチェ」

「うむ。そうだったな」

　トマトクンは無む駄だに重々しくうなずいた。

「とにかく、やつにも何か思おも惑わくがあるのかもしれん。だが、お前を罠わなに嵌はめようとしているとは考えにくいな。情報の確度については、それほど疑う必要はないんじゃないか」

「そう……かな」

　個人的には、アジアンを簡単に信じるなんて危険きわまりないと思うが、自分の感情を一いつ切さい排はいして考えれば、確かにトマトクンの言うとおりかもしれない。

　だとすると、何とか秩序の番人を動かすことさえできれば、ＳｍＣの先手を取るところまでは可能性がある。

　その先は正直、全然見通しがつかないけれども、手をこまねいて見ているよりはいくらかマシだろう。

「──うん。それなら、僕にできることもありそうだし。番人が動くようだったら、頼たのんでみてどうなるかはわかんないけど、その中に加えてもらうって手もあるしね」

「どっちにしても、急いだ方がよさそうだな」

　トマトクンが椅い子すから立つと、ほぼ同時にピンパーネル、続いてカタリ、ユリカ、サフィニアの順で立ち上がった。

　座っているのは、なぜかマリアローズだけだ。

「へ？　みんな……どこに行くの？」

「む？　お前こそ、行かないのか」

　トマトクンは片方の眉まゆをつり上げた。

「肝かん心じんのお前が行かないでどうする」

「いや、そりゃもちろん行くけど。そうじゃなくて、僕が訊きいてるのは、きみたちがどこに行くのかってことで」

「今の番人の本ほん拠きよ地ちといえば、銀の砦シルバリイホールドだったか」

「せやな。第四区や」

　カタリがトマトクンにうなずいてみせてから、マリアローズを見て不満げに魚顔を歪ゆがめた。

「何しとるん。事は急を要するんやろ。早うせえや。わしらはもう準備万ばん端たんやで」

「や、だから、急いでるけど──何できみたちが準備万端なわけ？」

「急いどるからやないか」

「だから、何できみたちが急がないといけないのさ。僕、単独行動とるって言ったよね？」

「ああ、何やそないなこと言うとったな。ほんで、それがどないしたん」

「どないしたん、って……」

　マリアローズは、自分が何かとんでもない間ま違ちがいを犯おかしているような気がしてきた。

　だが、本当に間違っているのだろうか。

　だって、これはマリアローズの個人的な問題だし、同じクランの仲間とはいえ、皆みなを巻きこみたくはない。それに、ＺＯＯがこぞってこの件に首を突つっこんだりすれば、クランとしてＳｍＣと全面的に敵対するような事態に陥おちいりかねない。Ｓ＊Ｋ、王龍、骨龍の龍州人連合に目をつけられている現状で、これ以上、敵を増やすのは好ましくないだろう。

　そうだ。間違ってはいないはずだ。

　けれども、マリアローズが自説を主張するより早く、トマトクンが大おお仰ぎようにに片方の眉と唇くちびるの片かた端はしをつり上

げて言った。

「ここはひとつ多数決といくか。マリアの単独行動に反対なやつは手を挙げろ」

　躊躇ためらうそぶりを見せる者は誰だれ一人としていなかった。

　マリアローズ以外の全員がーいつ斉せいに挙手した。



「じゃあ、次だ。マリアに付き合うやつは？」

　結果は同じだった。中でも、ユリカがやけに勢いよく、背せ伸のびでもするみたいに手を挙げたのが印象的だった。

　トマトクンは何事もなかったかのように、扉とびらの方へ顎あご

をしゃくってみせた。

「さっさと行くぞ」

「……はい」

　マリアローズはもうそれ以上、何も言わなかった。言えるはずがなかった。

　とてもではないが、面と向かっては口にできないような、恥はずかしい言葉しか出てきそうになかったからだ。

Omenage 897 9th revolution 9th day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区

“銀の砦（シルバリイホールド）”

chapter.12

# 義と情の果て

環かん状じよう通に面してそびえ立つ銀の砦シルバリイホールドは、その名に違たがわない、まさしく砦とりでだ。

何しろ、中央の主しゆ塔とうを中心として、前後左右に配された四つの支塔の内部には、各種防衛施し設せつはもちろん、厩きゆう舎しや、糧りよう食しよく生活必ひつ需じゆ品武具等の倉庫、居住空間まで備えている。それらの構造物が、高さ十メーテルを超こえる強固な壁かべによって囲まれ、厳重に守られているのだ。

その偉い容ようは他を圧してあまりある。

正面に一つだけある威い圧あつ的な門も、常時、多数の番人に固められていて、正直、かなり近寄りがたい。

マリアローズも、まさか自分がこの砦の中へ足を踏ふみ入れることになろうとは、つい昨日まで夢にも思わなかった。

今日にしても、すんなりとは入れてはもらえないだろうと考えていたし、もとより、総長デニス・サンライズに面会しようだなんて思おも惑わくは微み塵じんもなかった。

だが、現にマリアローズは、主塔五階の総長室を目の前にしている。

なぜか。

トマトクンのせいだ。

いや、おかげというべきか。

むろん、門のところでは、守衛の番人たちに行く手を塞ふさがれた。

ところが、トマトクンが自らの名を告げた上で「デニスに会わせろ」と──本当にこのままの台詞せりふを、ややぞんざいな口調で言い放つと、これに腹を立てて顔を真っ赤にした守衛の一人が、それでも一応、確かく認にんのために中へ入っていった。守衛はすぐに戻もどってきたが、どういうわけか一転して殊しゆ勝しよう顔でかしこまり、別の番人を伴ともなっていた。

二番親衛隊隊長マシュー・シュナイデルを名乗ったその番人は、三十代半ばくらいの実直そうな男で、トマトクンと面識があったよ

うだ。

　以後、トマトクンとそのご一行様はかなり丁重な扱あつかいを受け、シュナイデルの案内で砦の中に通されて、そのまま総長室の前まで来てしまった。

　それにしても、銀の砦シルバリイホールドの中は、いかにも堅けん牢ろうそうで装そう飾しよく性の低い外観同様、徹てつ底てい的に無む駄だを省いた造りだ。壁、床ゆか、天てん井じようやら階段やら窓やら、どこもかしこも似たような印象だから、味気ないといえば味気ない。

　すれ違う番人たちも、例の銀色の鎧よろい姿か、胸に純ピユア血・ブラのツド・司祭プリーストの紋もん章しようが刺し繍しゆうされた紺こん色いろの衣服を着ているかの二つに一つだ。ベアトリーチェが言っていたように、女性はそうとう少ないらしく、見た限りでは男しかいない。

　質しつ実じつ剛ごう健けん、とでも表現すればいいのか。

　何だか、このエルデンにはまるで似合わない言葉だが、階段を上って廊ろう下かを進んだ先にある総長室のドアも、他ほかの部屋より少々立派なくらいで、大おお仰ぎようなものではなかった。ドアの両側に鎧を着た番人が一人ずつ立っているのも、決して物々しい警備態勢とはいえないだろう。

　その仰々しさを排はいした簡素さは、シュナイデルが総長室のドアを開けるまでの一連の手続きにも表れていた。

　というか、手続きとも呼べない。

「クラン・ＺＯＯ園長マスター、トマトクン殿どのをお連れいたしました」

　シュナイデルがドアを二回ノックしてそう告げると、いきなり内側からドアが開かれた。

「おう、来たか」

　ドアを開けたのは、ぼさぼさの黒くろ髪かみのぶんを含ふくめればトマトクンに匹ひつ敵てきするくらい背が高く、不精髭ひげを生やして、眠ねむそうに目を半開きにした男だった。

男が身につけているのは他の番人たちも着ていた紺色の衣服だが、詰つめ襟えりの上衣の前を開けているせいで、全体的にだらしない雰ふん囲い気きが漂ただよっている。頭を掻かいたり、唇くちびるを突つき出すようにして不精髭をさすったりなどの仕草も、いかにもものぐさといった感じがした。

「あんたがトマトクン？」

「ああ」

「おもしれぇ名だな」

しかも、失敬な男のようだ。

それでいて、そんなことを言ったあとに顔をくしゃくしゃにして笑ってみせた表情には妙みような愛あい敬きようがあり、嫌けん悪お感や不快感を抱いだかせない。

いずれにせよ、一いつ般ぱん的な番人のイメージからほど遠いタイプであることは間ま違ちがいないだろう。

「俺は七番突とつ撃げき隊の焔ホムラだ。まぁせっかくだから覚えといてくれや。とりあえず入れよ。総長の他にも小うるせぇのが何人かいるが、あんまり気にしねぇでいいぜ」

男がそう名乗ってドアを開け放ち、トマトクンご一行様に道を空けた瞬しゆん間かん、マリアローズは頭の隅すみに引っかかりを感じた。その正体に気づいたのは、ドアを支えている焔ホムラの横を通ったときだった。

そうか、焔ホムラ――ベアトリーチェやモリーの話に何度も出てきた。ベアトリーチェを助けて、アサイラムに預けたのが焔ホムラという男だったはずだ。面おも白しろい人だとか、気まぐれだが、やさしいとか。この間、焔ホムラの奥さんがどうしたとか、何とか。

確かに、これで番人だというだけでも、十分面白そうな男ではある。

一方、焔ホムラ以外の総長室に居並んだ面々は、様々な意味で見るからに只ただ者ものではない。

まず最初に目に入ったのが、何といっても秩序の番人総長だ。

　マリアローズは初対面なのだが、他の番人たちと同じ紺色の服を着たその男がデニス・サンライズだということは、すぐにわかった。

　奥行きが十メーテルほどで、幅はばは六、七メーテルといったところだろうか。広いといえば広いものの、動物園事務所よりは狭せまい総長室の奥に設しつらえられた執しつ務む机の前に、堂々たる体たい軀くの男が背筋を伸のばして立っている。

　亜あ麻ま色いろの髪かみをきっちりと後ろに撫なでつけ、赤せつ褐かつ色しよくの瞳ひとみに鋭するどくもぬくみのある輝かがやきを宿して、形のいい髭を蓄たくわえた彼は、四十代くらいに見える。が、実際は五十を超こえているはずだ。

〝太たい陽よう鬼き〟。

　彼が両手を柄つか頭がしらにかけている鞘さやごとの大刀は、モトローリィの名めい匠しようダグラス・トゥースの傑けつ作さく、刀身一・二メーテルの豪ごう刀「日にち輪りん」だろう。腰こしに差しているのは、脇わき差ざしにしてはずいぶん大おお振ぶりな、同じくダグラス・トゥースの「月げつ明みよう」か。

　噂うわさによると、太陽鬼がこの二振ふりの愛刀で斬きり捨てた悪党は、三桁けたに上るともいう。

　もしかすると、魔ま導どう王おう時代の秘宝を除いたいわゆる現代刀とう剣けんで、「日輪」と「月明」ほど有名な銘めいは他にないかもしれない。

　エルデンでは、太陽鬼自身がすでに半ば生ける伝説なのだ。

　そして、その向かって右には、眉まゆ太く、いかにも狷けん介かいそうな容よう貌ぼうで、左頰ほおと右の眉まゆ尻じりに古傷がある黒髪黒目の〝死神〟羅ラ叉サが控ひかえていた。

　羅ラ叉サもまた紺色詰襟の服を身にまとい、やはり鞘ごとの大刀を持っている。

　だが、死神は太陽鬼と違って、左手で鞘を握にぎりしめていた。右手を柄にかければ、いつでも抜ぬける構えだ。実際、かなり物ぶつ騒そうな眼光がマリアローズたちに浴びせられているけれども、死神の逆側、太陽鬼の左脇に立つ美女が、その威い圧あつ感かんを

いくぶんかやわらげていた。

　彼女が身につけている衣服は、ベアトリーチェが着ていたものと同じだ。紺こん色いろのジャンパースカートと胸に純ピユア潔・ブラのツド・司祭プリーストの紋もん章しようが刺し繡しゆうされているジャケット、白いブラウスの組み合わせで、胸むな元もとに臙えん脂じ色いろのリボンを結んでいる。

　ただ、彼女はベアトリーチェよりずいぶん背が高く、手足が素す晴ばらしく長くて、すらりとした体型なのに胸は大きい。細い顎あごと真ん中で分けたまっすぐな黒髪、つり上がった一ひと重え瞼まぶたの黒い目が印象的な、いわゆる東部美女というやつだ。それも最上級の部類だろう。

　エルデンには龍りゆう州しゆう人などの東部人も多いが、これほど美しい女性はそうはいまい。

　物もの珍めずらしさも手伝って、マリアローズは思わず彼女に目が釘くぎ付づけになってしまった。彼女に微笑ほほえまれたときには、どきりとして、自分の頰が少々熱くなるのがわかった。

　それで——というだけではないが、彼女のさらに左に控えている男には注意が向かなかった。その男は何だか影かげが薄うすい感じで、特に重要人物とは思えなかったせいもある。

　ともあれ、太陽鬼に死神、東部美女と焔ホムラ、シュナイデル、それに加えて目立たない中肉中背の男の合計六人と、トマトクン、マリアローズらＺＯＯの六人が、図らずも同数同士で対面したことになる。

　最初に口を開いたのは、太陽鬼デニス・サンライズだった。

「一昨日は久方ぶりに貴公と飲み交かわすことができ、重ちよう畳じよう至福であった。して、今日は何用でわざわざ斯か様ようなあばら屋まで参られた」

　太陽鬼の髭に半ば隠かくれた口くち許もとには、かすかな笑えみが浮うかんでいる。また、太陽鬼が赤褐色の瞳をトマトクンに向けて話した内容からも、二人が知ち己きであることは明白だ。

　一昨日。

　そういえば、大食大路グラトン・アレイで龍州人に襲おそわれ、死神やベアトリーチェら番人の一隊に助けられたあと、サフィニアが言っていた。トマトクンは夕方から、昔の友人に会うとかどうとか。

　つまり、その昔の友人こそが太陽鬼で、だからこうしてあっさりここまで通されたのだろう。

「うむ。それなんだが」

　トマトクンはそこで一呼吸置くと、顎を撫でた。何か考えこんでいるようだ。

　嫌いやな予感がして、それはすぐに的中した。

　トマトクンはやおら振り返るなり、マリアローズの肩かたを押して前に進み出させた。

「説明はこいつがする。うちのマリアローズだ」

「──う……」

　だが、もともとマリアローズが言い出したことだ。どうして拒きょ否ひできよう。

　とはいえ、太陽鬼と、死神と、美女と、焔ホムラと、シュナイデルと、影かげ薄うす男の視線をいきなり一身に受け、平然としていられるほど強心臓の持ち主ではない。マリアローズは心臓に剛ごう毛もうが生えてくるように祈いのりながら胸に手を当てて、一度だけ深呼吸をした。

「あ、あの……その、は、はじめまして」

　言ってしまってから、しまった、と思った。先方もどう反応していいかわからない様子で、何とも形容しがたい空気が流れている。やはり、場ば違ちがいな挨あい拶さつだったか。

　けれども、覆ふく水すい盆ぼんに返らずだ。

　マリアローズは気を取り直して、用件に入ることにした。

「実は、今日、こ、ここに来たのは、そ、そちらのべ、ベアトリー

チャンの」

「ベアトリーチェやろ」

　すかさず後ろから小声でツッコミが入った。マリアローズは振り向かずに裏拳バツクナックルを魚顔の横っ面つらに叩たたきこみ、半魚人を黙だまらせてから話を続けた。

「えー、ベアトリーチェの──ベアトリーチェさんのことで」

「確かに、その者は秩序我のが番人団に籍せきを置いておるが。それが何か」

　太陽鬼の表情は動かない。彼だけではなく、他ほかの番人も皆みな、顔色一つ変えていなかった。あれほど大勢の番人たちが街中をうろついていて、それを命じたのは彼らに違いないし、ベアトリーチェの身み柄がらがＳｍＣの手に渡わたったことは、当然、彼らも知っているだろうに。

　それにも拘かかわらず、こんな態度をとってみせる。

　大きな組織とは、こういうものなのかもしれない。

　だが、マリアローズにしてみれば、どうも割りきれない。

　気のせいだろうか。

　彼らはもうベアトリーチェのことを諦あきらめていて、今も幹部連中で集まり、その後の処理について協議していたのではないか。穿うがちすぎかもしれないけれども、そんなふうに思えてならないのだ。

　何だか、だんだんと腹が立ってきた。

　根こん拠きよはほとんど想像だし、別にマリアローズが怒おこる筋合いではないのだが、頭にくるものは仕方ない。

　こうなると、逆に緊きん張ちようなんて吹ふき飛んでしまった。太陽鬼の物もの腰ごしは古めかしいほどに堅かた苦くるしくてご大層だが、ゆえあってマリアローズも、ラフレシア貴族の礼れい儀ぎ作法は一通り身につけている。その気になれば、大半のエルデン市民よりも優ゆう雅がに、慇いん懃ぎん無礼なまでに堂々と振ふる舞

まうことだってできるのだ。

「僕は昨日から今日未明にかけて、彼女とともに、龍州人のクラン、Ｓ＊Ｋ、王龍、骨龍によって拉ら致ち監かん禁きんされていました。その後、彼女がＳｍＣに引き渡されたことは総長殿どのもすでにお聞き及およびのことと存じますが、いかがでしょうか」

「いかにも」

　太陽鬼がうなずいて少しだけ目をすぼめた。

「マリアローズ殿と申したな。お主の名も聞いておる」

「彼女の消息については、何かご存知ですか」

「残念ながら、我が知りうる限りにおいては、いまだ何の手がかりもえておらぬ」

「そうであれば、微び力りよくながら、お役に立てるかもしれません」

「ほう」

「ですが、その前に一つだけ、総長殿にお尋たずねすることをお許し願えないでしょうか」

「何なりと」

　太陽鬼が短く答えた。すかさず半歩前に出て、挑いどむように太陽鬼をねめつけたマリアローズのやり方は、お世辞にも礼にかなっているとは言いがたい。

　しかし、マリアローズはあえてそうした。

　そうでもしなければ、この男の鉄面皮を剥はがすための糸口はつかめないと思った。

「総長殿はベアトリーチェを救いたいと考えておられますか」

「我が団に籍を置く者は──」

　だが、それくらいで揺ゆらぐ相手では、もちろんないようだ。

「ことごとく血を分けた我が子同然と思うておる」

「では、僕がベアトリーチェの居場所を今ここでお教えすることができれば、彼女を救出するために力をつくしていただけますか」

「できうる限りの手は打とう」

「世には我が子を金に換かえる恥はじを知らない親もおります。よもや総長殿は、利を計り子を見捨てる非情な親ではありませんね」

「いかなる意味で申しておるのかな」

　ようやく、太陽鬼の声音がわずかに怒ど気きをはらんだ。死神の眼光も刺とげ々とげしさを増し、東部美女は柳りゅう眉びをひそめて太陽鬼の表情をうかがっている。焔ホムラだけは面おも白しろがるようににやにやしているが、シュナイデルは落ち着かなげに視線を右往左往させているし、影かげ薄うす男もマリアローズを睨にらんでいるようだった。

　こうなると、かえって度胸が据すわるというものだ。

「そのままの意味です。僕は彼女を救い出していただけるかとお訊ききしました。総長殿はできうる限りの手を打つと仰おつしやいました。ただちに兵を差し向けるとは仰っていただけなかった。ですから、僕は念を押してお尋ねしたのです。まさか、大の虫を生かして小の虫を殺すみたいなもっともらしい糞くそふざけたことをのたまって、ベアトリーチェを見捨てるつもりじゃないだろうな、この髭ひげオヤジってね！」

「──貴様……！」

　調子に乗りすぎたか。死神が大刀を抜ぬきかけたときには、冷ひや汗あせをかいた。まあ、死神は太陽鬼が鞘さやごとの大刀「日輪」を突つき出して制止してくれたものの、正直、その太陽鬼の方が何倍も怖こわかった。

「子を失って悲しまぬ親がどこにいよう」

　太陽鬼はうつむき加減で、眉み間けんに深い縦たて皺じわを刻んでいた。

　その姿勢や、押し殺したような声のせいでは、たぶんない。心理

的なものなのだろうが、とにかく物もの凄すごい威圧感プレッシャーで、マリアローズはまったく身動きがとれなかった。呼吸さえできないほどだった。

「しかし、我には四百余名の子がおる。子一人を救わんがため、その他大勢の子らを死地に追いやるべきか否いなか。理解など求めぬ。ただ、我は我の責任、義務として下すべき決断を下し、その罪と咎とがは我がこの身に背負う。お主ごとき小こ童わつぱにいかなる差し出口を叩たたかれようとも、我は我が名と全生命を賭とし、我が意志に従って事を行うのみ」

「……それを」

　とはいえ、マリアローズもここで引き下がるわけにはゆかない。

　確かに、太陽鬼デニス・サンライズの言葉は、秩序の番人という大きな集団の代表者、指導者に相応ふさわしく、正当性もあり、おそらく間ま違ちがっていない。それはわかる。

　わかるが、マリアローズはある一点において、絶対に太陽鬼を認めることができなかった。

「──それを、ベアトリーチェに向かって言えるのかな。死んだベアトリーチェにじゃなく、今、生きて、ＳＩＸの隠かくれ家がにとらえられてるベアトリーチェにさ。みんなのためにお前は死ねって。見捨てる子供にそう言ってのける人間が、親だって……？」

　違うはずだ。少なくとも、マリアローズの両親は違った。

　彼らは力弱く、結果的にマリアローズを守り抜くことはできなかったが、口が裂さけても、いや、口を引き裂かれても、決してそんなことを言ったりはしなかっただろう。

「親だって言うなら、子供の代わりにあんたが死ね！　少なくとも、あんただけは子供を救うために体を張って、命を捨ててみせろ！　それが親じゃないのか！　ことごとく血を分けた我が子同然と思ってる……？　そりゃあ、思うだけならタダだよね。でも、それらしく言葉を飾かざって格好つけるなら、それ相応のこともちゃんとやっとかないと、太陽鬼の名が泣くんじゃないの？」

　太陽鬼は無言でかっと両りよう眼めを見開いて、口くち髭ひげを震ふるわせている。死神も虚きよをつかれたような顔つきだ。

銀の軍団ザ・シルバリイの名にし負う二人の番人にそんな表情をさせた者が、いまだかつてどれだけいたことか。そういう意味では、マリアローズはすでにある種の偉い業ぎようを成し遂とげたと言ってもいいが、そんなものには十万分の一ダラーの価値もない。

「今すぐどっちか選びなよ。番人みんな自分の子だと思ってるなんて、ご立派な言葉を取り消すか。それとも、親なら親らしく、一人ででも子供を助けに行くか。そういえば、ベアトリーチェも言ってたけどね。あんたのことを、お父さんみたいだってさ。あんたの返答次し第だいでは、それは単なる買いかぶりだったんだって、僕がきっちりベアトリーチェに教えてやるよ。あんたたちみたいな腰こし抜ぬけの力は借りない！　ベアトリーチェは、僕と僕の仲間が助ける！」

　──言ってしまった。

　特に、最後の部分は、蛇だ足そくではなかったのかと思わないでもない。

　だって、数百人はくだらないというＳｍＣ相手に、たった六人で何ができるというのか。マリアローズ一人の意向で、仲間たちの身を危険にさらしていいのか。

　しかし、マリアローズが行くと言えば、彼らは間違いなくついてくるだろう。物好きというか、酔すい狂きようというか、好事家というか。全部同じことだけれども、まあ、そういう連中なのだ。

　だから、振ふり返る必要はない。彼らが後ろにいる限り、背中はいつも守られている。

　正面はすっきり完全に無防備だが。

　ここまでずけずけと物を言えば、当然、相手は気分を害しているに違いない。いや、それどころではすまないか。現に、番人たちはそれぞれに憤いきどおりをこらえたり、呆あつ気けにとられたりしている様子で、総長室は不気味な沈ちん黙もくに支配されている。

　一人だけだった。

　影薄男だけは、さっきから変わらない。ありふれた栗くり色いろの瞳ひとみでマリアローズを見み据すえ、特とく徴ちようのない彼の顔には何とも表現しがたい感情が浮うかんでいる。とりあえず、

あまり上じよう機き嫌げんそうには見えないので、睨まれているのかと思っていたが、果たして本当にそうなのか。

　というより、彼は何か感じているのか。

　マリアローズをただ見ているだけなのではないか。

「言いたいことはそれだけか」

　それゆえに、彼が口を開いたときは、彫ちよう像ぞうが喋しやべり出したかのような違い和わ感かんと驚おどろきを覚えた。

　彼は前に出ることもしない。マリアローズの視線を事もなげに受け止めて、その場を動かず、体勢も変えなかった。

「では、総長に代わり、私、秩序の番人副長ヨハン・サンライズが君の問いに答える。よろしいですか」

　影薄男にそう訊かれ、デニス・サンライズがうなずくまで、多少間があった。

　──ヨハン……サンライズ？

　太陽鬼と同じ姓せいを持つ男は、実に淡たん々たんと話した。

「まず現状を簡単に述べておくが、現在、我が団の五番副長直属隊、通つう称しよう・羅ラ叉サ隊所属ベアトリーチェがＳｍＣの虜とりことなっていることは、君がもたらしてくれた情報によって我々の知るところとなった。これについては、先ごろ捕ほ縛ばくした龍州人への尋じん問もんによって、事実だとの感かん触しよくをえている。ただし、我々は肝かん心じんの彼女の居場所を知らない。また、いまだＳｍＣ側からの接せつ触しよくもないため、率直に言って事態の推移を見守るしかなかった。もっとも、仮にＳｍＣが何らかの取引を持ちかけてきたとしても、我々はこれを一いつ切さい受け付けない。この点については、すでに協議の上、決定している」

「……それは、ベアトリーチェを見捨てるってことだよね」

「取引には応じない。それだけのことだ。そして、君の問いについて、つまり、彼女の奪だつ還かんに関しての我々の方針だが、先ほどの総長の回答がすべてということになる。平たく言えば、許容範

はん囲い内の犠ぎ牲せいで彼女の奪還が見込めるのであれば、必要な規模の隊を動かす。そうでなければ、我々は動かない。彼女はＳＩＸの隠れ家にいるとのことだが」

「闇やみ市いちの──」

　どうもヨハン・サンライズのペースに乗せられているような気がする。しかし、場所を教えなければ、話が進まないだろう。

「サックドールっていう酒場だよ。そこの厨ちゆう房ぼうにある一番奥の冷蔵庫が隠し扉とびらになってて、その先にＳＩＸの隠れ家があるんだ。下水道にも、隠れ家に通じる道があるみたいだけど」

「サックドールか。琺瑠フオール副長」

　影かげが薄うすかったヨハン・サンライズは、今や一種、異様な存在感を発揮しつつ、東部美女に顔を向けた。

「すでに内ない偵ていが進んでいる場所だと認にん識しきしているが。私の記き憶おく違ちがいか」

「いいえ」

　琺瑠フオール副長と呼ばれた東部美女は、黒くろ髪かみをかきあげた人差し指を唇くちびるの脇わきにあてた。

「サックドール──おしゃぶり人形。下品な名前もＳｍＣにはぴったりだし、実際、あの店は連中のたまり場になっていて、刺青か焼印がなければ酒も飲めないわ。闇市には同じような場所がいくつかあって、サックドールはそのうちの一つよ。ただ、ガードが堅かたくて、潜せん入にゆうも困難だし、隠かくし扉や隠し部屋までは探さぐりあてられていないわね」

「その店にはどの程度のＳｍＣがいる」

「常時約七十。百はいると思った方がいいわ。サックドールのある建物の周辺にも、監かん視し要員が配置されているとの報告も上がっていたはずよ」

「ＳＩＸがいれば当然、ジェイもいるだろう。やつの率いる殺さつ戮りく戦隊ジェノシドマックスが丸ごとつめていたら、同数では分が悪い。二百は要いる。団の半数か」

　ヨハンは少しの間、中空を見つめてから、再びマリアローズに向き直った。

「結論から言おう。君の情報が正しいとしても、我々は動けない」

「……何でさ」

　マリアローズも強く抗こう議ぎしたいところだが、ヨハンの回答がだいたい予想できるだけに、気持ちがやや萎なえ気味になってしまう。ヨハンは思ったとおりの答えを返した。

「外部の者に詳しよう細さいは明かせないが、我々は現在、必要と考えられるだけの人員を動かすことができない。必要な人員を投入できなければ、作戦の成功は見込めない。成功が見込めない作戦で無む駄だな死傷者を出すわけにはゆかない。理由は以上だ」

「無駄、って」

「一人を生かすために二人を殺せば、一人は無駄に死んだことになる」

「そんな、人を物みたいに……」

「あいにく、私は人間を頭数以外で勘かん定じようするすべを知らないのでね。ともあれ、情報をもたらしてくれたことには感謝する。我が団では、有益な情報を提供してくれた者には相応の謝礼金を支し払はらっている。望むのなら金は出そう」

「誰だれがお金なんて」

「むろん、不要ならば、無理に受けとってもらわなくていい」

「くれるものはもらっとくけど！　や、違う、そうじゃなくて！」

　思わずケチの虫がうずいてしまったが、まったくもって、金ですむ問題などではない。金を払はらってすまそうというヨハンの態度は、別れたい女に手切れ金を渡わたして「これで何もかも忘れてくれ」と追い払うよりもずっとタチが悪い。

　だが、マリアローズの口からは次の言葉が出てこなかった。

　このヨハン・サンライズという男は強敵だ。姓がサンライズだ

し、年格好からも、デニス・サンライズの息子なのかもしれないが、何のかのいって情に厚そうな父親の方がまだ付け入る隙すきがある。この男はダメだ。情義に訴うつたえても通じない。理り屈くつで打ち負かさない限り、決して屈くつ服ぷくしないタイプだ。

　道があるとしたら、ヨハンが副長ということだろうか。いくら何でも、副長が総長より偉えらいなんてことはないはずだから、ヨハンなんか無視してデニスを説得してしまえばいい。

　こうなったらもう、座りこみでもすがりつきでも泣き落としでも何でもして、とにかく太陽鬼の言げん質ちをとるか。それとも、本当に自分を含ふくめたＺＯＯの六人だけでサックドールとやらに向かうか。

　いや、待て──サックドールって、そもそもどこに？

　まあ、内偵しているという話だし、底意地の悪そうなヨハンだって、場所くらいは訊きけば教えてくれるだろう。

　そうだ。それが先決だ。場所がわからなければ、行動も起こしようがない。聞くは一いつ時ときの恥はじ、聞かぬは一生の恥ともいうし、さあ、尋たずねてしまえ──あの、ちなみに、サックドールってどこにあるの？

　できるか、そんな真似まね。

　胸中でそう自分にツッコんで、マリアローズが一人、頭を掻かきむしったときだった。

「悪党には生きる価値がない」

　後ろから声がした。

「悪は死んでも治らない。だったら、駆く除じよしゅるのが最しやい善じえん。おのれを利しゅるため、他を害しゅるものはしゅべて悪。悪なれば即しゆなわちこれを斬きる」

　舌足らずだ。

　言うまでもない。ユリカの声だ。

　ユリカはゆっくりとマリアローズを追い越してゆき、極限クラ

イマツクス九手棍ナインポールの石いし突づきで床ゆかを打った。

「しょれがあなたたちの義。〝死神〟羅ラ叉しや、あなたは確かしょう言ったわね」

「ああ」

　死神は即そく座ざに首しゆ肯こうした。

「それがどうかしたか」

「じゃあ訊かしぇてもらうわ」

　小さなユリカの背中が、なぜだかやけに大きく見える。声もいつもより低い。もちろん、声質自体は変わっていないし、舌足らずなのは相変わらずなのだが、今のユリカには十歳か十一歳相当の体格に相応しくない迫はく力りよくがある。

「ＳエしゆｍＣはあなたの言う悪じゃないのかしら？」

「……何？」

　死神の頰ほおがかすかに引きつった。

　大だい胆たんにも、ユリカはその死神に極限クライマツクス九手棍ナインポールの先を突きつけて言い放った。

「悪、即しよく、斬じやんとあなたは言った。今、ＳエしゆｍＣどもがたむろって、あなたの部下を拘こう束しよくしている場所がわかっている。しょれなのに討たないということは、あの超最低しやＣＫな糞くしよ蛆うじ虫むしどもは悪じゃない。当とう然じえん、しょういうことになるわよね？」

「……ッ……」

　死神が口の中で鳴らした小さな音は、舌打ちだろうか。

　ユリカはまだ追つい及きゆうの手を緩ゆるめない。

「傑けつ作しやくだわ。勝てしょうな相手は徹てつ底てい的に潰ちゆぶして勝ち名乗りを上げて、勝てしょうもない相手は避しやける。あなたたちとよく似たやり口で人を傷ちゅける連中がいるのを

知っている？　悪党よ。連中はしょうやって獲え物ものを選ぶの。あなたたちがやっていることは連中と同じだわ。ちゅまり、あなたたちの義なんてしょの程度のものだということよ」

「──貴様……」

「否定できるの？　しょれとも、義とかいうのはあなた一人の戯じやれ言ごとなの？　本当は、秩ちちゆ序じよの番人なんて正しえい義ぎの味方気どりの弱い者いじめ集団なのかしら？　他の方々にも是じえ非ひお訊きしたいわ」

　ユリカは琺瑠フオールに目をやった。マシュー・シュナイデルを見た。焔ホムラを見た。ヨハン・サンライズを見て、最後にデニス・サンライズを睨にらみつけた。

「秩ちちゆ序じよの番人！　あなたたちの義って、いったい何なの？　隊がどうしたとか、必ひちゆ要ような人員がどうとか、作しやく戦しえんがどうだとか！　しょんな戦しえん争しようごっこをしゅるのがあなたたちの義なの？　だったら、悪だとか秩ちちゆ序じよだとか偉しょうなことを言わないで！　戦しえん争しようしたいなら、どこかの国に仕官しゅるなり、傭よう兵へいになるなりしゅればいい！　あなたたちにおあちゅらえ向きの戦しえん場じようが、きっといくらでもあるわ！　しゃあ……！　弱虫の偽ぎ善じえん者しやは、化けの皮が剝はがれる前に、今しゅぐ荷に物もちゆをまとめてこの国からしゃっしゃと出ていきなしゃい！」

　重い静せい寂じやくが総長室を満たした。

　ユリカが番人たちの口をつぐませたのだ。

　しかし、実じつ年ねん齢れい二十三歳、マリアローズより六つも年上だし、普ふ段だんからしっかりしたところもあるユリカだが、舌ぜつ鋒ぽう鋭するどくこんな大演説をぶってみせるとは。

　はっきり言ってかなり意外だ。正直、ユリカらしくないとも思うが、それではマリアローズは彼女の何を知っているのか。

　ユリカは医術士で。鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術の使い手で。十歳か十一歳に見えるのに実は二十三歳で。くすみのないブロンドと灰色がかった青い瞳ひとみを持つ絶世の美少女で。

　それだけだ。

　ユリカがいつからいつまで誰だれに師事して医術式を学び、どのようにして鵺流古式戦闘術を身につけたのか。いつどうやってエルデンに来たのか。何より、どうしてユリカは子供みたいな体をしているのか。マリアローズは何も知らない。

　ただ、一つだけ推測できることがある。

　ユリカは悪党を、もしかしたら、とりわけＳｍＣを深く恨うらんでいるようだ。

　やはり、何か遺い恨こんがあるのか。それが心優やさしいユリカに苛か烈れつな言葉を使わせる原因になっているのだろうか。

　そのあたりは想像もつかないが、ユリカの痛つう烈れつな批判を浴びた番人たちは、あるいは憮ぶ然ぜんとして、あるいは自らを省みるように目を伏ふせ、あるいは険しい面おも持もちで、いずれにしても押し黙だまっている。

　突とつ然ぜんだった。

　笑い声がこぼれた。

「……義。義、か……」

　秩序の番人総長、太陽鬼デニス・サンライズ。

　顔に刻まれた年輪以外、老いなど微み塵じんも感じさせない髭ひげの五十二歳は、最初、喉のどを鳴らして愉たのしげに笑い、それから破顔一笑した。

　その笑え顔がおはまるで青年のそれのように若々しく、ぎらつくほどの生気に満ちていた。

「トマトクン、笑ってくれ。我は老い、耄もう碌ろくしたようだ。今一度、罪と咎とがの業ごう火かに身を焼かれながら、義を貫つらぬき通すべく剣けんを振ふるわんと誓ちかったのが、つい一昨日であったのにな。思えば、我を慕したい、我に従う子らを鋼はがねとし、刃やいばとなし、血を流させ、その命で切り開いてきた道こそ、汚よごれし義の我が道であったのだ。我が往くは修しゅ羅らの道なり……！　我は痛みを忘れぬ！　だが、痛みを恐おそれぬ！　羅ラ叉サ副長！」

「はっ」

　羅ラ叉サが太陽鬼に向き直り、軽く頭こうべを垂れた。

　太陽鬼の命令は、叩たたきつけるがごとく激しかった。

「お主は我とともに選えり抜ぬきの三隊を率いて、正面よりサックドールを襲おそい、これを制圧せんがための先せん鋒ぽうとなれ！　たとえ敵が我が方の何倍いようとも、死神の名に賭かけて悉ことごとく殺してみせい！」

「承知」

「──総長！」

　すかさずヨハンが身を乗り出して異議を唱えようとしたが、太陽鬼は一睨みでこれを抑おさえた。

「我が団は血にまみれた義によって立つ！　ヨハン、お主もその剣に誓ったはずだ。その剣を悪党と己おのが血で汚し抜く覚かく悟ごがないのならば、即そつ刻こく、団を脱だつするがよい！──焔ホムラ隊長！」

「俺かよ？」

　太陽鬼に指名された焔ホムラは、自分を指差してきょとんとしている。

　だが、眠ねむりから覚めたかのような太陽鬼は頓とん着ちやくせず、かえってにやりと笑ってみせた。

「左様、お主だ。たまたまこの場に居あわせたのが、運のツキと思うがいい。お主は麾き下かの一隊を率いて、我らと連れん携けいを図りつつ、下水道よりＳＩＸの隠かくれ家がを目指せ！」

「ＳＩＸ、ね」

　焔ホムラは奥歯をぎりりと嚙かんでから、不精髭の生えた顎あごを撫なでた。

「望むところですよ。やらせてもらいましょう。場合によっちゃあ、リーチェの馬ば鹿かにまた貸しを作る羽目になるかもしれねぇ

が、出世払ばらいで倍返ししてもらやぁいい。ただ、あいにく下水道は不案内でね。いきなり隠れ家なんて言われても、どこにあるのやらわからねぇ。どうすりゃいいんです」

「琺瑠フオール副長」

　太陽鬼の指示はよどみなく、簡潔明めい瞭りようで、しかも的確だ。

「下水道を知りつくした情報屋がいると聞いておる。その者であれば、あるいは案内役たりうるのではないか」

「は……」

　琺瑠フオールは心持ち顎を引き、切れ長と表現してもいいその双そう眸ぼうに、鋭えい利りな刃は物もののごとき光をともらせた。

「エルデンの下水道を棲すみ家かとし、これを知ち悉しつしている者たちなので、あるいは。ですが、いずれにせよ、彼らを動かすにはかなりの大金が必要となります」

「よい。早さつ急きゆうに手配せよ。琺瑠フオール副長はあわせて市内各所に派は遣けん中の隊を逐ちく次じとりまとめ、後続として第九区北側に展開させたのち、闇やみ市いちにひたひたと侵しん攻こうさせつつ、ＳｍＣの刺青いれずみ、焼印がある者を残らず狩かれ。一匹ぴきたりとも逃のがすな」

「御ぎよ意いのままに」

　琺瑠フオールが右手を胸に当ててそう答えると、太陽鬼デニス・サンライズはむっつりと黙りこんでいるヨハンに一いち瞥べつをくれた。

「お主は屯とん所しよに残り、各拠きよ点てんの防衛と通常任務の指揮管理運営にあたれ」

「……承知」

　ヨハンはさすがに不満げだが、それが表情に出ているわけではない。彼の顔つきだけを見るなら、依い然ぜんとして何を考えているのかわからない。マリアローズごとき青二才が思うのも何だが、これほどかわいげのない男もあまりいないだろう。

　もっとも、太陽鬼は気にする様子もなく、再度、番人たちを見回した。

「よいか。目的はＳｍＣに痛つう撃げきを与あたえんこと。怨おん敵てきＳＩＸを討うつことだ。その上で、可能なれば義に剣を捧ささげし我らが同志を奪だつ還かんする！」

「承知」「了りよう解かい」「御意」「承知」「承知」

　五人の番人たちはそれぞれ太陽鬼の号令に応じ、そのうち琺瑠フオールとヨハン、シュナイデルは足早に総長室を退出していった。その後ろ姿を見送った太陽鬼は、進み出て床ゆかに片かた膝ひざをつき、ユリカと目線をあわせた。

「お主のようなうら若き娘むすめ御ごに面めん罵ばされ初心に返るのでは、まさしく太陽鬼の名折れであろうが──もとより我はこの名もこの身も惜おしくはない。我が望みは義に殉じゆんじ、剣に死すことのみ。よくぞ思い出させてくれた。我が深謝の意を受け容いれてもらえようか」

「こちらこしょ……」

　さっきはあんなに大きく見えたユリカが、戸と惑まどうように、恥はずかしがるように、少しうつむいている。

「差しやし出がましいことを申し上げてしまいました」

「そのように思う必要はない」

　と、何をするのかと思ったら、太陽鬼はいきなりユリカの右手をとって、その甲こうに軽く髭ひげを──いや、唇くちびるを押しつけた。

　かなり唐とう突とつだったが、手の甲にキスをして立ち上がり、一礼するまでの仕草がえらくさまになっている。まるで、どこぞの国の騎き士しが貴婦人を扱あつかうような態度だったので、不自然さはない。というか、あれは間ま違ちがいなくそうした教育を受けた者の振ふる舞まいだろう。

　案外、出自はどこかの国の貴族か騎士階級だったりするのか。

　太陽鬼はそれからマリアローズの前に来た。

「マリアローズと申したな」

「はい」

　マリアローズが見上げるようにして向けた眼まな差ざしを、太陽鬼はしっかりと受け止めた。

「我は我が子にこの程度のことしかしてやれぬ。百の悪党と刺さし違えることはできても、子一人の命と我が命を引き換かえにはできぬ非道の親だ。お主は申したな。皆みなのためにお前は死ね、面と向かってそう言えるのかと。答えは応だ。我はやはりそう言わざるをえぬであろう」

「……それが、義、なんですか」

「我らは正義を標ひよう榜ぼうしておるわけではない。我らはただ、我ら自身が義と信じるもののために剣けんを振り、足が止まり斃たおれるまでひたすら戦い抜ぬく。極論すれば、我らは悪を斬きる悪なのかもしれぬ。だが、我らは怯ひるまぬ。立ち止まらぬ。剣を止めぬ」

「僕を──」

　マリアローズは一いつ瞬しゆんだけ後ろを振り返った。

　トマトクン。カタリ。サフィニア。ピンパーネル。

　前を向くと、最後にユリカが愛らしくうなずいてくれた。

「僕たちも同行させてください」

「ベアトリーチェを救えるか否いなかはわからぬ。むしろ、その可能性は低いかもしれぬが」

「あなたがたは好き勝手に敵を殺していればいい。ベアトリーチェは僕たちが助けます」

「ふむ……」

　太陽鬼はマリアローズから視線を外して、どこか別の場所を見た。

　その先を目で追うと、トマトクンがいた。

「よいのか」

「見届けると言ったことか」

　太陽鬼は何を「よいのか」と尋たずね、トマトクンはどのような意味で答えたのか。マリアローズには見当もつかないが、おそらく、一昨日、会って話したことにでも関係しているのだろう。トマトクンは大おお袈げ裟さに片方の眉まゆをつり上げてみせた。

「あのときとは状じよう況きようも事情も違うしな。今回は今回ということじゃダメか。まあ、せいぜい邪じや魔まにはならんようにするつもりだぞ」

「貴公に限って邪魔になどなるものか」

　太陽鬼は目め許もとを緩ゆるめて笑い、焔ホムラをちらりと見た。

「貴公らは焔ホムラの隊と行動をともにしてくれ。ベアトリーチェの奪還が目的であれば、むしろその方がよかろう」

「そうさせてもらうか。それでいいな、マリア」

「うん」

　マリアローズは安あん堵どと不安と緊きん張ちようが入り混じったような気持ちで、力強く首を縦に振った。

　ようやく何かが終わり、何かが始まろうとしていて、先は見えない。

　知らぬ間にマリアローズの手が震ふるえていた。

　武者震いだと思いたかった。

Omenage 897 9th revolution 9th day

サンランド無統治王国首都エルデン第九区・第十区境地下
〝奇妙な下水道(オッド・スウェアー)〟

chapter.13

# 意気地なしの返事

道行くエルデン市民に「貴方あなた／貴女は下水道に入ったことがありますか？」と尋ねたら、九割九く分ぶ九く厘りんが否いなと答えるだろう。中には、日常的に下水道の世話になっていながら、その存在をまったく意識していない者もいるに違いない。

所しよ詮せん、そんなものだ。

下水道がどうなっていて、どのような仕組みで、どうやって管理されているのか。知らなくてもその恩おん恵けいに与あずかれる以上、知る必要もない。知りもしないそんな場所に、なぜ足を踏ふみ入れなければならない？

ただ、そう考えない者たちもいるようだ。

下水道の中を家とし、庭として、そこに棲すんでいる人々——一部では溝鼠族ブラウニグと呼ばれているらしいが、その呼び名の認知度はきわめて低い。彼らの存在を知る者自体が少ないのだから、当然といえば当然だろう。

エルデンの下水道は、大きく本道と支道に分かれていて、今、マリアローズたちが歩いているのは本道だ。

というか、支道は狭せま苦くるしくて、下水に身を浸ひたして這はって進む覚かく悟ごがなければ入りこめない。

それに比べると、本道はずいぶん広いとはいえ、幅はば三メーテルほどの下げ水すい溝こうを挟はさんで、両側に一・二、三メーテルの歩道があるだけだから、最高の住じゆう環かん境きようとはいいがたい。

いや、高層寺院のてっぺんなんかに住んでいるマリアローズだが、あえて断言する。

こんな場所に住むのは狂きよう気きの沙さ汰ただ。まともな神経の持ち主ではとうてい不可能だろう。

だって、どういうわけか、臭においこそたいしたことはないものの、時折、どこからか響ひびいてくる「イィィ——ッ！」といった感じの鳴き声はいったい何だ。

歩道を走り回る真っ黒い四足獣は、たぶん鼠ねずみだと思うのだが、猫ねこよりも大きそうだ。

　湾わん曲きよくした天てん井じようや壁かべを伝って駆かけ回る脂羽蟲ゴキっぽい虫は、水陸両生に進化したのか、変な形のヒレみたいなものを備えている。そいつらは下水に飛びこむと、半魚人のカタリよりずっと上手に泳いでみせるのだ。

　そして、その水陸両生脂羽蟲ゴキを捕ほ食しよくする生き物が、下水の中を高速で移動している。

　たまに水面上に凶きよう暴ぼうそうな背びれを見せたり、跳はね上がって一瞬だけ禍まが々まがしい全身をさらすその遊泳生物は、体長一メーテルはあるだろうか。そうとう速いので、はっきりとはわからないが、もっと大きいかもしれない。細長い体に不ふ釣つり合いな大きい顎あごを持ち、全身に棘とげを生やしていて、五つか六つもある目がぼんやりと赤黒く光っているそいつは、まるで異界生物フリークスのようだ。やつには下水よりも、アンダーグラウンドの方が似つかわしい。

　溝鼠族ブラウニグたちはスプーキィと呼んでいるようだが、この怪かい魚ぎよはひどく獰どう猛もうで、ごく稀まれに手足に近いようなヒレを持つ個体もいるとのことだ。そいつらは歩道にまで上がってきて、あの大きな鼠や水陸両生脂羽蟲ゴキだけでなく、溝鼠族ブラウニグをも襲おそうのだという。

　そんなことを愉たのしげに話して聞かせる溝鼠族ブラウニグが、道案内として隊列の先頭にいる。

　声からして、その溝鼠族ブラウニグは男性だと思われる。ただ、暗視鏡を装着した上、マスクをかぶり、フード付きの外がい套とうですっぽりと体を覆おおっているため、容姿は一いつ切さいわからない。名はシデオというらしいけれども、彼曰いわく、真の名前はもっとずっと長いのだという。

　だが、マスクのせいか、シデオの声は聞きとりづらい。

　顔が見えないせいだろうか、シデオはかなり挙動不ふ審しんに見え、こんなやつに任せて本当に大だい丈じよう夫ぶなのかと不安になる。

　どうやら、下水道内にあるＳＩＸの隠かくれ家がへの通路まで案内することで、シデオには何と百万ダラー単位の金が渡わたるようだ。すでに前金として半額が支し払はらわれ、残りの半額はすべて

が首しゆ尾びよくいったあとで、という契けい約やくらしいが、いいのか？　半額とはいっても大金だし、すでにそれを手に入れたシデオが、ちゃんと約束を果たしてくれるという保証はあるのか？

　まあ、ここまで来て、そんなことを考えてもどうしようもないが。

　下水道の中は、真っ暗ではない。天井に淡あわい緑色の光を発するラインが三本走っていて、その明かりが下水の水面に反射している。そうはいっても、足あし許もとも暗い程度の光量だ。大半の者が暗視鏡を使っている。

　隊列は、歩道が狭せまいため、互たがい違ちがいに近い不完全な二列だ。先頭は壁側にシデオ、下水側に秩序の番人七番突とつ撃げき隊隊長焔ホムラが並び、シデオの後ろにはトマトクン、マリアローズ、ユリカ、サフィニア、カタリ、ピンパーネルのＺＯＯの六人。焔ホムラの後ろには七番突撃隊の十四人が続いて、最さい後こう尾びを隊長補のチェス・ピードが固めている。

　番人たちは皆みな、純ピユア血・ブラのツド・司祭プリースト、プロヴィデンス・シリーズの鎧よろい兜かぶとの上に黒っぽい外套を着け、剣けんと盾たてを持っているが、重装備のわりに音はしない。プロヴィデンス・シリーズには、浮ふ遊ゆう接合という特とく殊しゆな技術が採り入れられていて、装そう甲こう板同士の噛かみあいが軽減されているらしい。

　だから、本来ならば、謎なぞの鳴き声と、水音と、種々の生き物が蠢うごめく音、それに一行の足音や息いき遣づかい以外はほとんど聞こえないはずだが、シデオがのべつまくなし、愚ぐにもつかないことを喋しやべりつづけている。

「しゃくまん……しゃくまんでね、俺、からなど行って、女、買うよ。いい女。たくさん買ってね。何人もいっぺんにね。シシシ……そいで、金は全部、ぱーっと使うよ。使って、女、買う。酒も飲むしね。金は貯ためるの心と体によくない。アレも溜ためるのよくない。シシシ……」

「そうかい」

　焔ホムラが適当に相あい槌づちなど打ってやるものだから、余計によくない。シデオは図に乗ってさらに言葉を継つごうとしたが、

いい加減、マリアローズは堪かん忍にん袋ぶくろの緒おが切れた。

「ね、きみ、最初っから思ってたんだけど、糞くそうるさいよ」

「──シ……シシシ……」

「シシシ、じゃないって。僕らはきみの話し相手になるためにこんなところまで来たわけじゃないんだからさ。きみだって、お金を受けとって仕事として案内役やってるわけでしょ。だったら、ビジネスに徹てつしなよ」

「だとさ」

　苦笑いを含ふくんだ声でそう言った焔ホムラも、他人ひと事ごとだと思っているのなら大おお間ま違ちがいだ。

「だとさ、じゃないだろ。きみが相手にするから調子に乗るんじゃないか」

「堅かてぇこと言うなよ」

「堅いとかそういう問題じゃないでしょ。だいたい、もう結構歩いてるけど、いつになったら着くんだよ。ちゃんと時間までに着くんだろうね」

「まぁ俺らが時間どおりに動いても、上の連中が下手を打ったら元も子もねぇがな」

「そんなこと考えてどうなるの？　僕たちは僕たちにできることをやるしかないだろ」

　作戦では、太たい陽よう鬼きデニス・サンライズと死神羅ラ叉サに率いられた番人たち五十一名が、正面からサックドールを襲しゅう撃げきする。それとともに、焔ホムラの七番突撃隊とＺＯＯの六人が、下水道からサックドールの奥にあるというＳＩＸの隠れ家を衝つく手て筈はずだ。

　当然、両者のタイミングは極力あわせたい。その方が、相手側により大きな混乱を見込めるはずだからだ。



　そこで、琺瑠フオール副長が、シデオからえた情報をもとに、九巡じゆん月げつ九日二十三時五十五分を突撃時間として提示した。

　太陽鬼は即そく座ざにこれを承認して、焔ホムラらとマリアローズたちＺＯＯの面々は、同二十二時二十七分、第九区のマンホールからシデオと一いつ緒しよに下水道へと降りたのだが──

「できることを、か……」

　焔ホムラは兜をかぶっていない。他の番人たちは兜の面めん頬ほおに選択装備オプシヨンの暗視鏡を装着しているが、ぼさぼさの黒くろ髪かみを剝むき出しにした焔ホムラは暗視鏡すら着けていなかった。何でも、トマトクンやピンパーネル同様、夜目が利きく方で、この程度の暗さなら不自由はないのだという。

「そうだな。結局はそれしかないのかもしれねぇな」

　焔ホムラはなぜかため息混じりにそう呟つぶやくと、胸むな元もとから何か引っ張り出すような仕草をした。マリアローズの位置からだと、それが何かわからないが、たぶんネックレスのたぐいだろう。もしかしたら、懐かい中ちゆう時計でもくくりつけているのかもしれない。焔ホムラはすぐにそれを元の位置に戻もどした。

「二十三時三十六分。あと十……二十分くれぇか」

「……今、計算できなかったでしょ」

「細けぇことは気にするな」

　焔ホムラはマリアローズの呆あきれ半分のツッコミに動じず、どこか暗い響ひびきのある声音で呟くように言った。

「やることはきっちりやるからよ。こうなったら、リーチェの馬ば鹿かは何としてでも助けるさ。女が死ぬのはあんまり気分のいいもんじゃねぇからな」

　そういえば、昔、売られそうになっていたベアトリーチェを救ったのは焔ホムラらしい。ベアトリーチェの話にも、ずいぶん焔ホムラの名前が出てきたし、二人はかなり親しいのだろう。今から思えば、ベアトリーチェの口くち振ぶりには、焔ホムラを単なる命の恩人以上の存在として意識しているような節があったような気もする。

　とはいっても、年の差もあるので、まさか男女の関係ではあるまい。だいたい、焔ホムラの奥さんがどうとかベアトリーチェが言っていた。焔ホムラは妻帯者のはずだ。

　何歳くらいなのだろう。東部人だし、不精髭ひげや髪かみ型がたの印象もあって、判断しづらい部分もあるものの、たぶん、三十歳

にはなっていないと思う。

　会ったばかりなので当たり前だが、どうもつかみどころのない男だ。

　それでいて、妙みような重みというか、存在感がある。

　ベアトリーチェだけでなく、部下たちにもずいぶん慕したわれているようなので、きっと人好きのする要素を備えてもいるのだろう。その点については、マリアローズもわからなくはない。要するに、変なこだわりがなさそうで、気安く口がきけるタイプなのだ。どちらかというと、マリアローズもよく喋る方だから、時が今で、場所がここでなければ、もっと焔ホムラと話をしていたかもしれない。

　だが、やはり、状じよう況きようが状況だ。それに、シデオの無む駄だ口ぐちをたしなめたばかりのマリアローズが、世間話をするわけにもゆかない。

「シ……シシシ……あとね、じ、十分くらいで着くよ」

　シデオも反省したのか、ようやく自発的に実務的なことを口にした。

「俺、約束は守る。俺たち、約束を破ったりしないよ。上の人間の方がずっと嘘うそつきだ。だから、十分で着くって言ったら、ほんとに着く」

「ああ、信じてるよ」

　焔ホムラがそう応じて、自分よりずっと背の低いシデオの頭を撫なでた。それはまったく作さく為いめいていない、自然で、胡う散さん臭くささが微み塵じんも感じられない仕草だった。その場面を目にして、何となくだが、ひょっとしてこの男は、と、マリアローズは思った──焔ホムラは番人にしては、いや、番人に限らず人間として、かなりマシなやつなのではないか。

　シデオの言葉ではないが、この男も約束を破ったりしない。きっと信しん頼らいに足る男だ。そんな直感的な印象を否定できなくさせるような雰ふん囲い気きが、この男にはある。

　だからこそ、太陽鬼はこの男にベアトリーチェの救出を託たくし

たのではないか。

　そう、何のかの言って、この部隊はベアトリーチェ救出隊以外の何ものでもない。

　正面からサックドールを襲撃するのは陽動で、この作戦の主眼は、ベアトリーチェを救い出すことにあるのではないか。

　好意的すぎる解かい釈しやくかもしれない。

　しかし、そうとでも考えなければ、ベアトリーチェが哀あわれだ。

「待ってろ」

　焔ホムラが小さく呟いた。まるで、ここにはいない、この先にいるはずのベアトリーチェに語りかけるように。

　それきりシデオも喋しやべらなくなり、一行は黙もく々もくと歩いた。

　マリアローズも黙だまって足を動かしながら、ひたすら数をかぞえた。頭の中で数を加えてゆくごとに、ベアトリーチェに近づいているはずだが、なぜだかそんな気はしなかった。実感がわいてこなかった。考えてみると、ここがどこかも正確にはわからないという覚おぼ束つかなさだけが、唯ゆい一いつの実感だった。

　だが、マリアローズが四百二十四まで数え終えたときだった。

　シデオが足を止め、壁かべに背中をよせるようにして振ふり向いた。

　焔ホムラもそれに倣ならって立ち止まり、手を挙げて短く「止まれ」と後続に命じた。

「シ……シシシ……こ、ここだよ。この向こう」

　シデオが前方を指差した。

「しゃ、しゃくメーテルくらい行ったら、しだりと右に曲がれる。そこ、しだりに曲がって、もうしゃくメーテルまっすぐ行く。そしたら、シ……シシシ……あるよ。しだり側に、あいつが勝手に聞け

た穴がある。さ、最初も言ったけど、穴の奥に、見張りがいるよ。そこから、し、しっくすが出てくるとこ、見た仲間が何人もいてね。俺も見たけど、仲間、何人か殺された。あいつら、嫌きらいだ」

「そうかい」

　焔ホムラは外がい套とうの中をまさぐって、重そうな布ぬの袋ぶくろを取り出し、シデオに向けて放った。

「シデオ、お前はここまででいいぜ」

「お、だ、だけど、俺」

　かろうじて袋を受け止めたシデオは、うろたえるように首を振った。

「か、金、半分は、帰りの案内のあとだって。俺、ふぉ、ふぉーるさんに約束したよ。まだ早い。俺の仕事、終わってないよ」

「そうだな。できれば、ここいらで待っていてくれると助かる。だが、しばらくして──小一時間しても俺たちが戻もどって来ねぇようなら、構わねぇからその金を持って、安全なとこまで逃にげろ。場合によっちゃあ、俺たちは正面から堂々と地上に出ることになるかもしれねぇし、無事に帰れるって保証もねぇ。確実にお前に金を渡わたせるのは今だけだ」

「で、でも」

「お前の話、結構、面おも白しろかったよ。エルデンの下に、アンダーグラウンドじゃねぇこんな場所があるなんざ、ほとんどのやつは思いもしねぇだろう。今度、機会があったら、一いつ緒しよに酒でも飲みながら続きを聞かしてくれ」

「……う、うん……」

「そんときはお前の奢おごりで頼たのむぜ。俺はたいした給料もらってねぇんでな」

「い、いいよ。俺、お前に奢る。約束する。俺、約束破らないからね。お前も約束しろ。あとで俺と一緒に酒、飲む。お前も約束破っちゃだめだ」

「わかったよ」

　焔ホムラが差し出した右手を、シデオが何度もしつこくうなずきながら両手で強く握にぎった。

「うん。お前、約束破らない。うん。きっとね。俺、わかるんだ」

「そうかい」

「シシシ」

　シデオは満足そうに肩かたを揺ゆらしながら笑って焔ホムラの手を離はなし、意外なくらいの身軽さで下水を挟はさんだ逆側の歩道に飛び移った。

「俺、ここにいる。お前たち、待ってるよ」

「ああ」

　焔ホムラはシデオに軽く応じてみせてから、後ろを振り返った。

「ここからはマジで無む駄だなお喋りは禁止で行くか」

「喋ってたのは、ほとんどきみとシデオだっただろ」

「そういやそうだな」

　焔ホムラは左手で頭を掻かきながら、右手で胸むな元もとから何か引っ張り出した。シデオがいなくなり、トマトクンが前に出たため、今度はマリアローズにもちゃんと見ることができた。暗視鏡越ごしなので、細かい意い匠しようまではわからないものの、鎖くさり状じようのネックレスに通された環かん状じようのものに、小さな円形の文字盤ばんがついている。文字と二本の針はうっすらと光っていた。

　時計だ。

「二十三時四十五分か──ん？　何だ」

「え？　いや、別に」

「こいつはやらねぇぞ」

「誰だれもくれなんて言ってないでしょ」

「そうかい。まぁ、女によう房ぼうの形見なんでな。本当は、野や郎ろうよりか、お前さんみてぇな娘むすめが持ってる方が似合う品なんだろうが」

「誰が娘だって？」

「誰って、俺の目の前にいる……」

　焔ホムラは怒いかりで引きつったマリアローズの笑え顔がおを見て、自分の間ま違ちがいに気づいたらしい。

　さらに間違っていたが。

「なるほどねぇ……色んな趣しゅ味みのやつがいるからな。特にこの街じゃあ……」

「しゅ、趣味ってどういう意味だよ！　ふざけるな！　誰が趣味でこんな……！」

「やかましいで、お前じぶん」

　後ろから飛んできたカタリの声が相乗効果をもたらし、マリアローズは本格的にぶちきれそうになった。だが、時と場合を考えれば、ここはぐっとこらえるべきだろう。

　マリアローズは何とか気持ちを静めようとして、何回も鼻で深々と呼吸をしたが、結果的にその憤いきどおりを消し飛ばしたのは、トマトクンの焔ホムラに対する問いかけだった。

「もしかして、お前の女房というのは──」

　あの釈拿シヤクナか。

　トマトクンにそう訊きかれた焔ホムラは、三秒ほど無言でいた。

　釈拿シヤクナ。

　その名はマリアローズでさえ知っている。秩序の番人の〝女め夜や叉しや〟釈拿シヤクナといえば、女だてらに太陽鬼や死神と並び称しようされることもある使い手だ。

　焔ホムラの女房が、あの釈拿シヤクナ？

　だが、ベアトリーチェは焔ホムラの奥さんがどうしたとか言っていて、焔ホムラはあの時計を女房の形見だと説明した。そういえば、今、思い出したが、龍州人のアジトに監かん禁きんされていたときも、女夜叉が晒さらされたとか何とか、そんな話を聞いたような覚えがかすかにある。つまり、釈拿シヤクナは死んだのか。

　正直、マリアローズにしてみれば、名前と評判しか知らないので、たいして感かん慨がいはない。

　すぐそばに、配はい偶ぐう者しやを失った男が一人いるということ以外は。

　焔ホムラは不精髭ひげをこするようにゆっくりと顎あごを撫なでた。

「まぁな」

「そうか」

　トマトクンは一つ息をついた。

「死に急ぐなよ。ＳＩＸとやりあうことになったら、俺に任せろ。やつはお前のような男が命がけで殺す価値のある相手じゃない」

「あんたの気の回しすぎだ。そんなつもりはねぇよ」

　焔ホムラはマリアローズたちに背中を向けた。

「ただ……あいつも結構、リーチェをかわいがってたしな。どうにかしてやりてぇってのがホントのところだった。実はあんたらが来たのは、俺がそのことを上申して、ヨハンの野郎にあっさり却きやつ下かされたあとだったんだ。やつは口が達者だからよ。俺なんかじゃあ太刀たち打うちできやしねぇ。でも、どんな結果が出るかはわからねぇが、あんたらのおかげで、チャンスだけは与あたえられたわけだ。だから、あんたらには感謝してる」

　おそらく、トマトクンはマリアローズの知らないことを知っているのだろう。トマトクンと焔ホムラの会話には、今ひとつマリアローズの理解が及およばない部分があった。

　ただ、あくまで言われてみれば、だが、何となく死に急いでいるような印象が焔ホムラにはある。

　もっとも、そのあたりはベアトリーチェも同じだったので、番人に共通する捨て身の思想なのだという受け止め方もできそうだ。

　違ちがうのか。

「行くか」

　焔ホムラが歩き出した。

　その斜ななめ後ろをついてゆきながら、マリアローズは若じやっ干かんの緊きん張ちようを感じはじめていた。

　何だか、自分たちの足音が、ちょっとした物音が、やけに大きく聞こえる。どれも、さっきまではそれほど気にならなかった音ばかりだ。実際、水音や例の鳴き声のせいで、この程度の音なら遠くまでは届かないだろう。たぶん、大だい丈じよう夫ぶなはずだ。

　そうは思うのだが、万が一ということもある。

　時間は？

　時計を取り出して確かく認にんすると、二十三時五十分だった。あと五分か。下水道が左右に曲がっている角はもうすぐなので、何とか間に合いそうだ。

　そうはいっても、さっき焔ホムラが言ったように、上の連中が何らかの事情で早めに突とつ入にゆうする羽目になっているかもしれない。

　それ以前に、隠かくし通路がどうなっていて、隠れ家ががどういった構造かもまったく不明だ。

　こうして考えてみると、不確定要素が多すぎる。というか、確定要素はなきに等しい。これがお宝探しなら、投機的要素はどうしても排はい除じよできないので仕方ないし、我が慢まんしようもあるが、人命救助となると話は違う。

　──頭が、胃が痛くなってくる。

　曲がり角の手前で後続を止めさせた焔ホムラが、自分だけ先行して角から顔を出し、左に曲がった先をうかがった。すぐに手を振ふり、「来い」という感じのジェスチャーをしてみせたので、他の全員が角のところまで行くと、焔ホムラはもう一度、ネックレスに通した時計を見た。それから一つうなずいて、腰こしの大刀を右手で抜ぬき、背負っていた盾たてを左手に持った。

「抜ばつ剣けん」

　小声の指示だったが、番人たちは次々と腰の物を抜き連ねて盾を構えた。マリアローズを含ふくめたＺＯＯの面々も、それぞれ得物を手にして、いつでも飛び出せる態勢だ。

　マリアローズは自分の時計を確認した。

　二十三時五十三分。あと二分。

　焔ホムラは角のすぐ手前で壁かべを背にし、微び動どうだにしない。

　秩序の番人七番突とつ撃げき隊が、焔ホムラを入れて総勢十六名、これにＺＯＯの六名、あわせて二十二名。

　総員で、突入時間一分前に、できるだけ静かに、極力すみやかに、角を曲がって一気に百メーテルを駆かけ抜け、突入する。

　前もってそう打ちあわせてはいたが、もっと細心の注意を払はらうべきではないかという気もする。何かもっと策を練っておけばよかった。何かが足りないように思えてならない。何か忘れているのではないか。何かしておくべきことは？

　ベアトリーチェは無事だろうか。

　意識的に考えないようにしていた、そんな心配事が、一番の懸けん案あん事じ項こうが、ふと頭に浮うかんだときだった。

「突撃」

　焔ホムラが低く押し殺した声でそう言うなり、角の向こうへ飛び出していった。

　マリアローズは心臓が飛び出しそうになったが、遅おくれなかっ

た。

　トマトクンの背中は七十サンチほど前にある。

　自分の、トマトクンの、焔ホムラの、ＺＯＯの仲間たちの、番人たちの、いくつもの、激しい足音がする。水音がする。さしものプロヴィデンス・シリーズの鎧よろいも、この速度で走るといくらかうるさかった。

　と、後ろで何かが水に落ちる音がした。「あっ」という声も聞こえた。誰だれか間の抜けた者が下水に落ちたのか。

　だが、その声はＺＯＯの誰かではなかった。マリアローズは安あん堵どして、安堵している場合ではないと思い、振り返らず、ただひたすらトマトクンに、焔ホムラについていった。どんどん頭の中ががらっぽになってゆくようだった。考えるより、感じることの方が多くなっていった。様々な音がして、行く手に光が見えた。頬ほおにあたる空気を感じた。足の下には歩道がある。手の中には偽にせ劫ごう火かがある。束つかの間、それがすべてだった。

　しかし、予感は常にあった。

　すべてが一変する予感が。

　行く手の光は、壁に開けられた穴から洩もれ出る照明器具の明かりだった。

　そこから何者かが出てくることを、焔ホムラは予測していたのか。あるいは、やはり予感があったのか。

　いずれにしても、焔ホムラは出会い頭にそいつの素っ首を苦もなくはね飛ばした。勢いあまった大刀がかすかに穴の縁ふちに触ふれて火花が散ったが、この豪ごう腕わんの剣けん士しはまったく気にする様子もない。首から上を失ったスーツ姿の男は、下水に蹴け落おとされた。焔ホムラは躊ちゆう躇ちよせず穴へと飛びこんだ。それに続くトマトクンを追ったマリアローズは、もう暗視鏡は邪じや魔まだと悟さとった。その先は十分とはいえないまでも、暗視鏡が不要なくらいには明るかった。

「何だてめえら……！」

　幅はばは五メーテルほどで、奥行きは十メーテルくらいか。下水

道の壁に穴を開けて作った通路の壁には、照明器具が据すえ付けてあり、突つき当たりには鉄てつ柵さく状のシャッターがあって、その一帯にスーツ姿の男たちがいた。「何だてめえら」と叫さけんだのは連中のうちの誰かだった。

　全部で何人いる？

　七人か、八人か。連中はすでに得物を抜いていた。突とつ然ぜんのことに動どう揺ようはしていても、怯おびえてはいないように見えた。

　そこに焰ホムラが突っこんでいって、まず一人を盾で吹ふき飛ばし、同時にもう一人の胸に大刀を突き刺さした。

　この猪ちよ突とつ猛もう進しんが、敵味方双そう方ほうに与あたえた影えい響きようは小さくなかった。

　敵には、おそらく恐きよう怖ふを。

　味方には、狂きよう気きじみた勇気を。

　マリアローズも熱に浮かされたように視野が極きよく端たんに狭せばまった。聴ちよう覚かくはほとんど麻ま痺ひした。

　走れ。殺せ。蹴け散ちらせ。潰つぶせ。

　それくらいのことしか考えられなくなって、たまたま視界に入ったスーツ姿の男に体ごとぶつかってゆき、そいつの土手っ腹に偽劫火を深々と突き刺した。

　そのあとだった。

　いや、もっと正確にいえば、慌あわてて偽劫火を抜きつつ下がろうとしたマリアローズの腰が、そいつの左ひだり腕うでにがっちりと押さえられた。その瞬しゆん間かんだった。

　死ぬ、と思った。

　相手の男の右手は、鍔つばのない片かた刃ばの剣けんを逆さか手てで握にぎっている。

　腹に剣をぶちこまれたくらいで即そく死しするほど、人間はやわ

ではない。

「──ぅおのォッ……！」

　どのタイミングか忘れたが、暗視鏡は上にずらしていたので、男の顔がよく見えた。

　男は灰色の短たん髪ぱつで、眉まゆを細く整えていて、唇くちびるの右う端たんにピアスをしていた。鼻にもピアスをしていた。右目の脇わきにもピアスをしていた。左頬に小さな刺青いれずみがあった。《ＳｍＣ》、そして、その下に《殺》の文字と、数字で《29》。まだ若そうな男だ。きれいなラインの粋ＣＯＯＬなスーツを着ていて、背もわりと高く、歓かん楽らく街がいの若い女たちが好みそうな細ほそ面おもてだった。

　今、その顔が赤黒く歪ゆがんでいる。

　見開かれた目には、恐怖が、絶望が、怒いかりが、殺意が、マリアローズが映っていた。

　もしかして、もしかしなくても、こいつが自分を殺すのか。

　でも、こいつもそのあとで死ぬんじゃないのか。

　どちらにせよ、うまく死ねば、生き返ることもできるだろう。頭、だけは──

「マリア……！」

　名を呼ばれて、我に返った。そのときにはもう、横から繰くり出されたトマトクンの大剣が、殺29の男の頭部を破は砕さいしていた。

「迂う闊かつだぞ、お前らしくもない！」

　トマトクンの言うとおりだ。マリアローズは自分を見失い、我が身を顧かえりみない突とつ撃げきをして、もう少しで死ぬところだった。

　もっと冷静にならなければならない。

　視野を広く持って。耳を澄すまして。頭を働かせて。アンダーグ

ラウンドでは普ふ通つうにできていることが、全部できていなかった。こんなことでは命がいくつあっても足りないだろう。

　顔にかかった返り血が気持ち悪い。

　マリアローズは、左手で素す早ばやくそれをぬぐって偽劫火を引き抜ぬきつつ、殺29の男の死体を蹴け倒たおした。息を整えながら見回すと、数名の番人を含ふくめたスーツ姿の男たちはすでに全員、倒たおれ伏ふしていて、突き当たりのシャッターは三分の一くらいまで上がっている。確か、最初は下まで完全に閉まっていたような記き憶おくがあるから、ちょうどシャッターの脇に転がっている死体が、生前、開けて向こうへ行こうとしていたのかもしれない。

「被ひ害がい報告！」

　焔ホムラがかがんでシャッターをくぐりながら怒ど鳴なった。

「チェス！　早くしろ」

「はっ」

　兜かぶとをかぶっているので見分けがつかないが、たぶん隊長補のチェス・ピードなのだろう。一人のわりあい小こ柄がらな番人が、血の海に沈しずんで起き上がらない番人の様子を手早く確かめ、死者二名、軽傷者三名と報告した。

「よし、死んだやつは置いていく。すまねぇが、回収はあとだ」

「怪け我がをしている人はわたしが──」

　シャッターの向こうの焔ホムラは、すかさずそう名乗り出たユリカを一いち瞥べつして短く首を振ふった。

「たいした傷じゃねぇようだし、そいつも後回しだ。時間が惜おしいからな」

　時刻はもう二十三時五十五分を回っているだろう。ユリカは医術士として怪我人を放っておけないのかもしれないが、たぶん焔ホムラの判断は正しい。

「進むぞ」

　焰ホムラが手て振ぶりを交えて合図すると、番人たちが物も言わずに次々とシャッターをくぐり、ＺＯＯもトマトクンを先頭にして、速めの駆かけ足でそれに続いた。

　シャッターの向こうはまた同じような通路で、約十メーテル先にやはり鉄柵状のシャッターがある。見たところ、さらにその先も通路になっているらしいけれども、暗くてよくわからない。とりあえず、今のところ人の気配はないようだ。下水道の水音も遠くなり、不気味なくらい静かだった。

　だが、次のシャッターを、チェス・ピードと思おぼしき番人が壁かべ際ぎわの床ゆかに設置された器具を手で回転させ、半分ほど開けたときだった。

「敵だ」

　トマトクンがそう言って大剣を担かつぐように構えた。

　それから間もなくだった。遠くでシャッターが開く音がする。この先のシャッターは閉まったままだから、さらにもう一つ先のシャッターか。

　目のいいピンパーネルが鋭するどく叫さけんだ。

「クロスボウ！　飛ビ道具でス！」

「──焰ホムラ隊、前ェッ！　盾たて構えェェ！」

　焰ホムラの反応は素早く、番人たちもこれによく応こたえた。たちまちのうちにＺＯＯを押しのけて横に広がった番人たちは、一いつ斉せいに腰を低め、盾をやや上に向けて前方にかざした。

　それでも、わずかに動き出しの遅おくれた者が二人、三人と倒れ、それでできた穴を後ろの番人が埋うめようとするものの、矢が空気を切り裂さく音はなかなかやまない。実際にはそれほど長い時間ではないのかもしれないが、水平方向からの平面射しや撃げきは嫌いや気けが差してくるくらい続いた。

　後列へと追いやられたマリアローズたちＺＯＯの面々は、床に伏せて、幸い皆みな、何とか無傷だったけれども──この矢の数は。

　最終的に五人の番人を射貫き、間断のない金属音を響ひびかせて

盾に弾はじかれ、時に貫つらぬいた矢は、いったい全部で何本に上るのだろう。射手は何人いるのか？

「クソッタレが、ジェノシドマックスの回転式ラニング連発弩フアイヤかよ……！」

　マリアローズの疑問に答えたわけではあるまいが、焔ホムラが矢だらけになった盾を床に放り投げて、吐はき捨てるように言った。

　回転式ラニング連発弩フアイヤ。聞いたことがある。〝ピンクショット〟という有名なはぐれ機術士が開発した連装の弩いしゆみで、どこぞの国の軍隊が制式装備に採用しようとしたが、あまりにも高価なため、予算の関係で断念したらしい。その後、〝ピンクショット〟が行方ゆくえ不明になるなど、何かと曰いわく付きの代しろ物ものだ。

　だが、弩であれば、矢の再装そう塡てんには時間がかかるはずだ。射撃がやんだことからも、これで打ち止めと判断しても差し支えないだろう。

　マリアローズと同じ考えらしい焔ホムラは、大刀を振り上げて吼ほえた。

「ジェイの野や郎ろうが出てくるかもしれねぇ！　てめぇら、フンドシ締しめてかかれ！　突撃用ォォォォ意ィッ……！」

「応！」「応」「応」「応」「応」「応」「応」「応……！」

　戦力になりうる番人は、焔ホムラを入れて九人になっていた。これにＺＯＯの六人を加え、十五人。すでに七人も欠けたことになるが、番人たちの士気は少しも衰おとろえていないようだ。

　トマトクンも焔ホムラに負けじと大声を張り上げた。

「俺たちも行くぞ！　サフィニアは魔ま術じゆつで掩えん護ご、ピンプは好きに殺せ！」

「……はい……！」

「はイ」

　サフィニアとピンパーネルは、ＺＯＯの中でも特にトマトクンに

忠実な二人だ。トマトクンが死ねと言えば、この二人はおそらく喜んで死ぬだろう。もっとも、ピンパーネルについては、死ねと命じられるよりも殺せと命じられた方が、何倍も何十倍も嬉うれしいに違ちがいないが。

　トマトクンは引き続き指示を飛ばした。

「マリアとカタリは俺から離はなれるな！　ユリカはサフィニアを！」

「了りよう解かい」

「わかっとるがな！」

「はい！」

「──突とつ撃げき！」

　そして、焔ホムラが腹の底に響くような声で号令をかけると、前列の番人たちが雪崩なだれを打ってシャッターをくぐっていった。

　マリアローズたちＺＯＯは、トマトクンを中心にその後ろをついてゆく格好だが、ピンパーネルだけは別だ。何しろ、この元アッサシンは信じられないほど足が速いので、あっという間に番人たちに並び、追い越こして、先頭に立ってしまった。

　が、それ以上は突とつ出しゆつしない。

　ピンパーネルはわかっているのだろう。

　あまりに先行しすぎて、一人だけで接敵し、混戦になれば、サフィニアにできる掩護の幅はばが狭せばまることを。

　その、敵は。

　距きよ離りだけでなく、目が粗あらいとはいえ、鉄てつ柵さく状のシャッターがブラインドになってもいるし、明るさの関係もある。さらには、マリアローズの位置からだと番人たちに遮さえぎられてよく見えないが、半分くらいまで上がった二つ先のシャッターの向こうから、続々と姿を現しつつあった。

　まあ、現しつつあるも何も、お互たがいの位置関係を考えれば、

どうしても次のシャッターが衝しよう突とつ地点になる。

　十メーテル。たった十メーテルだ。

　ということは、数秒後、シャッター越ごしに対たい峙じして、さてどうするか。

　普ふ通つうに考えたら、まずはどちらかがシャッターを上げなければ、どうしようもない。シャッターを開閉する器具は両側にあるようなので、可能か不可能でいえばどちらにも可能だが、できればお互いそんな作業は相手にやらせたいところだろう。

　どちらかが、思いきってシャッターを上げにかかるのか。睨にらみあいになるのか。シャッター越しに殺しあう羽目になるのか。何かもっと別の展開が待っているのか。

　結局、別の展開になった。

　サフィニアが上ハイ古ロ高メ位オ語ンの呪じゅ文もんを詠えい唱しようしはじめたのだ。

「寒磁罪母刹ＲｅｕＬａ外ＮａｕＲａ矛Ｊｕｄａｓ怨氷結酷寒冷獄」

　ＬＥＰから呼び出した水霊Ｈｙｄと時霊Ｘｅｏの力を借りて、あわよくば対象の生命活動を停止させて殺害し、悪くてもしばらくの間、運動能力を奪うばう、縛ばく氷ひよう獄ごく。サフィニアがよく用いる、得意とする魔術といってもいいだろう。

　サフィニアは縛氷獄の魔術を完成させ、シャッターの向こうで発動させた。

　むろん、標的はシャッターに殺さつ到とうしようとしていた相手方だ。

　シャッターの向こうに、大気にあたためられて水蒸気と化した水分が真っ白い靄もやみたいに広がり、その冷気はマリアローズにも感じられた。言うなれば、生きたまま瞬しゅん間かん冷れい凍とうされるようなものなので、極寒の極地に対応した装備でもしていない限り、これはたまらないだろう。

　その意味では、敵が非常識でなくてよかった。連中は、秋口のエ

ルデンに相応ふさわしい程度の格好だった。

　だが、マリアローズは瞠どう目もくせざるをえなかった。番人たちの合間から見えた、シャッターの向こうで全身を霜しもに覆おおわれている敵の服装に見覚えがあったからだ。

　全員ではなく、殺29の男と同じようなスーツ姿の者もいるが、あれは──髑どく髏ろを象かたどったネックレスや指輪、ブレスレットなどをじゃらじゃらとつけた、あいつらは。

「チェス……！　今だ、開けろ！」

　チェス・ピードらしい小こ柄がらな番人は、焔ホムラに命じられるより早く、壁かべ際ぎわの床ゆかにある器具にとりついていた。レバーを回す。シャッターが上がってゆく。

　十サンチ。

　三十サンチ。

　マリアローズは、もう一度、髑髏のアクセサリーを確かめてから叫さけんだ。

「龍州人がいる！」

　だからどうしたというわけではない。ただ、言っておいた方がいい気がした。

　トマトクンと焔ホムラも、何か察するところがあったのか、マリアローズをちらりと見たが、シャッターはもう七十サンチくらい上がった。重装備の番人たちでも、ちょっと無理をすればくぐれる高さだ。

「──突つっこめェェィ！」

　そうなると、龍州人がいようがメリクルがいようが悪あく魔まがいようが二の次、三の次だ。マリアローズも徐じょ々じょにわかってきたが、この程度の人数同士の戦せん闘とうだと、機を逃のがせばまたたく間に形勢が不利になる。ある意味、一対一で剣けんを交えるよりも、駆かけ引きの要素は少なく、勝敗は一瞬で決してしまう。

　それゆえに、とりわけ先手を取ったとき、番人たちの集団突とつ貫かん攻こう撃げきは凄すさまじく強い。

　彼らは盾たてで敵を吹ふっ飛ばし、剣で串くし刺ざしにすることで、躊躇ためらうことなく一人一殺を実じつ践せんする。場合によっては相討うちに終わることもあるが、一人一殺どころか、二人も三人もしとめる焔ホムラのような傑けつ出しゅつした剣士もいる。難しいことは一いつ切さいない。いや、あえて複雑さを排はい除じよした戦術なのだろう。単純な数減らしの結果として、番人たちは優位に立つことができる。

　もっとも、この状じよう況きようにおける番人たちの仕事は、数減らしよりも、まずはサフィニアの縛氷獄で動けなくなった敵を突き倒たおして道を空けることだ。

　マリアローズは、トマトクンの左斜ななめ後ろについてシャッターをくぐった。すでに、敵の最前列は番人たちに突き崩くずされている。焔ホムラや数名の番人はさらに前進し、それに先んじてピンパーネルが迸ほとばしるように駆けてゆく。敵はまだいる。十人。いや、その倍はいるか。

　おそらく、敵側にしてみれば、一瞬、自分たちの前列に何が起こったのかわからなかったのだろう。それでも、壁かべになっていた前列が薙なぎ払はらわれると、彼らも理解したようだ。嫌いやでも理解せざるをえなかったに違ちがいない。

　ピンパーネルが先せん陣じんを切って髑髏の龍州人──骨龍を、無造作に斬きり刻んだ。

　やや遅おくれて、焔ホムラが大刀で一人のスーツ姿を叩たたき斬った。

　トマトクンが大剣を一いつ閃せんさせて、骨龍を二人、一挙に両断した。

　それで敵は思い知ったはずだ。

　人数的には、たぶんかなり敵に分がある。回転式ラニング連発弩フアイヤの斉せい射しやを一方的に浴びせたところまでは、敵の優勢だった。しかし、サフィニアの縛氷獄が流れをこちらに引きよせ、決定的な個の力が駄だ目め押おしをした。

マリアローズも、一人の骨龍に右籠こ手ての矢を命中させ、絡からんできたスーツ姿をカタリに引き受けさせて、ユリカとサフィニアに接近しようとしていた別のスーツ姿にまた右籠手の矢を当てた。矢を食らわせた二人は、あと数秒でＰ９ドウター＋が効きはじめ、全身痙けい攣れん、戦闘不能に陥おちいるだろう。

もはや、どの方向にも敵がいて味方がいる乱戦だが、マリアローズのそばにはトマトクンとカタリがいる。ユリカとサフィニアも、少々離はなれ気味だが、何とかついてきている。ピンパーネルは、他人の助けを必要とするような男ではない。

大だい丈じよう夫ぶだ。

正確な数はかぞえようもないが、敵はどんどん減ってきているように見えるし、勝てる──と、そんなことを考えるのはまだ早すぎた。

「……ぬお！」

突とつ如じよ、前を行くトマトクンが、否いな、前を行っていたはずのトマトクンが、マリアローズの脇わきを転がってゆき、すぐに跳とび起きた。

マリアローズは見た。

トマトクンに低い姿勢からの強きよう烈れつな体当たりを浴びせ、転てん倒とうさせたその男を。

一言でいえば、やつは筋肉ダルマだった。

白い人骨の紋もん様ようが入った、袖そでがない藍あい色いろの衣ころもからのぞく、刺青いれずみだらけの両りよう腕うでだけではない。その全身が、顔までもが筋肉でできているようで、肌はだや頭とう髪はつ、目の色から東部人だということはわかるけれども、顔立ちなんて正直、よくわからない。

骨龍の女首領ミストレスらしいあの媚妻メイルー、魔ま性しようの目を利用した邪じや術じゆつの使い手にくっついていた男だ。

確か、呉戒ウージエ。

そう媚妻メイルーに呼ばれていたと、マリアローズは記き憶おく

している。

　呉戒ウージエは腰こしの左右から二本の得物を両手で抜ぬいた。それは先の尖とがった太い棒で、横手がついており、握にぎりには革かわか何かが巻かれている。十手とかいう龍州産の武器に似ているが、十手は先が尖っていないし、もっと小こ振ぶりだ。まあ、さしずめ、大十手といったところか。

　その二本の大十手を両手にだらりと下げた呉戒ウージエは、きわめて危険な敵に見えた。

　だって、何となく、マリアローズはその後の展開が予想できた。

　予想どおりになった。

　呉戒ウージエの後ろから進み出てきて、その脇にぴったりと寄り添そった者がいる。

　女だ。

　髪かみ型がたはドレッドロックスで、黒地に紅色の髑どく髏ろ柄がらの、両側に深いスリットが入った龍州風のドレスを身につけ、唇くちびるには黒い口紅を塗ぬり、眉まゆは剃そり落とされていて、目は――

　いや、ダメだ。

　あの不気味な刺青に飾かざられた目を見てしまったら、きっと大変なことになる。

　マリアローズは意識的に視線を落とし加減にして叫さけんだ。

「あの女の目を見ないで！」

　だが、返事がない。

　皆みな、無言で、黙だまって、おとなしくマリアローズの言葉に従ってくれたのだと思いたいが、えてして、思いたいことと事実は一いつ致ちしないものだ。

　そこで、まずカタリをちらりと見た。ため息も出なかった。

期待をこめて、トマトクンを見た。マリアローズの顔が引きつった。トマトクンは大剣を担かつぐように構えたまま、体中をぴくぴくと震ふるわせていた。

振ふり返って後ろを見ると、金かな縛しばりに遭あったように硬こう直ちよくしているユリカは、それでもやっぱり絶世の美少女だった。

サフィニアだけだった。

しかも、サフィニアは銀色の杖つえを両手で握り締しめ、険しい表情で前方を睨にらんでいる。目をそらしてはいない。サフィニアは媚妻メイルーの魔性の目をしっかりと見み据すえて、その妖よう力りよくに抗あらがっているようだ。

マリアローズには何だかよくわからないが、魔術士であるサフィニアには、魔性の目に対する耐たい性せいがあるのか。

「……わたしに、妖術なんて……通じない……！」

サフィニアが絞しぼり出すようにそう言って、杖を横向きに持った両手を前に突つき出した。その何か不可視の物体を押し出すような動作が直接、作用したわけではないだろう。

媚妻メイルーの両眼から、口から、鼻から、毛穴から、やや緑色がかった光が噴ふき出した。その光こそが魔力だ。魔力は普ふ通つう、目視できないが、体内に集中せず、空転して、拡散したときは、このような光という形で目に見える。

精神攻撃マインドハック。

サフィニアの作り出した攻性スパク意識体チユラが、今、魔術の深しん淵えんを知る者のみが感知しうるという無意識層共有集積領域を通って、媚妻メイルーを攻撃している。詳くわしい仕組みは、マリアローズのような魔術の初歩くらいしか知らない人間には想像もつかない。たぶん、その原理について書かれた書物を理解するだけでも、そうとうの時間を費ついやさねばならないだろう。

だが、サフィニアが何かをして、そのせいで媚妻メイルーがこうなっていることは一目瞭りよう然ぜんだ。

だから、呉戒ウージエがサフィニアめがけて駆かけ出したのは、

むしろ当然といえる。

　もちろん、マリアローズはサフィニアを守らなければならない。呉戒ウージエならば、手にした大十手を使うまでもなく、素手で軽々とサフィニアを殴なぐり殺してしまえそうだ。いや、それは何もサフィニアに限らない。あの筋肉のかたまりの前では、マリアローズだって大差ないだろう。

　そうはいっても、止めなければ。

　媚妻メイルーがああなっているにも拘かかわらず、トマトクンも、カタリも、ユリカも、まだ呪じゅ縛ばくから解かれる様子はない。マリアローズしかいないのだ。しかし、どうやって？

　籠こ手ての矢ではダメだ。命中させても、Ｐ９ドウター＋が効果を現すまで時間がかかる。相手が標準的な成人男性ならば、数秒から長くて十秒ほどだが、呉戒ウージエはその間にサフィニアを殺すかもしれない。

　ハーレム・ゴードン、爆ばく弾だんも使えない。距きょ離りが近すぎて、自分もそうだけれども、周囲を巻きこむ可能性が非常に高い。

　愛用の剣けん、偽にせ劫ごう火かは――まあ、どうもこれを頼たよりに体を張るしかなさそうな情勢だが、正直、どうにかなるとは思えない。

　それでも、やるしかないのだ。

　マリアローズは呉戒ウージエとサフィニアを結ぶ直線の間に割りこんだ。向かいくる呉戒ウージエを正面にとらえたまではいいが、迫はく力りよくが物もの凄すごい。心理的な圧あつ迫ぱく感かんだけではなく、速度も予想以上だし、こんなものを止めるなんて、物理的に可能なのか。

　腰こしが引けそうだ。悲鳴が洩もれる寸前だった。逃にげてしまいたい。どこか遠くへ行きたい。けれども、マリアローズはほとんど破れかぶれで呉戒ウージエの顔面に狙ねらいをつけて偽劫火を突き出し、次の瞬しゅん間かん、どういうわけか宙に舞まっていた。

　どうして、何が、どうなった？

確か、偽劫火を大十手で弾はじかれ、それで──呉戒ウージエのぶちかましをまともに食らい、紙かみ屑くずみたいに飛ばされた。そして、今は上下逆さまの視点で呉戒ウージエの背中を見ている。間もなく頭から床ゆかに落下する。

痛いとか、そういった感覚はまるでない。

ただ、しまった、と。

何て自分は無力なんだと、マリアローズはその苦さだけを噛かみ締めていた。僕が貧弱だから。

しかし、かろうじて受け身をとることに成功し、肩かたから床に落ちながら、ＺＯＯにはもう一人、頼りになる男がいることを思い出した。

彼の名は、ピンパーネルという。

ラハン大陸の言葉で瑠ル璃リ繁縷ハコベを意味するその名前は、名は体を表すどころか、彼の存在を百分の一も表現していない。

砂色の元アッサシンは、疾しつ風ぷうのように、あるいは迅じん雷らいのように駆ける。放たれた矢のごとく跳ちよう躍やくして、雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けん、雄おすのグレアデと雌めすのリレッザを操あやつり、残ざん酷こくに、無情に、そして鮮あざやかに人を解体する。

突とつ如じよ、横合いから飛んできたピンパーネルは、呉戒ウージエの側頭部を両足で蹴け飛とばした。

ぎりぎりだった。

呉戒ウージエはあと一歩か二歩で、サフィニアを大十手の間合いにとらえるところだった。

もっとも、それで万事丸く収まったわけではない。

呉戒ウージエはよろめいたものの、すぐさま態勢を立て直した。そこからがこの巌いわおのような男の異様さだった。呉戒ウージエは間かん髪はつを入れずに襲おそいかかってくるピンパーネルには見向きもせず、しつこくサフィニアに迫せまろうとしたのだ。

　むろん、一回転してきれいに着地を決めたピンパーネルは、これを阻はばもうとして短剣を鋭するどく凶きよう暴ぼうに無む駄だなく舞わせた。

　ところが、だ。

　呉戒ウージエは驚おどろくべき防ぼう御ぎよ手段でもって、ピンパーネルの連撃を防いだ──とはいえまい。実際、ピンパーネルの短剣は呉戒ウージエの肉を引き裂さき、腱けんを断ち切って、骨を削けずったのだから。

　ただ、それでも呉戒ウージエは止まらなかった。というより、呉戒ウージエは意図的にマリアローズの胴どう回まわりよりも太そうな右みぎ腕うで一本で、ピンパーネルの攻撃を受け止めたのだろう。

　サフィニアをしとめるために。

　媚妻メイルーに精神攻撃マインドハツクを仕し掛かけているサフィニアを殺すため、呉戒ウージエはあえて自分の右腕を犠ぎ牲せいにしたということだ。

　それでも、あと一秒あれば、ピンパーネルは呉戒ウージエに致ち命めい的てきな一いち撃げきを加えていたかもしれない。

　しかし、いかんせん、呉戒ウージエとサフィニアの距離は近すぎた。いかにピンパーネルといえど、無理なものは無理なのだ。

　呉戒ウージエの左ひだり腕うでが唸うなりを上げて、その手に握にぎられた大十手がサフィニアの華きや奢しやな体を粉ふん砕さいしようとしている。サフィニアは動かない。集中していて動けないのか。足がすくんでしまっているのか。マリアローズは呉戒ウージエに吹ふっ飛ばされてから今までの間、自分がろくに呼吸をしていなかったことに気づいた。床に這はいつくばった姿勢のまま息を呑のんだ瞬間、胸から腹部のあたりに強きよう烈れつな痛みを覚えたからだ。その痛みとたぶん同時だった。

「──があああああっ……！」

　ピンパーネルだけでは、確かに間に合わなかった。

　が、サフィニアやユリカの近くで、大剣を担ぐように構えたま

ま、さっきまで媚妻メイルーの妖よう術じゆつにとらわれていた動物園ＺＯＯの園長マスターが━意地か、意志の力か、はたまた単にたまたまいいタイミングで呪縛が解けただけか。

　位置的には、サフィニアの真ん前に呉戒ウージエが迫っていて、ちょうどそれを右からピンパーネルが、左からトマトクンが挟きよう撃げきした形になる。

　トマトクンが斜ななめ上段から振ふり下ろした大剣を、呉戒ウージエはとっさに大十手で受けようとしたようだ。そこまでゆくともう、本能的な防御動作だろうが、トマトクンの膂りょ力りょくだって並なみ大たい抵ていのものではない。しかも、呉戒ウージエは片手で、トマトクンは両手だ。さすがの呉戒ウージエも押し切られ、トマトクンの大剣が大十手ごと馬ば鹿か太い左腕を斬きり潰つぶした。

　まあ、そこまでやられても、呻うめき声一つ洩らさないのだからたいしたものだが。

　両腕が使い物にならないのに、器用に連続後転を決めて媚妻メイルーの前まで下がってみせたのは、さらにたいしたものだった。

　とはいえ、立っていられるのが不思議なくらいの重傷に見えるし、出血も夥おびただしい。戦力的にも明らかすぎるほどこちらが有利で、トマトクンも、ピンパーネルも、一気に呉戒ウージエをしとめようと動き出しかけている。

　マリアローズは、胸と腹の痛みで目がくらみそうだが、無理をして立ち上がるまでもないかもしれない。周囲の戦せん闘とうも、番人たちの優勢で落ち着いてきつつあるようだし、今度こそ、これで決まりか。

　決まると思った。

　決めて欲ほしかった。

　それなのに、その決定打を放つべきトマトクンが、不意に足を止めて腰を低め、猫ねこのように背中を丸めて頭とう髪はつを逆立てた。

「……ＳＩＸ……！」

　トマトクンは忌いま々いましげに、呪のろわしそうに、反吐へどを吐はくように、その名を口にした。

　だが、言われなくてもわかった。マリアローズも感じた。ピンパーネルでさえ、呉戒ウージエではなくそちらに目をやって身構えた。サフィニアも精神攻撃マインドハックを中断したようだ。

　戦闘がやんだ。

　敵味方双そう方ほうが手を止めて、通路の奥の方からゆっくりと、世界の異物のように、周りの空気を邪よこしまな気配で乱す気色の悪い魔ま物もののように、歩いてくるというよりは徐じよ々じよに巨きよ大だい化してくるかのごときそいつを注視した。その異形の存在感には、人をそうさせる力があった。

　そいつは革かわか何かの、派手な色と柄がらのパンツとブーツを穿はいただけで、上半身は裸はだかだった。

　一応、人間に類する形をしている。けれども、極きよく端たんに腰こしがくびれ、手足と首が異常に長い体形は、明々白々に普ふ通つうの人間ではありえない。体形のせいで、巨きよ漢かんという表現はややそぐわないが、背せ丈たけは二メーテルくらいあるだろう。

　その肌はだ──奇き妙みように白くて、傷一つない最上級の陶とう器きのように滑なめらかな肌は、なぜか皮ひ膚ふというよりも肉を想像させる。

　やつの顔がん貌ぼうは邪じや悪あくだ。

　邪悪とは何かと問われれば答えに窮きゆうするけれども、とにかく邪悪なのだ。

　大きく左右に裂けているきわめて薄うすい唇くちびるも。人間のそれとは思えない尖とがった歯も。鬼おに火びのような禍まが々まがしい輝かがやきを宿した両りよう眼めも。

　ひたすら不快だ。

　いや、不快というより、おぞましく、恐おそろしい。どこか白子アルビノの蛇へびに似ているが、やはり決して違ちがう。そんなことを言っては、蛇に失礼だろう。美しく艶つやのある濡ぬれたよう

な黒くろ髪かみが肩かたにかかっているのも、人を嘲あざ笑わらうかのようなミスマッチで、かえって怖おぞ気けをふるわせる要素にしかなっていない。

　やつの左ひだり肩かたには、数字の《６》が刺青いれずみされている。

　６。

　ＳＩＸ。

　あるいは、Ｓ．Ｉ．Ｘであるともいう。

　このエルデンに住んでいて加サデイ虐ステイ的ツク・殺戮マーダーズ・愛好会クラブの首領マスターＳＩＸの名を知らない者は、新参者や子供を除けば、たぶんコロナくらいのものだろう。

　しかも、ＳＩＸは一人ではなく、マリアローズが龍州人のアジトに監かん禁きんされていたとき、アジアンとともに現れた男を伴ともなっていた。灰色の髪かみの毛を後ろに撫なでつけ、眼光鋭するどく、老いた鷲わしを思わせる顔立ちで、ストライプ柄のスーツを着こなした伊達だて男風の人でなし──ＳｍＣの実質的なナンバー２、ジェイと呼ばれている男だ。

　つまり、ＳｍＣの二大巨きよ頭とうが、揃そろって隠かくれ家がでくつろいでいたところ、デニス・サンライズと羅ラ叉サの隊にサックドールが襲しゆう撃げきされたので、裏口から逃にげてきたのか。

　尻尾しつぽを巻いて逃げてきたというふうにはとても思えない、ふてぶてしいほどに悠ゆう然ぜんとした態度だが。

　だいたい、あれは何だ。

　ＳＩＸが首にかけている──ネックレスというには大きすぎる、襟えり巻まきとでも呼べばいいのか、しかしながら、あんなものをそう呼んでしまうのは、常識的な言語感覚に対する挑ちよう戦せんだろう。

　また、あんなものという言い方も訂てい正せいすべきだし、本来、それは用よう途とが違う。

　そんな目的のために使うべきではない。

　人を。

　全ぜん裸らの女性を。

　手て枷かせで固定した両手と、足あし枷かせでひとまとめにした両足とを、鎖くさりで繋つなぎ──ちょうど輪のようにした女の体を首にかけるなんて、それは、その所業は、とても、言語道断なくらい、間ま違ちがっている。

　間違いであって欲しい。

　別人であればいい。

　別人であっても、もちろん、正視に耐たえない光景ではあるのだが、それでもマリアローズは祈いのらずにいられなかった。いつか悪党どもに父母を踏ふみにじられて以来、不信心なもので、祈る神すら持たないのに。

　だが、最初に見たときからわかっていた。

　あのくすんだ金きん髪ぱつは、彼女のものだ。

　目め隠かくしをされて、猿さる轡ぐつわを嚙かまされていて、顔はほとんどわからない状態だけれども、それが彼女ではないと否定する根こん拠きよは、悲しいほどない。

「……ベアトリーチェ……」

　マリアローズは鈍にぶく痛む腹のあたりを押さえて立ち上がり、目をそむけようとしたが、できなかった。

　ＳＩＸの右胸くらいの位置にあるベアトリーチェの顔が、マリアローズの方を向いたからだ。

　それから、ベアトリーチェは何か呻うめいて身をよじりかけたが、ＳＩＸに背中を一撫でされると、体の力を抜ぬいておとなしくなった。

　自分の名を呼ぶ声が聞こえたのか。

　マリアローズは囁ささやくように呟つぶやいたのだが、ありえなくもない。通路は粘ねん着ちやく質しつの沈ちん黙もくに押し包まれている。目を塞ふさがれたベアトリーチェは、とりわけ聴ちよう覚かくが鋭えい敏びんになっていることだろう。

　けれども、ベアトリーチェだって当然、自分が今どんな状態なのか、ある程度は把は握あくしているはずだ。

　たゆまぬ訓練のせいか、単に若いせいか、女性らしく成熟しているとはいいがたいが、それでも男とは似ても似つかない裸の姿が人目に触ふれている。

　ひょっとしたら、自分の名を呼んだのがマリアローズだということにも、気づいたかもしれない。

　それはきっと、耐えがたい恥ち辱じよくのはずだ。

　そんなことを彼女に強しいるのは、許しがたい大罪に違いない。

　──助けないと。

　せめて、彼女を救い出してやらないと。

　でも、彼女はあんな場所にいる。立ち止まったＳＩＸまでは七、八メーテルといったところだが、距きよ離りの問題ではない。

　遠い。遠すぎる。

　絶対に、どれだけ手をつくしても届かないようにさえ思える。

「何だかねえ……」

　口を開いたＳＩＸが発した声は、腹の底に響ひびくような最低音域バスなのだが、どこか女じみた妙みような抑よく揚ようがあって、マリアローズの神経を逆さか撫なでした。

「ずいぶん死んでいるじゃないか、ええ？　せっかくこの俺がネーミングにまで凝こって、それなりに使えそうなやつを集めてお前に預けたってのに、このざまかよ。ジェイ、お前の教育がなってねえんだ。見ろ、俺の大事な友だちまで怪け我がをしてるじゃないか」

「申し訳ありません。我が主マイ・ロード」

　ジェイは軽く頭を下げてから、呉戒ウージエと、彼にしがみつくように立っている媚妻メイルーを無感動な灰色の目でちらりと見た。

「あんたたちは生き残っている手勢をまとめて先に行ってくれ。動けないようなら、誰だれかに運ばせるが」

「……いいえ」

　媚妻メイルーは揺ゆするように首を振ふった。だいぶ憔しよう悴すいしている様子だし、呉戒ウージエの負傷も深刻そうだが、口調は毅き然ぜんとしている。

「大だい丈じよう夫ぶよ。ただ、道案内を一人つけて欲ほしいところね」

「もちろんだ。誰か骨龍の方々を適当な場所まで送って差し上げろ」

　ジェイが命じると、スーツ姿の男が一人、マリアローズたちや番人を横目で睨にらみながら媚妻メイルーと呉戒ウージエに近づいていった。最初、十人以上いたと思われる骨龍はほとんど斃たおれていたが、それでも三名ほど歩ける者が残っていて、彼らに支えられた媚妻メイルーと呉戒ウージエは、スーツ姿に先導されて下水道の方へと向かった。その途と中ちゆう、マリアローズを含ふくめたＺＯＯの面々や番人たちの鼻先を通りすぎていったわけだが、誰も手を出そうとはしなかった。

　出せるはずがなかった。

　こちらは人質をとられているのだ。

　ＳＩＸもジェイも、そのことをわざわざ口にしたりはしないが、こちらの出方次第では、ベアトリーチェに何をされるかわかったものではない。

「──それで」

　ＳＩＸは骨龍様ご一同を見送ってから、ぐるりと通路を見回した。

「番人はわかるがねえ。よくもこの場所を突つき止めたものだって

点はさておき、番人がここにいる理由は理解できるよ。だが……なぜだ。どうしてお前がここにいるんだ。それとも、人違いか。まあ、もうかれこれ、ずいぶん顔をあわせてねえから、確かそんなツラをしてたって程度の覚えしか実はないんだが、どうも俺の直感は外れちゃいなさそうな感じだな」

　マリアローズは一いつ瞬しゅん、ＳＩＸが何を言っているのかわからなかった。

　これくらい異形の人物ともなると、話すことも珍ちん妙みょう奇き天て烈れつなのか。

　ＳＩＸが目をとめた先を視線で追い、そこに一人の男の姿を認めてからも、やはり事情は呑のみこめず、予想もつかなかったが、ただ何となく正体不明の妙な納なっ得とく感はあった。

「lon-taim-no'see.」

　ＳＩＸは上ハイ古ロ高メ位オ語ンらしい言葉を口ずさみ、鬼おに火びのともる両りょう眼めをつり上げた。

「そう挨あい拶さつしておくべきかねえ。それとも、俺たちの間では挨拶なんて不要だったか」

「後者だろうな」

　そっけない声音で、だが、珍めずらしく憎にく々にくしげに表情を歪ゆがめてそう答えたのはトマトクンだ。表情だけでなく、言葉遣づかいも普ふ段だんよりかなり乱暴だった。

「貴様のド汚ぎたないツラなんぞ見たくもなかったが、何かの巡めぐりあわせでこうなっちまった。俺たちの目的は貴様が首に下げくさってるその娘むすめだ。黙だまってその娘を置いて、とっと消え失うせろ。貴様みたいなカスは、斬きっても剣けんが汚よごれるだけだ。斬りたいとも思わん」

「Ｋｕ　Ｋｕｋｕｋｕｋｕ……相変わらず口の悪いヤツだ」

　ＳＩＸは横おう隔かく膜まくを痙けい攣れんさせるような薄うす気味の悪い笑い声を上げ、古い悪友の欠点を面おも白しろがってあげつらうみたいに目を細めた。何だか、ＳＩＸがおかしなことを言っていたような気もしたが、そんな思考は次の瞬間、きれいに消

し飛んだ。

　ＳＩＸがベアトリーチェの両手と両足を結んでいる鎖くさりを右手でつかみ、彼女の体を左手一本で軽々と持ち上げたからだ。

　ベアトリーチェは狩かられた獲え物もののように、体を折った格好でＳＩＸの手に吊つり下げられた。

「そんなに欲しいのなら、やるよ」

　ＳＩＸは左右に裂さけた唇くちびるをいやらしく割って笑ってみせた。

　いかにも裏がありそうな顔つきで、とてもではないが信用できない。

　信じられはしないが、ベアトリーチェの身み柄がらは何とかして奪うばい返したい。

　逡しゆん巡じゆんせざるをえなかった。

　正直、マリアローズは最悪のケースさえも想定した。

　むろん、ベアトリーチェを奪だつ還かんするための最悪の手段という意味だ。彼女の奪還を前提にするのでなければ、難しいことは何もない。彼女を見捨てて、ＺＯＯの六人と生き残った番人とで、ＳＩＸとジェイとわずかなスーツ姿に襲おそいかかればいい。しかし、それではこんな場所までやって来た意味がないだろう。

　だから、マリアローズが想定した最悪のケースとは──

　ベアトリーチェの死体を持ち帰って、蘇そ生せい式を施ほどこし、生き返らせる。

　──ダメだ。

　不確実すぎる。蘇生式は万能ではないのだ。マリアローズは死んだことがないのでわからないが、死にマニアのカタリ曰いわく、うまく死ぬのにはコツがあるのだという。

　端たん的てきにいえば、きれいに死ぬ。脳が破損するような死に方をしたら、まず可能性がない。焼死などもまずい。たとえば、Ｓ

ＩＸがあの体勢からベアトリーチェを思いきり床ゆかにたたきつけたとする。それで即そく死しするかどうかは微び妙みようだが、床に頭でも強打しようものなら、あまりうまくない死に方に直結してもおかしくない。

　結局、今、この時点では、様子を見るしかないだろう。日和ひより見みとそしられても仕方ないが、ここで不用意に動いて失敗したら全部おしまいだ。

　マリアローズはそう判断し、トマトクンを含めたＺＯＯの皆みなも、もう五人まで減った番人たちも同じ選せん択たくをした。

　焔ホムラだけが違ちがった。

「返せよ」

　焔ホムラは大刀を床に捨てて、ゆったりとした足どりでＳＩＸに歩みよっていった。

「そいつは返してくれ。だいたい、そいつは女っていっても、まだ年とし端はもいかねぇ餓が鬼きだし、お楽しみの道具としても面白味がねぇだろ。ＳＩＸ、あんた確か、超ちよう凄すげぇ加サ虐デ愛イ好ス者トらしいじゃねぇか。何だったら、俺がそいつの代わりになってやってもいい。俺はしぶてぇぞ。あんたがいくら責めても、耐たえて耐えて耐え抜ぬいてやる。痛がりだけどな。泣き叫さけんでも、じたばたあがいても、健康体だから、持ちはいいはずだぜ。どうだ、悪い話じゃねぇだろ」

「ほう」

　ＳＩＸはわずかに両眼を見開いた。

　それから、急に加速して数メーテル前進したＳＩＸの姿を、マリアローズはしっかりと目でとらえることができなかった。単に速かっただけではない。ＳＩＸの動作は、まるで一いつ般ぱん的な人間とは骨格や筋肉の付き方が違ちがうのではないかと疑いたくなるくらい独特で、ぎこちなさはないが、人としてどこか不自然だった。

　それゆえ、予測しづらく、目で追いにくい。

　リズムがまったく違うのだ。

焔ホムラも、一歩たりとも動けなかった。

重い、激しい音がした。

焔ホムラはただ殴なぐられて、床に倒たおれこんだ──殴られた？

殴った？　何で殴ったのか？　ＳＩＸが豪ごう速そくで斜ななめに振ふり下ろし、焔ホムラに叩たたきつけたものとは、いったい何だ？

言うまでもない。

ベアトリーチェだ。

ＳＩＸはベアトリーチェの体を武器にして、彼女と同じ義に剣を捧ささげ、恩人でもある焔ホムラを容よう赦しやなくぶん殴った。

もちろん、その容赦のなさは、焔ホムラだけでなく、ベアトリーチェに対しても向けられている。今の一いち撃げきでベアトリーチェが無傷だったとはとうてい思えない。現に、ベアトリーチェの腰こしあたりと焔ホムラの顔面が衝しよう突とつした瞬間、何だか嫌いやな音がしたし、彼女の洩もらした苦痛の声が聞こえたような気もする。

「わかってないねえ……！」

そして、ＳＩＸは満面に笑えみをたたえて、再びベアトリーチェを振り上げていた。

振り下ろすために。

焔ホムラとベアトリーチェの双そう方ほうを痛めつけ、壊こわすために。

そう、きっと焔ホムラはわかっていなかったのだ。

ＳＩＸが真の加サ虐デ愛イ好ス者トであれば、ベアトリーチェの代わりに焔ホムラを嬲なぶることで満足などしない。

イシュタル・アガメムノ・ゴードン子し爵しやくという名の鬼き畜ちく変態を知っているマリアローズは、少しだけ想像できる。

　やつらは愛だの何だのと言葉を飾かざって理り屈くつを吐はくが、そんなものは全部嘘うそっぱちだ。やつらは真実だと信じているのかもしれないが、結局はすべて嘘になる。

　やつらは自分の快楽を唯ゆい一いつ無二の王とし、それに仕え、従い、その王に媚こびへつらうためなら何でもする。やつらに、いわゆる人間的な情を期待してはならない。別に情が皆かい無むなわけではなく、やつらは快楽という王には何もかもを差し出すからだ。

　従って、ＳＩＸがベアトリーチェにも、焔ホムラにも、両方ともに、痛みと悲しみとやるせなさと絶望を与あたえようとするのは、いわば当然の帰結だった。

　一人より、二人。

　単純な足し算で考えても、ＳＩＸが快楽の少ない方を選ぶ可能性は絶無だろう。

　焔ホムラは甘かったのだ。いっそ好ましいほどに、甘すぎた。マリアローズは叫び出しそうになりながら、そう思うしかなかった。まあ、実際のところ、何もわかっていなかったのはマリアローズの方だったのだが。

　もう一度、ベアトリーチェで殴られる間ま際ぎわ、焔ホムラが投げてよこした意味ありげな視線に気づいたのは、トマトクンだった。

　トマトクンは駆かけ出す寸前に「ピンプ！」と、彼の忠実な猟りよう犬けんに声をかけた。それだけですべて伝わったなんて、あまりにもできすぎだ。事実はたぶん、そうではない。

　ピンパーネルは、いついかなるときも主人の動向をうかがっている。少なくとも、傍かたわらにいるときは常にトマトクンの命令を待っている。だが、命令を受けずとも、ラフレシア貴族の勇ゆう敢かんな猟犬は、危機に見み舞まわれた主人を自らの意志で救う。同じように、ピンパーネルはトマトクンの挙動を見て、その視線の先にあるものを見て、自分は主人に何を求められているか、主人にとって何が必要なのか、主人のために何をするべきか判断し、即そく、実行に移す。

　ピンパーネルはトマトクンの広い背中に隠かくれるようにして、そのあとに続いた。

「Ｈｉ□Ｈｙａｈａｈａｈａｈａｈａ……！」

　ＳＩＸがさも愉たのしそうにベアトリーチェを振り下ろしたのと、ジェイが音もなくトマトクンの行く手に進み出てきたのとでは、どちらが早かっただろう。

　ジェイはほとんど見えない速度で、すくい上げるように両手を振った。

　何かが飛んできた。

　それが何かはわからなかった。

　ただ、かなりの数に思えた。そうとう危険な感じがして、マリアローズはとっさに伏ふせた。

「ぐっ！」という痛そうなカタリの声が聞こえた。

　ユリカが「サしやフィニア！」と叫さけびながら、サフィニアを押し倒す気配がした。

　トマトクンは、顔を庇かばうように構えた大剣とそれ以外の体の各所に、その何かを大量に食らったはずだが、すべて鎧よろいと大剣が弾はじいたのか。その前進は止まらなかった。トマトクンを盾たてにしたピンパーネルは、おそらく無傷だろう。

　一方、ＳＩＸは束つかの間、動きを止めていた。

　焔ホムラの仕し業わざだった。

　マリアローズは己おのれの不明を、早とちりを恥はじるべきかもしれない。

　そもそも焔ホムラは、秩序の番人七番突とつ撃げき隊の隊長として、これまでＳｍＣをはじめとする無数の悪党どもを相手にしてきたはずだ。大おお雑ざつ把ぱそうに見えて、悪党どもの習性は熟知しているに違ちがいない。

　だから、あんな申し出をすれば、ＳＩＸがどう反応し、何をして

くるか。

　ＳＩＸは、鎖くさりで両手と両足を繋つないだベアトリーチェを武器にして、自分を攻こう撃げきしてくるだろう、と。

　そうして味方同士を、少女と男をいっぺんに痛めつけるという、いかにもＳＩＸみたいな異常者が考えそうな展開になることを、たぶん、焔ホムラは読んでいたのだ。

　その上で、賭かけに出た。

　一度目は叶かなわなかったが、二度目、そして、焔ホムラは賭けに勝った。

「──てめぇの薄うす汚ぎたねぇ根こん性じようなんざ、すっかりお見通しなんだよ……！」

　焔ホムラは床ゆかに寝ねた姿勢のまま、ベアトリーチェをしっかりと受け止めていた。

　ベアトリーチェの腰こしに、焔ホムラの両りよう腕うでが回っている。異形のＳＩＸも力が強そうだが、大刀をやすやすと扱あつかっていたことからも、焔ホムラだって並みの力自じ慢まんではないはずだ。ＳＩＸが鎖を引っ張ろうとして、焔ホムラは体勢を変えつつ何とかこらえ、ベアトリーチェはそうとう苦しいだろうが、少しの間だけ耐たえてもらうしかない。

　我が慢まんの時間は、もうすぐ終わる。

　終わらせるべく、動いている者たちがいる。

　そのうちの一人は、琥こ珀はく色いろの剣けん身しん波打つ大剣で渾こん身しんの一いち撃げきをジェイに見舞おうとした。

　速度といい、タイミングといい、キレといい、申し分のない横よこ薙なぎの一ひと振ふりは、だが、ジェイにかすりもしない。ジェイはしゃがみこむように腰を落とし、見事にトマトクンの大剣をよけてみせると、どこからか両手に三十サンチくらいの両りよう端たんが尖とがった棒を出現させ、両腕を交こう叉さ させるがごとき奇き妙みような動きで、この棒をトマトクンの左ひだり膝ひざに突つき刺さそうとした。

　このとき、トマトクンの体重は、前に出した左足にかかっている。

　軸じく足あしを浮うかせばバランスが崩くずれるし、かといって、トマトクンはやや前のめりになっているため、体重を瞬しゆん時じに右足へと移すこともできない。

　ジェイはそれを見み越こしてトマトクンの左膝を狙ねらったのだろう。ジェイの体捌さばき自体は最小限度だし、派手さはないが、かなりいやらしい攻撃だ。

　しかし、正直、マリアローズはどこかでたかをくくっていた。

　トマトクンが身にまとっている炎模様ファイヤーパターンの全身鎧は、少しぬくみがあって弾だん力りよくさえも感じ、他ほかのどんな材質とも似ていない不思議な手て触ざわりなのだが、物もの凄すごい強度を誇ほこる。今まで、あの鎧が破損したところなんて見たことがないから、今回も平気だろう。よしんばジェイが繰くり出した棒が当たったとしても、あの装そう甲こうは貫つらぬけない。そんな思いがどこかにあった。

　裏切られた。

　単なる両端が尖った棒にしか見えないが、ひょっとして、とんでもない代しろ物ものなのか。

　両側から挟はさみこむように、二本の棒がトマトクンの左膝に深々と突き刺さった。

　それでも、さすがと言うべきか。トマトクンは怯ひるむ様子も見せずに、すかさず無事な右足を前に出して体を支えた。その瞬間だった。

　神速でトマトクンの脇わきをすり抜ぬけてゆくものがある。

　それは風だ。

　突き抜ける砂色の風であり、有無を言わさず人を切きり裂さく人間凶きよう器きだ。

　ラハン大陸の元アッサシンは、これまで数かぞえきれない敵を解体してきた雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを手に、まっし

ぐらにＳＩＸへと迫せまった。

　比ひ喩ゆでも何でもなく、まばたきほどの間だった。

　ピンパーネルに接近を許したＳＩＸは、決断しなければならなかった。

　鎖に、ベアトリーチェにあくまで固こ執しつして、不安定な姿勢のまま、ピンパーネルを迎むかえ撃うつか。それとも、鎖を手放して、ピンパーネルを相手どる際の選せん択たく肢しの幅はばを広げるか。

　もし、ＳＩＸが被マ虐ゾ愛ヒ好ス者トなら、あえて前者を選んだかもしれない。

　こちらにとっては、その方が好都合だったろうが、残念ながら、ＳＩＸは加虐的殺戮愛好会の首領マスターに相応ふさわしく、加サ虐デ愛イ好ス者トでしかなかったようだ。

「□□Ｋｕ……！」

　ＳＩＸは鎖から手を放し、一っ飛びで三、四メーテル後退してピンパーネルの初撃を回かい避ひした。

　その結果、ベアトリーチェは焔ホムラの腕うでの中に収まった。トマトクンがほぼ腕の力だけで大剣を振ふり回して、ジェイはそれをさけるためというより、むしろＳＩＸを追うように棒を引き抜きつつ下がった。

「今よ！」

　やはり、悪党相手だと気合いが入るのか、いち早くそう叫んだのはユリカだ。

　もちろん、ＺＯＯはともかく、番人たちに指図する資格や権利など、ユリカにはない。が、ユリカの声に応じない理由はなく、応じようとしない者もまたいなかった。

　だって、焔ホムラの的確な判断と思いきった行動、それにトマトクンとピンパーネルの勘かんのよさのおかげで、最大のネックだった人質は救出できた。立っているスーツ姿は五人か。敵の頭数はそう多くない。すぐ目の前には、敵の総大将たるＳＩＸもいる。いっ

たい、今、攻こう勢せいに出ないで、いつ出るのか。そんな状じよう況きようなのだ。

　こちらの戦力も、ベアトリーチェを抱だいている焔ホムラは、すぐに参戦というわけにはゆかないだろうが、隊長補チェス・ピード以下五名の番人が健在だ。彼らはチェス・ピードの号令で、ＳＩＸとジェイに突とつ撃げきを敢かん行こうしようとしている。

　ＺＯＯでは、すでにピンパーネルがＳＩＸに襲おそいかかろうとして、ジェイに阻はばまれていた。ジェイが投とう擲てきした何かで左ひだり腕うでを負傷したらしいカタリも、右手のイノイチだけで手近のスーツ姿に勝負を挑いどむ構えだ。ユリカとサフィニアはトマトクンに駆かけよりかけて、「俺はいい！」と制止された。ユリカは魔ま術じゆつの準備に入ったサフィニアを護衛しつつ、極限クライマツクス九手棍ナインポールでスーツ姿を蹴け散ちらすことになるだろう。トマトクンも、左足を引きずりながらではあるが、ＳＩＸらとの距きよ離りをつめつつある。

　あとは当然、マリアローズも、このたいして広くもない戦場で何らかの役割を果たさなければならない。

　しかし、性格だろうか。別に、余よ裕ゆうがあるわけではない。ベアトリーチェが焔ホムラの手に渡わたって安あん堵どし、興奮もしているのだが、最初、番人たちに煽あおり立てられた熱ねつ狂きようはすっかり冷めた。今ではもう、自己の限界と相談しながら全体を見み渡わたして、とるべき行動を精せい一いつ杯ぱいの慎しん重ちようさで取捨選せん択たくしようとしている自分がいる。

　で、どうするか。

　実のところ、迷う要素はさしてない。

　なぜなら、ベアトリーチェがとらわれていたことで複雑化していた戦局は、彼女の奪だつ還かんによって単純明快になったからだ。

　ＳＩＸ。

　やつが死ぬなり、逃にげるなりして、こちらの目の前から消えれば、事実上、この戦せん闘とうは終わる。必ずしも、やつを殺す必要はない。追い払はらうだけでもいい。もっと言えば、こちらが撤てつ退たいしてもいいのだ。連中が見み逃のがしてくれれば、だ

が。

　ただ、番人たちにとって、ＳＩＸは宿敵だろう。それに、ベアトリーチェに対する仕打ちもある。番人たちだけでなく、ユリカなどもかなり感情的になっているようだし、こちらが逃げるという選択肢はないと考えてよさそうだ。

　ＳＩＸを殺やるしかない。

　せめて、やつを逃とう亡ぼうに追いこまなければならない。

　デニス・サンライズと羅ラ叉サの隊は、まだサックドールを制圧できていないのか？

　ふと頭をよぎったそんな疑問は打ち消した。彼らをアテにしても始まらない。それで、自分にできることは何かと考え、たどり着いた答えは我ながら情けなかった。

　だが、たぶんこれが最善だ。

　マリアローズは小動物のような敏びん捷しようさを発揮して走り──拾い上げた。

　焔ホムラの大刀を。

　そして、その足を止めず、一気に行った。

　大刀の持ち主のところへ。

「はい、これ！」

「ん？　ああ」

　焔ホムラはたいして驚おどろいたふうもなく、ベアトリーチェを床ゆかに下ろして、マリアローズの手から大刀を受けとった。見たところ、唇くちびるの端はしから血が流れているのと、顔の左半分が赤く腫はれはじめている以外、目立った怪け我がはなさそうだ。これならきっと、マリアローズ数人分以上の戦力にはなるだろう。

　立ち上がった焔ホムラは、ベアトリーチェの両手と両足を繋つないでいる鎖くさりを大刀で簡単に断ち切ると、身につけていた黒っぽい外がい套とうを彼女にかけてやった。

「こいつを頼たのむ」

「……うん」

　マリアローズだって、内心、気が引けないわけではない。

　とはいえ、純じゆん粋すいな戦闘能力でいえば、マリアローズはおそらく敵味方双そう方ほうの中で最低級に属する。混戦になりつつあるので、小細工も弄ろうしづらいし、焔ホムラより役に立てる自信はない。端はたから見ても、マリアローズがベアトリーチェを守り、焔ホムラに思う存分戦ってもらうのが、適材適所というものだろう。

「もう大だい丈じよう夫ぶだから」

　マリアローズは焔ホムラの外套にくるんだベアトリーチェにそう声をかけ、どうにか抱かかえ上げた。ベアトリーチェが身じろぎして、何か言ったけれども、よく聞きとれない。猿さる轡ぐつわやら目め隠かくしを外してあげたいが、それはあとだ。今はとにかく、少しでもこの場から離はなれることが先決だろう。

　実際、離れなければ、いつとばっちりを受けるかわからない。

　ジェイはピンパーネルが一いつ騎き討うちに持ちこんでいて、二人で次元の違ちがう力と技の応おう酬しゆうを繰くり広げているが、問題はＳＩＸだ。

　やつは武器らしきものを何も身につけていなかった。やつの武器は現地調達したものだった。

　人間だ。

　やつは一いつ斉せいに突撃してきた番人たち五名のうち一人の右足首を、人外的な身のこなしでつかまえた。

　そして、その番人でもって残りの四名を薙なぎ払い、次の標的をトマトクンに定めていた。

「何ゆえお前だってすぐに気づかなかったか、わかったよ……！　お前は違ちがァァ──う！　今のお前は恐おそるるに足らないやうだねえ！　挙句、怪我なんぞしているＵＵＵ！」

「……貴様ごとき、これで！」

　だが、トマトクンにしてみれば、向かって左側から猛もう速度で襲いかかってくる番人を大剣で防ぐわけにはゆかない。そんなことをしたら、番人をぶった斬ぎってしまう。

　かといって、左ひだり膝ひざに甚じん大だいな故障を抱えているトマトクンは、普ふ段だんのようには動けない。床に身を投げ出せばよけられそうだが、負傷しているので、いったん体勢を崩くずしきってしまうと、立て直すのに手間がかかるはずだ。

　そこで、トマトクンは大剣を右手一本で持ち、左ひだり肩かたで体当たりするように番人を受け止めた。

　むろん、それはＳＩＸの攻こう撃げきなわけだから、要するに直撃を食らったのと変わらない。

　せいぜい、身構えていたぶん、いくらか打撃が少ないといった程度だろう。

「──十分だ！」

　それでも、トマトクンはわずかにバランスを崩しただけで、何とかこらえた。

　間かん髪はつを入れず、前に踏ふみこませた右足を軸じくにして、回転しながら大剣を振ふるったが、言葉とは裏腹に、トマトクンにしては十分な斬ざん撃げきとはいえない。余よ裕ゆうさえありげに飛とび退しさって大剣をかわしてみせたＳＩＸは、今度は大上段から番人を振り下ろしてきた。

　それは滝たきのような突つき下ろしだった。

　逃のがれられない。

　得物が人間だから余計だ。面積が広すぎる。ちょっと体をひねって、どうにかなるものではない。

　もういいのではないかと、マリアローズは思った。もういい。大剣で防いでもいい。あんな扱あつかい方をされているのだ。どうせ、あの番人は死んでいる。死んでいるに違いないが──まだ蘇そ生せいできる望みはあるかもしれない。

　トマトクンがどう考えたのかはわからない。

　いずれにせよ、トマトクンは頭上から降ってきた番人を、とっさに左ひだり腕うでで庇かばった後頭部と背中でまともに受けた。この衝しよう撃げきには、さすがに立っていられなかったようだ。トマトクンは床に膝をついた。焔ホムラがＳＩＸの名を叫さけんで、大刀を手に突とつ進しんしてゆこうとしたのはこのときだった。

　実は、それより前にサフィニアが呪じゆ文もんの詠えい唱しようを開始していて、魔ま術じゆつの発動にあわせ、小こ柄がらな人ひと影かげが矢のように飛び出していたのだが。

「ＮｉＬＩＬＮｕｍＭｏＬＳｅＬＺｅＬ我申子浄化閻魔也ＤａｇｅｌｉｓＦｏｎｄＶｏｎｄ真藍蓮往還涅槃王ＳｅｖｅｎＮｅｖｅｎＸ＋Ｘ喪━慧━手━翅━痲━衛」

　炎霊Ｎｉｇは、ＬＥＰの住民の中でも、とりわけ凶きよう猛もうで魔術士にとって扱いづらい要素精せい霊れいなのだという。

　非常に稀き少しような血星曜石ジグネヴイアと引き換かえに、気難しい彼らが術者の要よう請せいに応こたえた際、この世界に引き起こす現象は、猛たけり狂くるう特とく徴ちよう的な藍あい色いろの炎ほのおだ。

　Ｎｉｇは一いつ瞬しゆんで燃え上がらせた。

　上半身裸はだかの、異形の男を。

「□□ＡＪＪＪＪＪＪＪＪＪＹＹＹＹＹＹＹＹＹｙｙｙｙｙｙｙｈ……！」

　藍色の濃のう淡たん揺ゆらめく猛もう火かの柱と化したＳＩＸは、たまらず手にしていた番人を放り投げて後あと退ずさり、両手で頭を抱えた。

「Ｆｕｕｕｕ×ｋ！　Ｆｕ×ｋ！　Ｆｕ×ｋ！　Ｆｕｕｕｕｕ×ｋ！　Ｇｏｏｏｏｏｏｏｄ□Ｄａａａａａａｍｎ□Ｉｔｔｔｔｔｔｔｔ……！」

　そして、悲鳴のような悪態をつきながら身み悶もだえている。



当然だ。

炎霊Ｎｉｇの協力をもってなる藍色炎えん上じようは、そんじょそこらの魔術士が使える魔術ではない。閃せん光こうの魔女マチルダに見込まれるくらい天分に恵めぐまれたサフィニアだからこそ、炎霊Ｎｉｇが力を貸してくれる。そうでなければ、適切な触しよく

媒ばいを用意して正しい手順を踏んだとしても、うんともすんとも言わない、どころではすまない。下手をすれば、機き嫌げんを損ねたＮｉｇが、逆に術者を焼きつくすかもしれない。魔術は高等になれば高等になるほど、失敗したときのしっぺ返しが大きく、危険を伴ともなうものなのだ。

　果たして、サフィニアの藍色炎上をもろに食らって、無事な人間がいるのだろうか。

　生き残りのスーツ姿たちが色めき立った。ジェイも「我が主マイ・ロード！」と叫んでＳＩＸの方へ目をやったが、その隙すきをピンパーネルに突かれて、守勢に回らざるをえなくなった。

　その上、藍色の炎で包まれたＳＩＸに追い討ちをかける者がいた。

「──破ぁぁぁぁぁ……！」

　ユリカだ。

　彼女の小さな手に握にぎられた極限クライマツクス九手棍ナインポールの先せん端たんがいくつにも分かれ、それぞれが別の形をしている。

　この棍こんは鵺ヌエと呼ばれる可変骨格を持つ魔ま獣じゆうの骨から作られていて、完かん璧ぺきに使いこなすことで、斬・砕・掛・抉・突・払・打・流・弾、それらすべての攻こう防ぼう動作を行えるのだという。

「破汰汰汰汰汰汰汰汰汰……！」

　炎を恐おそれず、ＳＩＸの懐ふところに飛びこんだユリカは、その極限クライマツクス九手棍ナインポールで打った。

　ＳＩＸの鳩尾みぞおちを突き、横腹を打って、逆の腹を斬り、抉った。

　突いて、突いて、突きまくり、また打った。

　さらに、円を描えがくように体ごと振り回した棍を、ＳＩＸの足に引っ掛かけたところで、勢いよくはね上げた。

　胸がすくような素す晴ばらしい場面だった。

　小さなユリカが、ＳＩＸの異様な巨きよ体たいをきれいに横転させたのだ。

　そこいらに大勢の見物客でもいれば、万ばん雷らいの拍はく手しゅが巻き起こったに違ちがいない。

　現に、焔ホムラなどは観客になったように立ちつくし、その光景に見入っているようだった。

　だが、拍手はきっとすぐに鳴りやんだはずだ。

「──ユリカ！」

　なぜか、トマトクンが右手で持った大剣と右足を支えに跳ちよう躍やくし、左腕でユリカを抱だきかかえて床ゆかに伏ふせた。

　その理由は即そく座ざに判明したが、同時に別の疑問が生まれた。

　なぜ、やつは平気なのか？

　どうして、すぐに立ち上がることができる？

　火勢は弱まりつつあったが、炎霊Ｎｉｇの炎はまだやつを取り巻いていて、肉の焦こげる匂においさえ漂ただよっているというのに。

　ＳＩＸは反動をつけて跳とび起きざま、左右の手でユリカを挟はさもうとしたのだった。抱きすくめようとしたのかもしれない。

　間かん一いつ髪ぱつ、トマトクンが動かなければ、今いま頃ごろ、ユリカはＳＩＸの腕うでの中で藍色の炎に焼かれていただろう。

「……アヂィィィィ……だがねえ、それだけだ。腸が煮にえくり返るくらいアヂィがねえ！　実際、煮えくり返ってるかもしれないが……Ｋｕ􏰀Ｋｕｋｕｋｕｋｕ……でもやっぱりアヂィものはＡＪＹＹＹＹｙｙｙｙｙｙｙｈ！」

「──ぐっ……！」

　ＳＩＸが繰くり出した長い右みぎ腕うでを、トマトクンは大剣で受けようとした。

　しかし、まだ起き上がりかけの床に片かた膝ひざをついた体勢だったし、負傷の影えい響きようもあるに違いない。大剣はわずかに遅おくれ、ＳＩＸの右手がトマトクンの左ひだり肩かたを強打した。それでトマトクンは床に突つき倒たおされる格好となったが、続けざまに猛もう襲しゆうしてきたＳＩＸの左手には、どうにか反応した。

　とはいうものの、苦し紛まぎれに見えた。トマトクンが狙ねらいすましてＳＩＸの左手首に大剣を叩たたきこんだとは、とても思えない。

　いずれにしても、ＳＩＸの左手首から先が切れ飛んだ。

　ＳＩＸは、だが、怯ひるみはしなかった。

　ただ、いっそうキれたようだ。

　藍あい色いろの炎ほのおの中でＳＩＸの双そう眼がんがまがまがしく、あやしく輝かがやき、その化物じみた体たい軀くが弓のようにしなって――

　蹴けった。

　右足で蹴り上げたトマトクンを、すかさず左足で蹴り飛ばした。

　右足で蹴り落とした。

　それから、とどめとばかりに踵かかとで蹴り下ろしたＳＩＸの左足が、止まった。

「――いい気になるな……！」

　トマトクンが両腕で抱かかえるようにＳＩＸの左足をつかんだのだ。

「雑魚ざこが……！」

　トマトクンの顔はもう血ち塗まみれで、どこをどう怪け我がしているのかも、よくわからないような有様だった。とうていそんな口

が叩ける状態ではなさそうだが、トマトクンは口先だけの男では決してない。さっき連続蹴りを浴びた際、大剣を取り落としたとはいえ、無手でも攻こう撃げき手段はあった。

　トマトクンは右腕と胴どう体たいで、つまり、右の腋わきにＳＩＸの左足を挟んだ。

　間を置かず、腰こしを浮うかしたトマトクンが、長い右みぎ脚あしをＳＩＸの左ひだり膝ひざに絡からませた途と端たんだった。

「……………………ッ！」

　関節を極きめられたＳＩＸが、声にならない声を上げげた。たぶん、激痛だけでなく、関節を破は壊かいされることから逃のがれるための反射的、本能的な動作だろう。ＳＩＸは自分から仰あお向むけに倒れた。まるで、それがきっかけになり、止まっていた時が動き出したかのようだった。

　二人の近くにいた焔ホムラが、我に返ったように大刀を振ふり上げ、無防備になったＳＩＸに斬きりかかろうとした。思わずそちらを見たジェイの左腕が、ピンパーネルの雌めすのリレッザによって切断された。

　そこまでの一連の出来事と、次に起こった事態とは、どう頭をひねっても繋つながらない。

　あまりにも脈みやく絡らくがなさすぎた。

　起き上がったのだ。

　番人たちが。

　スーツ姿たちが。

　骨龍たちが。

　すでに物言わぬ死体と成り果てていたはずの彼らが、どうして？

「──な……」

　肝きもを潰つぶしたのはマリアローズだけではないだろう。ピンパーネルがジェイを取り逃にがし、焔ホムラが瞬しゅん間かん、動

きを止めたのも、呆あっ気けにとられたからに違いない。トマトクンもＳＩＸの関節を極めていない方の足で顎あごをしたたかに蹴られ、ふりほどかれてしまった。

　しかも、死体たちは、ただ起き上がってマリアローズらを驚おどろかしただけではなかった。

　彼らはモトロール刀を手にとった。盾たてを構えた。鍔つばのない片かた刃ばの剣けんを握にぎった。得物の選び方はめちゃくちゃだった。生前、愛用していたものを持つ者もいれば、そうでない者もいた。だが、そこからの行動は皆みな、一いつ緒しよだった。

　息をしている人間のように機き敏びんではなく、ぎこちない動作だが、襲おそいかかってくる。

　一度はＳＩＸに薙なぎ払はらわれながらも、何とかまだ戦えそうな生き残りの番人たちに。

　カタリに。サフィニアに。ユリカに。ピンパーネルに。焔ホムラに。トマトクンに。

　そして、ベアトリーチェを抱だきかかえているマリアローズに。

　ということは、どうやら彼らは敵らしい。が、何が何だかわからない。いったい、何がどうして、どのような仕組みでこんなことに？

　いや、そんなことよりも、どう対処するかの方が大事なのだが、正直言って、気味が悪かった。喪そう神しん街がいオレストロの半死者ハーフデッドも元死体だとはいえ、あちらは理り屈くつが知れている。こちらは不明だ。そのぶん、こちらの方がずっと怖こわい。

　また、単純に数が多いこともある。何せ、十や二十ではない。三十か、四十か。通路の死体はそれくらいの数に上り、こちらは負傷者や戦力になりそうもないベアトリーチェまで含ふくめても、十二人しかいないのだ。

　せっかく、もう少しでＳＩＸをしとめられる、ついでに、ピンパーネルがジェイをも始末してくれたかもしれない、そうすれば、残ったスーツ姿なんてどうにでもなる──そこまで持ちこむことができたのに。

　一気に形勢が逆転したようだった。

　というか、絶体絶命の危機だ。

　マリアローズは弱音を吐はきたくなった。望みを失ってしまいそうだ。しかし、不意にベアトリーチェがぎゅっとしがみついてきた。ダメだ、と思った。諦あきらめてはいけない。諦めたら負ける。負けたら死ぬ。ここで死んだら終わる。

　終わりたくない。終わらせたくない。このちっぽけな命にしがみつくだけの理由が、今のマリアローズにはある。

　ちゃんと両目を見開いて見み渡わたせ。耳を澄すませろ。考えろ。素す早ばやく考えろ。

　ヒントはサフィニアがくれた。

「……死霊術ネクロマンシー……！」

　サフィニアがそう言ったのだ。

　ぴんときた。死霊術ネクロマンシー。物の本で見た覚えがある。詳しよう細さいは知らないが、魔ま術じゆつの一種で、死者を意のままに操あやつるのだという。ただ、正確には魔術ではなく、超ちよう常じよう能力のたぐいであるとの記き載さいもあった。

　どちらにしても、これが死霊術ネクロマンシーだとすれば、術者がいるはずだ。おそらく、今までこの場にいた者ではないだろうから━奥か。ＳＩＸたちがやってきた方向だ。

　そちらに目をやると、見つけた。

　いる。

　いつからそこにいたのか。そいつは背が高く、痩やせていて、灰色と黒の奇き妙みような形の衣服を身にまとい、黒い杖つえを持っている。顔立ちはのっぺりしていて、風もないのにざわざわと広がって揺ゆれている髪かみは真っ白い。瞳ひとみは青だろうか。あまり若そうではないが、何歳かまったく見当がつかない男だ。

　間ま違ちがいないと思った。あれが術者だ。見れば、特殊なチヤネ精神集中リングの只ただ中なかにいるような様子もある。あるい

は、死霊術ネクロマンシーを行使している最中なのか。

　だとしたら──妨ぼう害がいしてやる。あわよくば、ぶち殺してやる。そのための手段はある。一人だけ離はなれた場所にいるのが運のツキだ。

　マリアローズはベアトリーチェを左腕一本で抱きかかえ、ベルトのホルダーを右手でまさぐってカバーを外した。

　ハーレム・ゴードンを満たした小こ瓶びん、爆ばく弾だん。

　それを右手の人差し指と中指の間に一本、中指と薬指の間に一本挟はさんで、あわせて二本持った。躊ちゆう躇ちよはしなかった。二本とも投げた。距きよ離りは、どれくらいだろう。シャッターの向こうだから、十メーテル以上ある。ベアトリーチェを抱いたままなので、体勢も不安定だったが、なぜか根こん拠きよのない自信があった。外さない。外すものか。

　それが過信だった、わけではないだろう。

　よりにもよって、ジェイに気づかれたのが失敗だった。

　ジェイは、もちろんマリアローズが投とう擲てきした物体の正体を知らなかったはずだ。知っていたら二の足を踏ふんだかもしれないが、ジェイは逡しゆん巡じゆんせずに両手を振ふって何かを放った。きっと撃うち落とすつもりだったのだろう。しかし、そうはならなかった。

　閃せん光こうに続いて、結構、いい感じに大きい音がした。

　瓶びんが割れて空気に触ふれたハーレム・ゴードンは、あるガスを生成して、その体積が瞬間的に膨ぼう大だいな量に増大する。早い話、爆発するわけだ。その際、可燃性のガスも同時に生じるため、炎ほのおも発生する。煙けむりも出る。

　爆発が起こった位置は、ピンパーネル、ジェイ、ＳＩＸ、焔ホムラ、トマトクンと並んでいる線上の、ジェイとＳＩＸの間くらい、彼らの斜な나め上だった。

　よって、幸か不幸か、ジェイとＳＩＸがもっとも爆発の被ひ害がいを蒙こうむったことになる。

　そうはいっても、ピンパーネルからトマトクンまでは六、七メーテルの範はん囲いに入っていた。全員、まったく平気というわけにはゆかないはずだ。平気ではないだろうが、もともと爆弾は見た目ほど威い力りよくの方は派手ではない。火が出るので、可燃物が多い建物の中などでは危険だが、ここは岩がん盤ばんを削けずって造ったような場所だ。直ちよく撃げきを食らった者は誰だれもいなかったので、死にはしないだろう。

　けれども、爆発が目くらましになって、少しの間、状じよう況きようが把は握あくできなかった。

　もつれあう二人の人ひと影かげがはっきり見えるようになったのは、爆発後、どれくらい経過してからか。

　一秒？

　数秒？

　十秒？

　わからない。

　ただ、立ちこめる黒こく煙えんの中、上になっているのが焔ホムラで、下がＳＩＸだということは見てとれた。

　叫さけび声も聞こえた。

「──女によう房ぼうの仇かたきだ……！」

　焔ホムラの声だった。

　大刀をＳＩＸの胸の中央あたりに突つき刺さした焔ホムラは、抜ぬき放った脇わき差ざしを振り上げて絶ぜつ叫きようした。

「てめぇは死ね……！」

　──そうか。

　女房の仇、と焔ホムラはＳＩＸに言った。焔ホムラの奥さんがどうしたとか、ベアトリーチェが言っていた。お前の女房というのは、もしかしてあの釈拿シヤクナか、死に急ぐなよ、と、訳知り顔でトマトクンが焔ホムラに言った。焔ホムラの時計は女房の形見

だった。つまり、焔ホムラの妻、女め夜や叉しやとも呼ばれた釈拿シヤクナを亡なき者にしたのはＳＩＸだった。そういうことか。

　爆発の最中、その復ふく讐しゆうの念が焔ホムラを突き動かし、絶好の機会をとらえさせたのかもしれない。

　だから、脇差を床ゆかに突き立て、それから一息にＳＩＸの首を掻かき斬きりながら、焔ホムラは笑っているのだろう。

　復讐を成し遂とげたとき、人はやはり笑うのだ。マリアローズもそうだった。子し爵しやくを陥おとしいれることに成功したとき、マリアローズも笑った。

　それは底暗い笑い声だった。人には見られたくない種類の笑え顔がおだった。だが、笑わずにはいられなかった。

　焔ホムラも同じだったのではないか。焔ホムラが腹の底に押しこめて、押し固めていた思いは、たぶんこうして解消する以外、どうしようもなかったのだ。失われたものは取り戻もどせないとしても、胸に空いた穴は何かで埋うめなければならないのだ。

　たとえば、憎ぞう悪おや、謀ぼう略りやくや、剣けんや、血で。

　そうしないと進めないときも、人にはきっとあるはずだ。

　だが、時に、進むべき道を阻はばむ者がいる。

「……死ね……と言われてもねえ……」

　低い声だった。

　それなのに、どこか女みたいな抑よく揚ようがあって、気色悪かった。

　しかし、なぜ。

　なぜやつが喋しやべっている？

「あいにく、この程度では死ねない体なんだよ」

　首を斬られたＳＩＸの体が動いた。

　呆あつ気けなかった。

　焔ホムラは放心していたのか。

　ＳＩＸの体はやすやすと焔ホムラをはねのけ、右手で自分の胸に刺さっている大刀を引き抜いて、振り下ろした。

　焔ホムラの頭頂部に。

「──あ……」

　焔ホムラは、己おのが愛刀を眉み間けんのあたりまで埋めこんだまま、そんな声だけを残して、ゆっくりと床に倒たおれこんだ。

　死んだ。

　大刀は脳まで達している。無理だ。もう生き返ることはできない。

　永久死だ。

　焔ホムラが、死んでしまった。

「Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕ……ほとんど勘かんだったが、うまくあたったか。でも、これじゃあやりにくくてかなわないねえ。あちこち痛えし。いくら俺でも、マジでM死んじゃＳう五秒前５だよ、こいつは」

　ＳＩＸはそう言って自分の生首を拾い上げ、首の位置にくっつけたが、どうも具合がよくないようだ。諦あきらめたように肩かたをすくめ、それを小こ脇わきに抱かかえてジェイに向き直った。

「潮時らしい。退ひくぞ」

「……は」

　左ひだり腕うでをなくし、爆ばく風ふうで衣服もぼろぼろになって床に転がっていたジェイは、それでも自分の左腕を拾いながら事もなげに立ち上がった。

　やつらが逃にげる。

　逃げられてしまう。

　それは理解していた。だが、体が動かなかった。正直、何をすべ

きかもよくわからなかった。

「マリアローズッ！」

　いきなりカタリに突き飛ばされて、ようやく思い出した。

　死体がいる。

　死霊術ネクロマンシーで操あやつられた動く死体が、数十の死体が、襲おそいかかってくる。

　しかし、マリアローズは何もできなかった。ベアトリーチェを抱だいていることしかできないマリアローズを、カタリが身を挺ていして守ってくれた。ユリカはサフィニアを庇かばうだけで精せい一いつ杯ぱいのようだった。ピンパーネルは、トマトクンに群がってくる死体を雄おすのグレアデと雌めすのリレッザで次々と解体した。大剣を支えにして身を起こしたトマトクンも、とうていＳＩＸやジェイを追うことのできる状態ではなさそうだった。

「□□ＳＩＸッ、貴様ァッ……！」

「See-Ya.」

　そんな声が聞こえたように思うが、定かではない。

　あの白はく髪はつの死霊術士ネクロマンサーがすぐ近くを通りすぎていったような気もするが、はっきりとは覚えていない。

　そのうち、何も聞こえなくなった。ただカタリの背中ばかり見ていた。ひたすらベアトリーチェをしっかりと抱いていた。決して離はなすまいと思った。離すわけにはゆかなかった。ベアトリーチェだけは、必ず生きて連れ帰らなければならなかった。

　だって、そうしないと、何のために。

　──何のために、死んだのか。

　やがて、通路に動く死体が見あたらなくなる頃ころには、ＳＩＸの姿など影かげも形もなかった。ジェイもいなかった。白髪の死霊術士ネクロマンサーも同様だった。番人の生存者はチェス・ピードを含ふくめた三人だけだった。ＺＯＯはトマトクンが左ひだり膝ひざに、カタリが左ひだり肩かたに深手を負った以外は軽傷ですんだ

が、誰だれも口を開こうとしないくらい、皆みな、疲ひ弊へいしきっているようだった。

　マリアローズもやけに体が重かった。

　腕うでの中で、ベアトリーチェが小刻みに震ふるえている。時折、引きつったように全身を強こわ張ばらせるのは、何かの拍ひよう子しで、どこかがひどく痛むのかもしれない。すがりつくように焔ホムラの外がい套とうで若い裸ら身しんをくるんだ彼女は、自分の周りで何が起きて、何が行われたのか、いまだ正確には把は握あくしていないだろう。何となく、わかっているかもしれないが。

　きっとこうなったのだろうとか。誰が死んだのではないかとか。

　想像して、けれども、確定ではないと打ち消して。

　ひょっとしたら、それはかえって残ざん酷こくなことなのかもしれない。

　いっそ、今すぐはっきりと知らせてやるべきなのだろうか。

　だが、果たして、彼女はその現実に耐たえられるのか。

　番人たちは、たぶん、これが彼女を奪だつ還かんするために払はらった犠ぎ牲せいだとは言わないだろう。主目的は仇きゆう敵てきであるＳｍＣのアジトを奇き襲しゆうすることで、彼女の救出はおまけだったと説明するに違ちがいない。実際、彼女を助けるためだけなら、死ななくてもよかった者はおそらくいた。

　しかし、それと彼女が納なつ得とくできるかどうかは別問題だ。

　もし、自分が彼女の立場だったら――

　マリアローズはベアトリーチェを慎しん重ちように、ゆっくりと床ゆかに下ろした。

　少し考えてから、猿さる轡ぐつわを先に外してやった。

「……マ……リ、ア……」

　ベアトリーチェは激しく喘あえぐように息をして、咳せきこみながら、絞しぼり出すように言った。

「……マ、リア……ローズ……？」

「……うん」

「そ……そう……か……」

　ベアトリーチェは震える両腕で、自分の肩を抱いた。異常なくらい、呼吸の間かん隔かくが狭せまい。息はしているのだが、そのまま息絶えてしまうのではないかとさえ思った。

　その震えを止めてやらなければ。

　だから、マリアローズはベアトリーチェを抱きすくめた。

　だが、自分で自分のことを抱いているベアトリーチェを抱きしめても、何だかかえって強く拒きよ絶ぜつされているようで、悲しかった。自分のやっていることが全部、無意味に思えた。ベアトリーチェの震えが少しずつ弱まっていっても、たいして慰なぐさめられはしなかった。

　ベアトリーチェが何を訊ききたがっているのか、薄うす々うす勘かんづいていたからだ。

　その問いに答えたくない。

　先に目め隠かくしを外さなくてよかった。ベアトリーチェに彼の無残な姿を見せたくない。いきなりそんな彼を見せられたら、ベアトリーチェの心が壊こわれてしまうのではないか。いや──そのとき、自分は耐えられるのか。

　焔ホムラに大刀を渡わたして戦いに赴おもむかせたのは、マリアローズなのだから。

　マリアローズはあのとき、もう大だい丈じよう夫ぶだから、とベアトリーチェに告げた。

　何が大丈夫なものか。

「ほ……ほむらの……」

　そして、とうとうベアトリーチェが彼の名を口にした。

「……焔ホムラの……声が、聞こえたんだ……焔ホムラは……」

　マリアローズは何も答えることができなかった。

　違う。

　答えなかったのだ。

　マリアローズはただごまかすように、はぐらかすように、押し黙だまってベアトリーチェを抱だいていた。

　その行こう為い自体が明確な返事になっていることにさえ、気づいていなかった。



Omenage 897 9th revolution 12th day

サンランド無統治王国首都エルデン第九区
〝クァラナド歓楽街〟

chapter.14 the end of the beginning

# 守るべきもの

耳を澄すませば、女たちの嬌きよう声せいが聞こえる。

独特の甘い刺し激げき臭しゆうは、カナビスから抽ちゆう出しゆつした麻薬ドラッグの匂においだ。

光こう沢たくのある分厚い幕でいくつにも仕切られたこの大きな部屋は、地上四階にある。一階から三階まではやや造りが違うけれども、下は今も営業中だ。表向きは、この階にも客が入っていることになっている。

それもあながち嘘うそとはいえない。

現在、四階を借り切っている客が料金を支し払はらうかどうかは別としても、ある意味、この店にとってこれ以上の賓ひん客きやくはそうそういないだろう。

その賓客は、部屋のほぼ中央に備えつけられた天てん蓋がい付きの寝しん台だいに、異形の巨きよ体たいを横たえていた。

部屋の光量は落としてある。壁かべ沿いや幕の前に立ち並んでいるスーツ姿の男たちは、身じろぎもしない。目玉だけ動かして、こちらをじっと見ている。

連中の視線を平然と受け流し、悠ゆう揚ようたる態度でやつの前に進み出る自分の姿の、何と浅ましく、滑こつ稽けいなことか。

すべて茶番だ。

だが、馬ば鹿か馬鹿しいからといって、途と中ちゆうでこの舞ぶ台たいを降りるわけにはゆかない。

「やあ」

アジアンは天蓋にカーテンが下ろされた寝台の前で足を止め、かすかに首を傾かしげてみせた。無む駄だに上等そうな生地のカーテン越ごしに、厚く重ねたクッションに上半身を沈しずめたやつの姿が透すかし見える。寝台の手前、アジアンから三メーテルの位置に立ち、陰いん険けんそうな灰色の瞳ひとみでアジアンを見み据すえている男は、ジェイという名の殺人愛好者だ。さらにその後ろには、死霊術士ネクロマンサーという触ふれこみの白はく髪はつの魔ま術じゆつ士しがたたずんでいる。

　名は確か、ボルフェンゲーテとかいったか。

　いつかやつの首に刃やいばを突つき立てることはあっても、親しく語りあうことなど一生ない相手だろうから、名前なんてどうでもいいが。

「見み舞まいに来るのが遅おくれてすまなかったネ。言い訳をするわけじゃないが、キミが何度も居場所を変えていたみたいだから、落ち着くまではかえって迷めい惑わくになるのじゃないかと思って。体の具合はどうだい」

「首をぶった斬ぎられて、全身にひどい火傷やけどを負わされたんだ。さすがの俺も、治るまで結構かかってしまったよ……まあ、左手がまだ生えかけだって以外は、もう大丈夫だが」

　カーテンの向こうにいるＳＩＸは、かすかな笑いを含ふくんだ声でそう答えた。

「きっとお前はわかってくれるだろうが、普ふ通つうじゃないってのも、これでなかなか苦労がある。低能な医術士には診みせられない体だからねえ……自然治ち癒ゆに任せるしかない。寝ねているしかないってのは退たい屈くつで仕方ないよ。ジェイは話し相手としては三流以下だしな」

「申し訳ありません」

　ジェイが軽く頭を下げた。この男は、ＳＩＸの前ではやけにおとなしくなり、極きょく端たんなくらい必要なことしか口にしなくなる。それが擬ぎ態たいなのか、あるいは、本心からの忠誠なのか。どちらにしても、いかにも人を人とも思っていないような男なのに、飼い主に対する忠義立ては見事なほどだった。

　そこが厄やっ介かいなのだが、場合によっては、付け入る隙すきにもなりうるかもしれない。

　アジアンは目め許もとを緩ゆるめて唇くちびるを笑う形に歪ゆがめ、前まえ髪がみをかき上げた。

「龍りゅう州しゅう人の王龍とＳ＊Ｋが行方ゆくえをくらませているようだネ」

「ああ。媚妻メイルーも連れん絡らくがつかないと言っているよ。

骨龍についてはほとんどうちの傘さん下かに入ったようなものだが、やつらはもともと龍州のハヤ九ク三ザだ。同郷人以外には排はい他た的なところがあるから、俺たちと手を組むのは端はなから気に食わなかったんだろう」

「放っておくのかい」

「Ｋｕ　Ｋｕｋｕｋｕ……まさか」

　ＳＩＸは喉のどの奥で何かを転がすように笑った。

「もともと、潰つぶすか飼うかの二択たくだった連中だよ。粋いきがって鉄てつ鎖さの憩いこい場で暴れるような小便くさい餓が鬼きどもには、愛のある教育的指導ってやつが必要さ。ただ、優先順位ってものがある。やつらを捜し出して灸きゅうを据すえるのは、銀ピカの糞ふん転がし野や郎ろうどもを殺しつくしてからだ」

「殺しつくす、か──」

　アジアンは表情を崩くずさないように努力した。

「どうするの。連中の砦とりででも攻せめるつもりかい」

「否ノンだ」

　ＳＩＸがカーテンの向こうで右手の人差し指を左右に振ふりながら、舌を鳴らした。

「あの糞虫どもは卑ひ劣れつなことに、奇き襲しゅうなんて仕し掛かけてきやがったからねえ。サックドールでは太たい陽よう鬼きと死神野郎のせいでずいぶん死んだよ。あそこにいたやつらはほぼ全ぜん滅めつに近い。だが、だからこそ、あえてこっちは紳しん士し的に行く。そう……果たし状を送りつけて、正々堂々と正面からの決けつ闘とうを挑いどむのさ。場所は一号区を考えている。もちろん、こんな面おも白しろいイベントを俺たちだけで楽しむ手はない。当日はエルデン中に宣伝して、ギャラリーを大勢集めるつもりだよ。衆しゅう人じん環かん視しの中、あの銀ぎん虱じらみどもをこてんぱんにやっつけるって寸法だ。どうだ、いいアイディアだろう？」

「素す敵てきだネ」

「ちなみに言っておくが、これはＳｍＣうちと番人どもとの決闘だよ。計算しづらい要素は極力、排はい除じよする。こっちはあくまでＳｍＣうちだけしか出さないし、そうすればやつらだって同じようにせざるをえまい。おかしな助すけっ人となんぞ頼たのんだら、銀の軍団ザ・シルバリイの名折れというものだろうさ」

「あのデニス・サンライズなら、乗ってきそうだ」

　だが、ＳＩＸのことだ。本当にそれだけで終わりではないだろう。

　案の定だった。

　ＳＩＸは寝しん台だいの上で足を組み、ゆっくりと首を回しながら言った。

「心配は無用だよ、アジアン。お前にもちゃんと働いてもらう」

「ボクは何をすればいいのかな？」

「あとのお楽しみだ。何、たいした仕事じゃない。何しろ、戦場に出るのはＳｍＣうちだけだからねえ。むろん、骨龍にも骨を折ってもらうよ。おっと、やつらの名からすると、この表現は少々縁えん起ぎが悪かったか。まあいい……ところで」

　アジアンは、さっきからジェイの両手に釘ネイルが━やつがそう呼んでいる、両りよう端たんが尖とがった棒状の得物が握にぎられていることに気づいていた。

　一見、そうは思えないが、ジェイが用いるあの得物はかなり危険だ。やつは他ほかにも、投とう擲てき用の細く短い釘ネイルを無数に隠かくし持っている。形状も用よう途とも違ちがうのに同じ名前なのは、やつの妙みようなこだわりなのかもしれないが、いずれにせよ、ジェイがいつでもアジアンを攻こう撃げきできる態勢にあることは間違いない。

「アジアン、是ぜ非ひ、お前の意見を訊きいてみたいんだが」

　一方、ＳＩＸは口調も平静だし、腹の上あたりで手を組み、くつろいでいるように見える。

　とはいえ、油断は禁物だ。

　アジアンも覚かく悟ごの上でここへ来たのだし、何とかうまく切り抜ぬけなければならない。

「意見？」

「ちょっとしたことだよ。サックドールのアジトを襲おそった連中のことだ。やつらはなぜ、あそこに番人の娘むすめがいると知っていたんだろうねえ」

「番人の娘が……？」

　アジアンは少し考える仕草をしてから、首をひねってみせた。

「連中はそのことを知っていたのかい？　てっきりボクは、どこからかキミの居場所が割れて、それで番人どもが奇襲してきたんだとばかり思っていたが」

「いや、知っていたようだよ。連中のうち一人が、はっきりと俺にそう言った」

「だとしたら、そのことを知っていたのは……龍州人か。もしかしたら、Ｓ＊Ｋか王龍が情報を洩もらしたのかもしれないネ。そう考えれば、彼らが行方をくらましている理由も──」

「アジアン」

　何か含ふくむところがありそうなイントネーションでアジアンを呼んだのは、ＳＩＸではない。

　ジェイだった。

「貴様は忘れているよ。番人の娘がサックドールにいた事実を知っていた者は、他にもいる」

「……ああ」

　アジアンは軽く手を打った。

「そうだったネ。当然、キミも知っていた」

「まだいるだろう」

「ＳＩＸ？」

「他にもいるはずだ」

「そうか。キミらのところの一部の人間も知っていたはずだ。こうしてみると、結構、たくさんいるものだネ」

「とぼけるつもりか」

「とぼける？　何を？　ボクが？」

「俺と一いつ緒しよにあの娘を引き受けに行ったのは、どこの誰だれだ」

「それは──」

　アジアンは指を鳴らしてから、苦笑しつつ髪かみをかき上げた。

「なるほど。自分のことだと、意外と気づかないものだネ。で、ジェイ、要するにキミは、ボクを疑っているわけかい」

「自分の胸に手を当てて訊いてみろ」

「訊くまでもないヨ」

「だろうな。答えは明らかだ」

　ジェイが灰色の双そう眼がんをすぼめた。この男は、とにかくアジアンを始末してしまいたくてたまらないのだろう。ジェイの立場であれば、可能か不可能かは別としても、それが適切な処置だとアジアン自身も思う。

　だが、始末されてたまるものか。いや、もし、我が身一つを差し出して何もかも解決するのなら、それでもいい。しかし、やつらはそんなことでは満足しない。今も、仲間の誰かが、たぶん一人ではなく、何人もが、殺さつ戮りく戦隊ジェノシドマックスの隠おん密みつ部隊に張りつかれているはずだ。連中にその指令が下った瞬しゆん間かん、仲間たちの身がどうなるか。何が起こるか。

「ＳＩＸ、ボクの首には──」

　アジアンはジェイから目をそらし、ＳＩＸに向き直って自分の首を軽く叩たたいてみせた。

「首輪が嵌はまっている。キミがつけた首輪だ。知っていると思うが、ボクはキミに忠誠を誓ちかっているのでも、友情を感じているのでもない。ただ、この首輪が嵌っている限りは、キミに従うしかない。それだけのことだ」

「正直者は馬ば鹿かを見るよ、アジアン」

　ＳＩＸは面おも白しろがっているような口くち振ぶりだ。何を考えているのか読めない。やはり、ジェイより遥はるかに難物だ。

「嫌いやそうに飼い主の手を舐なめる犬は愛されない。嘘うそでも尻尾しつぽを振ふって、喜んでみせていれば、飼い主の覚えもめでたくなるというものだろう」

「それで、例の、惜おしみなく奪うばう愛とやらを注いでもらえるわけかい？　残念ながら、ボクは被虐マ愛好者ゾじゃないのでネ」

「Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕ……そのうち目覚めるかもしれないよ？」

「どうも、ボクには素質がなさそうだ」

　アジアンは肩かたをすくめながら短くため息をついてみせ、床ゆかに視線を落とした。

「━昼飯時ウチは今、三十八人になった。おそらく、キミらも把は握あくしているだろうが、一人死んで、九人抜けた。これ以上、また何かあったら、クランの体てい裁さいすら維い持じできなくなるかもしれない。これがキミに飼われているボクの現実だヨ」

「アジアン、俺はねえ……」

　ＳＩＸが体を起こして身を乗り出してきた。

「最初からお前にしか興味がない。お前が欲ほしい。お前だけだ。有象無象がくたばろうが、どこかへ消えようが、どうでもいいことなんだよ」

「でも、ボクにとってはそうじゃない」

　アジアンは薄うす笑わらいを作って首を振りながら、おのれの愚ぐ劣れつな過誤で命を奪ってしまった男のことを━クラニィのことを、その女によう房ぼうと二人の子供たちのことを考えていた。

アジアンはクラニィの家を訪ね、彼の女房に自分の口からすべてを、一部始終、何もかもを話すつもりだった。

しかし、言えなかった。

まだ小さなジョゼとユーリィがいたから。幼すぎる彼女らに、床に額をこすりつけて謝罪する自分の姿を見せて、不必要に驚おどろかせたくはなかったから。

そんなものは言い訳にすぎない。違ちがう。そうではない。アジアンは単に臆おく病びようで、卑ひ怯きようだっただけだ。白はく刃じんの下をくぐって敵を殺し、血を浴びるのは平気なくせに、彼女にそのことを告げて、責められ、なじられるのが、ただただ恐おそろしかったのだ。

結局、アジアンの態度からそのことを察した彼女に、目の前で泣かれた。

彼女はアジアンに背中を向けて言った。「あの人はもう帰ってこないんですね」

アジアンは「そうだ」とうなずくこともできず、彼女の言葉を聞いていることしかできなかった。「あの人はあなたが好きでした。とても好きでした。たぶん、わたしよりもあなたのことが好きでした。わたしはだから、あなたが嫌きらいです。あなたなんかいなければよかった。でも、あなたがいなかったら、わたしはあの人と出会えなかった。わたしを助けようとしたのはあの人で、助けてくれたのはあなただから。あなたが好きなあの人を、わたしは好きでした。ねえ、お願い、約束して、アジアン。あなたは死なないで。たとえつらくても、ジョゼとユーリィに笑ってあげて。ジョゼとユーリィを抱だいてあげて。だって、あの人はもう、帰ってこないんですもの」

アジアンはかろうじて「わかった」とだけ返した。それが精せいいつ杯ぱいだった。

その後、クラニィの死の真相については、ベティをはじめとする数人にだけ話した。ＳｍＣに与くみする決定はアジアンが独断で下して、従う気のない者は、クランから抜ぬけてくれて構わないと一方的に宣言した。実際、それで一人抜け、二人抜けた。一巡じゆん月げつの間に、あわせて九人抜けた。当然だった。

　何しろ、対等の不戦同盟ならばともかく、事実上、ＳｍＣの傘さん下かに入るという重大な決断を、ろくに理由も説明せず、一人で、勝手に行ったのだ。

　皆みな、そんな男に愛あい想そを尽つかして、去ってゆくだろう。

　いっそ全員、いなくなってくれていい。

　ボクを一人きりにしてくれ。

　アジアンは心密ひそかにそう願ってさえいた。

　だが、そうはならなかった。

　結果的に、三十八人も残った。三十八人のひねくれ者たちが、救いがたい馬鹿どもが、ぶつくさ文句をつけ、不平不満を洩もらしつつも、ある日、一人一人、アジアンに握あく手しゅを求めてきたのだった。彼らは口々に言った。「ここ以外、行くところがない」と。「他に居場所なんかない」「しょうがないからいてやるよ」「別に昼飯時ランチタイムが好きなんじゃない。ただ他より嫌いじゃないだけだ」「生き方と死に方は自分で選びたいが、その全部がここにあるから仕方ない」

　もともと、胸の真ん中に空いた大きな穴を埋うめようと、必死であがいているようなやつばかりだった。

　曖あい昧まいな言葉や感情だけでは、信じあえない。信じたいのに、信じられない。

　そんな連中がまとまるためには、何かが必要だった。

　形のある、守るべきものが。それがたまたまクランだった。

　別に、大おお仰ぎようじゃなくていい。

　安心して一いつ緒しよに昼飯を食える、そんな程度の集まりでいい。

　言い換かえれば、昼飯を一緒に食う相手にも事欠く連中の寄り合い所帯というわけだ。

　惨みじめったらしくて、哀あわれで、笑うしかない。

　だが、それこそ自分が守るべきものなのだと、あらためてアジアンは気づかされたのだった。もう遅おそいかもしれないが、気づいた以上は、まだ自分を信じてついてきてくれる大おお馬ば鹿か者ものたちがいる限りは、二度と決して投げ遣やりになるわけにはゆかないのだ。

　大切なものは守る。

　どんなことをしても、他のすべてを犠ぎ牲せいにしてでも、必ず守る。

　大切なものは全部、だ。

　──そういうことなんだ、マリア。愚おろかなボクが、自分の意志で、そう決めた。

　アジアンは胸中で呟つぶやきながら、嘲あざけりをこめてジェイを一いち瞥べつした。

「どちらにしても、ジェイ、キミの嫉しつ妬とにまみれた下ゲ衆スの勘かん繰ぐりは的外れだ」

「……嫉妬だと？」

　ジェイが灰色の瞳ひとみに怒ど気きをみなぎらせた。いい気味だし、この男をおちょくるのは愉たのしいが、アジアンにとってこれは遊びではない。ある意味、抜き身の剣けんで打ちあうよりも神経のすり減る真しん剣けん勝負だ。

「自分で気づいていないのかい。キミはボクがＳＩＸのお気に入りだから、気に食わないんだろう」

「くだらんことを」

「果たして、くだらないかな。キミが意識しているしていないに拘かかわらず、それが原因でボクを陥おとしいれようとしているのだったら、ボクにとっては大問題サ。何せ、たくさんの命を背負っている身なのでネ」

「俺は貴様を信用していないだけだ」

「ボクもキミに信用されたくなどないし、信用してもらう必要性も認めない。元野良犬のボクと猟りよう犬けんのキミが、飼い犬同士で馴なれあって何になる？　それこそくだらないヨ。ボクが信しん頼らいを勝ちえなければならない相手は、ジェイ、キミじゃない」

　アジアンは黒衣を翻ひるがえして床ゆかに片かた膝ひざをつき、ＳＩＸに向かって恭うやうやしく頭こうべを垂れた。

「──ボクの主人は、ＳＩＸ。ただ一人、キミだけだ」

　我ながら、芝しば居いがかったことをやっていると苦笑したくなる。

　偽いつわりの忠誠すら装よそおわぬ服従。面従腹背。

　今、ＳＩＸに命じられれば、アジアンは嫌いやそうな顔でやつの足の裏でも舐なめてみせるだろう。

　おそらくＳＩＸも、ある程度までは承知の上で、笑えみを浮うかべてそれを眺ながめることだろう。

　だが、やつの毒々しく輝かがやかしき悪徳と栄光の日々も、いつまでも続きはしない。陽ひは少しずつ、確実に傾かたむいてゆく。落日がやつを押し潰つぶすときが必ずやってくる。その前にやつを葬ほうむるべく打った遠回しな手は不ふ首しゅ尾びに終わったが、焦あせることはない。

　重要なのは、機を見誤らず、逃のがさないことだ。

　いつかその瞬間が訪おとずれるまでは、ＳＩＸ、お前に傅かしずき、あえてぬけぬけとこう呼ぼう。

「我が主マイ・ロード、何なりとご命令を」

　アジアンは二度目のあやまちをおのれに許すつもりはなかった。

　だから、すまないが、クラニィ、もう少し見ていてくれ。

　ボクはきっとうまくやってみせる。

　──いや、絶対にだ。

『薔薇のマリア　Ⅱ．壊れそうなきみを胸に抱いて』了

あとがき

僕は今までたくさん嘘うそをついてきました。

自分をよく見せるために嘘をつきました。

自分を慰なぐさめるために嘘をつきました。

自分を守るために嘘をつきました。

誰だれかを楽しませるために嘘をつきました。

誰かを陥おとしいれるために嘘をつきました。

誰かを抱だきしめながら嘘を囁ささやきました。

結局、どれもろくな嘘ではありませんでした。

僕という人間は、八割程度が嘘でできています。

ですが、小説を書くために積み重ねる嘘は、僕にとって大切なものになりそうです。

本編について、本当に少しだけ書きます。

といっても、あとがきから先に読まれる方も多いことでしょう。本巻の内容については、ここではあえて触ふれません。

ただ、一つだけ。

本巻から、ようやく『薔薇ばらのマリア』が物語として歩きはじめます。

いつ終わるとも知れない旅ですが、よろしければ、最後までお付き合いください。

　それでは、イラストレーターのＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関わったすべての方々、そして、本書を手にとっていただいた皆みな様さまへ、言葉につくせぬ感謝をこめつつ。

　またお会いしましょう。

　たぶん、次も『薔薇のマリア』だと思います。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔薇ばらのマリア

II．壊こわれそうなきみを胸むねに抱だいて

十じゅう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/



本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　II．壊れそうなきみを胸に抱いて』平成17年3月1日初版発行

平成20年9月25日11版発行